

THE JAPAN'S MOST REMARKABLE S-M MAGAZINE

昭和38年6月7日日本国鉄道特別授受承認誌第1580号・昭和31年2月3日第3種郵便物認可・表紙第9巻第7号 昭和38年7月1日発行(毎月1回1日発行)

裏窓

7月号

THE JAPAN'S MOST REMARKABLE S-M MAGAZINE

昭和38年6月7日日本国鉄道特別授受承認誌第1580号・昭和31年2月3日第3種郵便物認可・表紙第9巻第7号 昭和39年7月1日発行(毎月1回1日発行)

裏窓

1500円
IBM 1807

裏窓の 合本用ファイルをお 申し込みください!

●本誌の新装判を簡単に合本できる、秘蔵用ファイルです。
●堅牢優美な高級仕上げで、これさえあれば、お揃えになったバックナンバーが散逸する心配もなくなりますし、また、好みの頁を取り外して、ファイルすることもできます。
●御希望の方は、頒価130円に送料20円を添えて、スグお申し込み下さい。
●なお御注文の際は「裏窓用ファイル」と御指定ください。
●裏窓の1年間(12冊)直接購読者にはファイル1個を無料で差し上げます。
東京都中野区松が丘2丁目21番
株式会社 あまとりあ社 営業部

★本誌の記事および挿絵写真を、無断で転載・上演・上映・放送することはお断りします。
★お買い上げの本誌に、落丁・乱丁等がありました場合は、お買いになった書店でおとり替え下さるか、または、本社宛にお送り下さればすぐおとり替え致します。
★直接購読を御希望の方は、6カ月分(1,800円)または、3カ月分(900円)を本誌営業部宛にお申し込み下さいますと、送料は本社の方で負担しまして店頭発売前に直接お送りします。
★外国からの直接御購読は、送料を1冊につき

37年(十一月号) 1100円	37年(十月号) 1100円	37年(九月号) 1100円
絵物語・かわいアンの文・松平 荘司 ぼんけん 絵・中川 彩子 異聞・牛裂きの刑 絵・東 桂史 宝石の血 絵・林 幸三 クラビア・美の鋭角 毛 卓三 美の兇吉 金井 行雄 美の傾斜 金井 行雄 美の断面・ほか 金井 行雄 海外SMナイト特選集 泰西出版資料 あわれ雪路 丸亀 忠史 おかつばとおさげの間 関野 雄 霧笛の町 五所 章 妖美傑作選 沖野 一 妖美傑作選 多賀 謙 火刑幻想 鳴瀬 三郎 夜の面影 村山 省 足 水尾 究 体当たりマゾヒズム論(4) 春川 光彦 さまたみろ 山本 節夫 ある恋の物語 桜井 和子 不安と絶望から幸福への道へ 阿麻 哲郎 畜獣デリムソン(終回) 阿麻 哲郎 はもととその周辺(9) かびや・かずひこ 風雲地獄街道(6) 鈴宮 英樹	絵物語・ひさすいて 絵・秋吉 樹 柔肌切支丹 絵・曾我部 泰 江戸見夫妖美傑作選 江洲 見夫 クラビア・舞台名場面集 金井 行雄 美と醜のあいだ 藤沢 修 ある青年の休暇 金井 行雄 紅の私刑 五所 章 女奴隷の浴室 東島 孝 妖しい休日の夜 市川 菊夫 畜獣デリムソン(11) 阿麻 哲郎 鬼洞又四郎の遺稿 小田 桐 ギャルド王の金色奴隷 松平 荘司 現代女牢記 多賀 謙 江戸の怪談 河西 恒一 はもととその周辺(8) かびや・かずひこ 海外SM映画二紹介 美濃村 晃 体当たりM論(3) 水尾 究 盗む 村山 省 おろかな馬のものがたり 馬場 弘二 風雲地獄街道(5) 鈴宮 英樹	絵物語・凄絶のくら忍法 絵・東 桂史 密林の女王ムムムタール 絵・中川 彩子 蛇と鏡 絵・山田 彬弘 北原環妖美傑作選 北原 環 クラビア・SM式美容鍛錬法 毛 卓三 悪夢 毛 卓三 女ひとりへのや 毛 卓三 かわいいくちびる 毛 卓三 お浜の受難 花巻 京太郎 山小屋の暴風雨 駒井 たまき 戦慄の女体爆弾 綾川 妖司 鈴の泣き声 浦戸 宏 白痴美の女 青柳 貢次郎 日本型罰則(3) 名和 弓雄 はもととその周辺(7) かびや・かずひこ 「魔羅老人日記」を解剖する 安東 泉 タロの恋 八巻 令 体当たりM論(2) 水尾 究 女賊と姫君 藤山 志郎 畜獣デリムソン(10) 阿麻 哲郎 鬼婆のすむ家 三枝 喜久治 風雲地獄街道(2) 鈴宮 英樹

37年8月号ぜんぶ

新刊発売中!



A5判・総アート・200余
頁・写真500余枚収録 ￥600 円90

スクリーン・エロティシズム② 美濃村晃・著

- ★スクリーンに躍る
- ★女体美の決定的瞬間
- ★間をここに収録、
- ★思い出のエロティッ
- ★クシーンふたたび!

〈内容のご紹介〉

- …抱擁・キスシーン
- …ベッドシーン
- …入浴シーン
- …ヌード
- …チラリズム・マゾヒズム
- …ショー場面
- …肉体美
- …捕われた女たち
- …怪談
- …受難シーン
- …女・女・女
- …スクリーン・おぼえがき

東京都中野区松が丘2の21 株式会社 久保書店 振替・東京10756番

裏窓叢書

ご案内

第一集 狂異地獄肌

飯田豊吉著 中島喜美絵

400円 送料80円

第二集 黒蛇呪縛

黒木 忍著 山田彬弘絵

400円 送料80円

第三集 地底の牢獄

藤見 郁著 鬼頭 暁絵

400円 送料80円

第四集 残酷裸女絵巻

万里小路崑著 豊田みのる絵

400円 送料80円

第五集 責め肌忍法

万里小路崑著 古正英生絵

400円 送料80円

第六集 地獄谷の女たち

塔婆十郎著 山田彬弘絵

450円 送料80円

第七集 大利根柔肌草紙

花巻京太郎著 鬼頭 暁絵

以下ぞくぞく刊行!

お手頃な値段で
いっぱい! あまとりあ社の
たのしい読みものが
特選出版物!

■ 東京都中野区松が丘二丁目二一
株式会社 あまとりあ社
振替・東京五五四〇八・あまとりあ社宛

ホステス稼業うら話

夜あそびがイヤになる本

価200円 送料40円 石井淡醉著

この本読んでネオン街でモテなかったら
あなたはオトコをおやめなさい
ホステス心理のぜんぶがわかる本!

13の情事・報告書

痴 (ちたい) 態

価200円 送料40円 辻街一夫著

すさまじい愛欲の渦にもてあそばれる
男女のなまなましい生態 愛と狂気と
死の報告書!

おピンク道中記

にやりと参ろう

価230円 送料40円 広島一男著

お色気あって旅たのし 他国で出会う
女のかずかず 男ふたりの底ぬけ好色
道中記!

ふしぎな・おかしな・ホントの話

世界実話ウラのウラ

実録・よみもの拳豪伝

話のネタになるボクシング

血闘に生きた男たち

秘聞・剣士録

大森貝介著
価180円 送料40円

野田開作著
価180円 送料40円

小山竜太郎著
価230円 送料40円



紳士淑女の
おへそのうらを
ふんわりくすぐる
あまとりあ社の
特選娯楽新書判!
たくさんでております
これからもです



東京都中野区松が丘2の21

株式会社 久保書店 振替・東京10756番

裏窓・七月号・目次

表紙モデル・小笠原純子
目次カット・吉田久
とびらカット・落合竜二

鬼頭暁・南北戦争画集 (74)

指名された女……九十九十郎 (158)

パノラマ島秘譚・2……北園透一郎 (30)

奢れる女神への祈り・5……森本愛造 (42)

腹切り残酷史譚……夏川浩一郎 (66)

子鹿……村山省一 (138)

老若抄……かびや・かずひこ (94)

裏窓文芸評論……安東泉 (50)

ファンタジア……八巻令 (194)

マゾヒステイカ (154)

★沖涉二小品傑作展 (172)

現代マゾヒズム文化時評……森下高茂 (180)

金色の薬……溝口 雄太

湖畔の美少女……羽鳥なつ子

毒婦妖恋……久慈たかね

毒の花びら……久慈たかね

集稿者投読
☆☆☆☆☆

絵物語

セント・レディ学院……

祖父江新
落合竜二

(58)

(180)

(172)

(154)

(194)

(50)

(94)

(138)

(66)

(42)

(30)

(158)

(74)

体当たりマゾヒズム論・②5…水尾究

読者コーナー・編集後記

(212) (144)

ゴルドンの記憶・①6…阿麻哲郎

(202)

●グラビア・オフセットページ●

絵物語

不幸な娘のひとりごと…下須畜男

秋吉 峦

(9)

アメリカの公刊誌・ご紹介

…北米・フェニクス商会

(15)

SとMのうたげ…北米・フェニクス

(20)

鎧と女…吉田久

(111)

藤沢修作品集

(220)

黒い妖精…猪島昌也

(104)

海のあらくれ…羽仁京志

(103)

地下室二景…沖涉二

(224)

黒い靴下…北好夫

(120)



■人間お金があるから幸福とはかぎりません

不幸な娘のひとりごと

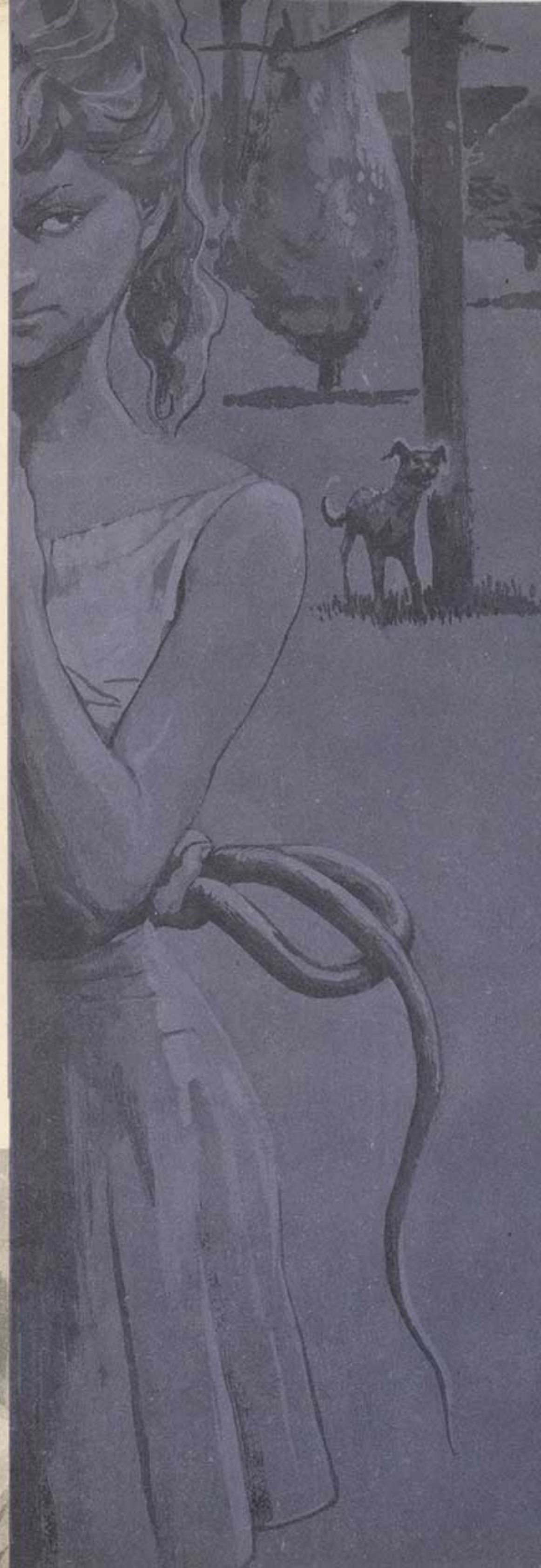
秋吉 密・絵

下須 畜男・文



① 使いきれないほどのお金があつて、遊びきれないほど時間があつた娘なんて、ほんとうに不幸だと思いますわ。貧乏人には希望もあり、夢をみることもできるけど、私には、かなえられない望みなんて、ひとつ

もない。ほんとうに不幸です。それとときどき、いらいらしてヒステリックになります。このあいだも、うちの犬のサムを裏庭のヒマラヤ杉の根もとにくくりつけ、皮むちでふとももと胴を、びしびしたたいてやったの。



② するとサムは、はじめワンワン吠え、つぎにはキャンキャン泣いたわ。よく見ると、皮がむけて血がにじみ出ていたのでお部屋からヨードチンキを持ってきて、傷のところをべたべたぬってやったの。犬はものすごく痛そうに哀れっぽい声で泣くの。おもしろかったわ。でもあんまりうるさく泣くので、靴で思いきり、わき腹をけとばしてやったの。



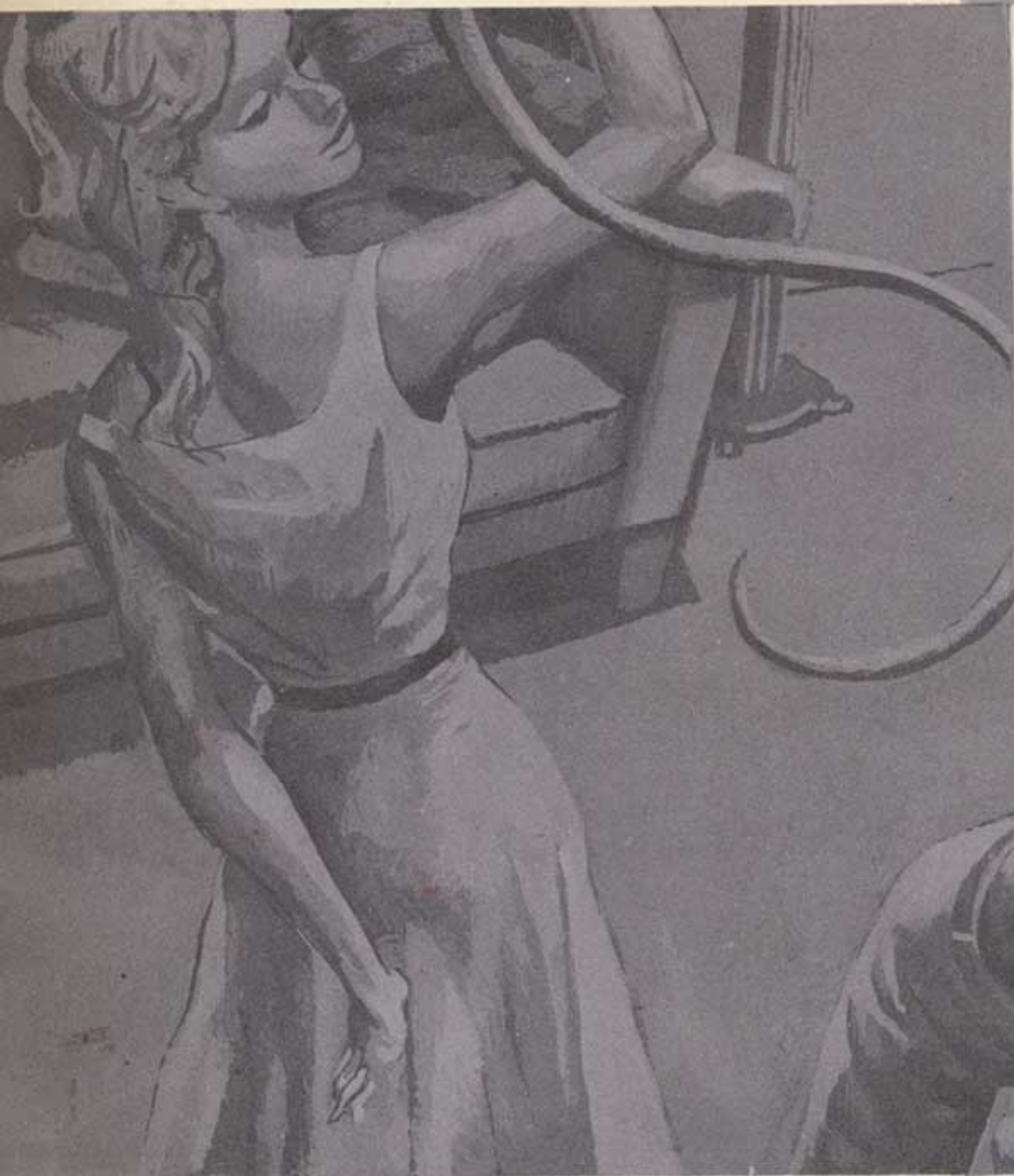


③

そのことを下男のテルオに話してやった。

どう、テルオ。お前もサムのようにしてほしいだろ、というと、テルオは黄色い顔をすこし赤くして、ごめんなさいお嬢さま、ぼくはけっこうです。

だめだめ、お前は心のなかで、白人の娘をばかにしているんだろ。私のパパのおかげで大学へ行かせてもらっているのに、まったく、わがままな男だよ。じゃ、すぐにはじめるから、私のお部屋へおいで。こないと承知しないよ。

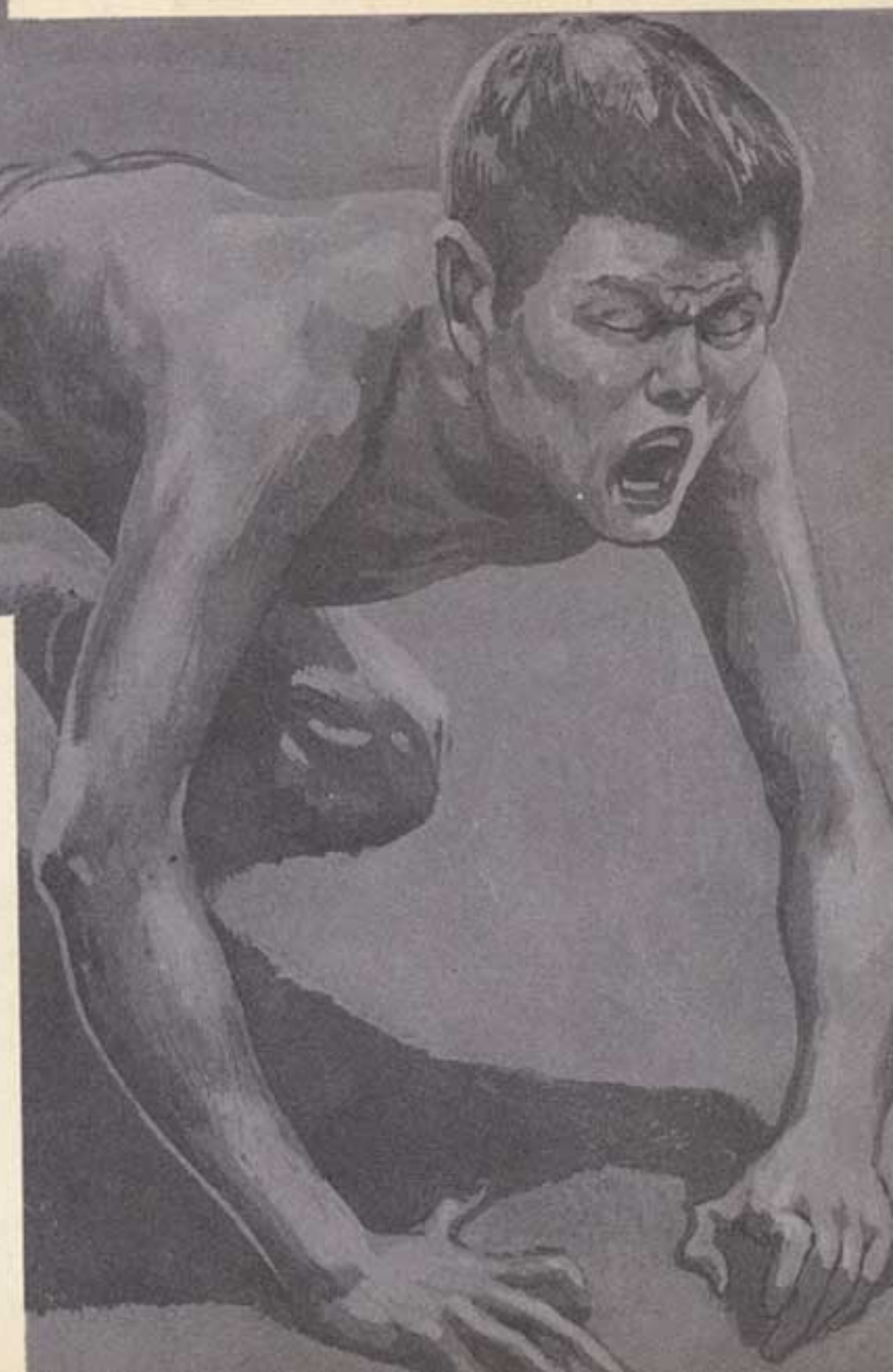


④

パパとママと私が日本へきたのはいまから一年半前。

パパが日本でつくった会社はうまく成功して、日本人のお金をどしどし捲きあげているらしいし、だからママは毎日ぜいたくばかりしているから、私だって遊んでやろうと思うけど、私は飽きっぽくて、なにをやっても、すぐ刺激がなくなっておもしろくない。

テルオがお部屋へきたので、きょうはこの猿を相手にしてやる。



⑤

「もしお前がおとなしくしていたら、私の足を五分間だけ、なめさせてやるよ」

と私がいうと、テルオは、

「お嬢さまのその美しいおみあしをなめさせていただけるのでしたら、ぼくは、どんなことでもがまんします」

というから、私はテルオの背中をむきだしにさせた。四つんばいにさせておいて、皮のむちで、ピシッ、ひいーッ、ピシ、ピシッ、ひいーッ、うおーッ、ピシリッ、ぎゃーッ、ひいーッ、ううーッ。

⑥

「あまり声をだしてはいけないよ。うるさいからね」

と私はいいながら、なおもビシビシ打つ。ちよつとおもしろい。

「うるさくすると、足をなめさせてあげないよ」ビシッ、ビシッ。

ひいーッ、ううーッ、ぎやッ。

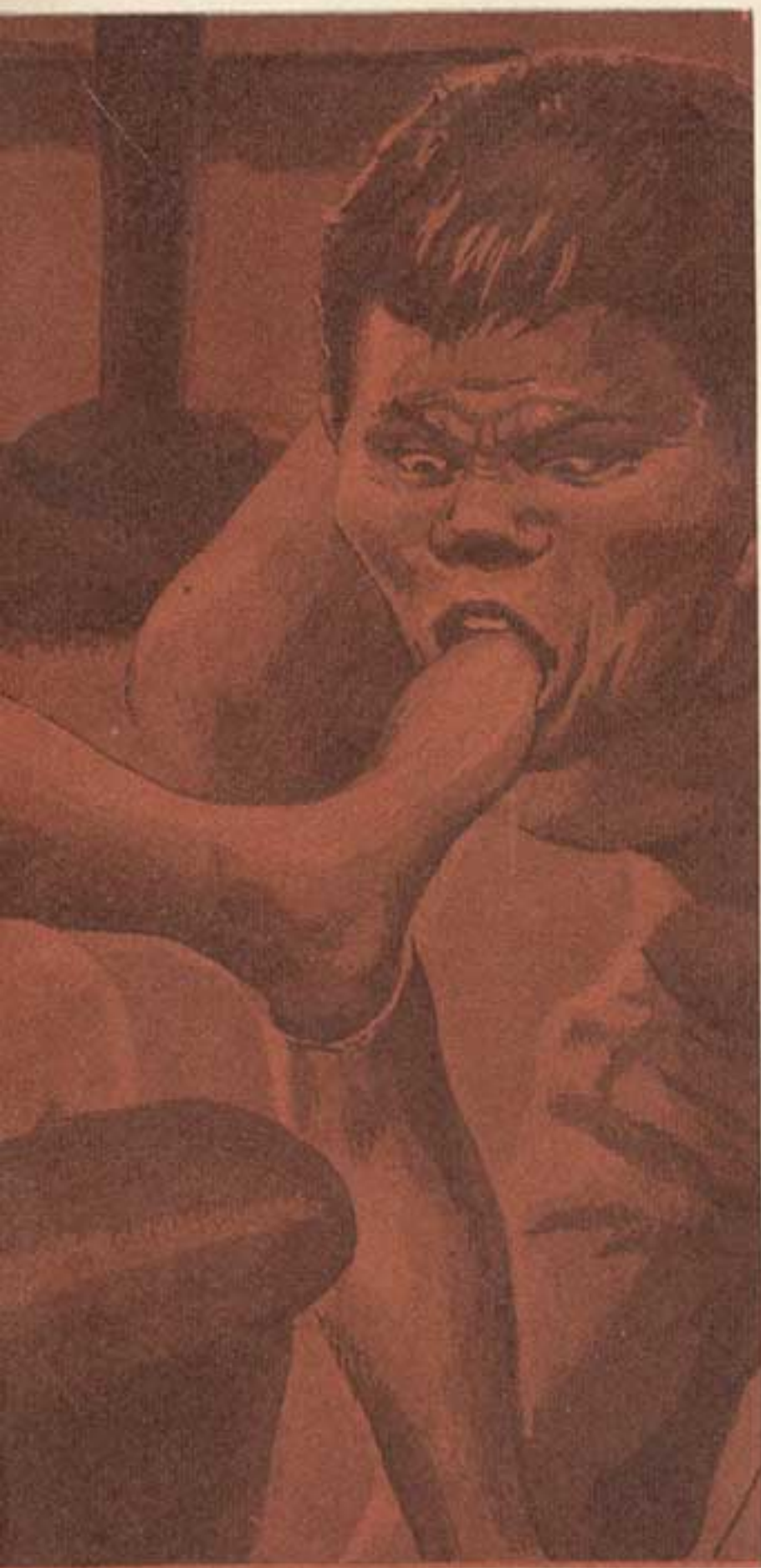
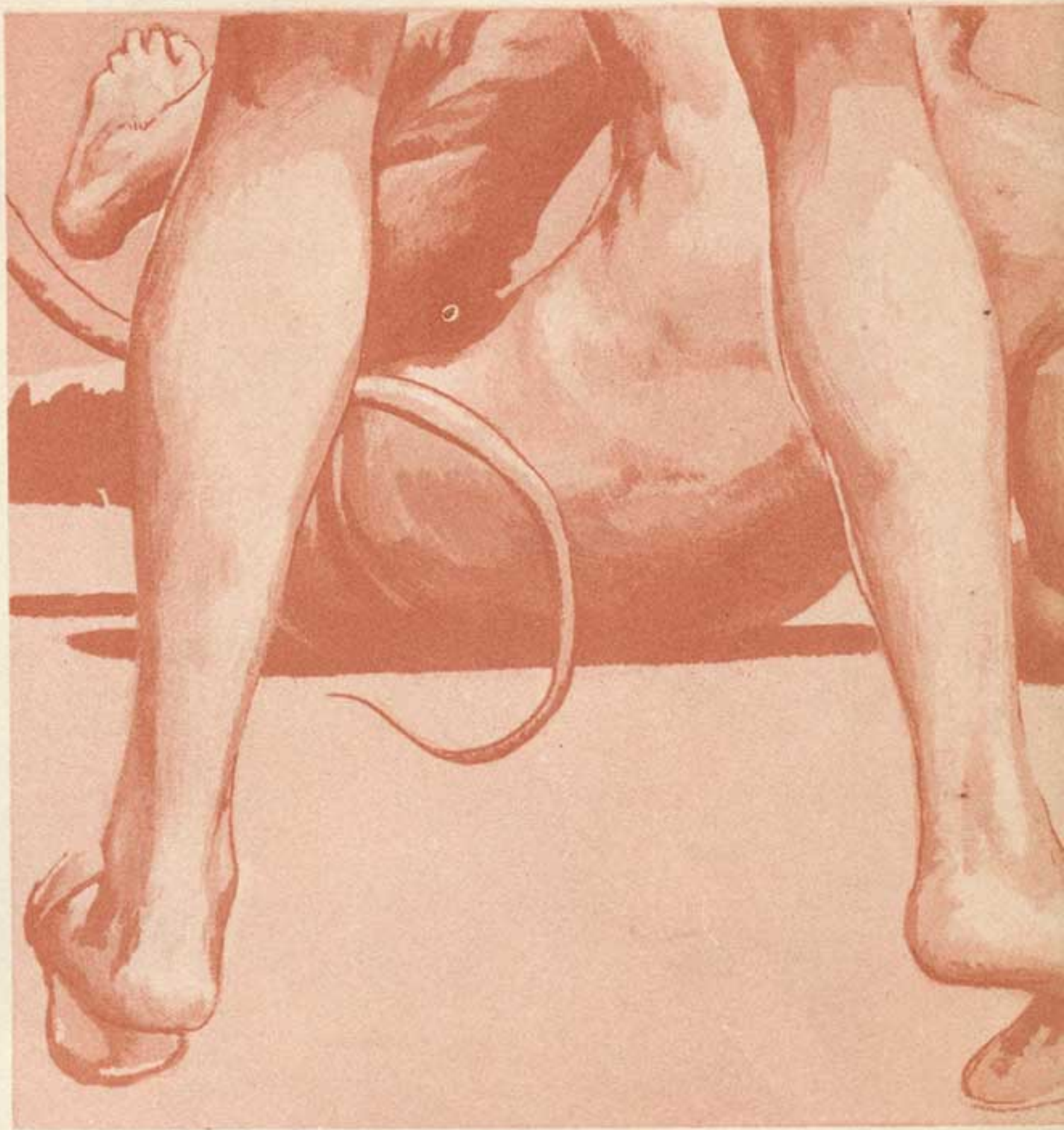
「ああ、ちよつと痛かったわね。

そこは男の子のいちばん痛いところだていうもの」

といって、そのところを、皮のスリッパで、ぎゅうぎゅう踏みつけてやった。

「よし、むちはこれくらいでやめてあげるわ。さあ、五分間だけ、足をおなめ。だけど、お前みたいな黄色い醜男に、私の素足をなめさせるなんて、もったいないわ。

靴下のうえからおなめ。きょうはだいぶ汗をかいて、べとべとになっているから、その汗や汚れを、じょうずに、お前の舌で、なめとるのよ。誠意をこめてやるのよ」
私は命令した。



⑦

私はテルオをゆかの上にひざまずかせ、口をあけさせて、ぬるぬるした靴下をはいたままの足を、歯のあいだにいった。

テルオは「ううう」とへんな声をだしながら、私の足をなめた。

気もちがわるかったけれど、テルオが犬みたいに舌をだして、私の汚れた足をなめているのを見ていたら、すこしおもしろかった。

テルオはゆかの上にあおむけになり、私はいすに腰をかけて、足さきを長くのばして、テルオの顔のうえに、足をのせてやった。

そのうちにテルオの唾液で靴下はべとべとになり、ほんとうに気もちがわるくなってきたので、
「もう、やめなさい。五分間たつたわよ」

というと、唾だらけの顔で、
「おねがいです、もう三分間」と、しつこくいうから、おしりでテルオの顔を踏んづけ、ずしんずしんとはずませた。

「お前は、いつもどうして、そうしつこいの！」



⑧ それからテルオの背中からおしりを、また二十回ぐらいたたいた。

「お嬢さま、お慈悲です。そんなに乱暴にたたかないでください」と、うるさくいうから、また私はかんしゃくをおこして、
「そんなことをいうなら、もっと乱暴にしてやるわ」

といって、テルオの鼻の穴に、金の鼻輪をとおした。テルオはまるで牛みたいな顔になった。

その鼻輪に、みじかいクサリをつけ、そのクサリを、私のハイヒールの靴のかかにつないだ。

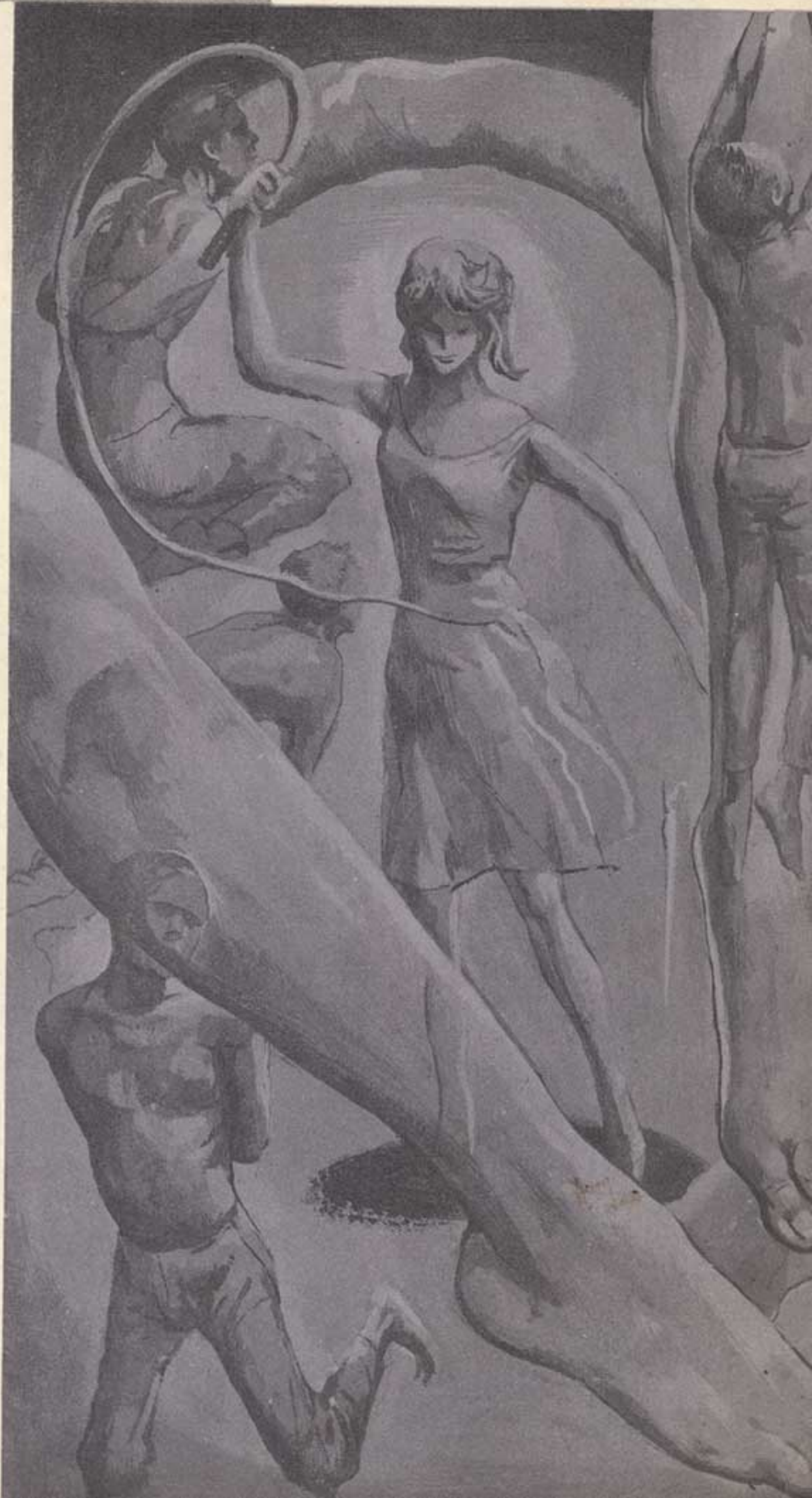
「私がお部屋のなかをぐるぐるまわるから、お前は鼻ずらをゆかにつけて、ヒイヒイ泣きながらついておいで」

といって、そのとおりにした。





⑨ 私のハイヒールのかかとと
テルオの鼻輪をつなげたク
サリは、三十センチぐらいしかな
いから、テルオは四つんばいにな
って、顔をゆかにすりつけるよう
な格好で、私のあるくあとからつ
いてくる。
「ふがふがふが」
となさけない声をだした。

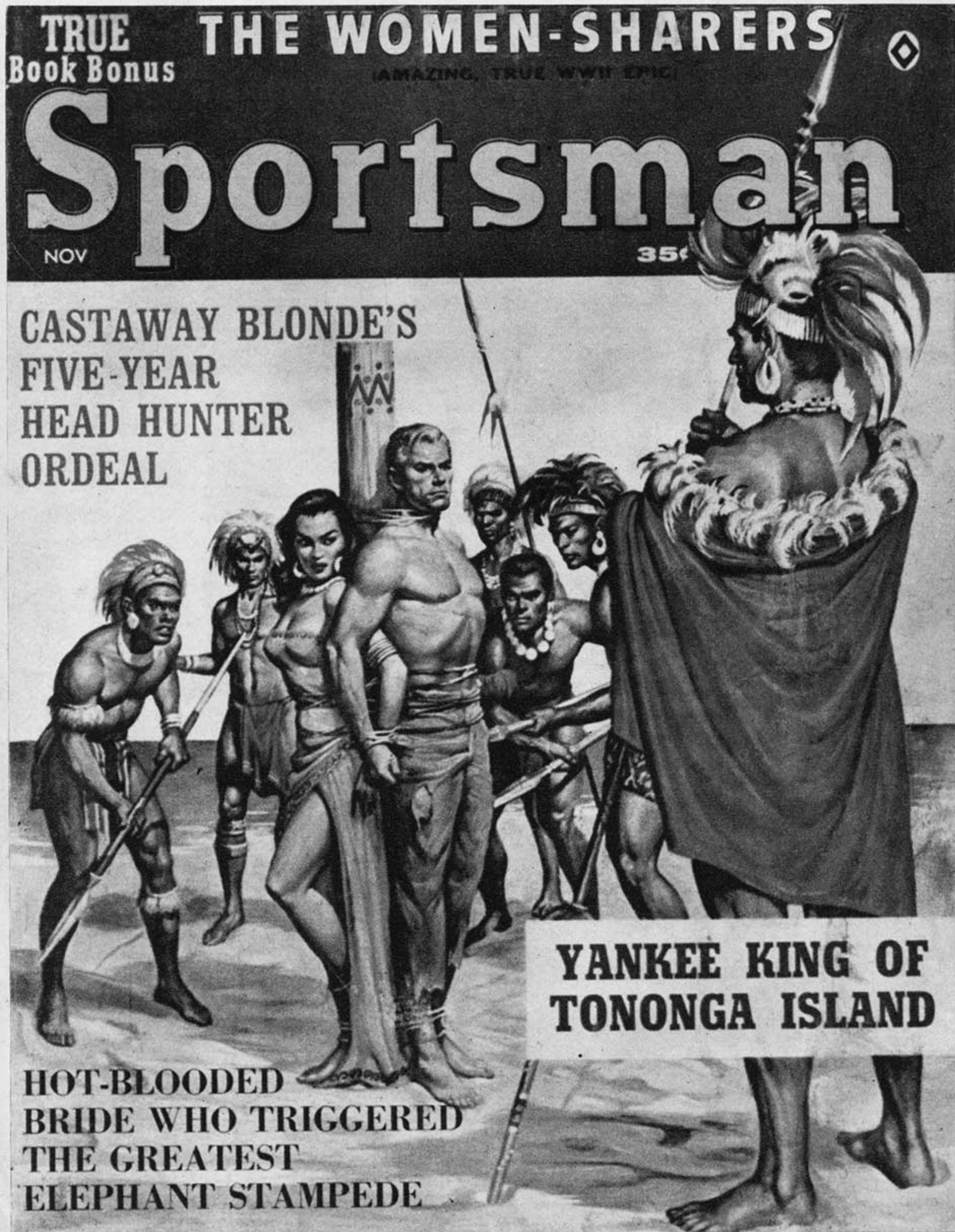


⑩ 「あんまりひどいことをな
さいますと、パパやママに
いいつけますよ」
と、テルオがなまいきなことを
いうから、また私は怒って、
「うちで遊んでいるかぎり、パパ
もママも、私がなにをしたって怒
らないわ。お前は私が外出をしな
いための遊び道具よ。私は色の白

い美しい娘よ。お前なんか、パパ
から給料をもらって生きている黄
色い猿じゃないの！」
と、どなりつけ、テルオの手を
うしろにしばって、いろいろいじ
めた。
私はテルオの顔が便器にみえた
ので、思う存分、便器として使っ
てやった。

テルオの顔は、あたまの髪の毛
からあごまで、ぐしよぐしよにぬ
れた。鼻の穴をふくらませて、ふ
うふう、うなっている。
こんなことが不幸な私のたった
ひとつの楽しみです。でも私が楽
しむ度合いよりも、テルオのほう
が大きいんじゃないかと思うと、
またイライラしてくるのです。

アメリカの公刊誌・ご紹介



TRUE
Book Bonus

THE WOMEN-SHARERS

(AMAZING, TRUE WWII EPIC)



Sportsman

NOV

35¢

CASTAWAY BLONDE'S
FIVE-YEAR
HEAD HUNTER
ORDEAL

YANKEE KING OF
TONONGA ISLAND

HOT-BLOODED
BRIDE WHO TRIGGERED
THE GREATEST
ELEPHANT STAMPEDE

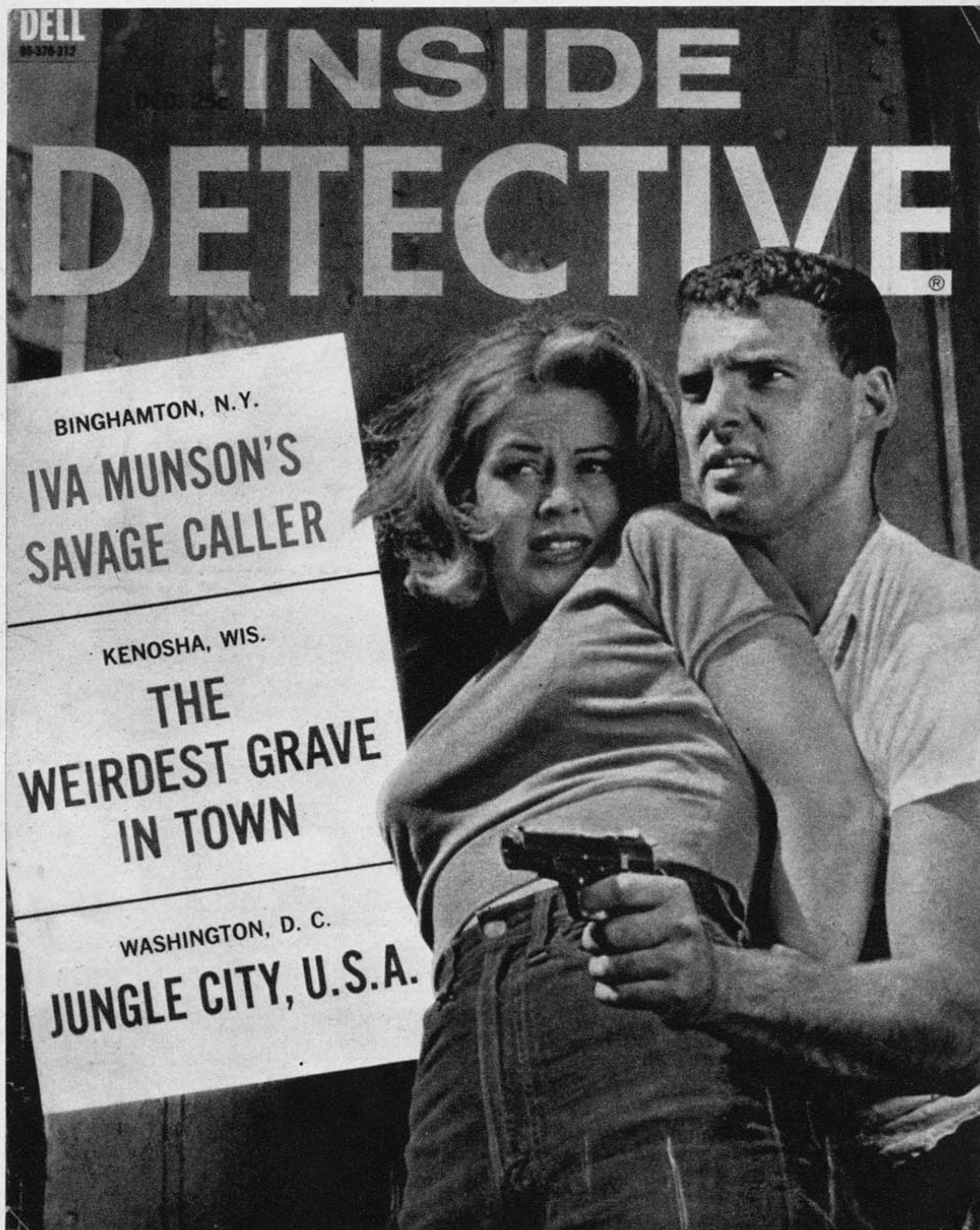


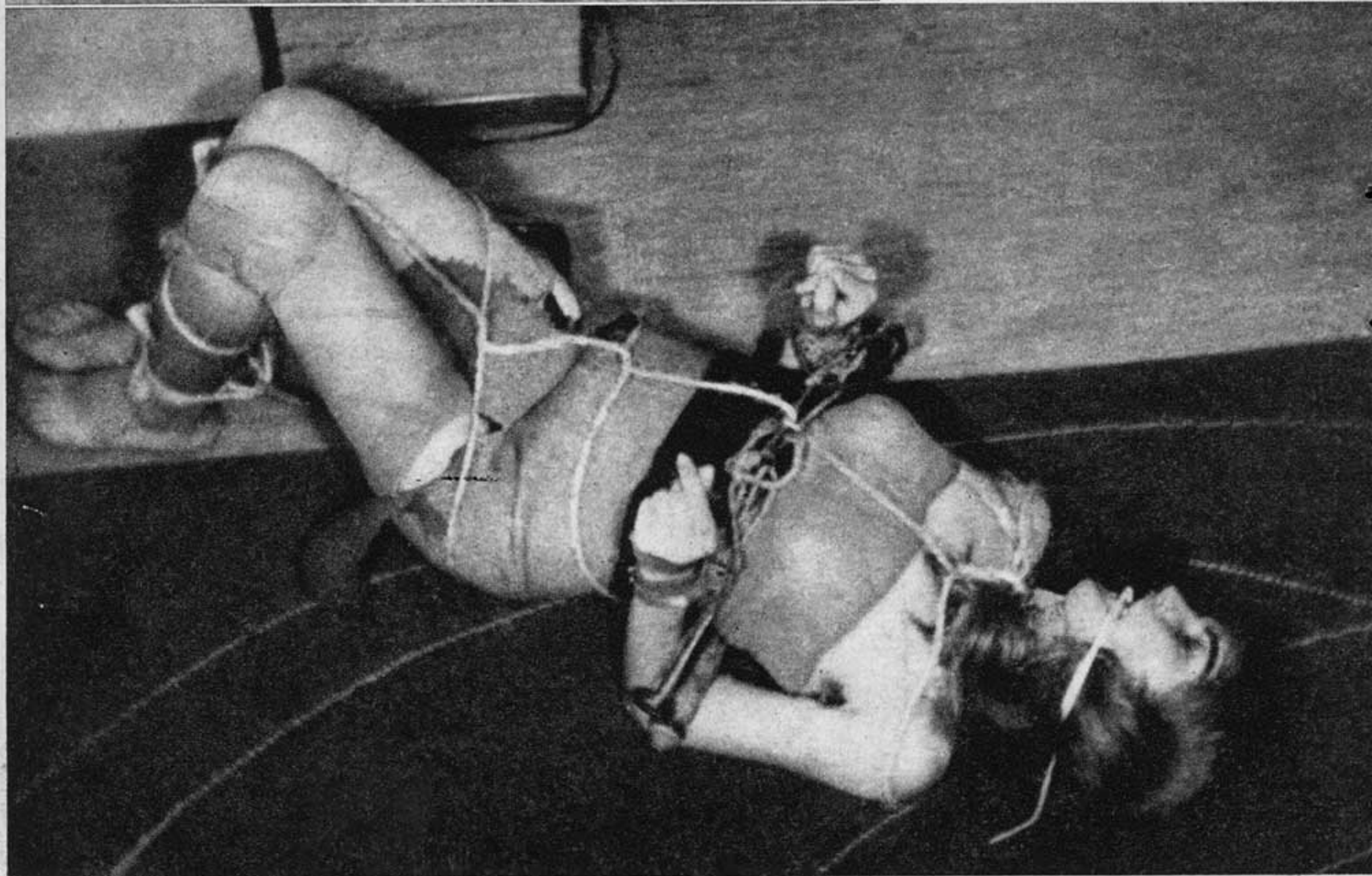
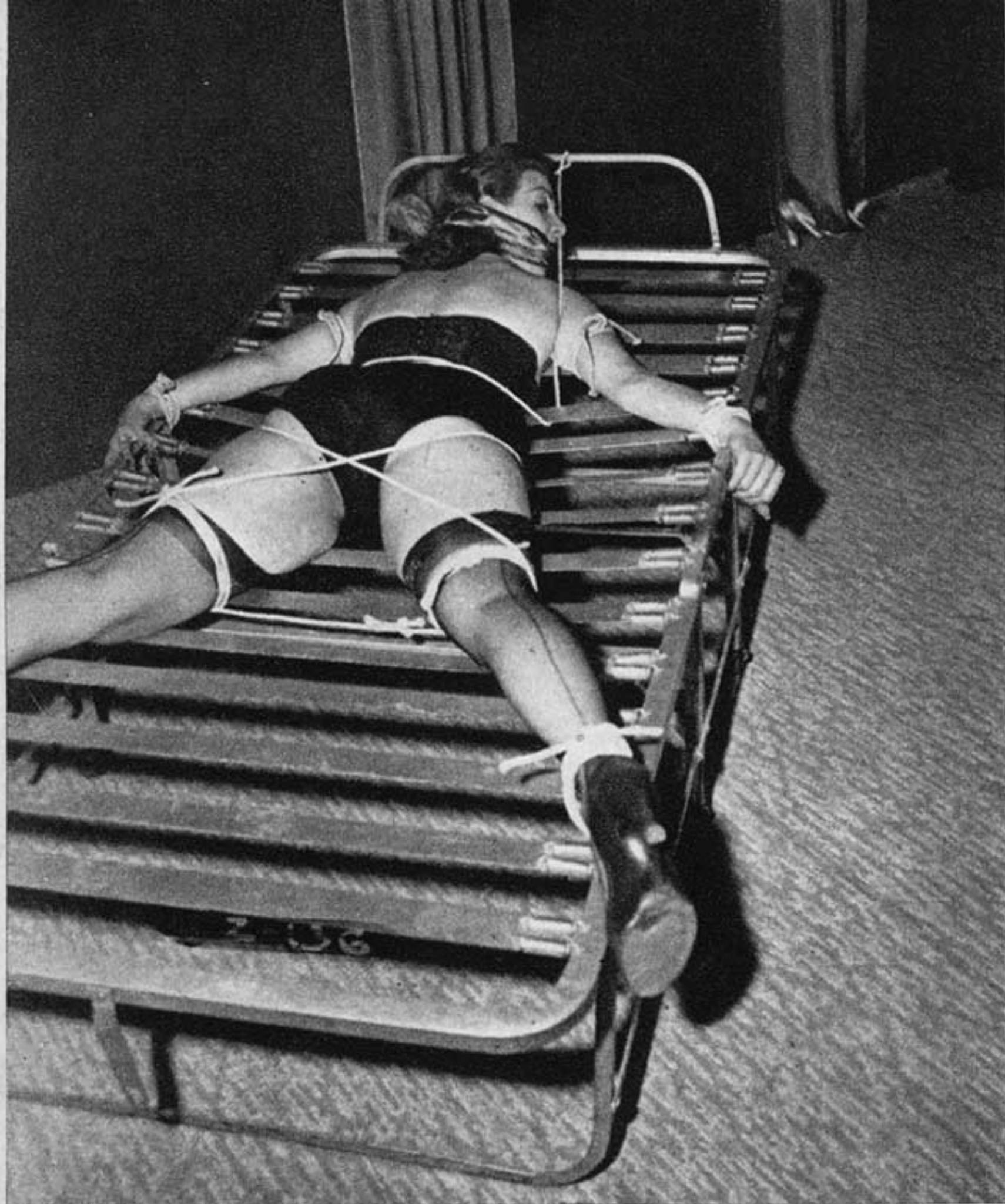
すてきな
お遊戯



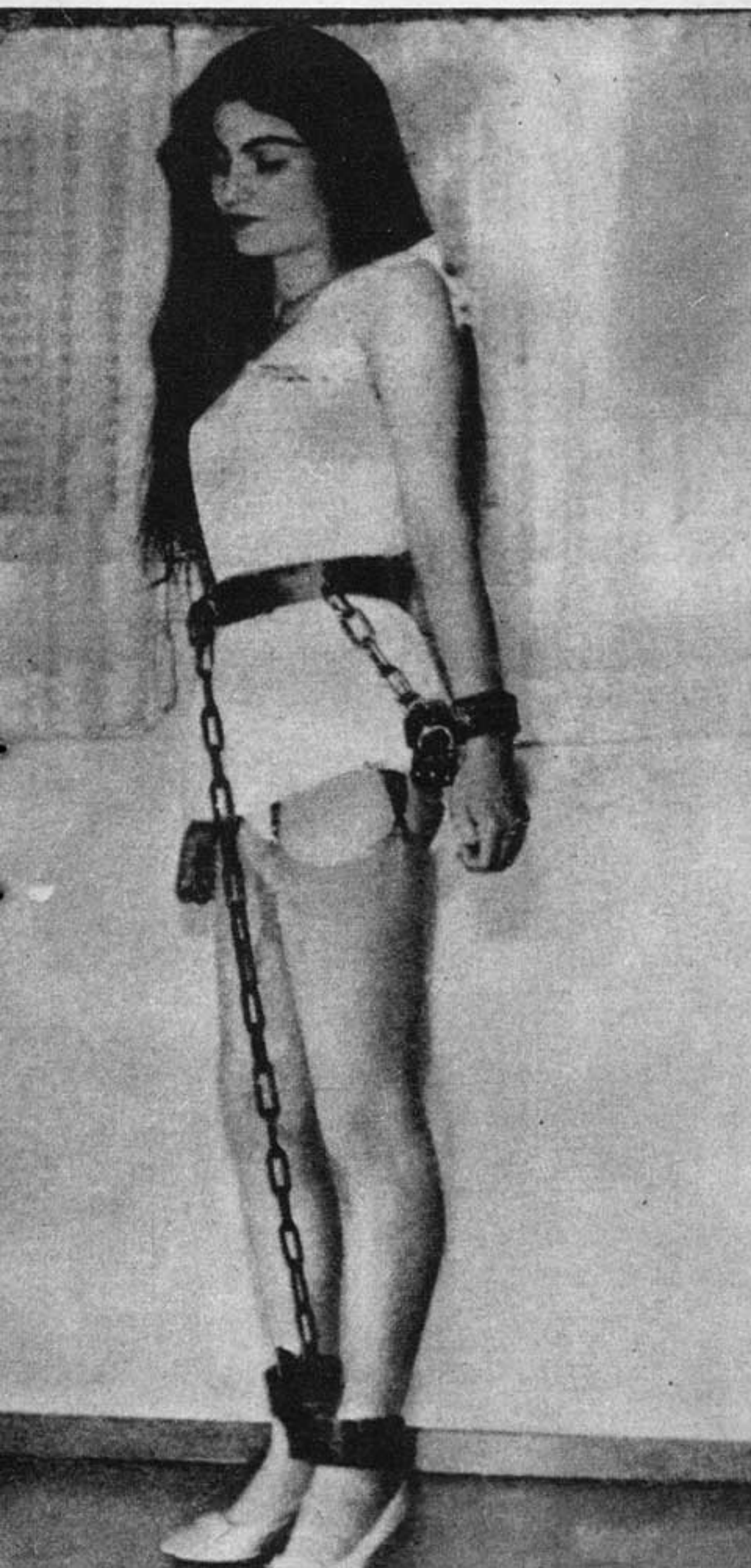
北米・フェニクス商会・特約

アメリカの公刊誌・ご紹介





北米・フェニクス商会・特約



S
と
M
の
う
た
げ





裏

窓



7 月 号

第9卷・第7号

人間再発見の時代



文学の神さまという元は志賀直哉であった。ところが最近では、神さまの座は谷崎潤一郎に移った、と奥野健男が「東京新聞」の文芸欄に書いていた。

なるほど、言われてみればそのような気がする。昔、確かに志賀病患者というのが多かった。なぜそんなに熱病病みのように取りつかれねばならないのか、合点がいきかねるほど、志賀直哉の信奉者ときたら、氣違いじみたところがあった。

《暗夜行路》は不滅の金字塔であり、古今にわたる古典であった自称他称の志賀直哉の弟子が続出して、感激をもって己が師のことを語った。

左翼であって志賀病だ、という連中がまた多かった。小林多喜二がそうであり、宮本百合子もそうであった。これは有名な話である。或る自称コミニストの若い経済学士で、猛烈な志賀病患者というのを知っている。彼は《資本論》を語る以上の熱意で《暗夜行路》や《城の崎にて》を語った。父と子の宿命的なにくしみと反発のあり方、などについての余談がつけ加わったりして、にぎやかだった。《和解》はついに和解ではない、と言ったりもした。

ともかく志賀直哉は大木だった。押せどもひけども、びくともするような代物ではなかった。とうとうと流れる文学の本流だった。全く小づらにくいほどに、ごう然と志賀直哉はそびえていた。

ところが、どこにでもヘソ曲がりというのが居る。大木がゆるがねばゆるがぬほど、本流がとうとうと自信たっぷりな流れを見せれば見えるほど、ヘソ曲がりのヘソは曲がる。

坂口安吾に太宰治は、ヘソ曲がりの中でも特に著名な代表選手であった。彼らは志賀直哉に体当たりをくれた。何するものぞの勢いでぶつかった。しかし、それは一種の自爆行為みたいなもので、志賀直哉はこゆるぎもなかった。全く不死身の巨人であった。

傷つき、破れ果てたのは坂口安吾であり、太宰治であった。という事になっていく。特に太宰治などは、あらんかぎりの悪罵をこの巨人に浴びせかけ、抱き合い心中をもしかねまじき勢いで、かみついたものだ。

しかし、勝負は最初からついていた、ということになっている。

×

志賀直哉は一種の不感症である。だれがかみつこうと、わめこうと、我不関焉として収まっている。がんこといえば、これほどがんこなおじいさんも、まためったに居るものではないということである。

最近亡くなった映画監督の、小津安二郎とどこか似たところもあった。ふたりは肝胆照らす仲であったそう。そういえば、政界の吉田茂老も、どこか共通点があるのではなからうか。政治に志すほどの者の中には、熱狂的な吉田病患者というのが居るそうであるから、そういうことから相通じるものが感じられる。

しかし、ともあれ時間は経つ。どんな大木もいつか枯れ、どんな大河もいつか干上がる時が来る。いつの間にか、ふっと気づいたときには、あれほど充滿していた志賀病患者が急に居なくなった。何とも不思議な位である。そうしてその反面、奥野健男が言うように、

今度新しく、谷崎潤一郎が神さまになった。神さまというと、川端康成なぞも神さまだそうである。しかしこちらの神さまは、少しばかり規模も位も低くなる。官幣中社というところか。

神さまには当然信徒が集まる。谷崎病という患者が出ることもなる。だが、以前、志賀病患者の時は、患者は自分が患者であることを、声を大にして告げ回った。だから、大変にぎやかで、うるさいほどであった。

それに反して、谷崎病患者というのは、至っておとなしい。自分が患者であるということ、なぜかあまりしゃべりたがらない。だから目立たない。

と言いながら、谷崎病は広く深く蔓延していることは、今や認められている。

神さまのバトンタッチで、志賀から谷崎へと選手は交替したが、いったいどうしてこういうことになったのか。そして、志賀病の場合は鳴物入りであればにぎやかであったのに、谷崎の場合はどうしてこういう具合にしめやかでおとなしいのか、ここのところ大変興味のありそうな問題ではなからうか。

いったいに日本人は理屈好きである。なかなしく人生論が好きだ。人間いかに生きべきか、という命題に、思い悩むことが好きである。命題そのものより、そのことを論じ、そのことに思い悩む、ということ自体が性に合っているようである。

日本人ほど読書好きの国民はないと言われる。というのは、読書そのものが、人間いかに生きべきか、といった人生論的なものを、論じ示唆し、考えさせてくれるからである。読書とはそういう行為

と結びつくことで日本人の体質にぴったりと寄りそってきた。

読書とは、人生を考えさせてくれるものであった。そういう哲理に似たものを、含んでいねばならぬものであった。だから、読まれる小説類までも、何か人生論的な哲理に似たものが示唆されていねば永続しなかった。文学の本流は、だから森鷗外に夏目漱石、島崎藤村といった人生倫理派のものとなった。神さまは、おおむねその流れから出た。

島田清次郎の《地上》でさえ、そういう人生倫理的要素が多分に含蓄されていたがために広く読まれ愛された。

そういう目で見ると、思いつくだけでも倉田百三しかり、吉田紘二郎しかり、《三太郎の日記》の阿部次郎、荻原朔太郎に宮沢賢治《生活の探究》の島木健作、みなしかりであった。

先年他界した吉川英治にもその色彩が濃くあった。菊池寛の戯曲や芥川龍之助の短編の中にも数多くあった。

人生派の中で、武者公路実篤の占める地位もまた特異なものであった。しかし、総じてこれらを一括し、そのストイックな倫理論の中に《暗夜行路》の時任謙作が、強い自我をひっさげて登場するのである。これは同じ人生派の《路傍の石》の山本有三、《次郎物語》の下村湖人らと、少し趣は異なるが、しかし、漱石、藤村から引きつがれた人生いかに生くべき、という命題を、意識するとしなやかかわらず、同じ大枠の中でつかまえることができるのである。

日本人は理屈と読書が好きである。また考えることが好きである。そのための資料となりうる小説が結局愛好されてきたのである。これが読書会、あるいは読書グループ等の、また格好な対象作品となりうる資格が、十分に備わっていることの証左でもあった。

こういう背景があらかじめあるところに、当然のごとく志賀病が

蔓延したのである。

日本のインテリは、コミニズムをさえ人生論的に考えてしまう。コミニズムも志賀直哉も、いっしょにして考えるといった思考法が生まれるのである。ここに、あまりにも日本的な特殊な思考法が感取されはすまいか。

×

思想家や評論家またしかり。人生派の作家や作品を論じることが性に合っていた。性に合うというより、論じやすいのである。格好な餌食でさえある。ということで、車の両輪のごとく小説家と相和し、評論家は次々に夏目漱石論、森鷗外論、島崎藤村論、そして志賀直哉論を書いた。そしてそれなりに良い仕事できた。

ところが、対象が志賀直哉から、谷崎潤一郎へと移ったとたん、はたと困るのである。志賀直哉を論じる筆法では、谷崎潤一郎はとうていつかまえられないのである。

これは一種の予期せぬ椿事であり、大変迷惑な話でもある。こういうための準備がまるでできていなかった。漱石や藤村を論じるとなると、これは日本人としては得意中の得意であって、続々と名論文が産まれる。だが、日本人の今までの習性として、潤一郎論となるとこれは大変厄介な話なのだ。だから、今まで、これが谷崎だ、といった決め手になるべき仕事をした評論家は、ひとりも居ない。にもかかわらず、神さまの座は志賀から谷崎へ移った、ことは確かである。

若手評論家のひとり、進藤純孝は、次ぎのように新聞に書いていた。題して《文学に墮落の精神を》というのである。

「墮落とは、人間と人間がぶつかりあい、ひしめきあってつくりあげるさまざまな秩序から、そむき出ることである。つまり、あえて

異端の徒になることだ——私たちの文学は、迫害の追跡ということ
をその身上としている。さまざまな秩序から身をそむけて、そのた
めにしいたげられ、おさえつけられている人間の感情をうたいあげ
るのが、文学のあり方であろう——作家の処女作というものが、活
力にみちみちているのは、はげしい墮落の精神に支えられているか
らだ。だが、今日では、作家たちは、世に出ることによって、たち
まち文化人となり、有名人となる。うとんじられ、そむき出たはず
の世の秩序から、ほほえみかけられ、頭をやさしくなでられる。そ
して、手もなく墮落の活力を失い、あわれな優等生になり果てる。
文学の衰えるのも当然である。——作家たちが、よほどの勇氣をも
って身ぐるみ墮落するのでなければ、文学は滅びるばかりだ。墮落
の精神の回復をのぞみたい」

若手らしい、もっともな言い分である。しかし、この言い方は、
いかにも青年らしい素朴さのままでありすぎる、そして何となく言
い古されて新鮮味がない。

これは逆説として、逆に裏返しにした人生論にすぎない。本当は
これが一番健康な考えなんだ、とほこらしげでさえあるのだ。

谷崎潤一郎は、進藤流の墮落精神などではやっぱりつかまえるこ
とはできない。

ここに書かんとするものは、別に文学論のつもりではないので、
それで文学論の深追いはしないつもりである。

ただ志賀と谷崎と比較することで、時代の移りと、社会世相、人
間の本質に迫って、興味ある命題が提出されそうだ。そのことにむ
しろ問題はある。

人生派を一口に言いきると、修養主義だ。それが何を結果するか、
秩序との合致である。明治時代は男性的時代だという。それは青雲
の志をいだいて立身出世を夢みる時代であった。出世とは、権力の
側に仲間入りすることを意味した。志成らず、野に下って反骨精神
をみがく、といってみたところで、これも一種の権力主義において
変わりはない。

明治の文学が、鷗外、漱石で代表されるのは偶然ではない。官学
的なアカデミズムという権力主義が、ストイックな修養主義を産ん
だ。結果としては秩序への順応である。

順応度の確かさにおいて、《三太郎の日記》ほど毒のある書物は
少ない。武者公路実篤のヒューマニズムというのと、変わりのない
毒素で、人の心を眠らせる。

眠ることが修養である。鍛練なのである。宮本武蔵までが、眠る
ための修養をした。昭和初期、風雲急を告げる権力時代の作品であ
った。武蔵はお通と剣と二筋の道を賭け、剣の道を選んだ。剣の道
は厳しい、まず己に勝つことじゃと、武蔵のストイックな精神主義
の遍歴が始まる。

精神主義の帰結は何か、悟りである。悟りは秩序との完全な一致
を悟ることである。

人間にはもともと、順応本能というのがあるそうである。本能的
に、いかに秩序に帰一するか、という理論を捜すくせがあるのだそ
うだ、目的は最初からはっきりわかっている。しかし、目的に至る
道にわざと沢山の障害を設け、通りにくくさせ、そしてその上でそ
の道を通して目的にたどりつこうとするゲームだ。パチンコの穴の
そばに、じゃまになる釘をいっぱいさしてあるのと同じ理屈だ。あ
の釘がないと、玉が穴にはいった、という確実な手ごたえがない。

じやまになる釘との闘い、それが修養主義だ、人生理論派の眼目だ。目的は最初からわかっているのだ。秒序への参加であり肯定である。思想善導、人づくりに道德教育といったもののねらいと、結果的には一致してしまう。

アカデミックな特権意識というのが、人生派の特徴の一つでもある。知識階級ということの過度な意識振りがそれだ。強固な自我、というが、それは知識人としての自我であつた。そういう自我は、実に安直に権力と結びついてしまう。そうして意にそまないものを見下し、排斥し、しまいは悪書のレッテルで燃してしまふようなつっ走り方を産むことにもなる。それが修養主義であり人生派であつた。

谷崎潤一郎は、「人生いかに生きべき」派とは全く無関係な位置にある。彼は日本人好みの思考癖というのがない。今までの文学の本流からいうと異端児である。

しかし、もともとは、これこそが本来、文学と名づけらるべきものではなかつたのか。谷崎潤一郎は『饒太郎』の中で、彼の口を借り、こんなことを言っている。

「——換言すれば、『美』は『善』よりも余計『悪』と一致する。

——ねえ、君、たとえばあのダンテの『神曲』だね。あの中で一番詩的な部分は何処かと言えば、どうしても地獄じゃないか。あの大作の中から、天国や浄罪界を除いたところで、それほど価値を減ずると思われないが、若しもインフェルノがなかつたとしたらどうだろう？ 恐らく世界の傑作とし賞讃されることはむずかしかったにちがいない。更に適切な例は、ミルトンの『パラダイス・ロスト』と『パラダイス・リゲインド』とを比較してみることだ。何故に『パラダイス・ロスト』は成功したか、何故に『パラダイス・リゲインド』は失敗

したか、と言えば、即ち前者は悪の勝利を描き、後者は善の勝利を描いたからなのだ。——

今かりに、二人の美人があつて、一人は善人の性格を持ち、一人は悪人の性格を持つとするね。その場合に孰方が余計美人に見えるかと言えば、必ず後者——悪人の方が遥かに立ち勝つて見えるものなんだ。つまり善人よりも悪人の性格の方が『美』を遺憾なく発揮するのに適当している訳なんだ——」

×

倫理派と耽美派がここでわかれる。ということより、志賀直哉で代表される倫理的時代から、谷崎潤一郎で代表される美意識、いわゆる感覚的時代への移行が問題になる。

もちろん、志賀直哉も、藤村も漱石も、りっぱな作家であるには違いない。それを決して否定するものではない。荻原朔太郎ほどの詩人が、そうやたらに続出するとは思われない。島木健作の地味で着実な仕事も忘れられない清潔な印象を残す。

だが、読書子は、良い文学とは、何かまじめな、人生態度にブラスするような、倫理的姿勢が確かなものでなければならぬ、といった大変な誤解を植えつけたことがくやまれるのである。このことは実は文学の世界に限られず、広く社会の高級な良識という名の、結局は秩序へ向かつて順応するだけの、そして後に向かつて、この道だけが正しい、前へ進め、と号令をかけるような、その号令がいつの間にか本来の人間の最も基本として身につけていねばならない、自由かつ達な野性人としての感覚を鈍磨させていくような、ひどく小さな枠内の、きわめて排他的な修養主義で、すべて他の人間のこごとくを縛りつけずにはおかぬ、全体主義的なものへ足並みそろえて進んでゆく傾向を生むのである。

そういう精神主義が一つの因ともなつて、戦争と敗戦を招来した。これはもつとも日本的な倫理主義の敗北であつた。

倫理が敗北しても、最後に残るものは人間である。理論は必ず別の理論で破られる。決して破り得ないもの。それは感覚だ。

志賀から谷崎へと時代が移行したというのは倫理から感覚へと、人間を再発見しようという自由な時代の息吹きが底流に流れることを証明するものである。この時代の移りと人間再発見の風潮は、理論ではない。自然である。だから説明しにくいことになるのではないか。

悪は美と一致する、悪は悪であるがゆえに美しい。悪はなぜ美しいか。倫理を追つ払うからではないのか。倫理主義のうそを、身をもつて、見事に喝破するのが悪だ。悪は理論的なものをきらう、ただ悪が存在する、という、それだけで、百の理論を打ちくだいてしまふ。これこそ人間の復活ではないか。

×

志賀病患者は、一の教条主義者であつた。谷崎病患者は教条破壊者であつた。主義を持たない人たちである。

今現実には、人は何を欲するか、それは自由と人間の復活だ。倫理主義の否定である。それは同時に、良書の否定を意味する。

何がいったい良書なのか、人の心から真に感動するナイーヴな神経を奪い去るものが、いわゆる、良書の名で呼ばれているようである。それは一種のお作法書にすぎない。ちょうど音楽会で、聴衆が作法に従つて、作法通りに拍手すべきところでピタリと狂いなく拍手する、あの拍手の感動を教えるものであるのだ。一つの調教を意味するのである。あの拍手は果たして真の感動なのか、実は真の感動を、逆に殺してしまふものだ。

良書主義との訣別、これが現代の意味する大きな流れだ。志賀直哉との訣別の意味は、本当はここにあるのではなからうか。

われわれは悪書を読みたいのだ。読んではいけないもの、先生に見つかると取り上げられてしまふもの、そういうおそれのある小説を読むことが、どんなにわれわれ成長期にあつた時代、魂のかてとなつたことか。

学校では決して教えてもらえない秘密は、われわれいわゆる悪書で知つた。そしてそこでは、人間は赤裸々にあつた。仮面をはがした人間の実質があつた。これに巧妙に仮面をかぶせて教えるものが良書なのである。

人は決して、仮面には真の感動はしないものである。その感動は、理論の筋を追うパズルのように頭だけの感動である。ハートを突き動かすには、結局は悪の感動によるのほかはないのだ。悪とは、批判者のことだ。

欺瞞に対しての厳しい批判者なのだ。

悪は善を侮蔑する。侮蔑すること人間を型(タイプ)から開放する。主義から開放する。だれをも肩書をとつた、はだかの人間にしてしまふ。つまり、階級の差、善悪の差、敵味方の差をなくしてしまふことだ。

悪は、己が悪であるがため、闘わねばならない悪を知らない。己を敵として追跡してくる善から、身をそらすだけである。悪は追っかけはしない。

追っかけずに逃げるのだ。そしてひそかに、あらゆる機知をもつて、善を嘲笑する。

黒い部屋に泣く美香

北 園 透 一 朗
中 川 彩 子・絵

1

美香は疲労した。

からだも心も、自分のものとは思えないほどの疲れかただった。

むりもない。死よりもショッキングな屈辱をうけたのだ。

体内の臓腑が、すべて活動を停止し、灰色になって沈んだような疲労であった。

美香の顔面は蒼白になり、力なく両眼をとじたまま、死人のように呼吸をみせなくなっていた。

Qは、注意ぶかく、美香の表情をのぞきこんでいたが、やがて、シコにいった。

「お嬢さまは、たいへんお疲れのようすだ。

これからすぐに浴室へつれていき、よくからだを洗ってあげなさい。よく筋肉をもみほぐしてあげてから、お部屋へ運び、ベッドに休ませるのだ。拘束具は、いっさいつけてはいけない。自由に、のびのびとねかせてあげるのだ」

「はい」

と、シコは機械的にうなずいた。

拘束具をつけないでねかせるといふのは、Qの性癖にとって、非常にめずらしいことであつた。

シコは機械的にうなずいたが、その内心になにかの感情がうごいたようだ。

美香が寝起きする部屋は、四階のほぼ中央に用意されている。

この「夢の城」で、はじめて美香がめざめた、真紅の部屋の左どなりに位置した、上等の部屋であつた。

「ああ、それからな」と、Qがふいに思いだしたようにいった。「私は、明日いちにち、このパノラマ島を留守にする。たいせつな用を思いだしたので、外出する」

シコは、自分の左手首にはまっている大きな腕時計をみながらいった。

「ただいま、午前二時十五分すぎでございます。明日というのは、つまり、きょうのことでございますね」



「そうだ。これからすぐにねむって、九時に起床する。朝食後、ただちに出發するから、ボートを港につけておくように手はずしてくれ」

「かしこまりました。それで、お帰りのご予定は？」

「そうだな、夜、九時、いや、もしかすると十時すぎるかもしれない」

「それで……」と、シコは、なぜか口ごもっていった。「あの……美香さんは、どういたしましょう？」

「ねかせておくんだ。ゆっくりと休ませてやれ」

「はあ？」

シコの近眼鏡が、いぶかしげに光り、うわめ使いにQを仰いだ。

「手枷も首枷もいっさいほどこさず、やわらかいベッドの上で、明日の朝まで、自由に、のびのびとねむらせるのだ。いいか、わかったな。美香は、私にとって、だいじな、だいじなお姫さまだ。ただ訓練するだけの女ではないのだ。お前たちとはちがうのだ」

「わかりました」

「食事も、第一級食をあたえなさい。私からとくに栄養士に言っておこう」

「かしこまりました」

シコは、もう、よけいなことは質問しなかった。美香のからだを、移動椅子のうえにのせた。

四階の入浴室へ行き、それから美香の部屋へ帰還すべく、シコは移動椅子の背後へまわり、ハンドルに手をかけた。

2

シコという名は「しこめ」の略称である。

「しこめ」とは、すなわち「醜女」である。

美しい女にだけしか関心のないQが、どういう理由で、こんな醜い女を身邊に置いておくのか。

この問いに対する答えは、しかし、かんたんである。

美しい女を、いっそう、ひきたたせるためである。

シコは「ひきたて役」であった。

いくら美しい女でも、見慣れると、その美しさに麻痺して、美に対する飽和を覚える。

美しい女を、美しいと感じなくなったとき

Qはシコの顔を凝視する。

——なんという醜惡な顔！

と、思わず心中でさけび、ぞおツとする。

戦慄にちかい、悪感を感じる。

そして、ほかの女たちの美しさを、再認識

する、というわけである。

シコは、自分がなぜそんな名で呼ばれるかを、むろん知っていた。

しかし、どんなに醜いことを自覚し、あきらめている女でも、あたまからそんな呼ばれかたをされることは、屈辱である。

この女は「シコ」と呼ばれることに、けっして慣れなかった。

つねに屈辱を感じ、反撥していた。しかしそれは内心だけで、その反撥を表面にだすことは、むろん、なかった。

反抗を表面にだしたときのQの怒りのすさまじさを、よく承知していたからである。

シコの反撥心や不服従に対するQの仕置きは、それがたとえどんなに小さな、瞬時の反抗であっても、苛烈をきわめた。

一片の愛情もふくまれない、ただ苦痛と忍耐だけを強制する、残忍なものであった。

だから、シコは、どんなにはげしい屈辱も怒りも、内面にかくしておく。内側に秘めた怒りは、一種の呪いとなって、日ごと夜ごと貯蔵されていくようだ。

Qは、この女の、屈辱に慣れない性格をよく知っている。屈辱に慣れ得ない神経をもっている女だからこそ、こうして身近な女奴隷として使っているのだ。

奴隷の境遇に、すぐあまんじてしまうような女だったら、なんのおもしろみもない。

この女は、醜いくせに、自分を実際以上にみせようとし、虚栄心がつよく、自己中心的な、おだてられやすい性質なのである。

ヒステリー性の女に、もっともよくみられるタイプであり、こういう女に奴隷の位置をあたえているというアイデアに、Qは皮肉な満足感をおぼえる。

美と醜との、形態的なちがいはあるが、Qの手きびしい教育に、なかなか馴致されないという点において、美香とシコは、まさしく同一の本質をもっていた。

したがって、Qがこの女を「シコ」と呼ぶときには、いささかのサディズムにくすぐられるという仕掛けである。

シコの左手首に巻きついている腕時計の針が、二時四十五分をさしている。

Qは、すでに自室にもどり、海のように広大な、やわらかいベッドのなかで、傲慢なねむりについていた。

そして、入浴をすませた美香も、母親の乳房のようにあたたかいベッドのなかで、屈辱にうちのめされた心身を横たえていた。

シートは、淡いピンク色であった。

美香は目をとじたまま、なんの恥じらいも

抵抗もなく、そのピンク色の平和な波のなかに身を沈めた。

シコが、近眼鏡の内側の目を、針のように細めて、それをながめている。複雑な色と光りを秘めた視線であった。

「これを、おのみなさい。疲れがとれて、よくねむれるわよ」

上等のブドー酒のなかに、鎮静剤と睡眠薬を混入したグラスを、シコが用意し、美香にすすめた。

「私がのませてあげるわ」

美香の肩に片腕をまわして、半身をやさしく抱き起こし、その飲みものを彼女のくちびるに触れさせた。

ちら、と眉をひそめたが、それ以上の抵抗はしなかった。目をつぶったまま、美香はくちびるをひらき、その血液色のブドー酒を口にふくんだ。

白いのどを従順にうごかし、グラスのぜんぶをのみほした。

「すなおね。おりこうさんね」

と、シコは賞め、美香のからだを、またピンク色の波のなかに横たえた。

死人のようだった白い頬に、すぐにアルコールの効きめがあらわれ、うす赤い色がのぼった。

「おやすみなさい。うつくしい、幸福なお嬢さん」

と、シコがいった。

これから数時間は、たしかになんの束縛も恐怖もない、無意識の世界だった。美香は、たしかに幸福なねむりについていた。

シコは、美香の寝顔を、しばらく上からのぞきこんでいた。そして、こんなつぶやきをたいくつな老婆のひとりごとのように、低くながながともらしていた。

「いまは午前三時。私の長い苦しい一日のすべてが、やっと終わったわ。あなたのおかげで、私の腕も足も腰も、ぬれた綿のように疲れきってしまった。……だけど、私の明日はすばらしいわ。それを思うと、私は勇気がでる。朝がくると、社長さんはこの島から外出なさるのよ。私たちみんなを置いて……。そして、島へお帰りになるのは、夜の十時すぎになるとおっしゃったわ。それまでの長い長い時間、あなたは自由なのよ。ということはい私たちも自由なのよ。この広いお城は、これから十二時間ものあいだ、私たちのものなのよ。うれしいわ、なんでもできるわ、なんでも。ホホホ……」

朝、Qは予定どおり九時にベッドをはなれ朝食に三十分を費したのち、この「夢の城」を出た。

シコは、四階の窓から、たしかに、そのうしろ姿を見送った。

十時。

美香は、きんきんとひびくシコの声によって、ねむりからさめた。

「起きなさい、美香さん。もう十時よ。いつまでねているの。まぶたが腫れあがってしまいうわよ」

美香は、目をひらいた。

めがねをかけた細い目が、美香の顔のうえで、ぶきみな微笑をただよわせている。

乱暴にまるめた粘土を、そのまま顔のまんなかに投げつけたような形のわるい鼻。

上顎と下顎を前方につきださせた出っ歯。

青白くむくんだ顔色。

美香は、思わず悲鳴をあげ、ふとんのえりで顔をおおった。

数時間前のいまわしい記憶が、美香の脳裡に、鮮明によりみがえった。

あの羞恥と屈辱の舞台の、醜怪な登場人物の面体を、朝のめざめと同時にみなければならないとは……。

「きょうはね、美香さん。社長のかわりに、

私たちがあなたをかわいがってあげるわ。いえね、トレーニングだと思えばいいのよ。その準備だって、もう、ちゃんとできているのよ」

微笑をうかべたまま、シコがいった。

いくらしとやかな微笑をうかべても、この女のくちびるからは、歯がむきだす。

しとやかさを心がけ、柔和をよそおえばよそおうほど、この女の微笑は奇怪さを増す。

「いやッ、いやです。もうゆるして。もう、美香にはなんにもしないで。おうちへかえして！」

美香は、慄然として、かなしい声音で哀願する。

「ホホホ。かわいがってあげるというのに、どうしてそんなにいやがるの。失礼ではないこと？」

シコは、めじりにしわを刻ませて笑った。

「もうゆるしてください。美香のからだに、お手を触れないでください。これ以上、美香をいじめないでください。おねがいです！」

美香の目に、なみだがうかんだ。

かわいがる、ということばの意味を、一夜の経験で美香は知った。

「ホホホ。そんなにいやがる顔をみると、どうしてもきょうは、私のお人形さんにしたく

なるわ」

シコの声音が、細く、金属的なするときでとがりだした。

そのことばが、単なるいたずらや、脅しでないことは、昨夜の「散歩」で、骨の髄まで知らされた美香である。この奇怪な城の住人は、やると言ったら、かならずそれを実行するのだ。

「おねがいです、ゆるして。もう美香をいじめるのはやめて！」

「ほんとにかわいらしいお嬢さんね、ホホホホホ。あなたの泣き声は、まるで、うぐいすの声のようだわ。私たち、あなたのそういう泣き声を、もっともっとききたいの。さあ、きょうはあなたを、「黒いお部屋」へご案内するわ」

シコが、私たち、と言った理由は、すぐにわかった。

「さあ、あなたがた、来てちょうだい。お嬢さまは、はつきりとおめざめになったわ。はやく来てちょうだい。お嬢さんを、あの部屋へ運ぶのよ！」

シコが、かんだかい声をあげると、この部屋のドアがあいて、四人の若い美しい女性がつぎつぎに姿を現わしたのである。

A子。B子。C子。D子の四人であった。



この「夢の城」に飼われている、美しい女
奴隷たちである。

透明ナイロンでできている半袖のブラウスの
胸には、わかわかしい隆起がゆれ、同じく
すぎとおったナイロンでつくられたスカート
のふともものあたりからは、若い女のなまな
ましい体臭をあふれさせていた。

シコは、この美しい仲間たちにむかって、
声をはりあげた。

「いいこと？ ゆうべ計画したとおりにやる
のよ。あと十二時間は、私たちの自由よ。す
ばらしい一日なのよ。一分だって、一秒だっ
て無駄にはすげないわ。みんなで協力して
このこなまいきな娘を、思うぞんぶん痛めつ
けてやるのよ！」

青白くむくんだめすの狼は、ついに牙をむ
きだした。

嫉妬と復讐にもえて、近眼鏡は銀色の炎を
八方に散らして光った。

「ほんとに、こなまいきな娘ね。こんな小娘
に、社長の関心が独占されたら、私たちの恥
だわ。やりましょう、やりましょう」

四人の美女が、シコの興奮に応じた。

いつのまに用意したのか、シコが皮手錠を
とりだした。

玩具で赤ン坊をあやすように、美香の顔の

前で、その皮手錠を、ぶらん、ぶらんと振つ
た。

「さあ、美香さん。おめめをぱちりとあけ
て、これをごらんさない。これがなんだか、
おわかりになる？ 手錠よ、皮の手錠よ。こ
れでまた、あなたのその、かわいい手首をく
くるのよ。おとなしくしなさいね」

「いやッいやッ、かんにんして！」

シコは、首をふって合図した。

「手をおさえて！」

A子とB子が、ベッドの両側から美香の左
右の腕をつかんでおさえつけ、両手首を前に
組み合わせた。

その白い両手首を、すかさずシコが皮手錠
でとめた。

同時に、皮の足錠を持ったC子が、D子と
協力して、美香の両足首をひとつに固定して
いた。

「やめてッ、たすけてえッ！」

美香はふとんをけり、えびのように胸と腰
をのけぞらせた。

七時間の熟睡で、美香の健康な若い肉体は
完全に精気をとりもどしていた。

肩を左右にひねり、腰を勇敢に躍動させて
小さなベルトの束縛からのがれる努力をつづ
けた。

しかし、五人の腕力におさえつけられては
その抵抗も、しょせんは、むなしい。

おさえつけられ、美香はうめいた。

「この皮の手錠と足錠は、あなたを、黒い部
屋に運ぶまでのものよ。だから、そんなにこ
わがらなくてもいいの。あばれたら、あなた
が疲れるだけよ」

いいながら、シコは美香の片腕をつかみ、
つよく手前へひいた。

「ああッ！」

美香のからだは、ベッドからゆかへ、ひき
ずり落とされた。

ネグリジェの裾が、大きくまくれあがる。

とくに白いひざからうえのみずみずしい二
本が、柔軟な弾力をみせてふるえた。また、

羞恥の悲鳴があがった。

C子とD子が、美香の足首をつかんで持ち
あげた。

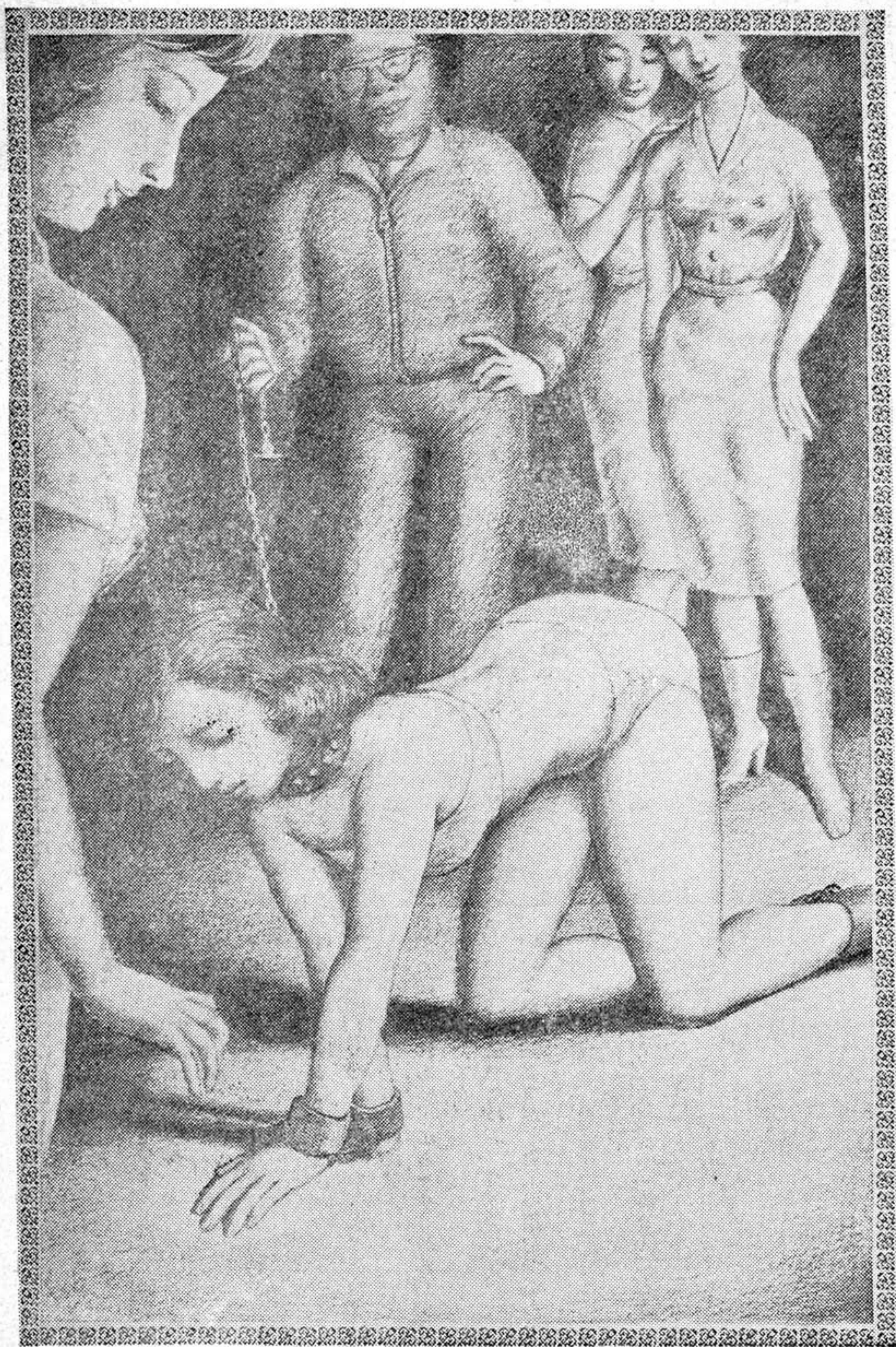
A子とB子が、美香の腋のしたに手をさし
こみ、よいしょとばかりに持ちあげた。

シコは、美香の髪の毛だけをつかみ、上へ
ひっぱった。

「痛いッ、たすけて、たすけてッ！」

美香は、悲鳴をあげてあばれた。

五人の女は、この協力作業に、早くも汗ば
み、夢中になっていた。



それらの汗は、女たちだけが発する神秘的な、あるいは卑わいな、とにかくなまぐさい強烈なおいとなって、美香ひとりをおしつづんだ。

五人とも、妙に呼吸をはずませ、鼻息があらくなっていた。

美香をかつぎあげると、廊下へ出た。

「黒い部屋」は、やはりこの四階の一隅にあった。

シコが、美香の髪の毛をひっぱりながら、そこへ先導した。

4

「黒い部屋」のゆかには、黒猫の毛のような光沢をもつ、黒いカーペットが敷きつめてあった。

四方の壁には、黒い壁布が、すきまなく貼ってある。天井も黒い塗料でぬりつぶしてあった。

換気装置らしい窓が、天井の中央部にとりついてしたが、そこにもたんねんに黒い塗料がぬられていた。

螢光灯の照明が、このさむざむしい墓場のような部屋を、無表情にてらしていた。

その無感動な螢光色は、部屋に六人の女をのみこんだときから、きわめて感動的にかが

やきはじめた。

美香は、部屋のまんなかへ投げだされた。ネグリジェをぬがされると、黒一色のゆかに、白いからだ、あざやかに浮きあがる。

黒い部屋は、白いからだをいっそう白くかがやかせた。

「ひいッ」

と、うめき、美香はからだを反転させた。

投げだされた美香の周囲に、五人の女が、林のように突っ立ち、それぞれの微笑をうかべてみおろした。

シコが、Qのそぶりをそっくりまねて、無言で合図した。

すると、四人の美女は、豹が獲物に襲いかかるように、いっせいに、美香にとびかかった。

皮製の手錠と足錠がはずされた。

そのかわりに、鎖のついた、重い金属製の手枷と足枷が、美香の両手首と両足首にはめられた。

左右の手首の鉄枷をつなぐ鎖は、三十センチほどの長さがあった。

左足首と、右足首をつなぐ鎖の長さも、三十センチほどであった。

つまり、手枷足枷をはめられても、最少限の自由はゆるされる仕掛けであった。

だが、それだけではなかった。

美香の白いのど首には、これも鉄製の、重いぶあつい首枷が、がちりッとはめられたのである。

それは、あつさが三センチもある、頑丈な重量感の豊富な首輪であった。

首輪にも、鎖がついていた。

その鎖は長く、二メートルほどのびていた。

「ゆるして、ゆるしてください」

と、哀願しつづける美香の声も、その首輪にしめつけられ、かすれた。

鎖と鎖がふれあい、がちやり、がちやり、と非情な音をたてた。

「いい格好になったわよ、美香さん」

いいながら、シコが、首輪の鎖をつかんでひっぱった。

「うううッ！」

と、美香ののどが、きしみながらのびた。苦痛をすくなくするために、自分から首を

シコのほうにむけ、両手をゆかにつけた。すると美香は、飼い主に首輪をひっぱられる犬のポーズそっくりになった。

本名のかわりに、アルファベットをかぶせられた美女たちが、美香のみじめな姿をみて

笑った。肩をたたきあい、おなかをおさえて

笑いあった。

「あなたの意識がはっきりしているうちにこ
とわっておくけど、きょうのこのトレーニング
グのことは、社長さんには、いっさい内緒な
のよ。秘密なのよ。約束してね。約束を破っ
て、きょうのことを言いつけたりしたら、私
たちは、また社長さんのお留守に、あなたを
ひどい目にあわせるわよ。このお城のなかに
は、あなたが見たこともきいたこともないよ
うな、おそろしい道具が、たくさん置いてあ
るの。私たちは、その道具の使いかたを、ぜ
んぶ知っているの。だって、私たちもその道
具や仕掛けで、さんさん泣かされてきたん
で、すもの。だから、お約束したほうが、あなた
のおためよ」

美香の顔をのぞきこむようにして、シコが
いった。

「だまっていけないで、なんとかいいなさい。
はっきりと約束するのよ。さあ、約束すると
いいなさい。返事をしなさい！」

いいながら、A子は、透明ビニールのブー
ツをはいた足で、美香のしりをけった。

美香は、四つん這いのまま、前へのめり、
顎を黒いゆかにぶつけた。

「は、はい。約束します。ですから、もう、
もうひどいことはなさらないで！」

なみだと声とが、いっしょになった。

そのポーズをみたB子が、はずんだ声でい
った。

「そうだわ。——めす犬ごっこ。これからの
お遊戯を、めす犬ごっここと名づけましょう」

「さんせい！」
「さんせい！」

C子とD子も、声をそろえて同調した。

六人の瞳が、異様な情熱をおびてかがやい
た。

Qの寵愛を、いま一身にうけている美香に
対して、美香以外の女性たちの感情と意志は
完全に一致したのである。

これはふしぎな憎悪であり、微妙な嫉妬と
いえた。

寵愛とはいっても、むろん、Qのそれは、
ふつうのものではない。

美香の出現によって、彼女たちは、Qの執
拗な加虐を受けずにすむはずなのである。

Qの関心が、美香ひとりにそそがれれば、
自分たちは、それだけ、ラクな時間をすごせ
るはずではないか。

シコはともかく、A子たち四人は、美香に
感謝すべきではないのか。

それなのに、彼女たちは、美香に、嫉妬し
憎悪をむけ、いま、Qの外出をよいことに、

美香ひとりを責めさいなもうというのだ。

めす犬ごっここの準備のために、A子以下四
人は、こまごまと立ち働いた。

シコは、美香の首輪からのびている鎖をつ
かみ、悠然と立っている。

つねに劣等感にさいなまれているシコに、
この優越感は、恍惚境ともいえる陶醉をあた
えていた。

——このめす犬のおしりに、皮のムチを鳴
らして、いろんな芸当をさせてやろう。

疲れてへたばったら、塩水を腹いっぱい
のませてやろう。

はらんだめす犬のような腹になるまで塩水
をのまし、そのままで這いずりまわしてやろ
う。この鎖をぎりぎり引っぱって、ひきずり
まわしてやろう。

塩水だから、たまらない。やがて、がまん
できなくなるだろう。

いくら「トイレに行かせて」と泣きさけん
でも、行かせてやらない。めす犬には、めす
犬の習慣があるのだから。

——というふうにしたら、この娘はし
りまで赤くして恥ずかしがるだろうか。
シコの空想は、果てしなくひろがっていく
のだ。



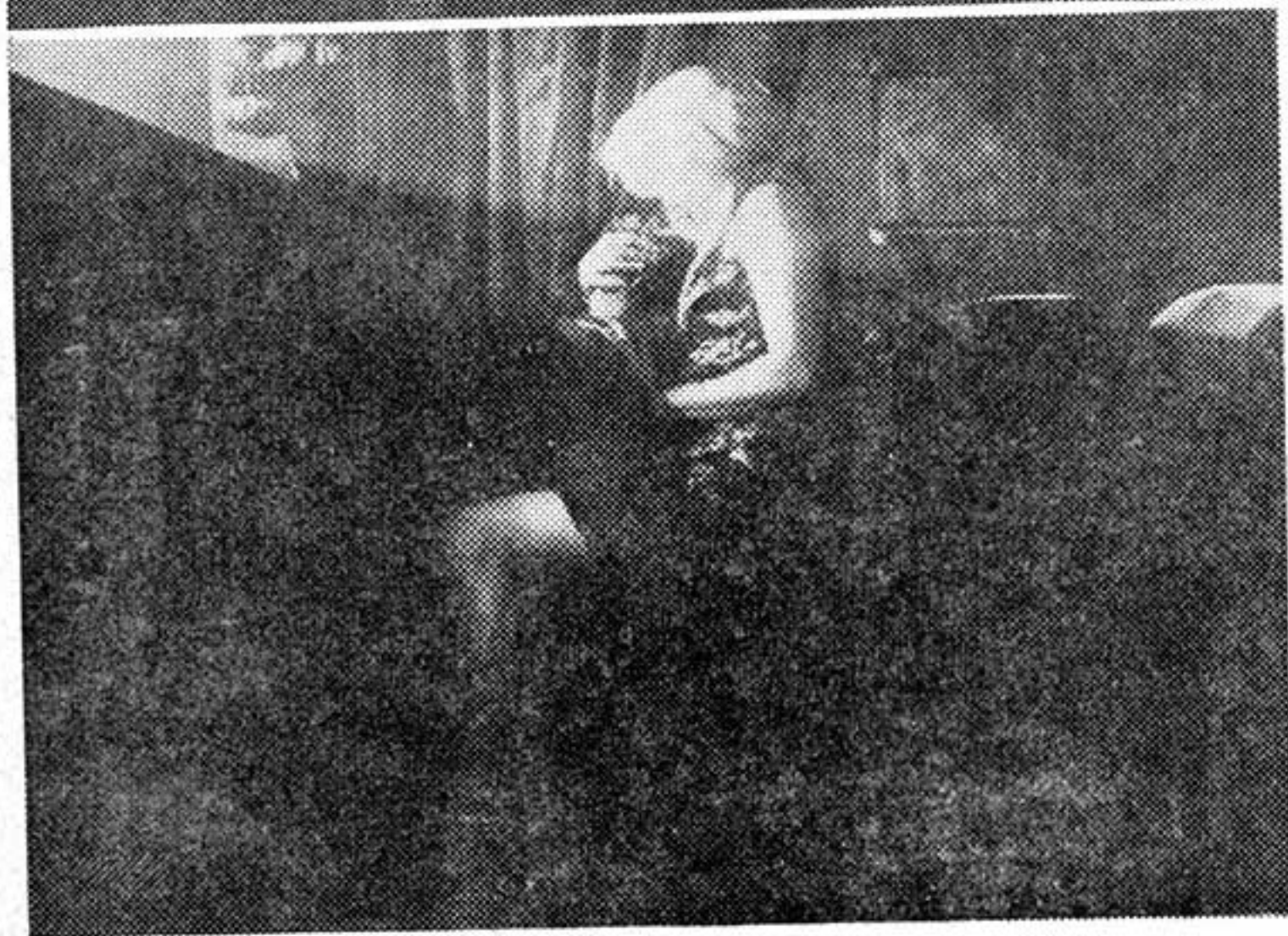
スウェーデン映画

ベルイマン監督作品『沈黙』の窃視シーン



本誌二月号の「裏窓タウン」に紹介した、スウェーデン映画「沈黙」は、案の定、日本税関の検査試写で「公序良俗に反する」場面が、四十秒間にわたってカットされた。ここに掲載したスチル写真は、女主人公のアンナが、芝居小屋にはいり、その客席で抱きあっている男女を目撃する場面。

アンナは、おもわず目をそむけ、興奮のあまり理性をうしななって、劇場の外へとびだしレストランの黒人ボーイを誘惑する——。ベルイマン監督は、肉体でも精神でも救われない「神の沈黙」を描いたというが、人間の真実をまじめに追究した映画も、ハサミを持つ人々にとっては好餌という次第。



ある彼岸への記録から



森本愛造

一

「ことり」というかすかなその音が僕の生活をあんなにも変えてしまう出来事の最初の析の音だとは、僕は思ってもみなかった。彼、西原健二氏は、今年三十六歳のサラリーマンであるが、こういう書き出しで、私のところに、自分の体験を書き送ってくれたのであった。

まず、彼について少し説明しなくてはなるまい。彼は或る鉄鋼会社員、中堅というのであろうか、頭も切れるし、また周囲の評判も、やり手、で通っている。出身校が二流の私大であることだけがいわば彼のキャリアでの欠点である、といえ、容易に彼のタイプは想像がつくであろう。色は決して白い方ではな

い。いまでも、かなりレジャーを楽しみ、また戸外のスポーツが好きだから、陽焼けしている。身体は頑健だが、将来の大物らしく、強肝剤を好んで飲む。家には、妻一人、子供は努力の甲斐なくまだ出来ない。収入は普通以上、かつて四〇万円ほどのボーナスを株式で儲けて百万ほどにふやし、その金で現在の住居を買った。有力者の仲人を得て結婚した彼は、結婚生活四年にもなる現在まで、夫婦喧嘩の経験もない。円満なのである。少し頼りないほどうまくいっているのだ。

では彼の手紙を、もう少し読んでみよう。その時、僕がふと足下を見たとしたら、僕は落とした定期券を発見していただろうし、そうすれだ何の事件もおこらなかったにちがいない。だが、僕は身をかがめるといふ面倒

な行為を敢えてしなかった。まもなく終点についた郊外電車は、先ず客の流れをはき出した。僕もその中の一人だった。改札口まで来て、僕は定期券を失ったことを知ったが、事情を話して、会社へと急いだ。どうせ一週間たらずしか有効期間が残っていなかったのだからと、大して探そうという気もなく、そのまま会社に着いてからは、忘れてしまっていた。帰りに庶務で、事情を言えば、すぐ次ぎのを買ってくれる。他の者ならばともかく、僕にはそのくらいのことはすぐしてくれる、という自信もあったからだった。

午後四時半、あと三十分で退社時刻というとき、僕の机の上の電話が鳴った。相手は女性である。

仕事柄、女性の電話というのはかならずし

もないことはなかったが、それでも珍らしかった。誰かな？ と、頭の中で、ゆきつけの酒場の女達の名前を一通り考えてみたがどうにもききなれない声であった。

だが、その疑問もたちまち解けた。相手は僕の定期券を車中で拾ったこと、それを届ける暇がなかったので保管していること。どうしても今日入用なら、あまり遠くない彼女の会社に預けておくこと。急がないならば、郵送してもよいこと、などを、ほとんど事務的に、早口でしゃべった。

僕にしてみれば、定期券そのものよりも、今になって気になるのは、二、三枚の写真であった。それを定期入れにはさんであつたのだ。それにしても、彼女は事務的すぎる。特に避けているわけでもないようだ。そこで、僕は、丁寧に礼を言ってから、お礼も言いたし、近くなのだから、ぜひ帰りにお目に掛けて頂戴したい、それに中には他人からの預りものも入っているものだから、と言いつつ、ええ、彼女の口から僕の勤め先に不快な噂が伝わったらと考えての釘をさしたわけだった。

案外、電話の主は簡単に答えて言った。では、今日帰りが五時半頃になりますから、八重州口のBというコーヒー店で六時におまち

します、私の顔はご存知ないでしょうから目印に、自分の会社の大きな封筒をもっていきます。それでも判らなかつたら、給仕さんに頼んで呼んでもらって下さい。わたくしは町村と申します。実に早口で、はきはきした言い方だった。

こうして、彼は町村という未知の女に会うことになった。しかも、相手は彼の秘密の趣味MSの写真を彼の定期入れの中から発見しているに違いないのである。これは、気の小さい人なら、何としても自分の持物であるとは言ひ難い種類のものではあつた。だがM系の人に独特のあの図々しさが、彼の心の中で頭をもたげはじめていた。分つたら分つたときのことさ、と彼は思い切つたように考えるように努めた。彼によれば、この危険な女性、自分の秘密を握つた未知の女性の前に、おずおずと出頭する自分を考えること自体がマゾヒスティックな興味を満足させるのであつた。そして、彼は未知の女性に会つた。

「やせすぎてはいた。だが整った顔付の女性だった。水の入ったコップを口もとに近づけるたびに、薄い口紅を塗つたその唇が、ひきつれるように曲つた。これは彼女の癖なのだ。

とくに写真を見付けたときに、はっとしてあたりを見廻した、というとき、彼女は再三唇を曲げて、肩をすくめてみせた。日本人がやると、いつでも不恰好になりやすいこの気障な様子が、彼女がやると自然だ———と思った。無難作に結び上げた髪、決して高価なものではないと、見ただけで分るアクセサリ、少しはき古したエナメル製の黒いハイヒール。それをつま先にひっかけてぶらぶらさせながら組んだ足に、僕はいつのまにか魅せられてしまったようだ。

彼がムシのよい想像をしていた通りに、この女は、はっきりとした興味をマゾヒズムについて持っているように見えた。彼は、彼女を食事に誘つた。もはや定期を返すというみせかけの用事は、二人にとって何の意味もなくなつてしまつていた。彼らは急激に近付いた。そして、おどろくべきことに彼らは、その晩床を共にしたのであつた。もちろん普通の行為だけであつた。

「しかし、この晩の行為は、僕達にとっては単なる手続きのようなものだった。あとになつて、それはまことにつまらない、してもしなくてもよい種類のものだったと思つたから

いである”

普通に考える、“女を口説く”ということ
は床を共にすることによって終る。あとは同
じことの繰返しである。だが、倒錯が少しで
も一つのカプルに影響を与えるとするなら、
正常の行為は、単なる確認の手続きにすぎな
い。お互いに感じる少しばかりの後悔と、浅
間しきに対する屈辱感が「資格証明」となる
のである。まさしく、彼らの第二回のランデ
ブーは、はなばなしい開幕であった。

“彼女が、どこでどうやってSMについての
体験を得たのかは、いくらきいても教えてく
れなかった。だが、その縛り方、その打ち方
は、どうみたって素人ではなかった。強すぎ
ず弱すぎず、なわは彼女の手にかかる生き
物のように僕の身体を硬直させ、折曲げた。

苦しいポーズをつづけているうちに僕は、鞭
打ちやその他のフェチシズムの遊びとは全然
ちがった別の恍惚感が全身を走るのをどうす
ることも出来なかった。僕は口もきかなか
った。彼女はなわを使うこと自体に快よさを
感じているようだった。僕は、あるポテンツ
が、にわかに身体を中心からわき出てくるの
をよく知っていた。その状態は、彼女に、さ
らにサシスチックな好奇心を起させたようであ
った。彼女は、ちっ、と舌打ちすると、な

わの余りで、びしり、と僕を打った。それは、
全身にはしるほどの、鋭い痛みだった。僕は、
ちじこまったポーズの中でうごめいた。

彼女は、例の唇を曲げる癖を何度か見せな
がら、それになわをまきつけ、ぎゅうとひき
しほった。交尾させられる時の種畜のように、
そのものは僕の意志や官能とは別に、彼女の
目を楽しませた、——にちがいないと思う。

彼女は、そのまま、僕をひきずって、バ
スルームに入れた。冷たいタイルの感じが僕
の背中に、腰に当たった。彼女は、黙ってひろ
げて、僕の目の上に跨がった。そこには、雄
大な、とも言いたいほどの、精力の源、がみ
えていた。それは、僕をのみこんでしまうの
ではないか、と思うほどだった。静かに、お
おいがぶさってくるのを期待していた、僕に、
次ぎの瞬間、ふりそそいだのは、生温かいネ
クターであった。息をつくひまも与えず、
異様な匂いのする液体はとうとうと、僕の顔
からえり首に、肩から耳の中に、流れるのだ
った。それがタイルの床に当たってくだけ、は
ねかえっては僕のわき腹をぬらすのだった。
そのはげしい水音だけが、目にしみる塩分の
ためにかたく目をつぶっていた僕にとっての
すべてだった。彼女は、なおも何一つ言わな
かった。ただ水音、液体の感じ、匂い、それ

が、僕のいまおかれている地位を強制的に考
えさせるのだった。それは、僕にとっては初
めての体験だった。考えるのも嫌な行為の一
つだった。だが、彼女は平然と事務的にそれ
をやったのである。平然とうそぶいて、唇を
曲げてうすら笑いをしながら僕を見守ってい
る彼女の容姿は、僕の眼では見えなかったが
まるで、スライド写真のように僕の顔の中で
描かれていた”

私は、いままでこのように書かれたネク
ターによる凌辱の場面を知らない。最も重要
な点は、彼が嫌いだった行為が、彼女が平然
と行なうことによって、不快感の彼岸に達し、
彼の心の目に、支配と無視の象徴をまき散ら
しているドミナの姿を描かせたことである。
バラモンの掟によるまでもなく、この不快感
から、彼岸に至るといふ心理の発展はきわめ
て東洋的な神秘感でおおわれている。

そして、心の中に姿を描かれたドミナは、
その瞬間から本質的には彼に隷属するのであ
る。心理的な支配と隷属の関係は、現象とし
ての反対の関係によってさらに強められる。
支配は隷属そのものとなるのである。この場
合、再びフェチスチックな対象物、媒介物
が登場している。それは、ネクターそのも

のではなく「平然とネクタールをそそぐ女性の行為」という抽象的なものである。普通にはネクタールそのものがフェチシスチックな対象物であることが多い。しかし、この場合はむしろネクタールは不快を、その行為は不快を通して彼岸に至る原動力を意味していると考えられる。またもや、現実の、卑近な女の姿をかりて、ヴィナスは誕生したのである。

一間四方のタイルのバスルームは、その瞬間から、春、花さき競うオリンポスの野となり、生れ出たレダは、権力と万能の化身である隷属物白鳥に、おしげもなく裸身をさらしているのであった。

そして、いつもながらヴィナスは無知であった。それは痴呆の化身であった、物言わず彼女にまつわりつく白鳥はすべてを知っていた。すべてを所有し、治めていた。彼の身体を拘束するなわは、白鳥の上をよぎってゆく涼しい風となり変っているのである。ヨアヒム・パウリイは書いた。

「フェチシズムは、未だに正当な評価を得ていないようである。それは運搬具でもなく、馬車でもない。「神々が渡ってゆく虹の架橋」なのである。(注IIワグナーの楽劇「神々の黄昏」の終幕部を意味する)愚昧から、神々が決別するときに渡る橋なのである。そして

橋をわたることは、樂園に至ることを意味する。とくに、それが抽象的なものである場合、余人はその存在に気付くことさえ稀である。しかし、それは、ラインの河底から登ってゆくかぎり、だれにでも識別出来るものである」

二

彼らの第三回の遊びは、もっと百科事典的なものとなった。彼は、どん欲に彼女を駆使し、くいちらすのであった。彼は雑誌やその他の方法で得た知識で、いくつかの道具を持っていった。まだこのとき彼らの最初の日から一週間も経っていなかったのである。

「巾の広いベッドに横むきに腰をかけた彼女は、荷物の中から一本の鞭をとり出して、びょうと空中で唸らせた。それは僕が百貨店で千円ばかりで買ったブルドッグ用の短かく太いものだった。それを買うとき、ひとみの黒く輝やく売子が、一度手で握って、みて、ふつと僕の方を見て笑ったのがとても印象に残っていた。だから、いまここで妖婉に笑いながら、その調子を試しているのは、僕の経験では、女性では二人なのである。

町村と名乗るこの女は、その握り具合に満

足したようであった。ちよつとてれたように彼女は何度も唇の端を曲けた。そんなとき、真白い歯並びが、きれいに唇のすきまから見えて、僕には何かそれが彼女の「女」を表現しているように思えるのだった。

鞭に満足した彼女は、それをベッドの上にそっとおくと、荷物の中をかきまわして僕が買って来た品物の中から、鑑(あぶみ)と鑑革を出した。それは、僕にとってはごくごくするような、がさがさという音をたてながら床の上に投げ出されるのだった。ごん、と重い鑑が音をたてて床の上に転がった。僕は、おそらく彼女がその真ちゅうの金物をどうやって革と結びつけるのかを知らないと思ったので、だまって手を出してそれを組立てた。彼女はやはり無言でその一对の鑑をつなげた。それは、その長い革を僕の頸にかけためだった。しゃがむように命じて、彼女はするとシユミーズを脱ぎ、裸の足に僕が大変な掘出しものだと思っていた競馬の騎手用の長靴をはいた。それは、少ししめっていたのか、ぎゅうぎゅうと高い音を出した。そのかかには、小さいほんとうに小さい拍車がついていた。歯車が、水平についているもので普通には使われないものだという。つまり烈しい競合いのときに、どんなに大げさに拍車を入れ

てもいいように出来ているわけである。

彼女はほんとと二、三度床の上をふみしめた。そのたびに拍車は可愛らしいかすかな音をたてた。

こうして二人の遊びがはじまった。しかし、彼は彼女が裸になる事を望まなかった。そのために、よりエロチックな感覚の持主であった彼女と意見が合わなかったが、結局、彼の言いが通った。彼女は荷物の中からスラックスを出してはかざるを得なかった。彼は「スラックス」と書いたが、正しくは「キュロット」と私たちが呼ぶものである。細身の、肌にあびたりついた当世ばやりのスタイルである。彼は、鞭について思い出したように、それらの一つ一つの品物について、いろいろの想いにふける。それは、彼に、強い刺激となって、ある感覚を鼓吹するのであった。彼は几帳面な字で書く。

「その内側にはあってあるーぬいつけてあるーセーム皮は、汗と脂とに汚れていた。セコンドを掘出したので仕方がない。」

その汚れた皮は、じっと見ている中に、どんな美女が、どんな愛らしい少女が、かつてこれをはいたか、そうして、はいている時に、どんなに馬を虐めたか、さらに、どんなに、この皮の内側の彼女たちの肉体が刺激をうけ

たかを僕に思い出させるのだった」

彼女は、彼の肩車にのり、彼は正しく規則的な反動を、彼女に伝えねばならなかった。

彼は、馬と女という人工的ルールを守りつづけた。彼女の意志は、痛みと打撃とによって伝えられた。しかし、それは常に、彼の作ったルールの中での話だった。

「彼女の与える痛みが、僕の予期していたよりも激しいとき、馬は、当然反抗した。そうして、そんな場合、上手でない乗り手は必ずずといってもよいほど落馬するのだった。もちろん、それにひきついて、鞭による懲戒が行なわれた。僕は、「自然馬」がすると同じように反抗し、全力をもって制約に対抗した。それは、当然のことである。どんな痛みにも平然としていたり、どんなむごい懲戒にもうれしがるとそんな馬があるだろうか。馬と騎手、これは、前提なのだ。前提だということとは、その前提が、いつまでも支配的に影響を与えるということではない。一旦スタートしたら、二人の個性が、それぞれに勝手に動きまわるのだ。」

そうでなければ、一つも遊びにならないのではないかと僕は思う。将棋でもそうだ。囲

碁でもそうだ。正目風鈴をおいたからといって、それは、ゲームがスタートすれば単なるハンディにすぎまい」

この点については、かつてはつきりと言いつ切った者がいない。馬と女、犬と女、すべて女が支配し、獣が従属するという前提が、最後までつきまとう、巨体の馬が、女の細腕で征服される。それは不自然ではないか。そうこの体験者は言っているのである。前提をつくること、その前提から別の世界に入っていくこと、それは、いわば魔術の世界である。トリックのない黒魔術の世界である。黒ミサが代表的にこれに属する。魔女裁判が、黒魔術に対する恐怖から生れたことはすでに立証されている。錬金術がそうである。中世の異様な想念をもって書かれた書物は、おごそかにこう伝えている。

「三頭の性器を持つ魔物ヴォーデは、処女に精液を注入する。そこに、魔女が誕生するのである。魔女は大家族である。ここに生れ出た魔女は、その時すでにこの大家族の一員である聖なる十字架に焼かれる魔女の肉は焦げただれでも、魔女の一族を拒絶することに出来ない。苦痛は

恵みであり、阿鼻叫喚は和やかな夕食の伴奏にすぎない。苦しみは、耐えるものでなく、娛しむものである。”

西原健二は、「それは前提である」というとき、体験を通じて黒魔術の世界に關直する。それは、淫濁を超え、退廃を超えた彼岸である。

“ラインの河底から登ってゆくとき”とパウリイは書いた。ラインの河底とは愚昧である。金の財宝が埋められているというライン河底から、人間の争いに失望して、神々は虹の橋を渡って神の国ヴァルハラへと帰っていく。この多神教的世界こそは、黒魔術の温床である。人は半獣神として神性を帯びる。有尾の女、双頭の龍、それと同じく、倒錯の持つ異様な魅力が、背徳と呼ばれ、情落といわれながら、着実に、そして迅速に、素晴らしき結晶作用をつづけてゆく。そこに真実の徳が、生れはじめるのである。私たちは、パウリイの叡智の言葉を思わざるにはいられない。それは運搬具ではない——それは樂園への橋である”

さて、この二人の人物はどうなっていたか。彼の長い手紙はいまやその終末を、憂愁を湛えながら物語っている。

“第三回目、その日は、ちょうど拾ってもらった定期券の期限の切れる日だった。僕達は、会い、食べ、そして飲んだ。僕はすでにこの女に興味を失ないはじめていた。彼女は何度か「もう一度」と言った。だが僕にとって、この女とのゲームは魅力がなくなっていた。最後に僕に言ってやった。

「もう会うまいよ」

すると、彼女は、涙を一杯にためた眼で僕を眺め、呟やくように答えた。

「では、もう会えないの？ 残念ね。あたしの本当の気持ちかわかってもらえなくて」

僕はそこに、ありふれた一人の女を見た。失恋に打ちひしがれて、誤りもなく、作法も乱れ、涙にくれる一人の女を見た。それが、僕の心の中に少しばかり残っていた彼女への興味を一ぺんに失なわせたしまったのだった。僕は立ち上り、再び彼女を見なかった。こんな事件が、僕を変えたとは思えないかも知れない。けれども、たしかに僕は変った。女の美しさに何も感じる事が出来なくなってしまうのだから。僕は不幸になったのだろうか、それとも、知ることによって、幸福になったというべきなのだろうか。

私には、手に取るように思いうかべること

が出来る。彼が立ち上って足早やに店を出てゆくときの、その後姿を追う彼女の目を、その心の中の焦りといったたまれないその気持ちを、そして、戸外に出て、彼が感じたであろう空気の味気なさを。この終末は、まさしく一枚の名画である。女は人間世界に帰るべく出発し、男は禁断の味の味を知った者の宿命的な漂泊へと出発する。

そして、私は信じる事が出事る、彼が沈黙に耳を傾むけ、心に永遠の女性の映像を結ぶとき、忽然と、或る日、至福の門が音もなくひらかれるであろうことを。その日は耳を聳するいかづちの音もなく、季節外れの稲妻も閃めかないであろうが、黒い魔術の世界からの使者は、再び美女の姿をかりて、すぐその街角から歩み寄って来るにちがいない。



■裏窓叢書 第六集 地獄谷の女たち 塔婆十郎作 山田彬弘絵■

▼第一章運ばれていく女 買われた娘 うしろ手の運命 女の積み荷 第一夜のうめき

悪魔の夜 真犯人の名 私刑の庭

▼第二章奸計のなかの女 野性の美 少女 吊られた女豹 狡猾な取引き 四畳半の悦虐

▼第四章私刑される女 青竹まわし 松の木吊り 逃走計画 追われる男

▼第五章縄にうめく女 羞恥の敗北

裏切られた朝 残酷シヨウ すべては悪夢

▼第三章無法地帯の女 野菊のもだえ

お待たせいたしました
6月上旬発売予定です
価 450 円 780 円



「いやッ、いやッ！」

低くさげんで、ひさ子は立ちあがった。

立ちあがりざま、いきなり虎三の眉間めがけて、唾を吐いた。

弾丸のような勢いで、その白いかたまりは虎三の右の目に命中した。

「わッ！」

と、虎三は声をあげた。一瞬、片目の視力がうしなわれ、虎三は反射的にその目を腕でこすった。

十七歳の娘の唾が、虎三の眼球にしみこんだ。

目をこすりながら、虎三のくちびるが、にやりと苦笑をもらした。

「おい、ひさ子。この旦那さんを、あまくみちや、いけねえ」

立ちあがり、ひさ子の片腕をわしづかみにつかんだ。つよい力でひき寄せた。

「いやッ」

と、髪をふって、その腕力からのがれでようとするひさ子の頬へ、虎三の平手が、音をたてて飛んだ。ひさ子は畳の上にたたきつけられた。悲鳴をあげる余裕もなかった……

■裏窓叢書 第七集 大利根柔肌草紙 花巻京太郎作 鬼頭暁絵■

▼羞恥蔵の巻 艶麗女師匠 はだか土蔵

竹藪包囲 美女謀者 お豊の素姓

▼捕われ姉妹の巻 卑劣な罠 美女長

脇差 緋扱帯縛り 素肌槍 みだれ湯文字

▼めす犬なぶりの巻 もだえ泣きめ

す犬もがき 悪徳役人 お光の哀訴 塩水
ながし

▼無残縄化粧の巻 白肌うめき 女尿

の酒 無念化粧 白いさかな たて縄尻

▼柔肌散華の巻 百貫芸者 大利根の血

煙 大の字柱 かみそり羞恥 竹槍真紅

つづいて第七集進行中
7月上旬発売予定です
価 450 円 千 80 円



うっそうとした竹藪の中にある土蔵は昼でも薄暗い。網戸のかぎを外した政吉が重い音を軋ませて戸を開き、用意してきたがん灯に火をつけてかざすと、奥の大黒柱に縛りつけられた黄八丈姿の美しい娘が、くつきり浮きあがった。

ここへ監禁されるまでに、かなり抵抗したのだろう。赤い鹿の子絞りの手柄も痛々しく乱れ、黒縹子の襟元もはだけて、すき通るように白い襟首が大きく露出している。裾も激しい乱闘を物語るように大きく割れて、あぶな絵を見るように、助五郎はごくりと唾をのみこんだ。

手ごろな麻縄で、そんな、あられもない身を後手に縛りあげられ、大黒柱を背にしているお絹は、豆絞りの手拭で猿轡までかませられている。切れ長の美しい眼は憎悪と哀願ともつかぬきらめき、土蔵に入ってきた助五郎たちをにらむのだった。

「なるほど、こいつあ政がのぼせるのも無理はねえ。……」とニヤリとする助五郎に、「とくと拝見させてもらおうじゃないの」とお松はお絹に近づいた……。

“遊び”に没し得ない

通人（つうじん）の小説

—吉行淳之介論



安 東 泉

吉行淳之介には吉行淳之介のくせがある。くせ以上には出られず、くせ以外には変ぼうし得ないくせである。

高村光太郎がくせについて『普遍と独自』という文章の中で書いている。

「一民族乃至一個人には、国土風習の永い固有条件に影響せられて、自ずから一つの癖がある。特性とは結局一つの癖であり、これは

自分でも気づかない先天後天の、離脱しがたい深い因縁のようなものに外ならず、又そういう深い所からくる特性こそ本来の独自性というに価するものであって、われわれが芸術に向って味わいたいと欲する特質は、即ちこの由来の遠い、一民族乃至一個人の自ら加減し得ないほど無意識圏に連なる微妙な点にある。

若し一民族乃至一個人が自ら自己の独自性を意識して作成しようと企てたら、どういう

事になるであろう。古来の伝統を吟味して、その中に自己の特性を認識し、これを強調して、その範疇以外の分子を精算し、濾洗してまで一つの独自性を守ろうとするようになれば、その独自性はいかに一地方的の意味を強く帯びるようになり、臭くなり、うるさくなることはなからうか。特性は自己の意識しないところから湧き出す、香りのようなものであってこそはじめて貴い」

くせというものが、自然に内からわき出し

て、かおりを放てば、その人は天才ということになるのであろう。かおりとは、何もいかおりである必要はない。ワキガのかおりでもよし、魚臭のかおりでもよし、汚物だめのかおりでもよい。

高村光太郎のいう「くせ」とは、かおりを放つ「くせ」のことである。

そういう意味で吉行淳之介の「くせ」を見たとき、この「くせ」にいささかの焦点の合わなさが感じられてくるのである。

つまり、端的にいつて、吉行淳之介の「くせ」には、かおりがないのである。何か既に冷えて固まって、内側にだけ凝縮していくような、黒いシンがあるだけである。

×

天才の半分は努力だという。しかし、そういう言い方では不十分だ。やっぱり天才とは内側に内蔵される素材の豊かさが第一であつて、努力とは、その素材を引き出すハッパがけの作用を果たすにすぎない。努力が素材を引き出す機縁を作るのだ。こうして、内側の素材が天衣無縫に外側に向かって花を開かせたなら、彼こそ天才の名で呼ぶに価する人であるといえるであらう。

努力の積み重ねが、単に努力の分量だけの足し算で終わるなら、つまらない。一足す一

は二、ではなく、一×何かが、何かを噴出させなければ天才とは言えない。でない努力家は単に努力家である。

江藤淳は、吉行淳之介を評して努力家だといっている。この一言が尽くしている。吉行淳之介の評価は、一にも二にも、努力家であるというワク以外には、出られないことに尽きるのだ。一十一は二であつて飛躍がない。吉行淳之介の「くせ」に、かおりがないということは、このことから出発する。彼の娼婦は川崎長太郎の娼婦ほどの体臭を発散するところがない。

食わず嫌いというのと同じく、読まず嫌い、というのがある。その反対に、読まず好きというのもある。

吉行淳之介は、私にとって、読まず好き、の部類に入る作家であつた。

満足に文章も書けない若手の作家たちが、ただやたらに頭でっかちで、苦勞も知らず、観念過多なひとりよがりの、ハッタリだけの作品で文壇をかき回すことに、マユをひそめる文学ファンは多い。そうした昔ながらの文学ファンは、一筋えいえいと、地道に一連の娼婦物の小品を私小説風に書き綴っていく吉行淳之介の姿に、救いを感じる。改めて読まはしないが吉行淳之介といえ、ああ、あの

娼婦物の作家だな、ということ、非常な親しみとなつかしさを感じる。いつか読んでみるつもりではあるが、そのまま過ぎてゆく。読まず好きである。

読まず好きのままにいればよかったのだ。《驟雨》で芥川賞をもらった作家、——なるほどいってみれば《驟雨》とはいいい題名だ。それだけでしみじみとした味があるし、コクがある。おそらく文章も、いぶし銀のようにしびい味があるのではないか——そのまま読まず好きの期間が続く。

二

吉行淳之介は「週刊現代」に《すれすれ》を連載した。連載エッセイ《浮気のすすめ》を「週刊サンサイ」に、そして同じく「週刊サンケイ」に《コールガール》を連載。

マスコミで結構重宝がられた。最近作は《女の決闘》、これもコールガールものである。

吉行淳之介の読まず好きのファンたちは、彼のこういう活躍の仕方まで好意的に見た。何か救いになるような、本当にホノボノとしたエロチシズムとリリシズムがそこにあるのであろうと、それはそれなりに彼の通俗化を

歓迎はしないまでも大目に見た。

しかし、やっぱり吉行淳之介は、「群像」や「文学界」や「新潮」の作家であって、今はほとんど居なくなった、あのなつかしい大正時代からの、私小説の伝統をくむ、地味でまっとうな作家であるという先入観を育てるのであった。

ところが、わたしに限って言えば、このまま読まず好きのまま、吉行淳之介に対する先入観をそのまま、そっと触れずに持っていていればよかったのである。

彼の「くせ」に、ただ努力の跡だけを見、それにプラスする何のかおりをもかくことができなかった失望は大きい。せめて、〈驟雨〉の軒を打つ露路裏の雨垂れの音を聞き、〈娼婦の部屋〉の少しすえたような、人生の味のしみこんだ、あのかおりをかいでみたかった。夜が持つ、薄暗い、背徳のうちの血のさわぎを味わってみたかった。

ところが、この期待と先入観が見事に裏切られたとき、何か彼だけは、の唯一の牙城が瞬時に消え去った寂りよう感が消しがたくおおいさるのである。

ゴムのようにはずむものがない。気体や液体のように、流動する奔放さや、人生の機微に触れる時にさまざまに反応する、人の心の

融通性が全くない。それは、雨に消し去られた焚火の跡の、もえがらのように黒く固まっているだけである。

彼は娼婦が好きなようである。コールガールが好きなようである。裏町が好きなようである。人生の秘密や機微が好きなようである。

しかし、それらの好きなものと、本当に溶けあってしまう部分を、心のどこにも持っていない。いつまでたっても、娼婦や裏町とは平行線なのである。外部から来て、ただ一時的に素通りしてゆく旅行者にすぎない。旅行者なら旅行者なりの、旅人としての汗やア力のおいがなくてはならないが、彼にはない。つまり旅情のふん囲気がないのである。

これは、近松秋江や岩野泡鳴の娼婦とは全く違う。まして永井荷風であり得ようはずもない。宇野浩二や川崎長太郎でもない。私小説以前のものである。

×

吉行淳之介は本質的に短編作家である。これは周知のことである。短編は同じテーマの反復である。反復ならば、バネの入ったクッションのように、そのたびに新しいはずみを感じられねばならない。それが無い。万年床が敷きっぱなしなのである。ふとんが固くなって、背中ざわりが平板すぎるほど前と同じ

である。これでは反復にならず繰り返しになる。

その最も典型的な証拠がここにある。

《原色の街》の或る部分と、《驟雨》の或る部分とを対比してみよう。まず原色の街から始める。

「その女の像が、すなわちその女が、気に入っている自分に、元木英夫は気がつくのだった。

気に入るということは、愛することとは別のことである。気に入るということは、はるかに微温的なことだ。愛することは、この世の中に自分の分身を一つ持つことだ。それは自分自身にたいしてのさまざまな顧慮が、倍になることでもある。そこに愛情の鮮烈さもあるのだが、彼はわずらわしさが倍になるとしてそこから故意に身を遠ざけていた。それは、彼が怠惰なためでもあり、又、感易すぎる自分自身にたいして疲れているためでもあった」

一方、今度は《驟雨》のほうである。

「その女を、彼は気に入っていた。気に入るということは愛するとは別のことだ。愛することは、この世の中に自分の分身を一つ持つことだ。それは、自分自身に対しての顧慮が倍になることである。そこに愛情の鮮烈さも

あるだろうが、わずらわしさが倍になることとしてそれから故意に身を避けているうちに胸のときめくという感情は彼と疎遠なものになって行った」

文章が意外に青っぱいという以前に、この二つの文章は、全く同じものである。これは決して反復ではない。繰り返してある。

繰り返しが繰り返してあるために、従ってモチーフははっきりする。愛に対しての、そして女に対しての、彼のモチーフがそれである。愛はわずらわしいから遠ざかっていった。ただ気に入る、という形においてのみ、接触していたい、これがモチーフである。

私小説の中の娼婦とは、作者も一体となつて溶け合う部分があるものである。吉行淳之介にはそれがなく、案外に自分だけはこざっぱりとしていて、気に入つた娼婦、という関係だけで、一時的な通行人の立場をくずそうとしない。封建時代の、世間知らずの大名と同じである。かわいげのないわがままさ、これが彼の本質だ。

三

同じひびき、同じ意見の繰り返しならともかく、全く同じ文章を、二度三度、違った作

品の中で書くとは、どういうことだろう。

《原色の街》と《驟雨》の二つの作品における場合を先にあげた。今度はもっと新しい例をあげてみよう。それは異常なセックスを売物に、大変売行きの良いという《砂の上の植物群》についてである。

いったいこのごろは、何か異常なセックスを売物にすることが流行のようである。きっかけは谷崎潤一郎の《鍵》あたりではなかったろうか。以下、《瘋癲老人日記》が出て、一時代を画した。

川端康成の《眠れる美女》、中村真一郎の《燃える薔薇》、安岡章太郎《花祭》等が出たが、このうち《花祭》を除いては、ほとんど付焼刃のにせものであった。大谷崎には、はるか遠いものであった。

吉行淳之介の《砂の上の植物群》はいったい何か、気の早いお客さんは、映画で大当たりした《砂の女》の原作か何かと感違いし、あるいは、感違いしないまでも、それとゆかりの異常なセックスなるものを連想し、争って読んだ。

反響は週刊誌の特集となつて現われたりもした。いわゆるねらいが的中したというわけだ。純文学を名乗りながら、そこで大っぴらに「縛り」があるのだから、そのこと自体、

確かにセンセーショナルな現象であった。SはMより強い、という。今までどちらかといえば、純文学におけるセックス描写はMの派手に大別された。井原西鶴以来の伝統であった。泉鏡花に尾を引いて、室生犀星、佐藤春夫、一方、川端、中村、遠藤、安岡と並べてみても、それは谷崎を頂点として、さまざまに変化を見せながらも、すそ野に尾を広げる女性崇拜の文脈を展開してみせることであった。このこと自体が、純文学をせまい読者層に限定し、広い読者大衆からそれを隔離してしまう原因の一つを成した。

一面、大衆小説のほうでは、純文学と違いサジズムが根を張った。縛りと責め折檻が売物である。そのチャンピオンが柴田練三郎ということであろうか。純文学ではM、大衆物ではS、これが従来の常識であった。

ところが《砂の上の植物群》がその常識を破った。純文学を自称しながら、そこに「縛り」を持ちこんだからである。SはMより強い、ということが、ここで立証された。その証拠が、《砂の上の植物群》の異常なまでの売行きの良さである。これには、《花祭》も《眠れる美女》も追いつかない。Sでなく、Mだったからである。

しかし、ここでもがまんのないことがあ

る。それは《砂の上の植物群》が、実は昭和三十三年に発表された《樹々は緑か》という作品の二番せんじであるという事実である。先にあげた《原色の街》と《驟雨》との関係以上に一種の詐欺がここで行なわれている。まず《樹々は緑か》のほうから抜き書きしてみる。定時制高校の英語教師をしている、主人公の伊木一郎が、亡くなった父親の知人である理髪店のおやじに呼び止められるところの場面である。

「——彼を呼ぶ声が耳許で聞えた。

『おや、一郎さん。一郎さんじゃないか、十年ぶりかな』

声の主は、彼のすぐ眼の前にいた。顔を突きつけるようにして伊木の顔を覗いていた。五十年配の男である。白い上っ張りを着て、サンダルを履いている。伊木は一瞬戸惑った。しかし、皺の多い寝れた感じの顔の奥からその男の昔の顔が、すぐに浮び上ってきた。

『やあ、山田さんか。少し老けたな』

『苦労したからね』

男の眉のあたりがふっと曇り、彼はポケットを探ると煙草を一本つまみ出して啜えた。点火したマッチ棒を両手でかこって口許へ近寄せるその手が、ぶるぶる烈しく震えた。

その手に、伊木は視線を当てていた。煙草

から煙が立昇った瞬間、男は、マッチ棒を放り出すように捨てると、両手をぐっと上衣のポケットに押込んだ。まるで、震えた手を慌てて隠したように見えた。そして、煙草を啜えた口の片隅から、言葉を押し出した。

『悪い酒の呑み過ぎでね、なあに、仕事に差支えはありやしない』

そう言いながら、伊木の無帽の頭をジロジロ眺めていた男は

『死んだお父さんにそっくりになってきたね。頭の恰好もそっくりだ。そのあたまではムツカシインだ。お父さんの頭は、俺しか刈れなかったんだからな。一郎さんの頭は誰が刈っているんだ』

『誰がって、そこらの床屋でやってもらっているよ』

『そこらの床屋で刈れるわけがない。ずいぶんミットモナク髪が伸びてるじゃないか。俺が刈ってやろう、一諸に來なさい。なあに、すぐ其処だ』——

×

これが三十三年度の作品《樹々は緑か》の一部分であるが、これがそっくりそのまま、三十九年度の新作《砂の上の植物群》に引き写されているのには驚いた。

今度は《砂の上の植物群》からその部分を抜き書きしてみよう。ここでも主人公は同性同名の伊木一郎で、元定時制高校の英語教師現在は化粧品店のセールスマンということになっている。このことはまだいい。しかし、しんほうのできないのは次の部分である。

「——街で彼を呼ぶ声を聞いた。

『一郎さん。一郎さんじゃないか、十年ぶりかな』

声の主は、彼のすぐ眼の前にいた。顔を突きつけるようにして伊木の顔を覗いていた。五十年配の男である。白い上っ張りを着て、サンダルを履いている。伊木は一瞬戸惑った。しかし、皺の多い寝れた感じの顔の奥からその男の昔の顔が、すぐに浮び上ってきた。

『やあ、山田さんか。少し老けたな』

『苦労したからね』

男の眉のあたりがふっと曇り、彼はポケットを探ると煙草を一本つまみ出して啜えた。点火したマッチ棒を両手でかこって口許へ近寄せるその手がぶるぶる烈しく震えた。

その手に伊木は視線を当てていた。煙草から煙が立昇った瞬間、男は、マッチ棒を放り出すように捨てると、両手をぐっと上衣のポケットに押込んだ。まるで、震えた手を慌てて隠したように見えた。そして、煙草を啜え

た口の片隅から、言葉を押出した。

『悪い酒の呑み過ぎでね、なあに、仕事に差支えはありやしない』——」

これ以上の紹介の要はないので、このくらいでやめる。つまり、その後も、すっかりそっくり『樹々は緑か』と同じであるから。

伊木一郎には、バー勤めをしている川村朝子という教え子が居るが、これも全く同性同名内容の設定も二つの作品とも同じである。

二つの作品とも、これが完全に私小説なら類似の現象や人物の登物も、あるいは妥当かもしれないが、それですら、こんなに一語一語、全く同じである場合はない。

これは部分部分を、前の作品の中から、そのまま引き写しての、無神経すぎる方法である。こういう事象が堂々と許され、しかも拍手されているというのなら、『針のない時計』の西村みゆきなぞは、あわれである。

×

芥川賞作品、『驟雨』の一節

『——町を俄雨が襲ったのだ。大部分の男たちは傘を持たぬ。色めき立った女たちの呼声が、舗装路をはげしく叩く雨の音を圧倒し、白い雨の幕を突破した——』

という部分によく書けている。といって気づいてみると、これは永井荷風の『瀬東綺譚』

によったものだ、これは当の本人が、『不法作紳士』の中でシャアシャアと告白している。この神経はわからない。

『砂の上の植物群』の中で、友人の作家、花田光太郎にさそわれて、伊木一郎はおもしろいものを見せてくれる家というのに出かけた。その家で少女がひとり、美しいはだかを見せてくれる、というくだりがあるが、これとて『眠れる美女』の構図をそのままそつてみたような、ふつきれない印象を受ける。

として考えてゆくと、大体この『砂の上の植物群』そのものが、兄妹相姦、縛りと責め、等を盛りこんで、何やらそのまま現在の時流をたくみに盗んだのではないか、とさえ思えてくる。本当の才人なら、こういう見えすいたことはしないであろう。ところが吉行淳之介は単に努力家に過ぎなかった。普通だと、万年同人雑誌の文学青年で終わるところが落ちであったのかもしれないが、運がよかったのである。すれからした文壇で、かえってこの同人雑誌じみた幼なさが新鮮に見えて、うけたのであろう。

『砂の上の植物群』とは、うまい題名である。題名についてだけいうと彼は名手である。

『薔薇販売人』『原色の町』『驟雨』『星の降る夜の物語』『焰の中』『悪い夏』『娼婦

の部屋』『すれすれ』『街の底で』『闇の中の祝祭』『華麗な夕暮』『寝台の舟』『風景の中の関係』等々多彩ではなやかで美しい。『砂の上の植物群』の中で、幾度もクレーに対しての讃美を、作者は生のまままで繰り返して述べている。

「私はその絵も好きだし、絵と切り離して題名の文字の配列だけを眺めていることも好きである。

帥走する都会。

庭の門。

灰色の男と海岸。

水中の庭園。

まだその場所にいる黒。——」

内容より、題名の配列だけのほうが美しいのは吉行淳之介の場合である。それは彼がいうとおり、クレーにあやかっただのであろうがクレーの絵はまだ題名同様に美しい。

四

『砂の上の植物群』の主人公は、先にも触れたように、『樹々は緑か』と同じく、伊木一郎という男である。大筋を述べるとこういうことである。

伊木一郎は、一つの推理小説の着想を得て

いる。病いのため、妻に先立って死ぬ夫が、近い将来、彼女を独占することになるであろう男に向かつて嫉妬を覚え、彼に対して復讐をちかうという筋であった。その方法は——彼女を兇器にして、彼女の無意識な動作が、相手の男の生命を奪うよう、繰り返し一定の条件をつくり、彼女のからだをそれに反応させた。——この推理小説の着想が伏線となっている。

一郎は塔の上で、十七歳の少女、津上明子と知り合う。彼女は高校二年生、いつしか関係を結ぶようになる。そして明子の姉、津上京子とも関係を持つようになる。京子は「鉄の槌」という、変わった名のバーに勤めていた。

「津上京子の乳房の横に、そのふくらみを取囲むように青い痣が三つ並んでいるのを、伊木は見た。生れつきの痣ではなく、乳房を掴んだ男が折り曲げた指先を肉の中にめり込ませた痣のように見えた。

被虐の趣味があるのか、と訊ねてみた」
これが始まりである。

「『淫売と同じじゃないか』

彼は京子の耳に口を寄せ、ときどき耳朶を軽く噛みながら、そういう言葉を耳の穴に注ぎ込む。侮辱的な言葉が流れ込むたびに、京

子の軀は烈しく反応した。——『噛んだ痣じゃないな』『強く掴んだ痕だ。こういうふう』

彼は力を籠めて、乳房を掴んだ。掌に乳房は一ぱいになり、五本の指の隙間を、ぎっしり白い肉が満たした。指先が肋の骨に突き当たると、彼は一層指を内側に折り曲げ、まるで乳房を掴み取ろうとするように掴み上げた。『掴んでくれと頼んだのだろう。もっと強く』

と言いつつ、力を加えながら、そう言う。——白い色が見えた。——乳首から、白い液体が迸ったのである。僅かな分量だが、間歇的に三度続いた。——悦びのためと流れる白い涙のようにみえた」

「露わになった腋窩に彼が唇をおし当てたとき、京子は唖れた声で、叫ぶように言った。『縛って』——彼はその二本の紐の端を結び合わせ、京子の左右の上膊に絡ませて、ふたたび引き絞った。京子の両腕は一層強力な搾木となり、頭部を両側から挟み付けた。京子は呻き声を発したが、それが苦痛のためか歓喜のためか、判別がつかない」

しかし真実は、伊木一郎は、京子より、十七歳の明子をいじめてみたかったのである。「紐を腕に絡ませた明子の姿態を、彼は思い

描いた。口の中が乾いた。襲いかかる眼になつた」

そこで一郎は、京子に言つて妹の制服を持つてこさせ、それを着させる。

「セーラー服を着たままの京子を、彼はベッドの上に押し倒した」

ここに現われるのは、ロリータイズムである。少女崇拜は川端康成にあり、ナボコフにあった。室生犀星にあった。少女のイメージが、崇拜心と結びつくことで文学となった。これはおとなの感覚でもある。ところが吉行淳之介の場合は、少女をいためつけ、いじめることに気持ちが傾斜する。ちょうど無残にトンボの羽をむしりとする少年の残酷な反応そのままに。

少年といえ、父親に対するコンプレックスが激しい時期である。父親をにくみさえする。父親は自分をにくんでいると信じる。そのキレツからくる異和感が主題となったのが『風景の中の関係』であったが、それは『砂の上の植物群』の中の主題でもある。

常に一郎は、父の存在を感じる。父の目を感じる。理髪店のおやじから、父に隠し子があり、自分に京子という腹違いの妹があると知らされたとき、まさしく津上京子がその妹に違いないと思う。兄妹相姦——あやしい目

まいがする。推理小説で、まだ見ぬ男に復讐をちかった男が父親ではないかと思う。京子ばかりではない。妻の江美子がかつて美しい十七歳の少女だった。父親と江美子に関係はなかったのか！ 江美子と京子、両面仕立ての父親の復讐ではないか。しかし、もしかすれば妹では、の、暗い疑いが彼に最後の炎をかきたてさせ、京子に向かわせた。やがて京子が全くの別人とわかったとき、虚脱したようにすべては終わってしまう。

「『終わった』」

今度こそ、彼は疑う余地もなく、そうおもった。蒲団に深く潜り、昼間の明るい光を遮って、彼は重たい眠りに入った――

津上京子は、父の遺した兇器ではなかったしかし、今では紛れもなく、伊木一郎の軀に鋭い刃先を突きつけている兇器になっていた。彼は、微かに軀を揺すった――

×

SがMより強いことは事実である。SのほうがMより多く売れ、多く読まれる。これは事実である。しかし、それを文学たらしめるためには、MよりSのほうがむずかしい。Sを主題にして成切した文学が幾つあるか。考えてみても思いつくものがない。ただ一つ、《大菩薩峠》の或る場面を思い出すくらいで

ある。純文学が、より多数の読者を獲得できない一半の理由が、案外ここにもあるのではなからうか。

Sとは、案外、初心な心でもある。気はすかしい少年の、照れたような笑いの中にあるものである。それは、十分に開花しきれないつぼみのじれったさでもある。

吉行淳之介は本来、生真面目なオクテの青年であらうと思う。努力+努力が二、この体質はそのままである。《砂の上の植物群》に当たっては、ずいぶんとその方面のことを、勉強したに違いない。「裏窓」を何度も読んだのではないか。彼がその中から選んだのが縛りと責めであった。これが彼の体質に、一番近かった。しかし、最後まで彼は、「赤線」の外から、一時的に探訪しにくる、訪問者か通行人にすぎない。決して内側の人にはなり得ないのだ。

《コールガール》を書き《女の決闘》を書

き、随筆《浮気のすすめ》を書いた彼ではあるが、いわゆる遊び慣れた通人では決してない。どこまで行っても、通人とは無縁である。

「気に入るということは、愛することとは別のことである。」

という主題にまた返ってくる。

「気に入るということは、はるかに微温的なことだ。愛することは、この世の中に自分の分身を一つ持つことだ。それは、――」

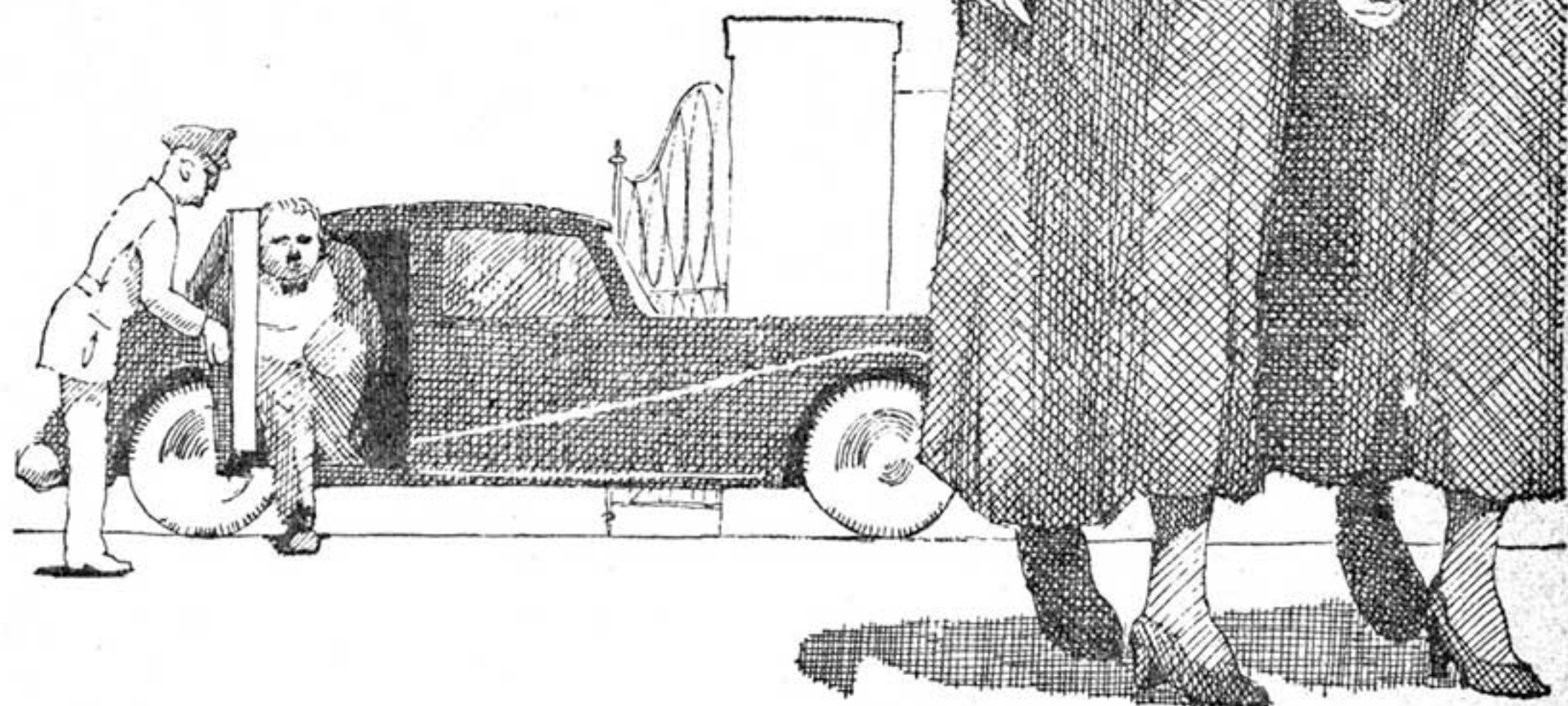
繰り返して書くのがいやになった。愛するのは負担だからいやだ。気に入った女、というものでいたい、というわけだ。こんなわがままに、別に理屈をつけることもなからう。愛せ、といっても、愛する能力もないくせにと言いたくなる。そこを一步育たないと、いつまでも坊ちゃんのまま、ただ生真面目に努力するだけでは、本当にSもわかりはしない。



セント・レディ学院

文・祖父江 新

絵・落合 竜二



① 白い校舎・黒い制服

白亜の校舎に純黒の制服、それがセント・レディ学院の象徴である。在校女学生の優雅さ、卒業生の良妻賢母ぶりは伝統的であったが、いま州を吹きあれる風紀肅正の嵐の中にあっては、まさに教育の場としてシンボルの如き存在である。

まるで女性の美しい曲線という曲線を、男たちの目から意地悪く遮蔽したような黒い制服に身を守られて、良妻賢母の卵たちはすすくと育つのである。

バン・ボーク氏は車から降り立つと、校庭を行き交う黒衣の乙女たちを見とめて、さっそく目を糸のように細くする。彼は今度の風紀肅正法案の発案者であり、立役者でもある。正義のためなら鬼をもひしく実行派の彼は、映画、演劇、出版物、その他ありとあらゆるものから俗悪物を一掃した功績により、州知事からこのほど勲章をものにして名声はいよいよ高い。

州議員、風紀委員長、州教育委員ときらびやかな肩書きどおり、山積する仕事に忙殺されながらも月に二回の当学院視察をかかしたことがなかった。まるでエネルギーの塊ともいえる。



② 鬼校長

セント・レディ学院は男子禁制の学院ながら、校長のエリザベスも議員には弱い。巾着みたいに皺だらけの唇から黄色い歯を見せて、愛想笑いも忘れない。

「これはこれは、お待ち申ししていたのでございますよ。それにつけてもこの度はごりっばな勲章をいただかれたとかで、そりやもう、おうわさばっかり……」

ボーク氏の顔をうかがいながらのお追従も忘れちゃいない。



「なんのなんの。どれもこれも、皆さんのご協力あつてのことですわい。ウワッハッハ」
ボーク氏にしてもこの婆さんの機嫌をそこねてはまずいこともあるのでなかなかの謙遜体軀にふさわしい豪傑笑いに笑いとばす。
「早々にせき立てるようですが、よろしくご案内願いたいのです。午後から議会がありますのでのお」
何かソワソワと落ち着かない。自分からそそくさと席を立った。

「まあ、それはそれは……、相変わらずおいそがしい中を……。さあさ……」
エリザベス婆さん、一たん校長室を出るとたん、ほうき星の魔法使いみたいなこわい顔になる。ふたりはいくつかの教室を素通りした。月の始めが授業参観。そして、二度目はこの学院の懲戒制度をつぶさに見学することになっている。今日はその日にあたるので、ボーク氏の落ち着かない態度も無理はなかった。

③ 第一懲戒室

どんな優秀な学校でも、必ず十人や二十人のよくないこがいるものである。この第一懲戒室で、いまひとりの生徒が鞭を受けていた。鞭打ちはおもに、宿題を忘れたこが受けることになっている。

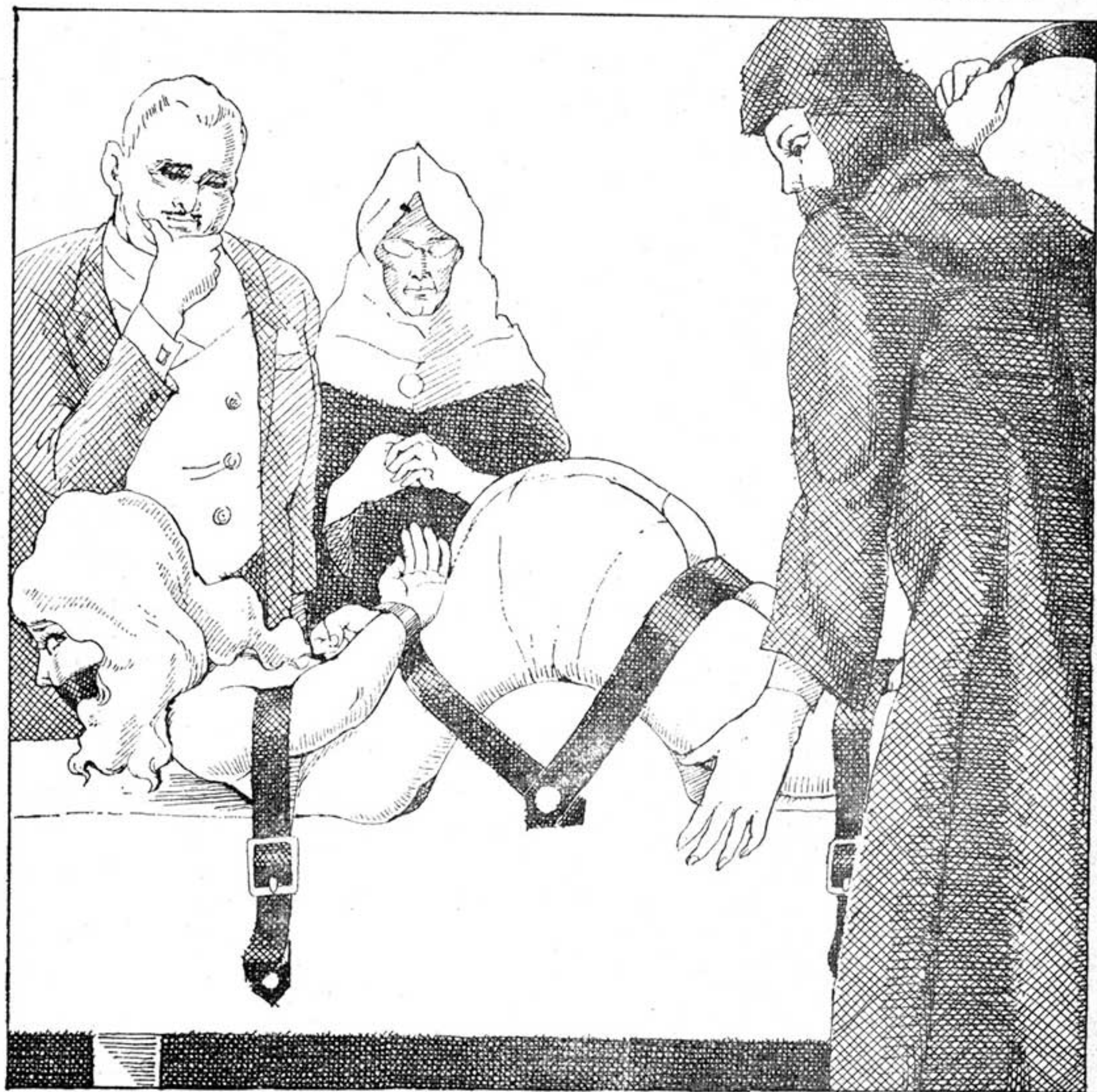
ボーク氏は、出来ることなら少女の足の方に立って見学したいところだが……。

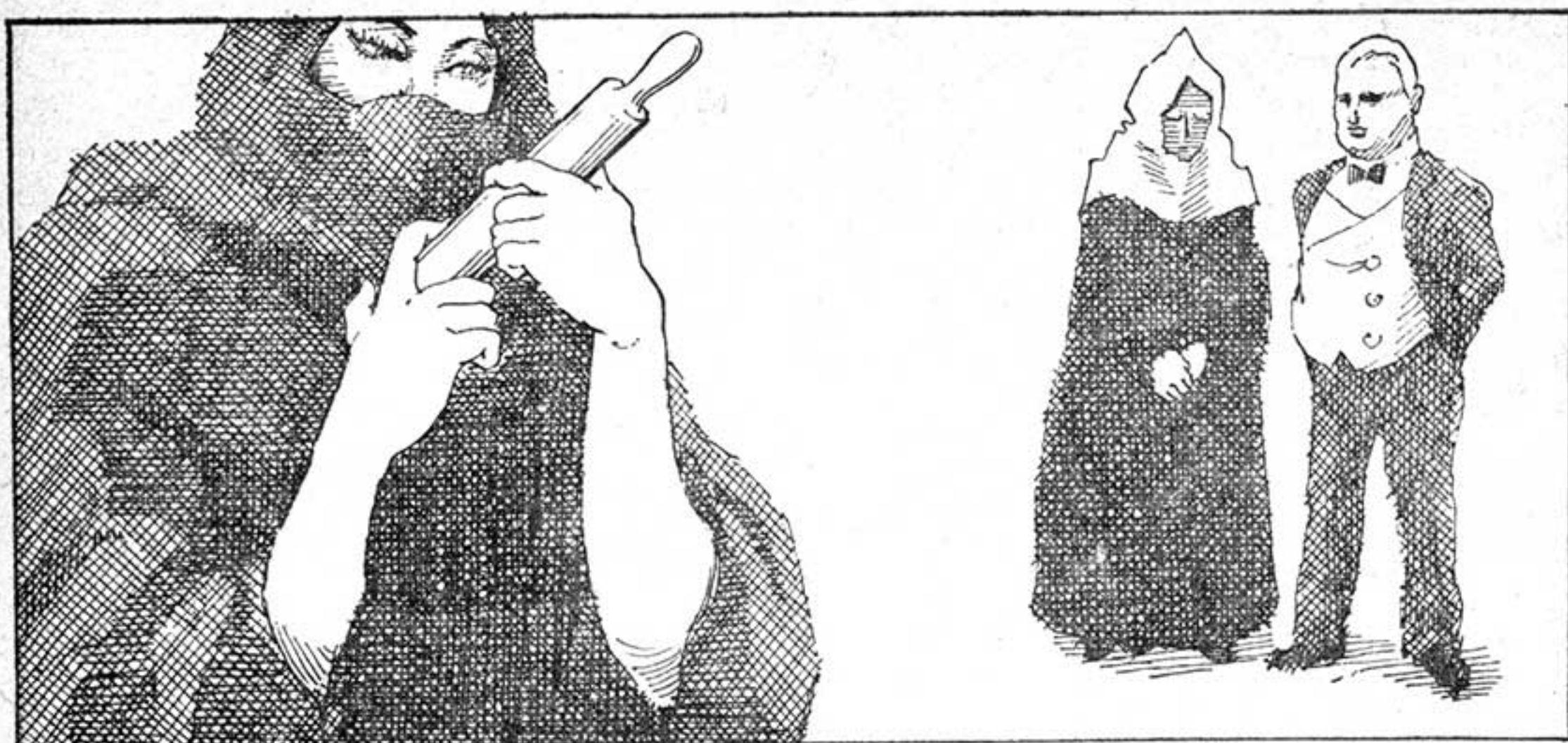
「鞭打ちならあいうへうのようなものを使わず、本ものの鞭がいいんじゃないかな？それに、四つんばいの方が効果的と思われるのに、どうして後手に縛りますかな？」

幾度も質問した問題ではあるが、少女は嚴重な猿ぐつわをされているので泣き声も小さく、ただへうのペッタンペッタンという音だけでははなはだ迫力に欠ける。そこはやはり説明つきの方が……、映画はトーキー、絵もやっぱり絵物語に限るて……。

「当学院ではむやみに生徒の肌を傷つけるようなことは好みません。その点、へうだとせいで腫れ上がるくらいですみますからね。それから懲戒のすべて後手に縛るのは、懲戒を受ける生徒に罪悪感を失わないようにするためです。おわかりですね」

エリザベス校長、鬼よりこわい。





④ 第二懲戒室

あたりが静かすぎるので、思わずゴックンと咽喉の鳴るのが気恥ずかしい。

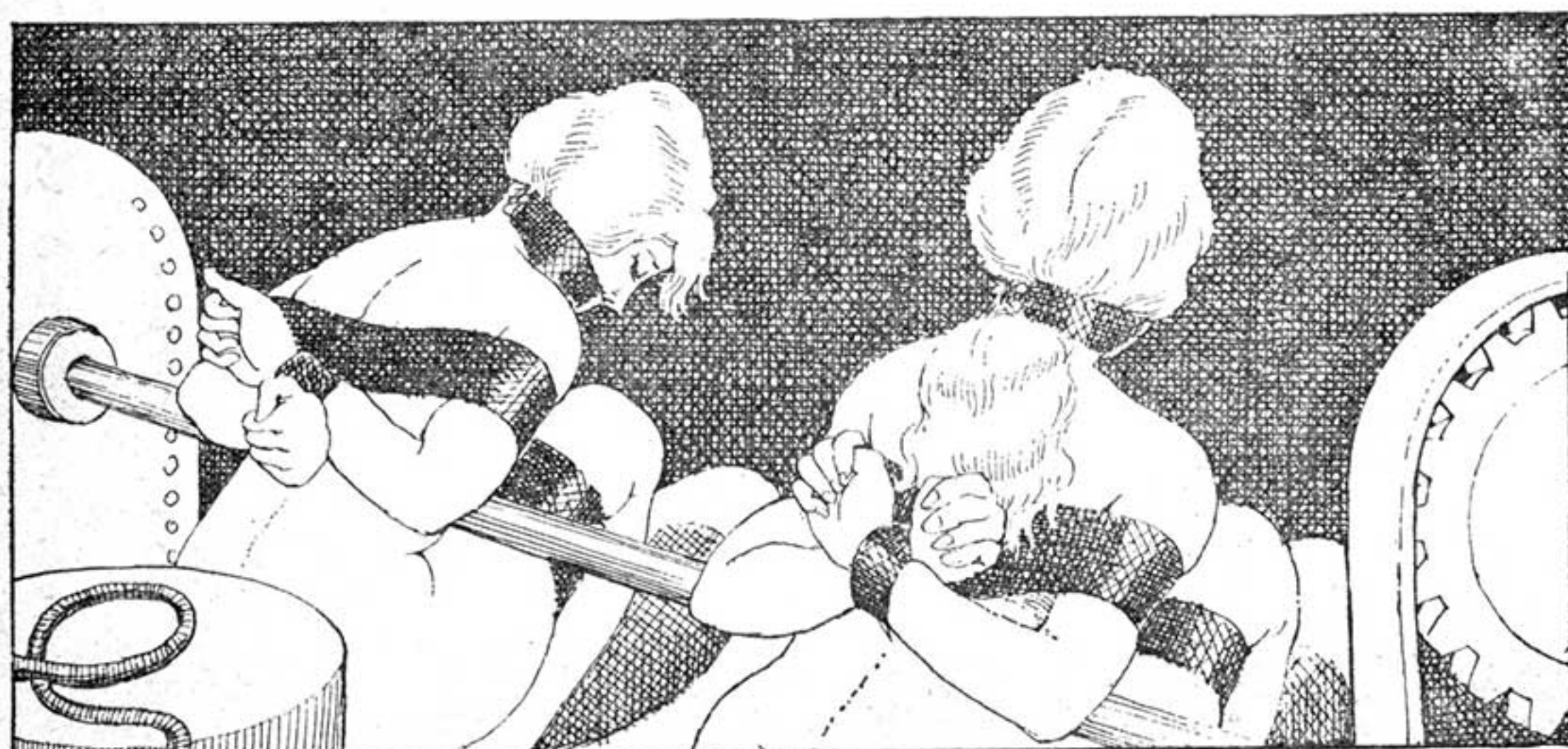
この部屋ではボーク氏の足を釘づけにせずにはおけないような懲戒が、いまふたりの少女に行なわれていた。食いしんぼうの生徒に対する懲戒である。

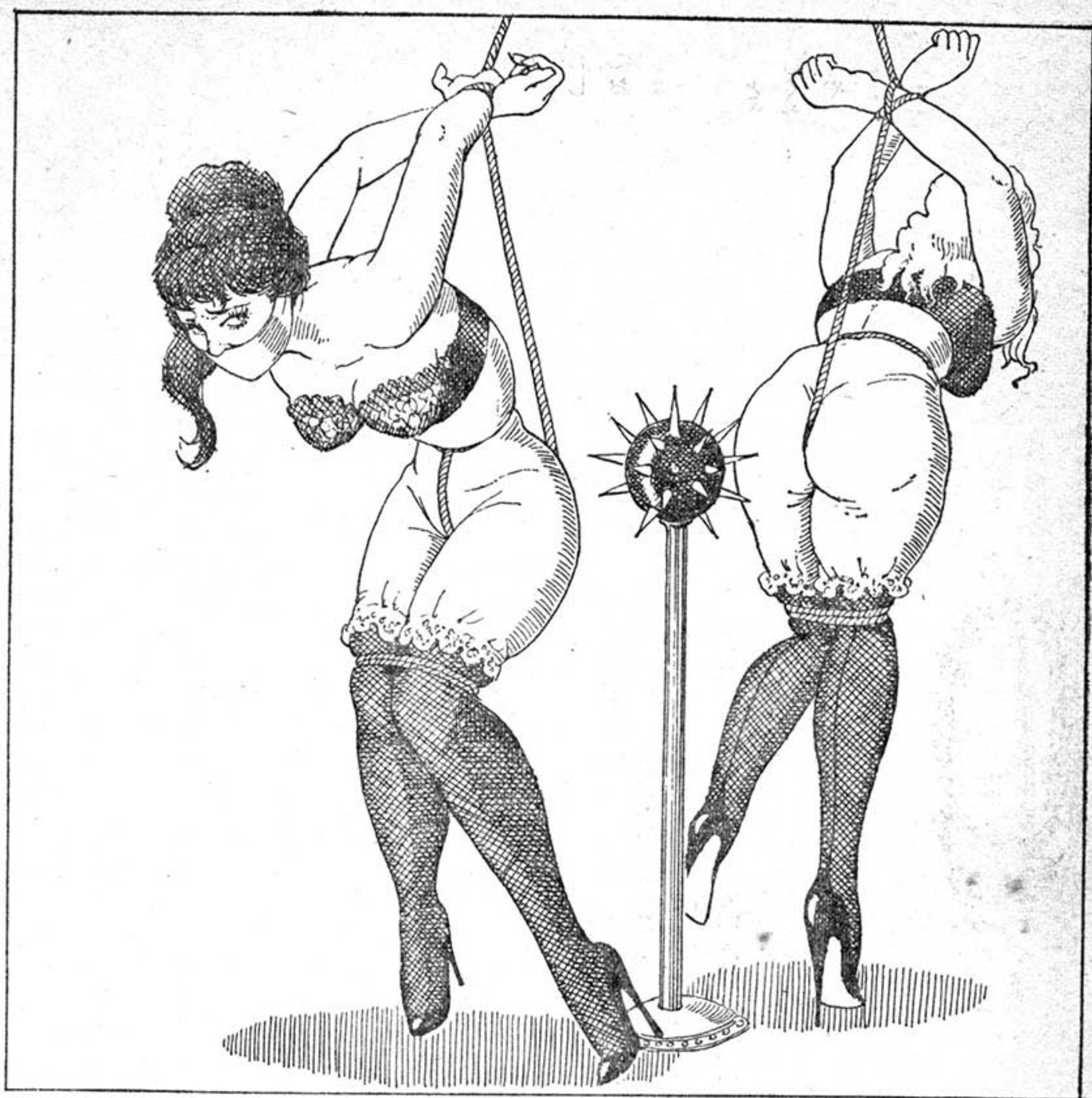
セント・レディ学院の寮では、もちろん不自由のないだけの食事はあてがわれてはいるが、そこは伸びざかりの少女のこと、ついこっそりと買い食いなどもする。この少女たちは、運悪く見つかったというだけのこと。

ふたりは革ひもで後手に縛られ、しゃがんだ姿勢で固定されたまま今日一日をすごさねばならない。ときどき、押しこめられたようなうめきが、革の猿ぐつわを洩れてでる。

椅子に腰かけて本を読んでいた懲戒師がチラッと腕時計に目をやった。

そして、複雑な機械のハンドルをグルグルまわすと、少女たちはしゃがんだままの姿でクリクリしたお尻の方が次第に持ち上がってゆく。懲戒師の方へ突き出した形までくるとハンドルの手を止めた。猿ぐつわを洩れる少女たちの泣き声。懲戒師の手に、ガラス器具がにぎられる。





⑤ 第三懲戒室

エリザベス校長の顔はますますきびしい。「当学院で、Sというようなのはしたくない行為は絶体に許しません。このふたりは今日一日このままで放置しておくのですが、そのうちどちらも、いままでどうしてこんな人を愛していたんだろうと、お互に後悔しますよきつと」

そのふたりの縄尻は、長く天井に伸びて、滑車につながれている。そして、背を向け合ったふたりの間には、栗のイガに似た鉄丸が並べて立てられていた。尻を突つかれまいと縄を引けば、今のいままで愛人だった少女が鉄針に悲鳴をもらす。だが、愛も苦痛には勝てない。お互いに縄尻を引き合って、やがては憎しみ合うようになる。

「これじゃ、力のないこの方が可哀そうだ」と、ボーク氏。校長は平然と答えた。

「そうとばかりはいえませんが。縄尻は手首からつながっているではありませんよ。ずっと下の方、どっちも痛い目をみるのに変わりがないようにしてあります。いろいろの罪は、ここを痛めてやるに限りますわ」
なるほど、校長の言うとおり、こりやさぞかしつらからう。

⑥ 第四懲戒室

ボーク氏がいちばん期待したのにかかわらず、この懲戒室はガランとして人影はなかった。

ふたりの前には、いかめしい鉄製の椅子が三脚、人待ち顔に据えられてあった。なにせこの椅子は当学院自慢のもので、またこれはバン・ボーク氏の考案によるものである。

「せっかくお考えいただいたもののなのに、この椅子で懲戒を受ける生徒は、そう、ひと月にふたりか三人くらいですわ。でもこうして使用されない方が、わたしども教育者としてうれしいにちがいませんが、せっかく先生におこしいただいたときが、いつもこれじやちよつと……、ホホホ」

エリザベス婆さんは、他の教師や生徒がいないとなると、にわかにマリアさまみたいに優しくなる。

「いや、結構けっこう。これもみな俗悪物追放による成果といえましょうな。われわれもこれでこそやりがいがあるというもんでしよう」

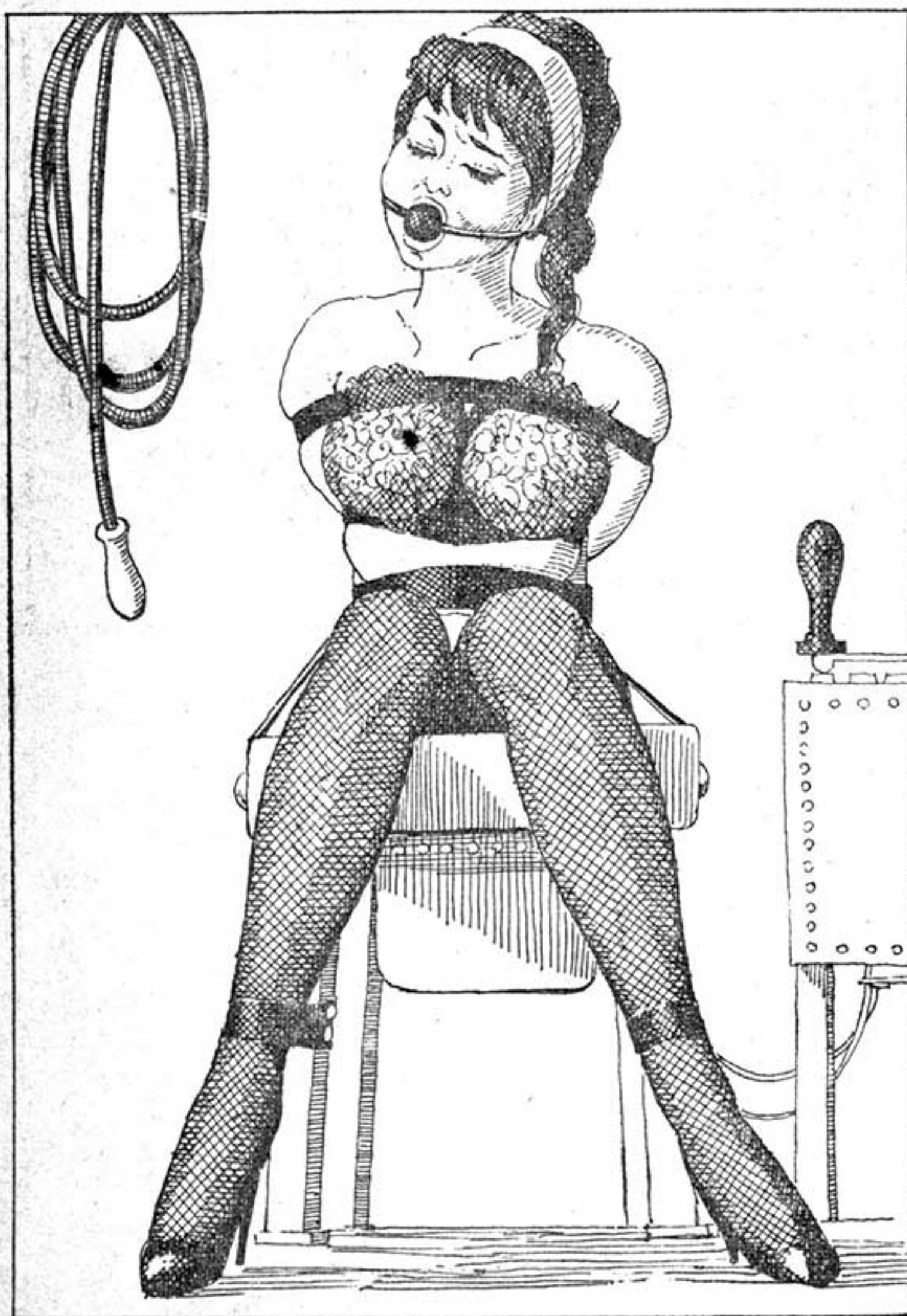
いささか残念ながら、ここは磊落に笑って見せねばならない。まさか、罪もない生徒を見学のための実験にするわけにもいかない。

冷い、にぶい光を放つ椅子の背、脚、いたるところに犠牲者を固定する皮ベルトがとりつけられていた。

ボーク氏は名こり惜しげに椅子に装置されたボタンの①を押す。と腰掛けの中央から、かわいい物体がつくしんぼうのようにニョキニョキと首をもたげる。②のボタンを押す。とつくしんぼうは極めて微妙な振動をおこし

てふるえた。

ボーイフレンドの出来た娘は、いくら切り離そうとしても無駄なことを、ボーク氏は愛嬢のことで身をもつて知らされた。禁断の木の実を食べたこの学院の少女は、一日中この懲戒椅子に坐らされることになっている。ボーイフレンドと、聞くだけで身ぶるいするようになる特製椅子である。





⑦ 美少女

第四懲戒室を出て数歩もいかぬうち、ボーク氏は廊下の向うから下着一枚に剥がれた美少女が、後手に厳しく縛られた縄尻を懲戒師に引かれてやってくるのに出合ってギクリとした。

その少女は、かねてからボーク氏が目をつけていて、行く行くは三人目の愛人に、と秘かに考えていたからである。

呆然と立ちすくんでいるボークの前を縄尻を持った懲戒師が会釈してすぎると、美少女を第四懲戒室へ追いたてる。

少女は猿ぐつわの下から悲しい呻きを洩らして必死に尻ごみする。だが自由のきかない身の抵抗は空しく、張ちぎれるようなお尻へピシリピシリと縄尻のにわか鞭を打たれながら懲戒室の中に消えた。

「ちようどいい機会ですから、戻ってごらんになりませんか？」

ボーク氏の顔色をいち早く察して、エリザベス校長がすすめた。

飛んで行きたいのは山々だが、最初に午後から議会があるなどと言ったてまえ、そう軽いところを見せられない。

「いや、時間がありませんので、それはまたの機会に……」

苦しい苦しい。だがなんと言っても、どこかの馬の骨とも知れぬ男に、美少女を取られたことがいまいましい。

⑧ 正義高潔の男

ボーク氏は車のクッションに深く身を沈めながらも、やけのように煙草をふかした。

車は議事堂の方とは正反対、第二夫人の方へ直行である。今日は午後から第二夫人宅で学院で見たことのおさらえを実行する予定だったが、さっきの美少女のことでもうそれどころではない。

(くそいまいましい奴め、近ごろの学生はな

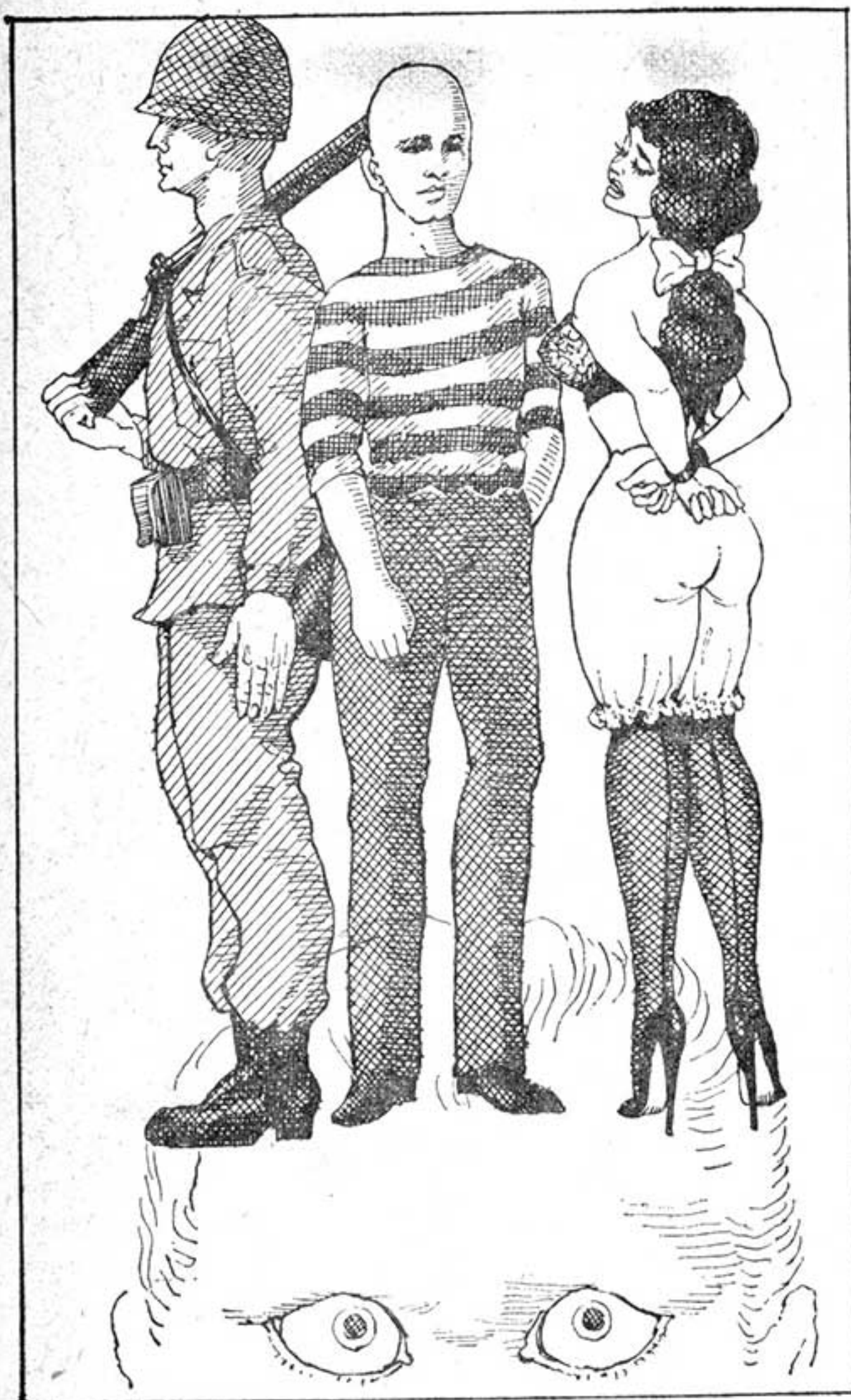
つとらん)

ボトリ、と煙草の灰がズボンの膝に落ちたのさえ気がつかない。可哀そうに、この分では第二夫人への風あたりもだいぶ強そうである。

(だいたい、この頃の男子学生のデレデレした格好が気に入らん……。そうじゃ！)

ボーク氏の、三角につり上がった目がギョロリと動く。

(男女学生間の風紀を正すには、あれこれ理



屈をこねるより、いつそ男生徒が女にもてなくすることがいちばんじゃ。敵衣破帽、わしらの若い頃がそうじゃった。うむーと、そうじゃ、丸坊主、これじゃ、男子学生はすべからく質実剛健、頭を丸坊主に刈るべし、この法案じゃ！)

やっと、三角眼が少し細くなる。

(だが、待てよ？)

男生徒のことはそれでよいとして、もっと強敵なのは青年男子である。まさか、一人前の男をつかまえて、丸坊主にしろとは言いかねる。

「うーむッ、これじゃッ！」

運転手があわててハンドルをにぎりなおした。

「うむッ！ 明日の議事提案はこれじゃッ！
今や世界情勢風雲急を告げるとき、我が親愛なる州青年諸君は全て兵役に身を投ぜよ。州民皆兵、他州に先駆けてわれら御国の御楯とならん！」

いつのまにか、ボーク氏の頬に熱いものが伝わり、あとからあとから感激の涙がこみ上げてくるのである。

感涙が熱い塊となって胸ときめかす。

ジリリ、と煙草の火が指を焼いた。

「アッ、チッチチー——」

腹切り残酷史譚

夏川浩一郎

鬼頭 暁・絵

第二章 切腹変遷史

1 創始期（西暦一、三〇〇年頃まで、鎌倉時代末期まで）

腹切り第一号は大盗、袴垂保輔である。彼は時めく名門藤原氏の一族として生れながら素行悪く「強盗の張本、本朝第一の武略、追討の宣旨を蒙る事十五度、後禁獄せられて自害」と記録にある。様々の悪事をはたらき、ついに郎党の自白によって発覚し、捕えられるとき刀をぬいて腹をさし切り、腹わたを引出したが、翌日絶命したという。時に永延二年、西暦九八八年であるから、腹切りの歴史も今日まで、かれこれ千年となる。

腹切りが一般的に行われ始めたのは、あた

かも源平両氏を中心とする武士の勃興期で、武士同志の争いによる内乱の間に次第に広まっていったものである。

保輔が腹を切ってから約一世紀を経て、東北地方に後三年の役（一〇八五—一〇八七）が起った。源義家がサッソウと登場し、雁の列が乱れたのを見て伏兵のあるを知った有名な話はこの時である。当時の戦の実況を描いたと言われる後三年合戦絵巻（重要文化財）の中に、腹わたを露出した数人の生々しい割腹死体が折重っている場面がある。また焼けおちた城あとに真ッ裸の焼死体が転がっている場面があるが、みな腹わたがはみ出しているのを見ると、やはり割腹したものらしい。これを見ても、すでにその頃には腹切りがかなり普及していたことが想像される。

少し降って源平両氏の栄枯盛衰の間に、この風習はますます広く行われるようになる。

当時の著名な腹切りは、大島の源為朝、宇治平等院の源三位頼政、吉野山の佐藤忠信等である。為朝は保元の乱に敗れて伊豆大島に流され更に追手を受けたが、強弓をもって先頭を進む敵の船を沈めた後、柱を背にして立ちながら腹を切ったが、死なれぬままに更に背骨を断ち切って死んだという。骨を切ったというのはオーバーな表現にしても、とにかく切先が背中に露われるまで深くかき切ったものだろう。その結果大血管を切断したらしく思われる。

頼政は平家討伐の旗揚げに失敗し、平等院扇の芝にすわり辞世の歌をよみ、太刀先を腹に突立て、うつ伏せに貫かれて死んだ。忠信のことは後述する。なお頼政の切腹については次のような川柳がある。

源三位、きゅうくつそうな腹を切り

おごる平家久しからず、檀の浦で一族みな亡んだ時、腹切りが全然なかったことは注目すべきで、後世のように武士は腹を切るものという不文律はまだでき上がっていなかったことを示している。考えようによれば、平家一族があまりに貴族化して武士としての野性を失っていたとも言えよう。あっけなく亡ん

でしまった一因もここに見られるのではないか。袋ぐものことを俗に腹切りぐも又はさむらいぐもと呼ぶが、平家のさむらい達は、くもになれず空しく西海に沈んで平家がになったような。

かくて世は源氏のものとなったが、大将頼朝と弟義経の不和から義経は奥州平泉に逃れ、衣川の合戦に敗れて自刃する(一一八九)。その時義経は臣下に「さていよいよ死ぬべき時が来たが、自害とはどうしたら良いのか」とたずねている。彼のような勇将が腹の切り方を知らぬということではあるまい。一番勇ましい方法はどうかと聞いたのである。これはまた当時腹切りの方法に一定の形式がきまっていなかったことを示すとも考えられる。そして家来が「先年、佐藤忠信が吉野でやった切腹がもてはやされております」と答えると、「それなら子細ない。ただ疵口の広いのが良いのであらう」と言って、短刀を左の乳の下に突立て背中に通れとばかり深くかき切り、三方へひきさいたと言うから、一種の十文字腹であらう。そして腸をくり出したが死ぬ、刀を衣のそでで押ぬぐい、衣を被って脇息に寄りかかり、しばらくして絶命した。

さて、切腹が初めて行なわれてから鎌倉時代ごろまでは、まだその方法に定まった形も

なく、各人思い思いの方法で行なっていたと見られる。そしてその方法も原始的で、思う存分深く突立て力まかせにかき切ったものが見られる。もちろん往々にして不手際になり極めて凄惨なものとなつたろうが、これらの切腹のパイオニア達の文字通り命をかけた実験の積み重ねにより、次第に手際の良い方法が発見されて行くのである。

2 最盛期(一、四〇〇年頃まで、健武中興前後から南北朝時代)

前期のいわば実験的段階を経て、腹切りは本格的最盛期を迎える。この時代は日本の元

首である天皇家が相継ぎから、大覚寺統(後の南朝、この末孫が例の熊沢天皇であるという)と持明院統(後の北朝、現天皇の祖)の二派に分れ、血で血を洗う抗争に終始した。これにより、全国の武士もそれぞれ二派に属し、全国の内乱となり、昨日の勝者は今日の敗者で、連続切腹劇を演ずる。腹切りも武士階級に限らず、勇僧の切腹や、傷ましい皇族の割腹自殺も数件ある。

当時の内乱の模様を良く伝えている太平記をひもといて見ると、「〇〇自害の事」という見出しが次々と出てくる。そしてこれ等の大半は集団割腹である。集団割腹と言っても



後世とはケタが違い、三百人も五百人も一辺にやるのである。腹切りの記事が最も多いのは何と言っても建武中興（一三三三）の頃である。以下二三の例をあげる。

北条氏の六波羅探題として京都を守っていた越後守仲時は大覚寺統に組する軍勢に攻められ、持明院統の光厳天皇を奉じて鎌倉指して落ち行く途中、近江国番場の峠で敵にかこまれてしまった。そこで彼は自決を覚悟し、将兵をあつめ、我が首をとってそれをみやげに敵に帰順せよとさとして腹を切った。この時残っていた武士四百三十二人が彼に続いて腹を切った。流血は河となって流れ、死がいは庭一面に折重ってさながら屠殺所の肉のようであったという。この死人の群れを目の当りに見て、当時わずか十九歳の少年天皇の恐怖と絶望はいかばかりであったろうか、察するに余りある。こんな大勢の者が一度に腹を切ったというのは信じがたい気がするが、決して作り話ではなく、故吉川英治氏の私本太平記にも取りあげられている。うら若い天皇の前で数百人が一度に切腹してもだえ死んだ光景はどうであろう、切腹史上でも最も悲壮な話である。

それから半月後、北条高時が鎌倉で自刃した時は、八百数十人の武士が一しよに腹を切

った。これ等の例は、主君が腹を切る時に一しよに腹を切ってお供をしたわけであるが、切腹による殉死に三つの場合がある。

主君と同時同所で腹を切るのが供腹で戦場ではほとんどがこの中に入る。また主君の死後、時日をおいて腹を切るのが追腹、主君の死に先立ち、時には主君の自殺をすすめるために先に切るのを先腹と言う。この当時は追腹というものは未だ見られず、大半は供腹であるが、少し変った例をあげて見よう。

北条氏の滅亡に先立って、高時の弟四郎左近入道という者は腹心の侍どもを集め「自分は思うところあり、奥州の方に逃れるつもりであるから、その他の人々は自害して屋形に火をかけ、自分が腹を切って焼け死んだように見せてくれ」と頼み、ひそかに逃れ去った。その後で侍どもは味方にむかって、殿はすでに御腹を召されたぞ、志のある者は御供申せと呼ばわり、屋形に火を放って二十余人の者が、一斉に腹を切ってしまった。それを見て三百余人の兵どもが庭に集まって、われ先にと腹を切り火の中に飛込んで死んだ。

結局たった一人の主君を無事に逃すためにこれほど多くの者が腹を切ったわけで、武士道もここまでくると、無残と言うか何と言うか我々には理解しがたいものがある。

九州探題の北条英時が自害した時も一族郎党三百四十人が割腹している。また延元々年（一三三六）小式入道妙慧が腹を切った時は、

郎党百余人が、持仏堂の床にならんで、そろって声を出し一度に割腹したが、その声が空にひびき渡り天のはてまでも聞こえるかと思われたと言う。その声というのは一度に刀を腹に突き立てる掛声であったろうか、或いはまた意味もない悲憤の絶叫でもあったろうか、想像するだに鬼気せまるものがある。

南朝の勢力が衰えて、正平五年（一三五〇）越前金崎が落城した時の模様も悲惨である。最後には食物がなくなり死人の肉を食って戦ったが、ついに落城の運命がせまり、先づ大将の新田義顕が割腹して手本を示すと、つづいて皇太子の尊良親王がみごとに自刃した。その他の武士たちは「いざさらば宮のおん供つかまつらん」と同音に念仏をとなえて腹かき切って重り伏す。さらに庭にならんでいた兵三百余人がお互いに刺違えて折り重って死んだ。

先腹の例としては、正平四年、畠山直宗等が高師直に追われて進退きわまった時、それまで付き従って来た若党十三人が主の自害をすすめるために、みなもろ膚脱いで腹を切った。

貫き腹の例としては、ものすごいものがある。北条氏が滅亡した時、塩飽新左近入道聖遠という者が、子息の四郎に我が首をうてと命じたので、四郎は大はだぬぎになって父の首を切り落とし、その刀を取り直して自分の腹をつば元まで突貫いてうつ伏せになって倒れた。郎党三人がこれを見て、四郎の背中から長く突出している刀の先に次々と身を投げかけ、四人の者が一本の太刀に串さしの魚のように頭を並べて死んだと言う。なお参考に述べる、戦国時代ごろに行なわれた「串さしの刑」というのは、死刑にすべき人間を丸裸にして、木や鉄で作った長い串を肛門から口まで刺し貫いたという残酷なものである。

ところで当時の腹切りの状況をいろいろな文献から想像して見ると、腹を切る動作がくわしく記述してある場合でも、そのあとで自ら致命傷を加える状況が全然記していない。そして介錯というのも来だ行なわれていないのでどうして死んだのかとふしぎに思われる。或いはのどや胸を突く動作の記述を省略しているのではないかと想像されるが、次の例を見ると、そういう解釈も成立しないことが分る。

前述の北条仲時が腹を切った時、糟谷三郎宗秋という者が続いて腹を切った状況が「太

平記」に次のように述べてある。

暫らく御待ち候へ。死出の山の御供申し候はんとて、越後守の、柄口まで腹に突立て、置かれたる刀を取って、己が腹に突立て、仲時の膝に抱きつき、うつぶせにこそ伏したりけれ。

この記述から見て、越後守は単に腹を切っただけであることは明らかで、更に刀を柄のところまで腹に突立てている点から、かなり深く切っており、当時の切腹の様相がうかがわれる。

要するに当時の切腹は、腹の奥まで深くかき切って腹わたや大血管を切断したもので、それだけで速かに死ぬことが出来たものと推察されるのである。

このように当時の切腹は深く腹をひきさいたので、流血多く、もちろん腹わたはみな露出し酸鼻を極めたものだった。これが数百人も集って、掛声をかけて腹を切った有様はどうだろう。苦しまぎれに腹わたをつかみ出して血の海の中に苦もんする数百人の半裸の男たち、物すごいめき声のコーラス、血のにおいと死臭のはげしさなど想像するだけでも恐ろしい気がする。

止まで、室町時代より江戸時代初期まで

およそ一世紀余にわたって激しい争いを続けた南朝と北朝は、北朝の明德三年（一三九二）両統の和儀が成立して合体した。しかし力関係から止むを得ず降伏した形の南朝であったから、再び内紛が起り、六十余年後の長祿元年（一四五七）十二月、南朝の末の二皇子が暗殺されて、南朝は完全に歴史の波間に没し去る。時代は大きく動いており、わが切腹風俗の面でも大きな変化があった。

それは腹を切った場合の介錯が行なわれ始めたことと、介錯する者がいない場合は切腹人が自らのどや心臓部を傷けて死ぬようになったことである。これらは何れも切腹のあまりに大きな苦痛を軽減し、速かに死に至るために考案されたものである。記録に残っている介錯の始まりは享徳四年（一四五五）のことである。しかしながらこの時期は、あくまで十分に腹を切ることが重要視されており、介錯は腹切りにピリオドを打つだけのものではあった。介錯の発明により、従来のように腹の底までかき回す必要になくなったが、やはり勇烈さを示すのが切腹の目的であることは変りなく、疵口広く腹わたのはみ出す程度ま

3 完成期（一、六六三年の追腹禁

でかき切ったものらしい。

当時の切腹の例を二三あげて見よう。

細川両家記に見る細川澄之の切腹の状況、

我いまだ腹切るやうを知らずと宣へば、

伯耆答へ申すやう、それ自害と申すは十方

仏土と申せ共、まづ西へ向ひ十念し、御腰

の物をぬき左の脇にさし立、右手の脇へ引

回し、かへす刀にて御心もとにさし立て、

袴の着ぎはへおしおろし候と申しければ、

御りやうじやう有て御腹めされけり。伯耆

涙と共に介錯申し、そののち伯耆も腹を切

る。

富樫政親が一向一揆に亡はされて自刃した時

の模様は富樫記にくわしい。落城の刻が近づ

くや、畳五六帖を庭にしいて酒宴を始め、次

々と家来どもが腹を切り、終り近く政親が割

腹した。彼は先ずもろ膚脱いで、小姓の千代

松丸のさし出す九寸五分をとって左の脇につ

き立て、右へキリリと引回し、返す刀で心窩

に突立て、へソ下までクワツと押下げ、血を

以て一首の辞世を記したのち、刀の切先を口

にふくんで柄口まで貫かれて果てた。彼の場

合は介錯なしであったのでこのような方法に

よったものである。このときの切腹は全員正

十文字腹をやっているが、その頃から以後は

腹は正十文字に切るものときまっていたよう

で一文字に切るものは極めて少ない。

主君の病死等に際して追腹を切る事も、漸

く始まった。その最初は明徳三年(一三九二)

細川常久が死んだ時に腹を切った三嶋外記入

道という者である。明徳記には、彼が亡君の

厚恩に報いんと腹十文字に切り刀をのどに突

立てて手を合わせて伏した模様を記し、およ

そ人の家僕たる者、戦場で主君と同じく討死

するも腹を切るも古今の間に多いが、病死の

別れを悲しんで腹を切つて跡を追うのは、前

代未聞の振舞と皆人感涙にむせんだと記して

いる。

応仁元年(一四六七)七月いわゆる応仁の

大乱が起り、天下麻の如く乱れさらに戦国時

代を経て、信長、秀吉、家康と権力が移り、

元和天年(一六一一)の大坂夏の陣により、

天下は徳川氏のもとに完全に統一される。し

かし戦国の余風いまだ治まらず、追腹の如き

はますます盛んになって来た。

当時オランダの平戸商館長であったフラン

ソア・カロンが一六三六年上司に送った「日

本王国誌」には次のように記してある。

諸侯が逝去すると、諸侯の大小および臣

下の多少に従い、通例十人二十人ないし三

十人が切腹して主君のあとを追う。これを

行う人々はたいてい主君在世中から定まっ

ている。彼等は主君に愛せられ、特別の恩

恵利益を被ったことを徳とし、感謝の辞を

述べた後、主君よ、主君の信用し給う多数

の臣下の中に、この名誉を与えられたこと

に対して、何をもって報うべきか、主君の

ものであるこの肉体を再び捧げ、主君より

長く生きることができないと言い、これを

確証するために、彼等は集つて一盃の酒を

飲む。(中略)

前述の切腹は次のように行われる、まづ

親友を集め、相伴つて寺院に参詣し、その

平地にむしろともうせんを敷き、訣別の宴

を開き、飲み食いかつ打興じて、それがす

んでから腹を十文字に切り、腸や内臓を出

し、なお勇氣あるものは自らのどの方まで

切上げてそうして死ぬ。自分は切腹の方法

に五十種類位あると確信するが、最も能く

切腹したものは最も多く名誉を有する。

このように追腹の風習があまりに盛んだった

ので、徳川幕府は寛文三年(一六六三)殉死

の禁令を出してやめさせようとしたが、それ

でも根絶しなかったもので、更に同じく八年に

再び禁令を出し、追腹を切った者の関係者を

厳罰に処したため、ようやくこの風習も跡を

絶った。

4 退廃期（江戸時代中、後期から 明治十年——一八七七年頃まで）

すでに追腹も禁止され、全く泰平の世となるにつれて、武士の気風も次第におだやかなものになった。腹切りも数少なくなり、たまにあっても従来のようなハデなものは見られないようになる。殊に武士の刑罰としての切腹は介錯を主とした極めて形式的なもので、「五分（約一・五センチ）突立て三寸（約九センチ）引回せば美事な切腹」と言われるようになった。介錯は切腹を手際よく片付けてしまうための手段となり、従来のように深腹切って腸が露出するようなものを無念腹と呼び、潔くないとして嫌うようになった。勇気を示し赤心をあらわすという腹切り本来の精神はうすれてきて、後には全く腹を切らずに、刀を手にした瞬間に首を打ち落すようになる。例の赤穂浪士の処罰でも実に腹を切った者はほとんど無かったと言う。

しかし個人が介錯なしに割腹するときは、前にあげた高山彦九郎のように、かなり壮烈な切腹をやる者も多かった。介錯のある場合でも死に花を咲かせようとする者は、あらかじめ介錯人にことわって十分に腹を切ることもあった。次に示すのは「葉隠（はがくれ）」



の中にある話。

野村源左衛門という武士が切腹を命ぜられた時のことで、彼は介錯人に向い「存分に腹を切り、とくと仕舞い候て、首を討てと申す時切るべし。もし声をかけざる内に切りたらば、うぬし七代まで祟り殺すべし」と言ってにらみつけたので、介錯人が「心安かれ。存分に任すべし」と言った。そこで彼は腹を木綿で巻きたて、十文字に切り腸が出た時、顔色が少し青くなったが、しばらく眼をふさいでいてから、小鏡を取出して顔をうつして見て、すずりと紙を求めた。介錯人がたまりかねて「もはや良きにてはなきか」と言うとき、眼をカッと開いて「いやいや、まだ仕舞えず」と言って、筆を取り、「腰ぬけと言うた伯父め、くそくらえ、死んだる跡で思い知るべし」と書いて家来に渡し、「さあよいぞ」と言つて首を打たせた。

泰平の眠りを覚ます黒船渡来の頃から、世の中が急にさわがしくなった。勤王佐幕の争いが激しくなるとともに、また腹切りが多くなり壮烈なものもかなり現れてくる。映画でおなじみの月形半平太の話などもその頃を舞台にしている。

慶応四年すなわち明治元年（一八六八）は日本切腹史上重要な年である。正月早々の神

戸事件で前にのべた滝善三郎が三十二歳を以って、初めて毛唐の前で切腹し、日本サムライの勇気を示した。続いて二月半ばに堺事件が起り、土佐藩士十一人が妙国寺で割腹した。この腹切りは戦国時代を思わせるようなかなり惨烈なものだったから、立会った外国人は恐れおののき、これ以来日本サムライのハラキリは世界に喧伝された。フジャマ・ゲイシヤとともにハラキリは日本の象徴となり、外国の辞書にも「ハラキリ」の項が収められるようになった。白虎隊の切腹も同年八月二十三日のことである。

王政復古、文明開化の世となっても、しばらくの間は波が収まらず、旧士族の反乱が何度も起った。中でも明治八年十月の神風連の乱では、敗れた旧士族のうち八十余名が腹を切った。彼等はザンギリ時代にも昔ながらのチョンマゲを結んでいた最後のサムライであった。明治十年の西南の役を以て旧勢力は完全の後退したが、この時もかなりの腹切り組が出た。そして動乱の余波もすっかり収まって腹切りも衰微の一途をたどる。なお切腹刑は明治六年に廃止されている。

5 衰亡期（現代まで）

日本の近代化とともに腹切りは目に見えて

減少した。新聞だねとして時折三面をにぎわせる個人的な切腹以外、集団的なものは殊に少なくなった。

例外的なのは、昭和十二年に発生した「死のう団」切腹事件で、青年数名が同じ時刻に帝都の各所で割腹した。いずれもかなり立派に切っているが、すぐ手当を加えたので命は助かった。

それから昭和の代にめずらしい刺し違えの例が十二年頃の新聞紙上に報道されたのを記憶している。これは旅館に止宿中の二青年が刺し違え割腹を行ない、発見された時は、一人は胸の辺を突破られて虫の息、他の一人は腹を突破られて大腸露出をして絶命していたというものである。如何なる事情によるものか不明だが、なんとなく同性愛的な感じがする。

切腹はサムライと切っても切れぬ縁があるので、サムライの仕事をうけついで軍人の間で比較的多く行なわれるのは、なるほどと思われる。事実戦前の軍隊では腹切りの作法を新入兵に教えたものである。

日清・日露の両戦役中も日本軍人で腹を切るものが少くなかったようである。また乃本將軍の明治天皇に対する追腹は、日本国内だけでなく世界の人々に深い感銘を与えた。

やがて昭和十二年八月、日本は支那を相手の泥沼戦争に突入し、更に太平洋戦争に広がり昭和二十年の敗戦を迎えるが、その間にも腹を切った例が少なからずある。

上海付近の戦いでは日本兵の裸体集団割腹が行なわれたが、これは当時の新聞の第一面に特大の活字で、

任務果して、悲壮！ 彈雨下に裸身の割腹というような見出しで大々的に報道されている。十二年八月二十四日、中村部隊長以下の決死隊四十名が敵前架橋作業を行なった時のことで、ふんどし一本の工兵達がクリークに入って作業を続ける内、次々と敵弾に倒れ、橋をかけ終った時はわずか数名となったが、彼等は真裸のまま橋の真中に立ちならび、帝國軍人の最期を見よ、天皇陛下万歳を絶叫し、銃剣をブスリブスリと腹に突刺して倒れたと言う。

昭和二十年は切腹の当り年で、沖縄決戦の牛島・長の両中将の切腹、終戦時の阿南陸相、大西中将の切腹がよく知られている。中でも終戦前後は軍人、民間人を問わず、また内地外地を問わず腹切り組が続出した。民間人の中には石翼団体大東塾の塾生十四人の集団割腹自殺という悲壮なものもある。

愛読者通信

★五月号サーピスカードから★



意味で、柚木あぐりの「にほんがみ」も大いに可。フェニクス商会の特約のものは毎月やぶき捨てる。まだ「山参道」の方が可。写真や絵をもっと多く、男は目よりものを得る。女は実感で？

(東京 E・S)

▼私は創刊当時の愛読者ですが、もっとアメリカのSM画をふやして下さい。枚数が少ないと思います。版權その他で問題があると思いますが「ある男の悲劇」のさし絵はいただけません。ちょっとグロです。SMとは美の中に被虐の感覚を陶醉させる事ではないでしょうか？ (東京 T・S)

▼①アメリカの公刊誌の紹介はフレッシュな感じで良い。今後も続けて下さい。②落合先生、沖先生その他の画家の作品展といったものが増えたのも楽しい。これを発展させて、デラックスな画集を別冊で出していただけませんか。またはさし絵のアンソロジーといったような画集でも結構です。

(広島市 T・A生)

▼「和装美礼讃」に大賛成。その

▼山田風太郎の忍法帳のように、ストーリーを主体とした中で浮かび上がってくるSシーンであるように。とにかく最近の小説の中には、Sシーンが前にむき出しすぎて、ストーリーがもの足りなく、ためにSシーンそのものを価値なくしている憾あり。一般的道德、時勢に迎合するは愚、あくまでマイペースで。 (札幌市 K・N)

▼普通のカメラ雑誌の写真程度の大胆さは許されるのではないのでしょうか。写真や絵をもっとふやしてほしいと思います。ストーリーは簡単でよいから描写の詳しいものがよいと思う。良心的に編集されていて感心しています。

(山口県 M・M)

▼貴誌のさし絵は絶対です。その点で申し分ありません。ただ、欲をいえば毎号必ず絵物語がほしいと思うのです。よろしくご編集下さるよう望みます。なお、今月号における「乳房を飾る男」なども異色な感じで、この種のものも期

待したく思います。乱文にて失礼します。 (静岡県 I・U生)

▼時代妖美画選、妖艶画選は非常に美しく描かれていてよいが、現代妖美画選といったものも非常に良いと思う。未来想像図といったものを望む。アメリカ公刊誌の解説つきの絵をもっと多く望む。

(京都 Y・H生)

▼いろいろな縄の掛け方を図(写真)で、始めから縛り終えるまでを解説したもの。洋服着用の縛り後手縛りの後手が見える大寫しの写真。外国誌物の縛り絵、写真。家庭生活の中での遊戯としての縛りを主題とした読物、等を望む。

(東京 Y・S)

▼「山参道」せっかく大家の作品ながら興味半減です。「裏窓」らしい本にするなら、せっかくの写真ですから「にほんがみ」のような写真をグラビアかコロタイプ等ににしてほしいものです。岩田吉夫氏の絵も、特に多く掲載して下さい。

(静岡県 SSK)

▼貴誌の縛り絵(カット)の素晴らしさには敬服いたしておるものです。その意味で「裏窓」を集めているものですが、せっかくの絵を薄い色のインキで刷ってあるのを見ると残念でなりません。

(長野 A・M生)

▼グラビアはできるだけ日本のもを用いて欲しい。現在、評論と名のつくものが三種類ある。これを各個別に、一月一題の割に掲げて欲しい。そして、余分になったページを他の読物に移してはいかが？ (神戸市 H・M生)

▼①グラビアの増加とともに、本誌「にほんがみ」のような裸身の縛りを多くして欲しい。②臨時増刊号の出版。③単に縛るにしても縛り方に変化のあるいろいろの方法を紹介してもらいたい。

(大防市 H・U)

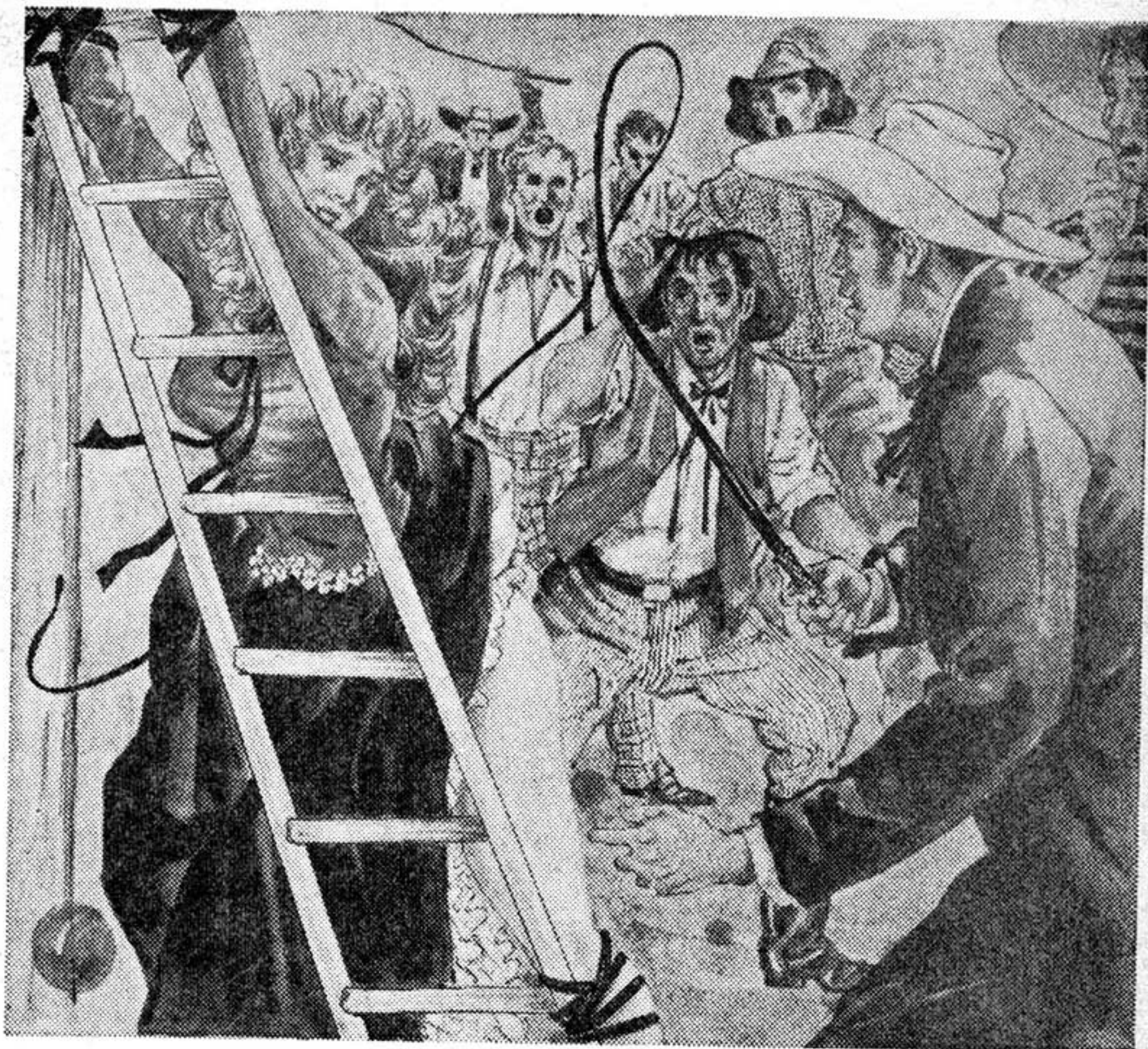
▼通信販売方式による雑誌、写真の分譲(従って魅力的なもの)。「ある矯正具の裏面史」のごとき

グロものの取り止め。鬼頭暁の責め絵をふやすこと(しかし現代風全裸、下らぬ拘束具は全く不要、バックも不要) (東京 T・K)

▼号を重ねる毎に、充実味を加えてまいりました。本誌を拝見する度に、編集長を始め編集部の皆様方のご努力、ご苦勞が偲ばれ、まことに感謝に堪えません。末長く続刊されんことを切に祈ります。

(東京 F・O生)

■この欄に掲載しました方に、手札型S写真一枚をお送りいたします。



カウント・ジョージ作

「南北戦争」について

この長編小説の原題は、「ドリー・モントルの思い出」で、著者は英国人と伝えられている。

ドリー・モントルというのは、女主人公の名で、時と背景は題名どおりアメリカ南北戦争勃発直前のヴァージニア州。

本誌の読者ならば、とっくにご承知のはずで、いまさら書き加えることも必要だと思うが、これは奴隷制度に対する抵抗運動に題材をとった、本格的な鞭打小説である。

そのクライマックスシーンを選んで、四枚の画集とした次第。

この画集では、わざと除いたが、編中のレール責めの箇所は、かなり強烈である。たとえば、こんなぐあいである。

——レールは私たちのほだかになった両腿のあいだをとおり、むきだしのおしりは、レールのとがったところにあたりました。男たちは棒杭を地べたに打ちこみ、私たちの足首を、それにしっかり縛りつけました。私たちの足は、ひろめにひらかれていましたので、レールは内腿にあたり……といったぐあい。



——やがて、ふたりはソフィをつれてきました。ソフィは、笞をみると、すぐに泣きさけび、後方にそりかえって気絶しそうになりましたが、ダイアナとミリイにささえられてからだを起こしました。

彼女の顔色は、恐怖のために蒼白でした。哀願するように手をのばし、なみだをながしながら、

「旦那さま、どうかそんなおそろしい笞で打たないでください。打つのなら、柴鞭か皮鞭で打ってください。その笞だけはおゆるしください」

と、泣きさけびました。しかし、ランドルフは平気で、

「早く台のうえにくくりつけろ」

と命じました。ダイアナとミリイは、彼女の猛烈な抵抗にもかかわらず、彼女を台のうえにひきずりあげて、思うぞんぶんにからだをのばさせ、手と足を、皮紐でしっかりとくくりつけてしまいました。

ソフィは、手早く裸にされました。台は彎曲して、おなかのところが高くなっているのので、頭と足は低くなり、おしりのほうは高く打つのは非常にうまくできていました。

ランドルフは、笞をにぎると、ソフィのおしりをめかけてたたきはじめました。



——デインさんは、しっかりと私を抱きしめていました。

「ほんとうにかわいそうな娘。あなたの悲鳴が、どんなに私の心を突き刺したことでしょ。あなたのようなやさしい娘の肌を、あんなにもひどく鞭打つなんて、なんと残酷な男たちなのでしょう」

デインさんは、私を憐れむあまり、自分自身がうけた恥辱や苦痛を忘れていたのです。

そこで、私はいいました。

「彼らは、あなたを打ったほど、ひどくは私を打ちませんでしたわ、デインさん。たった十二回打っただけですから。でも、私は悲鳴をあげずにはいられなかったのです。だって私には、あなたほどの勇気がないんです」

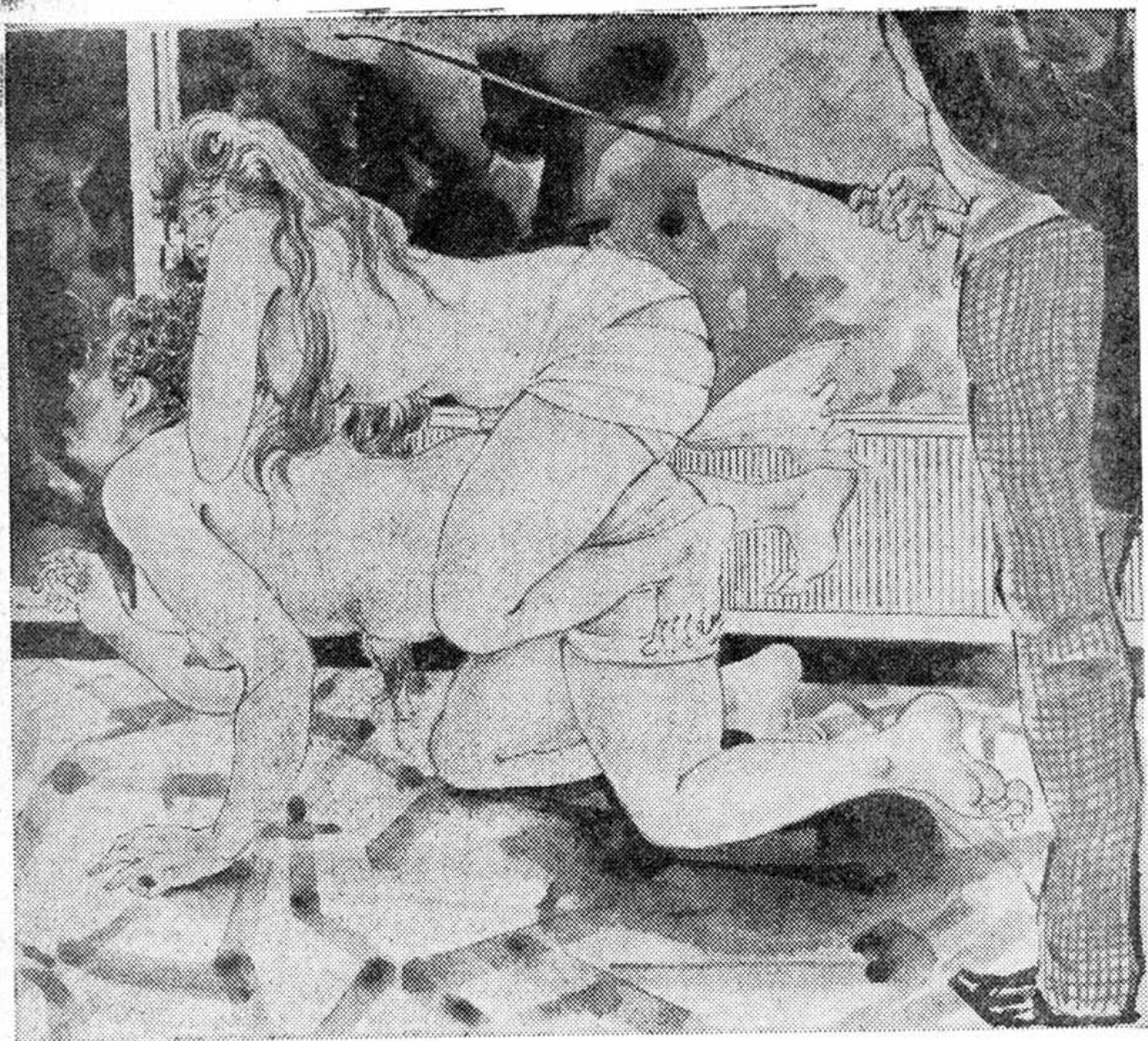
私は、ベチコートの下に手をやり、ぴりぴり痛むおしりにさわってみました。鞭のために腫れあがった筋は、すぐわかりました。ちよつとでもふれると、その痛みといったら、とびあがるほどでした。

また、ふたりの男が現われました。

「どうだい、鞭の味は？」

といいながら、私たちのベチコートを上にまくりあげ、ドロウスを足のしたまでひきさげました。

「もう、二、三十くれてやろうか——」



——娘たちがしばらく休息していると、ランドルフが、

「こんどは、おもしろい競馬をごらんにいれます」

と、披露しました。

どんなことかとお見せすると、五人のがつちりした女をえらびだし、その背中に、各自ひとりずつ、べつの女を背負って走るのでした。

背中にまたがった娘は、手で馬にされた女の首すじをつかみ、足は腰のまわりに巻きつけていました。

競争開始の合図と同時に、競馬がはじまりました。お客たちはこの勝負に多額の金を賭け、歓喜の声をはりあげて声援します。

五人の裸の女は、五人の裸女を背中にのせて、ランドルフの鞭に追われながら、廊下をけんめいに走りました。

馬になっている女の腿とおしりの筋肉は、はりきっておのき、騎手である女の両足は馬の腰をしめつけて落ちないようにしていました。女たちのおしりには、ランドルフのつめあとや、赤い鞭あとがいっぱいしみつき、無傷の女は、十人中、三人しかいませんでした。私は、このあられもない娘たちの競馬をとても見つづけることはできませんでした。

同姓愛酒場と

クラブの記事から



「週刊大衆」四月三十日号に「東京SEX秘密結社潜入記」なるタイトルで、五つの探訪記事が掲載されているが、そのうちに、レスビアンのパート、男色者のクラブのことが、記事されている。

総タイトルの感じから、デッチアゲ記事かナと思ったが、読んでみると、週刊誌特有のうわすべりの内容ながら、じっさいにその場所へでかけて、取材したものらしい。

レスビアン酒場のほうの探訪場所は、上野広小路にある「Y」という店である。

その記者（若い女性らしい）が店にはいつてみると、カウンターのなかに、いずれも白のYシャツに蝶タイ、グリーンのチョッキにスラックスという、男装の若い女が六人並んでいる。

女記者は、そのうちのソバカス

の目立つファニー・フェースの「トンちゃん」なる女から、ビールの酌をされながら、レスボスのあけすけな話などきかされて、顔を赤くしたり、めんくらったりする。また、他の女客——中年の人妻風や若いBG風と、その店のバーテン（男装）との熱い場面なども記されているが、その見方がいずれものはずれていることは、むりもあるまい。

次に、男色クラブのほうは、新宿の「T」なるクラブが、探訪の対象とされている。

探訪記者は、三流夕刊紙の三行広告で知ったそのクラブに、まず電話連絡すると、先方は新大久保駅近くの喫茶店に来るように、指定してきた。記者がそこで待っていると、白のセーターにほそみのズボンの少年がやってきて、記者をクラブの本拠に案内した。

その記者は、マスターらしい中年の男から、クラブの趣旨を説明された後、入会金三千円と紹介料二千円を払って、先刻の少年といっしょに近くの旅館に行く。そのみちみち少年にきいてみると、かれとアソぶには、旅館代のほかさらに三千円ほどを必要とするらしい。

男色あそびに一万円近い金がかかるとは、金くもって正気の沙汰とは思われない——とその記者は嘆じている。

この道のことを知らぬ者が、以上のふたつの記事を読むと、レスビアンや男色者というものが、皆こうした場所に入入りするように錯覚するであろう——そんな書き方である。

勿論、そうではない。そうしたところを知っている者は、また、知っていても、そこへ足をふみいれる勇気（？）と金のある者は、同性愛者のうちのきわめて少数なのである。（かびや・かずひこ）

ハガキをください

あまとりあ社が発行している、いろいろな本の、最新の「出版目録」をお送りいたします。



ハガキに「裏窓でみた。出版目録を送れ」と書いてお送りください。たつぷりとたのしめるパンフレットを、すぐにお送りいたします。（あなたのご住所、お名前をはっきりとお書きください）

大奥の怪

古正英生・絵



愛読者通信

★五月号サービスカードから★



▼ふと見つけた「裏窓」という雑誌。ページを開いてみて第一に、柚木あぐりさんの「にほんがみ」鬼頭曉氏の絵、この二つに魅せられて購入。愛読者の一人となることを決めた。今後の希望としては「美少女責め」を、そして、「和装責め」を（和装には是非猿ぐつわが必要）、以上を考慮下さい。

（広島県 R・S生）

▼もう十年？も以前からSの道におぼれている私です。貴誌も三年ほど昔から欠かさず買い続けています。最近の貴誌を見ますと、以前よりもレディ・ファーストになった様に思います。もっともモデルに恥ずかしさを与える、苦しみにもだえるような痛烈なフォトを期待して止みません。Sに上品さは無用！ よろしく……。

（京都府 Y・O）

▼「アラビアの城」のようなものを、毎月二十〜二十五ページの読み切りで連載してほしい。絵物語も毎月一つ以上。悪書追放など気にせず、良書の自負のもとにますます発展を。（愛媛県 T・T）

▼①江戸時代、吉原で、或は地方の遊女屋で行なわれた折檻の方法や遊女の虐げられた生活の模様等を時代考証的に、又は小説として掲載していただきたい。②江戸時代の無残絵の紹介などしたらどうか。③伊藤晴雨先生の秘画等を掲載出来ないか。④小生も六年来の貴誌の愛読者ですが、通信を出すのは初めてです。

（愛知県 A・N生）

▼①ノンフィクション物を取り入れられたし。②サド小説のバズイと沖渉二氏によるそのの作画。③ウィーン性問題研究所等のコレクションの取材。④クレームを二三。現在のフィクション小説は時代物以外は中学生向きだと思ふ、やめた方がよい。モデルを使つてのフォトも駄目、紙面がもつたない。絵はおおむね良いがくだらぬものもある。値段は五百円くらいまでOK。（大阪府 T・T）

▼すばらしい内容恐れいります。今年に入つてすでに六冊。希望と

いたしまして外国S小説、例えば「O嬢の歴史」とか「鞭打学校」の訳を連載して沖渉二画伯の筆をもつて、毎月の誌面を飾っていただけなら、きつと上の欄に①と書くことでしよう。

（東京 H・M生）

▼アメリカの公刊誌紹介は、一つのストーリーを絵物語、または読物として出しても構はないか？落合氏の絵で「裏窓風バルカンクリープ」を連載していただきたい。小品にみな逃避してグラフィア写真のカットの姿態の、ついぞ見られなくなつた近頃のなまぬるさは……（神奈川 S・O・S）

▼西洋のものはほどほどに、余り多くしないで下さい。「山参道」のジープン姿はどうもいただけませんでした。「山参道」とあるからにはそれにちなんだものの、例えば娘巡礼姿だったら……。

（姫路市 M・K生）

▼編集しにくいのはよくわかりますが、いずれも中途半端の感じ。どこか不自然です。でもむずかしいでしようね。写真、極めて芸術的で美し過ぎ、一個の物体としてしか観賞できないのは無念。体臭の感じられるような、生々とした表現はいけないうか。下着、セーラー服なども清潔なおい

ろけ。作品に大家のものを多く。

（神奈川 K・T）

▼「クライマックス場面集」のような読物や、体験をどしどし頼みます。全裸の縛り絵や、柚木あぐり、エセル・モニカ、南ゆり等のモデルを全裸縛りにして下さい。今月号の「山参道」は全くつまらない。（神戸市 H・K生）

▼もっと読物を多くして、昔のような読物本位（小説）なものにして欲しいと思う。「裏窓叢書」は五集まで全部持っているが、これに類した読物、特に時代物が欲しい。そして普通の小説が、危機に善玉が助けにくるのに反して、非情に、徹底的に残酷に、凄絶におかされて行く、その後の運命等を刻明に描いてほしい。

（東京 K・S）

▼最近、世間の状態が二十九年頃と同じ状態に入りかけています。単純な一読者としては、最近の本誌にはもの足らぬところもありますが、いちばん大切な事は、多数の読者よりの不満はおさえても、発行を続けられますように。

（京都市 T・M）

■この欄に掲載しました方に、手札型S写真一枚をお送りいたします。

■ 新着公開映画スチル集

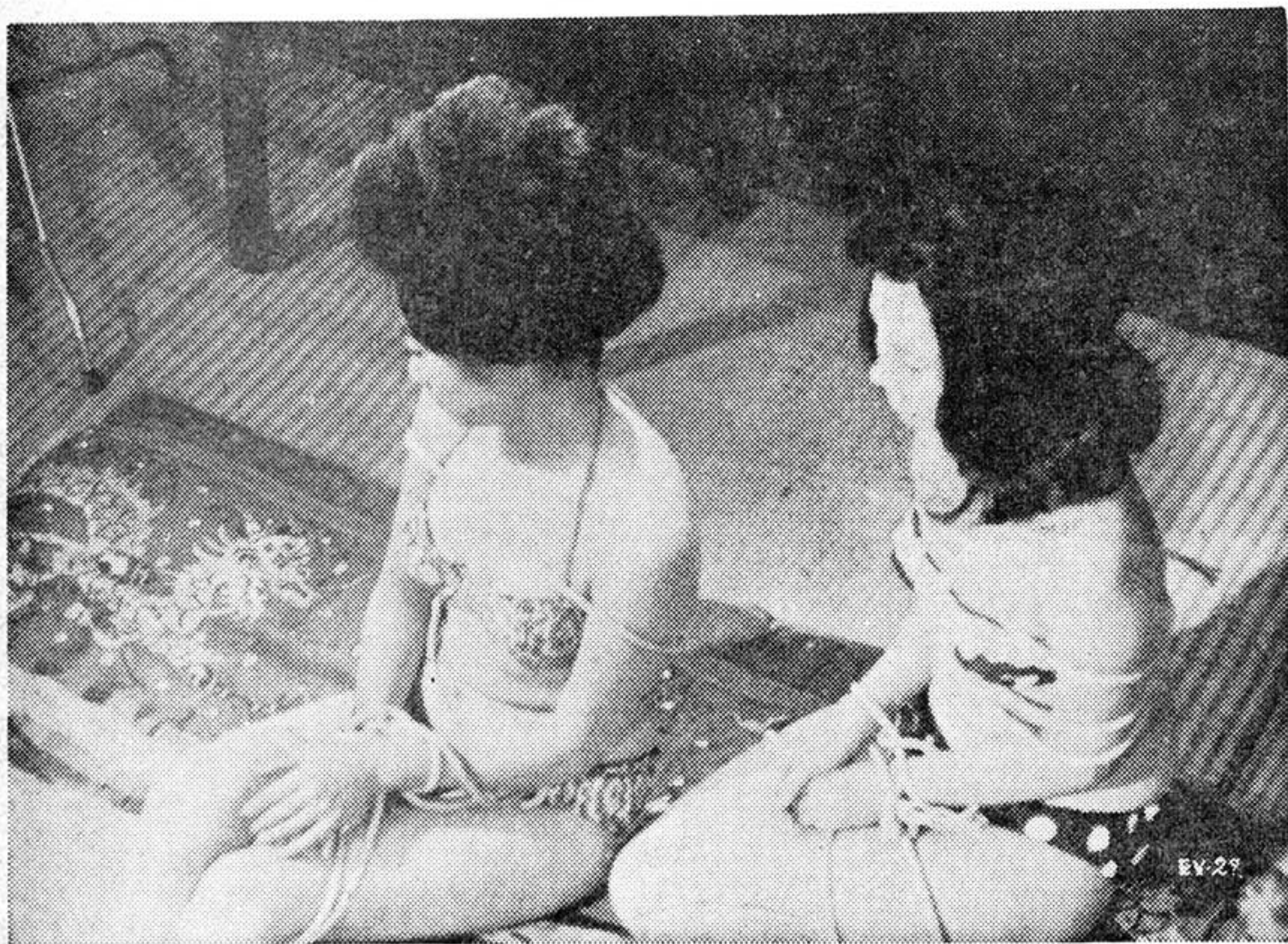
イタリア映画「世界の裏の裏」より

☆ ☆ ☆

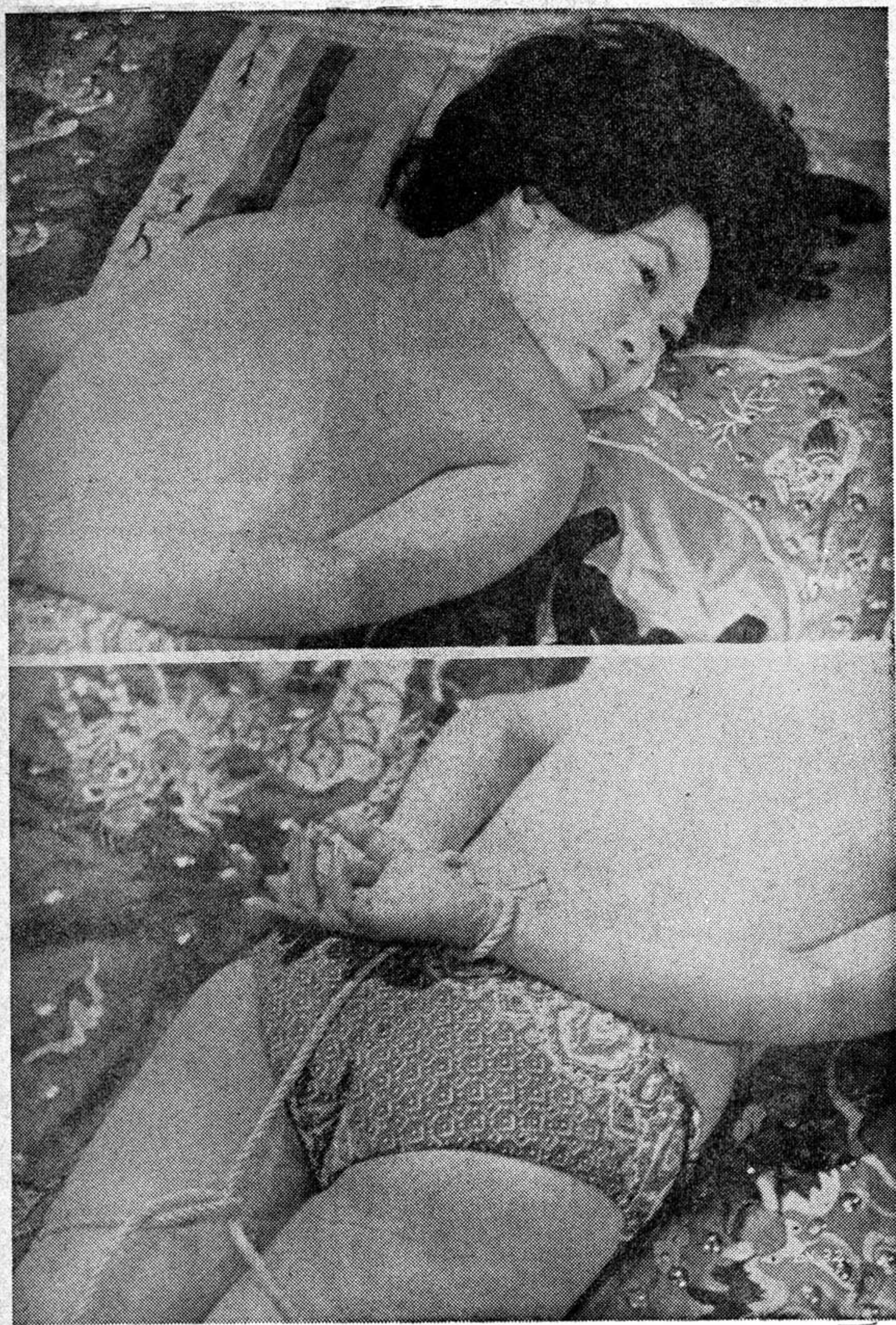
輸入映画の制限が解かれたために、おもしろそうな映画が、ぞくぞくと海外からやってくる。この「世界の裏の裏」も、そんな映画のひとつ。

縛られた女の出てくる舞台は、香港ということだが、その筋の通（つう）にいわせるとこれは、じつは日本で撮影されたものだという。

ともあれ、一見のねうちはあるようなシーンではある。









■イタリア映画「世界の裏の裏」より

これは、女の同性愛クラブにおける女性たちのごきげんな生態。シルクハットをかぶっているのが、男役専門の女性。





松尾悦三
習作
小品集





悦
三

二人はくんずほぐれつの争いを展開していた。すでに帯はとけ、衣裳は剥がされて、お互に真赤な長襦袢のまま転がっていった。

お縫にくらべて、やや体力に勝るお紋は、徐々に戦力を挽回して、遂には縄をお縫の手首にまきつけた。お縫はそうさせじと必死で抵抗する。

「おとなしく、妾の自由になるんだよっ」

お紋は、勝誇ったように因果を含めた。

「そ、そなたなどに、この身体をもてあそばれてたまりますか」

「ええいつ往生際のわるいこのあまつ、覚悟をおしっ」

美しい顔に似合わず、口汚なくののしったお紋は、お縫の身体に馬乗りとなって逆手をとった。

お縫は、そりかえって痛さをこらえる。

「さ、さあ、どうだ、これでもか！」

「ああ、ああ、ゆるしてー」

お縫は、苦痛のうめきをもらす。

お紋は、してやったりと、もういちど手首に縄をまきつけた。麻縄は情容赦もなく、ぐるぐるお縫の白い手にまきついた。

「ゆ、ゆるしてっ」

お紋は、お縫の上に跨がっているの、長襦袢の裾が割れて、まことに凄絶なものであ

る。

星名甚九郎は、しばしこの場面に魅せられたように、酒をのむのも忘れてふたりの決闘の結末を凝視している。

お紋は、お縫を完全に縛りあげると、手拭をだして猿轡を噛ませようとする。お縫はそれを知らずと身をのけぞらせながら、



「そればかりは許して下さいませ。かにして下さいませ！」

としきりに哀願するが、お紋は声を立てて嘲笑しながら、

「何をお言いだい。お前はもう妾のものなのだ。妾がどんなことをしたってかまわない

裏窓既刊号ご紹介

んだ。さあ、素直にしないと痛い目をみせるよ」

お紋は、ものすごい形相でお縫の美しい唇に手拭を持っていこうとする。お縫は、縛られて自由のきかない身をのけぞらせながら、逃れようとする。

「あつ、あれーっ」

「さあ、このあま！」

お縫は、噛まされまいとして、顔を左右に振って、しきりと避けていたが、もうこうなってはどうすることもできない。

「うっ、ううー」

と、憐れにも猿轡を嵌められてしまった。たかが知れた同性の弱力のために縛られ、猿轡まで嵌められて自由を失ったお縫の哀れな姿態を眺めていた甚九郎は、お縫のほうにより以上ほんとうの女を感じていた。

三十五年一月号・陶酔小説特集

久我風太郎・文 古正英生・絵

「受難桜」より

定価・百二十円 送料・十八円

裏窓既刊号ご紹介

小雪の胸を締めつけている縄は、豊かな肉づきの腕に痛いほど喰い入っている。浴衣の襟は大きくはだかり、ぬめ肌が乳色に光って主馬の咽喉をこくりと鳴らさせた。

主馬は盃を置き、小雪の傍らに進むと、肩に手をまわしてぐいと引き寄せた。

「そのきれいな顔をわしに見せるのだ」

小雪のおとがいを自分の方に向けさせると主馬はにやにやと笑った。この美しい生贄をどう弄ぼうかと、主馬は夢中である。

小雪は恐しさと嫌悪感に打ちひしがれて、しっかりと目を閉じていた。

がつくりと鬚は崩れて、襟足におくれ毛が乱れている。きゆうっとくびれた細い胴から豊満な腰への線が熟れきった女をむせ返るように現わしていた。

主馬は重ねられて、固く握られている白魚のような小雪の指を見据えて酒をふくんだ。「苦しいのか、小雪」

と、しわがれた声で主馬は言った。

「そなたは男嫌いが評判の芸者だな。美しい顔と軀を持ちながら、男が嫌いと言うわけはあるまい」

そこまで言った時、主馬は急に烈しく咳いた。盃を持った手がふるえて、酒がぼたぼたと膝の上にこぼれる。

咳がおさまると主馬は苛立たしく言った。

「わしがそなたに心を奪われて幾度となく座敷をかけても、そなたはいつも素っ気なくわ



しを扱いおったな。わしはそなたにそうされる毎に、ますます心が燃え上ったのだ。そなたの柔肌を思うさま責め抜くのがわしの念願だ。ようやくのことで手に入れたそなただ。今宵はたっぷり泣かせてくれるわ」
まるで、地獄の底から甦った亡者の声である。

小雪はぞっとして、畳からあげた顔を曇らせた。絶望の涙が玉となって瞳に浮かぶ。これまで芸者をしていて、男の嫌な口説に平気だった小雪も、屈辱と羞恥にまみれた苦しみを前にしては、所詮弱い女にすぎなかった。ふらりと立って近づく主馬を見上げて、軀を固くしながら後ずさる。

彼は身をかかめて、両掌に小雪の顔を包みこむと、頬に喰いこんでいる猿轡の結び目をゆっくりと解いた。

「泣きわめくそなたの声を聞こう。この屋敷の中ではいくら叫んでもかまわぬ」

猿轡が外されると、小雪は口中の唾液をじつとりと吸いこんだ濡れ手ぬぐいを、舌の先で押し出した。

息を弾ませて、小雪はむさぼるように空気を吸った。唇がわなわなとふるえている。

「お、お殿様、もう、お許し下さい」
悲鳴に近い小雪の声が座敷の中に空しく響いた。

三十五年三月号・伝奇小説特集

円城寺 達・文 喜多玲子・絵

「くれない草紙」より

定価・百二十円 送料・十八円

「刺青があるか、ないかを調べてやるぜ」

と、無頼の剣客は嗤いをふくんだ声で言った。多少は武術の心得もあるお小夜だったが、左近の無遠慮な臂力には敵う筈がない。切なげに息を弾ませながら、膝下に組み伏せられてしまった。

「離して、離して下さい」

悶えるお小夜に、お滝が手をのぼして帯をとき始める。しごきが畳に這う。

「それだけは、お許しを」

泣き声をまじえて、お小夜は必死に哀願した。

「裸にするだけだよ。安心おし」

びりっ、とお小夜の着物の裂ける音が起くる。どさりと彼女の帯は腰から離れてしまった。すかさず左近が長襦袢と着物の襟を鷲掴み、お滝が伊達巻を解くのももどかしく、一気に引き剥いだ。

「あれえ」

と、お小夜は絶え入るような声をあげた。眸のくらむような羞恥が、屈辱感を駈り立てながら、全身を熱く火照らせた。乙女のむっちりとした肉づいた白い裸身が、かすかな光をあびてくねっていた。湯文字の紅いに包まれた豊かな曲線が、左近の頭に血を逆流させた。

「ううっ、刺青がない」

左近の口から狼狽した呟きがもれた。お小夜の輝くばかりの上半身には、刺青どころか汚点一つないのである。

むろん、左近はお小夜の肌に彫られた刺青が、特殊な白粉彫りであるという事を知らないのだ。それに当然の事であろう。お小夜自身も知らないのである。



「お前さん、刺青は湯文字の下じゃないのかい」

「うむ、それしかない。調べる」

胸乳を両の掌で包み隠したお小夜は、兇暴な左近の手に対して抵抗した。湯文字を奪われては、お小夜の裸身を掩う何ものもなくな

裏窓既刊号ご紹介

るのだ。

「面倒だよ。お前さん、縛っちまおうよ」

お滝は素早く脱がしたお小夜の衣類の中から、細紐を取って左近に渡した。胸乳を隠していた両手は、無残にも後にねじあげられ、細紐が蛇のように動いてからみついた。

肩の付根が強く痛み、お小夜の懊悩を無視して、柔肌に喰いこみ乳房を締めつけた。まるで双つの丘は責められて、むっくりと恥ずかしげにふくれあがる。

畳に頬をこすりつけたお小夜の眼尻から、屈伏の涙が光りながら落ちていった。左近の指が最後の布片である湯文字にかかった！清らかな艶めかしさに満ちたお小夜の裸身は、模様のある細紐にくくりあげられ、悩乱の淵にうごめいている。

だが、その雪白の柔肌のどこにも……。

三十五年四月号・異色時代小説特集

丘野武也・文 喜多玲子・絵

「魔剣地獄」より

定価・百二十円 送料・十八円

水夫が四、五名、それに水夫長、あとから片目の船長までやってきた。

ことここに至っては、さすがの龍珍姐御も顔色を変えた。敵陣の真っ只中だ。取り巻くのは、みるからに荒くれの男どもだ。いくら大胆不敵の女海賊でも、こうなっては手も足も出ない。

「この船で密航しようとは、いい度胸だな」と、片目の鯨がいった。

「やい、女。てめえ何者だ。なんのためにこの船へ乗りこんだ。いつ、どこからもぐりこみやがったんだ！」

水夫長がどなった。

龍珍も白豚も無言だった。おれもわざと黙っていた。ここはおれの出る幕じゃない。ベツドの下にもぐりこんで、顔だけだして見物をきめこんだ。

「どうも怪しいアマだな。その目つきが気に入らねえ。野郎ども、この女を縛りあげちまえ！」

水夫長が部下に命令した。同時に数本のふとい腕が、われがちに龍珍につかみかかる。龍珍は壁際に後退し、腰を落として身がま

えた。唐手の構えだ。水夫の二人は首筋を打たれてひっくり返った。

が、結局は多数に無勢だった。左右から両腕をつかまれると、海賊の女首領も、一匹の小兎だった。

姐御は、はげしい勢いで床にねじ伏せられ



た。ビリビリとシナ服が裂けた。裂いているのは水夫の手、手、手だ。

一人がロープの束を持ってきた。潮風にさらされて固くなったやつだ。肩からむきだしにしている龍珍の白い腕が、たちまち背中になじあげられた。左右の腕が関節から折れまがった。ウウツと赤い唇がゆがんだ。

ロープが手首を縛り二の腕に喰いこみ、さらに胸までぐるぐる巻きた。むっくりと大きく盛りあがった龍珍の乳房が、ロープを噛んで半分にくびれた。

「縛ったら縄尻を壁の腕金具に通して、滑車で捲きあげろ！」

水夫長が残忍な命令をだした。手下どもはこの命令をわれがちの勢いで実行に移した。滑車が用意される。ロープが新しく追加される。馴れたものだ。責め道具はそろっている。

ギリギリギリギリギリ！……

滑車の捲きあがる音だ。龍珍を縛ったロープが、たちまち天井から、びいんと吊りさがつた。

「それひけ、やれひけ、えんやこら、どっこい！」

水夫たちの合唱だ。手を叩き、笑いはやしている。

「ぐうッ！」龍珍が声をあげた。

三十五年五月特大号・仁俠義賊特集

豊田一狼・文 根元 裕・絵

「東支那海の鼠」より

定価・百五十円 送料・十八円

深く暗い闇の底に、ぼつかりと黄色い灯が
浮きあがっていくように、芙蓉姫は意識を
戻してうすく瞼をひらいた。

ほんやりとほのあかい行燈に照らし出され
た座敷を、見まわした芙蓉姫は、そこにくり
拡げられている光景に眼を疑った。

地獄絵を思わせる雰囲気が、芙蓉姫の肌を
ぞくりとおののかせるのであった。

座敷の一隅にある柱に、水色縮緬の湯文字
一枚を残して、素っ裸に剝がされたお艶が後
手に縛りつけられているのである。

声を立てられては面倒とばかり、源四郎が
猿轡を噛ましたのであろう。お艶の頬には緋
のしごきがくびれこんでいた。

がつくりとうなだれたお艶は、死んだよう
に動かなかったが、縄に厳しく締めつけられ
て、むっくりとふくれあがった乳房の、紅い
乳首が濡れたように光って震えているのだ。
畳にはぶい光を放つ刀身が冷たく突き刺
してあった。

源四郎はどこからか持ち出した冷酒をあお
りながら、狂気じみた凄まじい視線を、輝く
ばかりに美しいお艶の裸身に這わせているの
であった。

「ほう、お氣がつかれましたかな」

と、源四郎は顔を向けて声をかけた。

芙蓉姫は双眸に怒りを滲ませて、源四郎を
疑視したまま、よろめきながら立ちあがる。
それを知ってか、お艶の睫毛がゆれた。

「源四郎、そなたはなんという破廉恥な所業
をするのです」

悲しむような呟きであった。

芙蓉姫はお艶の縄目を解こうとして走り寄



る。源四郎の手が素早く鞘を握むと、芙蓉姫
の両脚をはらっていた。

「あつ、なにをするっ」

倒れる芙蓉姫の細い肩を、源四郎はがっち
りと抱くと、ずるずると膝下に引きずった。

「姫、拙者の邪魔を致されるならば、あの女

裏窓既刊号ご紹介

のように、裸に引き剥いで縛りつけますぞ」
本当にやりかねない源四郎の口調である。
どきっとしたように色を失って芙蓉姫は、
体中から力を抜いて畳に手をつきあえいだ。

「ううっ」

と、猿轡の奥でお艶がうめいた。

源四郎は口にふくんだ酒を、畳に突き刺し
てある大刀の柄にぱつと吐きつけた。目釘を
湿めして、龍之進を待つばかりである。

雨が降りはじめたらしく、かすかな雨音が
閉めきった座敷の中まで聞こえてきた。

「雨か——」

と、源四郎は口の中で呟いた。

お千世を使いに出して一刻あまりになる。
もう果し状は龍之進の手に渡っているであろ
う。時刻も約束の亥の刻に間近い。源四郎は
蹣跚たる足取りで立ちあがった。

三十五年六月号・天変三日月秘文特集

万里小路 崑・文 中島喜美・絵

「天変三日月秘文」より

定価・百二十円 送料・十八円

古めかしい部屋だ。たいして大きくもない
ビルの一室といった感じだが、白い壁はしみ
だらけになっている。部屋じゅう、なんの飾
りつけもない。正面にデスクがひとつ、その
デスクに、眼鏡をかけた四十くらいの肥った
男がもたれている。

一瞬、あたしは息をのんだ。肥った男のせ
いではない。部屋のすみに、椅子が一脚あつ
て、その椅子に若い女がすわっているのを見
たからだ。

若い女は、体になにひとつつけていなかっ
た。両腕の椅子を背中に廻し、両足は、片方
つつ椅子の足に縛りつけられていた。あたし
たちのほうを見ようとせず、女はがっくり
頭をたれている。

一度はあわてて眼をそらしたが、まるで吸
いよせられるように、あたしの視線はすぐ女
に戻った。男たちの眼の前で、こんなふう
にまっぴだかにされてしまったら、どんな気持
がするだろう。心臓のテンポがますますスピ
ードを増し、さっきまで氷水みたいだった全
身の血が、今度は熱湯に変わってしまった。
泣いているのだろうか。女の肩が二度三度

こきざみにふるえた。

「簡単につかまりましたぜ。多分裏口から入
りやがるだろうと思ってはりこんでたら、様
子を見るつもりだったとみえてね、表通りを
すました顔でぶらついてやがるんですよ。な
んだかあっけないみたいでね」拳銃をつきつ



肥った男は、拳銃を持っていた男に視線を
移す。

「おい、テツオ、雑誌屋をつかまえてきた褒
美に、こっちのスケをひといいめさせてやる
よ。勝手に逃げ出したらどんな目に会わされ
るか、隣りの部屋でよくわからせてやれ」
テツオと呼ばれた男は、にやつと歯をみせ
る。

「ただし、目立つところに傷をつけるなよ。
わかってるだろうな。それに、こいつが逃げ
るのを手引きしたやつがいるはずなんだ。そ
いつの名を吐かせといってくれ。おれも少しや
ったんだが、強情に吐きやがらねえんだ」
「引き受けました。そういうことなら、マカ
シトキってとこですかね」

縛られた女のそばに近よると、テツオは椅
子ごとひきずりはじめた。

「もうよして。お願い。ねえ、もうよして……」

消えそうな声で、若い女が言った。

三十五年七月号・あぶちっく小説特集

橘 新太郎・文 宮園 亘・絵

「木曜日に逢った女」より

定価・百二十円 送料・十八円

裏窓既刊号ご紹介

老 若 抄

かびや・かずひこ

東 桂 史・絵

主客とも老残―夏

谷中天王寺の夕の鐘が鳴っている。

その門前町の八軒長屋の入り口に、ひとりの侍がはいって来た。

白の蚊がすりの着流し、雪駄（せった）ばきの浪人風である。

顔や首すじのしわのようすは、六十がらみと語っているが、能面のような端正な容貌は、それよりも十年くらいは若くみせている。

しかもひたいは角（かど）をいれていな

い元服していない、生まれつきのままの丸びたいである。

長屋のなかほどの一軒の家の前に、老侍は足をとめた。

出入り口に明り障子、すだれがかかって、その下方に、

「おん痔のくすりあり、万によし」と記された板きれが吊るしてある。

老侍は明り障子に手をかけた。障子はぎしっと軌んだが、開かない。老侍はそのまま、裏手に廻った。

小さな庭にたけのひくい垣。その竹垣のひとところに、黄赤色の花を咲かせたのう

ぜんかつらがからみついている。庭隅の夏菊の白が清々しい。

老侍は縁から座敷に下がった。

座敷のまんなかに、下布のきものを着た七十がらみの老人がうたた寝をしている。やすらかな寝顔である。

老侍はかすかにほほえんだ。と見るや、彼の手が刀の束にかかった。すらりっと刀身が抜き放たれた。そのとき、

「またそのような戯れを……そなたの来たのは、とうに存じておる」

寝ている老人の口から、言葉が洩れた。

いつのまにか、うつすらと眼をあいている。「昨日はどうされた？ いちども見えなかったが」

おだやかな口調で言いながら、老人は起きあがると、枕もとのきせるでたばこ盆をひきよせた。

「出かけようとした矢先きに、珍客が訪れたものですから……」

丸びたいの老侍は刀をおさめて、その前に端座した。

「珍客とは？」

「出仕していた当時の同僚、玉島主水です」「主水か……会ったことはないが、そなた

からおりおり噂にきいておる。いろいろめずらしい話も出たであろう？」

「ございました。……なによりも、彼からわたくしたちのことをからかわれました」

「おーお……」

「衆道が君たちのように、長くつづくものとは思わなかった、たいしたものだと彼は言うのです」

「では、からかったのではあるまい。ほめたのだろうか……」

「さあ……」

「いずれにしても、世の人びとにはふしぎらしいナ、われわれのように数十年もつづくのは。……だが、たがいに色欲もうすらいだいまでは、衆道の仲というよりも、茶のみ友達なのだが……」

言いかけて、老人は気がついたように、「主馬どの、そこでその茶を一杯、所望したいものだ」

丸びたいの老侍は、あいての言葉の「茶のみ友だち……」うんぬんのところで、なにやら異議を申したてたいような、不服そうな表情を示したが、思いなおしたふうで立ちあがった。

土瓶に湯を沸かし、そのあとに、土釜に



水をみたして、火にかけた。

茶を喫んでいるうちに、土釜の湯が沸々とたぎった。

老侍はその湯をたらいにあけると、水を増した後、老人をかえりみた。

「義左衛門さま、暗くならぬうちに行水をなされ」

「ありがたい」

こっくりとうなずいて、老人は着物をぬぎすて、たらいのなかに身を屈めた。

皮膚につやこそないが、年齢にしてはひきしまった肉付きである。老侍はそのうし

ろに廻って、背を流しはじめた。

流しながら、彼はこわこわと老人の前をのぞきこむ。

——ない……まだ白毛がでていない……ほっとする表情。これが彼のいつものなわらしなのだ。

老人の行水がすむと、次ぎは老侍がたらいのなかに、そして老人がその背後に廻る。老人の眼は、あいての現実の身体のうちにはない。あいての膚を、その少年時のままと見ている。いや少年時の膚そのものと見ているのだ。……

若衆の馬上ゆたかに

七十がらみの老人がこの家のあるじで、田川義左衛門、丸びたいの老侍は客で、奥川主馬と言う。

義左衛門がはじめて主馬を知ったのは、ふたりの会話にもあったように、もう五十年ちかくもむかしになる。

二十二歳であつた。伊予の松山で六百石を食む侍の次男であるが、宮仕えを嫌って、單身江戸に下り、虎の御門近くに長屋住まい、大橋流の売り手本(注―実用向きの誓)など書いて、漂々と日を送っていた。

その年の春のある日のこと、いまが盛り……と付近の人の噂する、渋谷の里の金王桜を見んものと、義左衛門は朝早くに長屋を出て、目黒の不動にさしかかった。

と、そのこの滝のほとりに佇んでいるひとりの少年の姿が、彼の目にはいった。

年のころ十五か六、あさがお染めの大振袖に、ぬきさめ(鮫)の大小、玉縁笠(たまぶちがさ)の下から、すずしげな眼がのぞいている。左の手にやまぶきの花をかざしながら、そのとりまわしがなんとも艶に

うつくしい。

――ぼたん花の化身のようだ。

義左衛門は、夢みるように、少年の姿に見惚けた。

ぼたんの化身は、まもなく滝をうしろにして、歩きだした。義左衛門ははっとわれにかえる。

少年の両脇に目付けらしい坊主頭の男が二人、うしろには数名の若党、馬もところどころついていく。

――尋常のものではない。大名の秘蔵のものかもしれぬ。

と義左衛門は推量する。

が、彼にとって、その若衆が大名の寵童であろうと、將軍のもちものであろうと、そんなことは問題の外にあつた。

魅いられたようにふらふらと、そのあとについた。

街道にでると、若衆はかるやかに身体をひるがえして、馬に跨った。

義左衛門は神仏でも仰ぐように、さわやかな若衆の馬乗姿をふりあおぐ。

馬までが、若衆を背にすると、俄かに颯爽とひきたつようだ。

二人の坊主は酒きげんらしく、小唄かな

にかをうたいながら歩いていく。

ほどなく、若衆の一行は、小六の宮(注―氷川神社)の辺で、桐の紋章しめした大名屋敷の門内へ消えた。

義左衛門は辻番にちかずいた。

「いまのお若衆は、どなたさまかな?」

訊くと、辻番はにやっとわらって、

「あのお方は、このご家中でも一番と評判の、奥川主馬さまとおっしゃいます」

「そうか……ありがとうございます」

義左衛門はそのまま、金王桜も見ずに、家に帰った。

彼は骨の髄まで、奥川主馬に魅惑されていた。といって、その日ぐらしの浪人の身の、あいてが大名の寵愛の小姓とあつては、所詮は高嶺の花にひとしい。

――せめてもういちど、顔だけでも見たい。見ねばならぬ。

義左衛門は翌る日も朝早く、長屋を出て、桐の紋の屋敷の門先きに佇った。

が、空腹をこらえて、日の暮れるまでたちつくしたが、主馬の影すらも見る事ができなかった。

その翌日もかけたが、結果はやはりおなじであつた。

が、義左衛門は諦めなかった。

——どうしても顔を見られなければ、文をよせて、思慕の情を訴えようか……いや、それはとうてい不可能だ。やはり会うまで……顔を見るまで待つよりほかない。

彼は毎日、桐のご門先きへ通った。

対象（あいて）の姿を見ないことで、義左衛門は、対象をいっそう美しく、心のなかで飾りたてた。彼の胸うちの主馬は、現実の主馬よりもすぐれていたかもしれないかった。

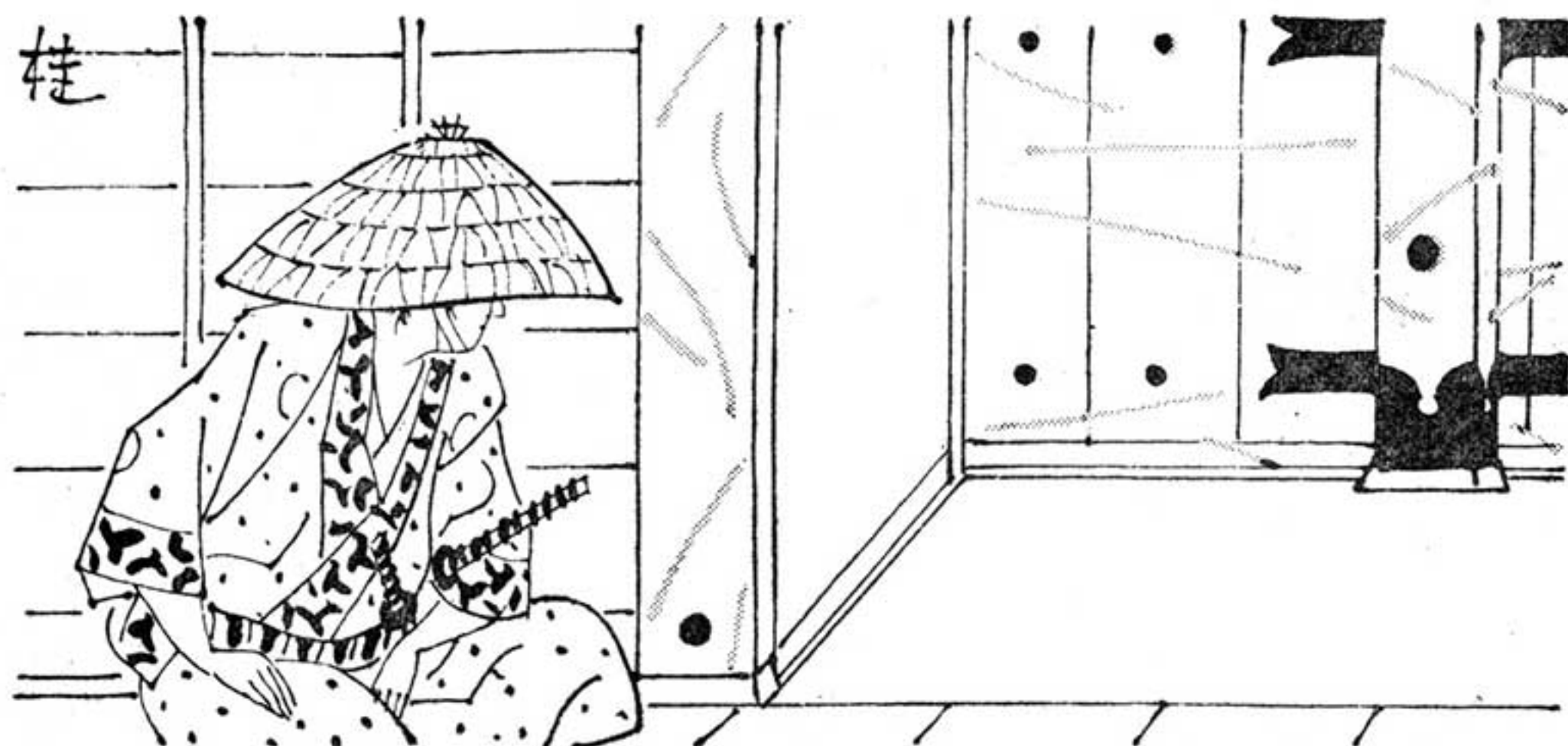
主馬に集中された義左衛門の恋情は、日に日に募っていくようであった。

こうして三月末から十月なかばまで通いつめたが、その間いちども、主馬の姿を見ることはできなかった。

執念の鬼の旅路

主馬が仕える大名が、この二十五日に江戸を立つことにきまった——ということを知った義左衛門が耳に聞いたのは、十月二十日のことだった。

——よし、どこまでもついてゆくぞ。
もはや執念の鬼である。さっそく、家財



道具を売り払い、諸払いもすませ、下男にも暇をだした後、二十五日の朝、その大名の行列のあとにつきしたがった。

その日は金川泊り、次ぎの日は大磯に暮れた。

と、心なき身にも哀れはしられけりうんぬんの西行の和歌で知られた鳴立沢（しぎたつさわ）に来たとき、行列のなかのひとりの駕籠の戸が開いて、前髪立ちの顔がのぞき、浜のほうを眺めている。

はッ……と義左衛門は胸を躍らせた。それはまぎれもなく、奥川主馬の顔である。義左衛門はそこに眼を据えたまま、はなさない。と、主馬は首をひきこめながら、うしろのほうをふりむいた。瞬間、義左衛門の目と目が合った。

——どこかで見覚えのある顔だが……

主馬のほうも、そのような目色で、義左衛門を見ていた。

まもなく、一行が駿河の宇津の山の切り通しにさしかかったときであった。主馬の乗った駕籠の戸がまた開いて、顔が覗いた。義左衛門は袖摺岩（そですりいわ）という岩のかげに身をかくしながら、じーっと主馬のほうを見ている。

主馬のほうも、すぐそれに気づいたようである。四つの眼が、まばたきもせず見合った。

——そうだ、いつぞや目黒の不動の滝でみかけたお侍……

このときようやく、主馬はそのことを思いだすとともに、

——あのお方は自分に執心している。

と読んだという。

やがて一行は泊りをかさねて、出雲に入国した。

義左衛門はふところに豊かな路銀があるうわけはなく、遊んでもおられぬままに、この地で馴れぬ百姓仕事の手伝いなどしながら、主馬のようすを窺った。

そしてその年も暮れて、翌年の四月はじめ、この出雲の国守がまた参観交代で、江戸へむかって立つと、義左衛門もまた、そのあとについて行った。

こうして義左衛門は、大名の一行主馬の加わる大名の一行とともに、江戸と出雲の間を往復をかさねながら、主馬の顔を垣間見ることを歓びとしていた。

目黒ではじめて主馬を見てから、三年目の秋、主馬らの一行について出雲に着いた

とき、義左衛門は足を痛めていた。

その足をひきずって宿へと歩きながら、義左衛門はいまさらながらわが身をかえりみた。

主馬のあとを追うにいそがしく、身のまわりを放ったままなので、いつのまにか、きものの袖口はほころび、襟からは綿がはみでている。腰の物も脇差ばかりだ。姿形もやつれきっていることが、よくわかる。

——このようになりはててしまったのは、もうあの方に見られたくないと思った。

血は飛ばぬ刃引きの刀

主馬は夜詰めをおわって、時雨のふるなかをおのが屋敷の前に戻ってきた。

門前ちかくに、ひとりの非人が藁(みの)笠に雨をよけながら、うずくまっている。数日前から、毎夜ここに出はじめていることじきだ。

その前を通りすぎながら、主馬はなにげなく、非人のほうをふりかえった。と、そつと彼を窺うようにしていた非人が、あわてたふうで面を伏せた。

——おや？

と主馬は思った。

——非人の身の、なんでこのわたしに顔をかくすことがあるのだろう……

瞬間、主馬の脳裏に、ここ三年ものあいだ、いつも自分の行くあとをつけている侍のことが、掠めた。

——こんど出雲に戻ってからは、ずっと姿をみかけない侍……

——もしや？

ひとりうなずきながら、家にはいると、主馬はすぐ、若党の九右衛門をおのが部屋に呼んで、

「そなたにぜひ頼みがある」

と言った。

「なんでござりましょう？」

「じつは……わしは侍の家に生まれながら、まだ人を斬ったことがない。これはいよいよというさいに、ここもとないうえ、ぜひ今夜のうちに試し斬りさせてくれぬか」

「それはいけません」

と九右衛門は首をよこに振った。

「いわれもありませぬのに、人を斬るなどということとは、大旦那さまにお叱りをうけます。そのうちにおりもありましょうから、

きようはおやめなさいまし」

「いや、理由もないのに人を斬ろうというのではない。おまえも存じておろう、ちかごろ向い屋敷の大溝（おおどぶ）のところに、世にあってもかいがないようなこじきがある。あれに命をくれるかどうか、きいてきてほしいのだ。命をもらうかわりに、死ぬ前にどんな願いでもかなえてやると申して……」

「さあ、それはむだでございましょうナ。ああした非人でも、やはり命は惜しみましようから」

「そう言わずに、ぜひ頼んできてくれ」

心根はやさしいが、いったんこうと言いだしたらきかぬ主馬の性格は、長年そばに仕えて、よく知っている九右衛門、しかたなく承諾して、屋敷の門外にでた。

見ると、非人はたちあがって、帰りかけるようすだ。

「もし……おこもさん」

と九右衛門は声をかけて、非人にちかずくと、

「おまえさんにむりな無心があるのだから……」

「はい……？」



「この屋敷の若旦那のお望みなのだが、なんでも二、三日は、願いのままに暮らせせて、そのあとで試し斬りになってくれるなら、あとは厚く叩いてくださるとのこと……その斬られ役が、おまえさんに白羽の矢があたったわけだ。どうだ？ きいてくれるか、くれないか」

とんでもない……と頭からことわられるのをかくごで、主馬の言うことを伝えた。

「お望みどおりになりました」

非人は二つ返事で承諾した。

「えッ、ではかなえてあげてくれるか」

「よろこんで……と申しそえましょう。それというのは、こうしておりましても、とても春を待たない身の、寒夜をしのぐのにもたえだえてございます。そのようなお方の手にかかって、命をおわることは、こちらからこそお願いいたしたいくらい。二、三日あとといわず、さっそく今夜のうちに斬ってくださいるよう……」

「そうか……そうか……」

あまりの意外に、九右衛門はいささかめんくらしいながら、非人を屋敷へ連れてきた。さっそく、このしだいを主馬に伝えたらう

え、非人行水をさせる、着物を貸してき
がえさせる、仲間（ちゅうげん）部屋へ入
れて、酒さかなの馳走をするなどした後、
夜更けを待つて、広庭へ引きだした。

主馬は縁さきにて、非人に頭を下げさ
せた。じつとその顔をのぞいた。

——うん、まさしく自分の推量どおり、
参観の途次、いくどか顔を見合つたことの
あるお方……。

うなずきながら、袴をかいどつて、庭に
とびおりた。

「命をくれるに、いつわりないか」

「どうかご存分に……」

男は泰然として、首をさしのべる。

その首へ抜き打ちに斬りつけた。が、血
潮はとばなかった。まえもつて、脇差に刃
引きをしておいたのである。

主馬は周りの者を残らず、中門の外に追
いだすと、男を書院へ同道した。

「長いあいだの、あなたさまの浅からぬご
執心、とくにお見受けしておりました。主
馬、うれしく存じます。ぜひご姓名をお教
えくだされ」

と主馬は言った。

「田川義左衛門……と申します」

歓喜のきわみのためか、声も震えがちの
答であつた。

義左衛門はふところに手をいれると、肌
につけた竹の皮包みを取りだした。そのな
かから柿地の守り袋、さらに袋の緒を解く
と、なにやらびっしりと記されている巻き
紙が現われた。

「これをお読みくだされ」
とさしだした。

主馬は巻き紙を受けとつて、披いた。薄
紙を幾枚も連いだものに、目黒ではじめて
主馬をみそめたときのことからの思いのた
けが、こまごまと書いてある。

四、五枚も読みかねて、主馬は巻き返し
た。

その夜は義左衛門を、若党九右衛門に預
け、自分は寝もやらず、白々明けを待つて、
主馬は登城した。

すぐに藩主の前に出た。

「一刻もはやく言下いたしたいことがござ
いまして、早くに出仕いたしました」

「申せ」

「わたくし、ある人に思いこまれ、その人
を念者にもたなくては、若道の義理が立た
ぬことになりました。しかし勝手にいたし

ましては、御掟にそむき、また長年のご厚
恩を忘れることになりました。とかくはど
うぞお手討ちになされてくださいませ」

「仔細を申せ」

藩主は眉ひとつ動かさない。

主馬は、義左衛門から預つた巻き紙の書
を、無言でさしだした。

藩主はそれを半刻あまりもかかつて、読
みおわると、

「まず帰っているがよい、詮議をした後に
申し渡そう」

「それはなりません。わたくしを私宅にお
帰しあそばしては、このまま不義をいたす
ことになりますゆえ、ここで切腹をお許し
くださるよう」

かさねて訴えて、いつかな動かない。否
か、応か、主馬は早い裁決がほしいのだ。

「ふーん……」

藩主はちよつと思案のていである。まも
なく、大目付を呼んで、事のしだいをきか
せたうえ、主馬へ閉門を申し渡した。

主馬は屋敷に戻ると、その日から義左衛
門に衣類をあらためさせ、大小を渡し、自
分も身辺をかたずけて、しずかに上意を待
つようである。

義左衛門との恋に命を賭けている身の藩主の手打ちもかくこのうえである。が、一方また、心中ひそかに勝算——恋の勝算もあった。それから二十日目に、閉門をゆるされた。そのうゑに丸袖の時服五重、金子三十両を頂戴、

「浪人は主馬がつきそつて、江戸へ送り返せ」

という上意を伝えて来た。

他方の予測が当たつたのだ。

翌日、主馬は明けるのを待たずに、義左衛門と同道して、出雲を出立した。見送りの者たちは兵庫から国へ返し、自分たち二人は江戸へ下つた。

以来、谷中と上野山下と、住居はややはなればなれに持ちはしても、二人は日ごとに往来して、交情を温めあつて来たのである。

夕立雨に燃える情の火

……行水をおわつた。

半白の髪に櫛をあてている主馬のかたわらに坐つて、義左衛門は、彼の横髪に花の露（注——髪油の名称）を注いでいる。



十六歳・二十二歳の年ごろから、数十年ほどもつづけて来ている慣わしなので、他目にはともかく、ふたりには、すこしも不自然ではなく、気もさしはしない。

これがすむと、夕食のしたくだ。これはいいてい主馬の役である。

若いころは、義左衛門が主馬にたいして、すべて奉仕する——よろこびをもつて奉仕するかたちであつたが、年をとるとともに、いつとなくその大半が逆となつて、ふつう女のする用は、主馬がうけもつようになつていた。

行燈にあかりがともされ、その灯のもとに、ふたりは膳をかこんだ。

膳の下に、銚子が載っている。

晩酌一、二本の費用は、たがいにゆつたりと稼げる。義左衛門のほうは、自分の創製の万の痔に効くと称するくすり、なかなか売れるし、大橋流の売り手本も、老筆ながらたまには売れる。主馬はまた主馬で、寺小屋というほどではないが、自分の家の近くの子どもたちに、読みかきを教えているのだ。

「昨夜、左隣りの夫婦が、大げんかをいたしてナ。ドタバタとえらい騒ぎだった」

と義左衛門は左手に盃を。右手にゆっくりとうちわをつかっている。

「とめにはいりましたか」

「いいや、とめにゆかぬ。かえって壁ごしに煽りたててやった。亭主！ そんな女房はたたきころしてしまへ。そうして小草履取りでもおくがよい、と呶鳴ってナ」

「女房は怒りましたでしよう？」

「さよう、おかげできようは、わしに口ひとつきかぬ」

義左衛門も主馬も、この年まで女を知らない。知らぬから、女のきもちをわからない、とも言えるようだ。

ふたりがいままで女を知らなかったのは「わしは女は嫌いだ」とむりに意地をはりあっていたためのようにも、たがいに内心思っている。そしてそのことが——女色を避けていたことが、損をしたような気のするときもあった。

銚子を三本あけて、食事にかかったときである。とつぜん、おもてを揺がす風の音、つづいてすさまじい雷鳴を伴って、夕立がおちて来た。ふたりはおもわず箸を休めて、すだれごしに暗い戸外へ目をやった。

地を叩きつけるような降りである。沛然と降る雨の水は、といを溢れだして流れおち、家のなかまで飛沫をとばしてくる。

ガヤガヤと声がして、二、三人の通行人が、義左衛門の家の軒先きへかけこんで来た。すだれの下方に、高々とたくしあげられた緋や淡紅色（ときいろ）のゆもじが、そして白い脚が、にゆうとした感じで現われた。義左衛門も主馬も、ドキリとした顔で、目をそむけた。

どうやら、不忍池畔あたりの出逢い茶屋（注—逢いびき宿）の女中でもあるらしく、はすっぱな調子で、客のうわさらしい話を喋りあっている。このとき、二、三条の稲妻が、いそがしく宙を走った。

「おお、こわッ！」

女たちの脚が団まりあった。

「こんなときに知りあいの家でもあればねえ」

「そうだよ……上りこんで、お茶のひとつも所望してサ、傘を借りて帰れるのに……」
「しだいによって、夕飯でも出してくれれば、ひとかたきよけいに喰べられるし……」
一人がすだれをすこしあけて、食事の中

義左衛門の家のなかを、覗こうとしているようである。

——ずうずうしい女どもだ。

さきほどから、女たちの会話の内容に、眉をひそめていた義左衛門は、この無遠慮さに堪らなくなった。ついとたちあがると、土間の隅にたてかけた竹ボーキを手に、軒先きにとびだした。

「どけ！ どけ！……きたない、きたない……」

ホーキの先きを女たちにかまえながら、眼をむいた。

「まあ、ひどい！」

「おそろしいおじいさんだこと」

めいめい捨てぜりふをはきながら、女たちは急いで、暗い雨のなかへ逃げていく。

「女はきたない……きたない……」

又もそう呟きながら、義左衛門は、家の前いっぱいに塩をまきちらしい。

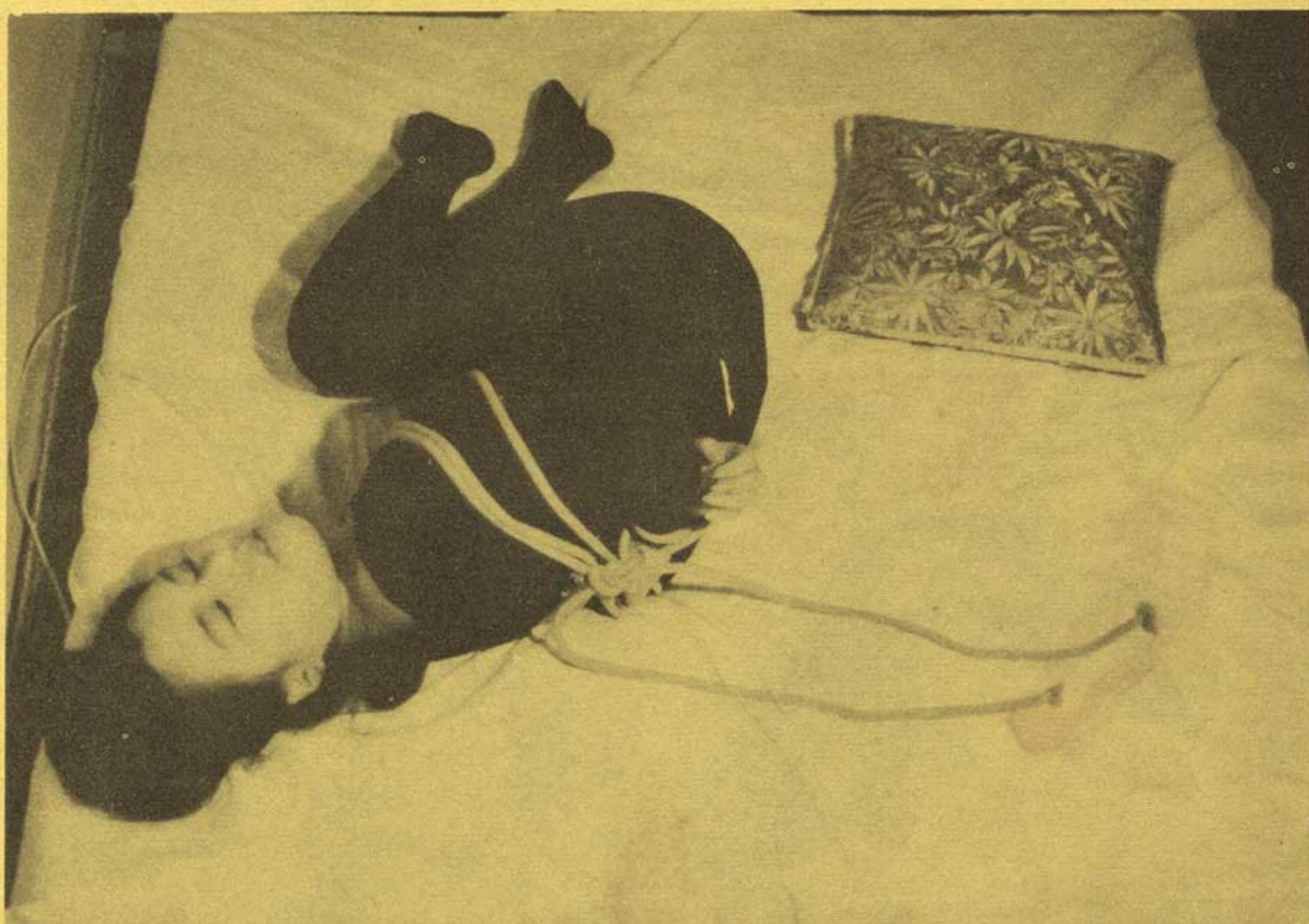
義左衛門はかっかっといきりたっていた。その怒りの念と錯綜するかのよう、ちかごろになく、はげしい色情のほむらが、からだじゅうをむらむらと燃えあがってくるのを覚えていた。

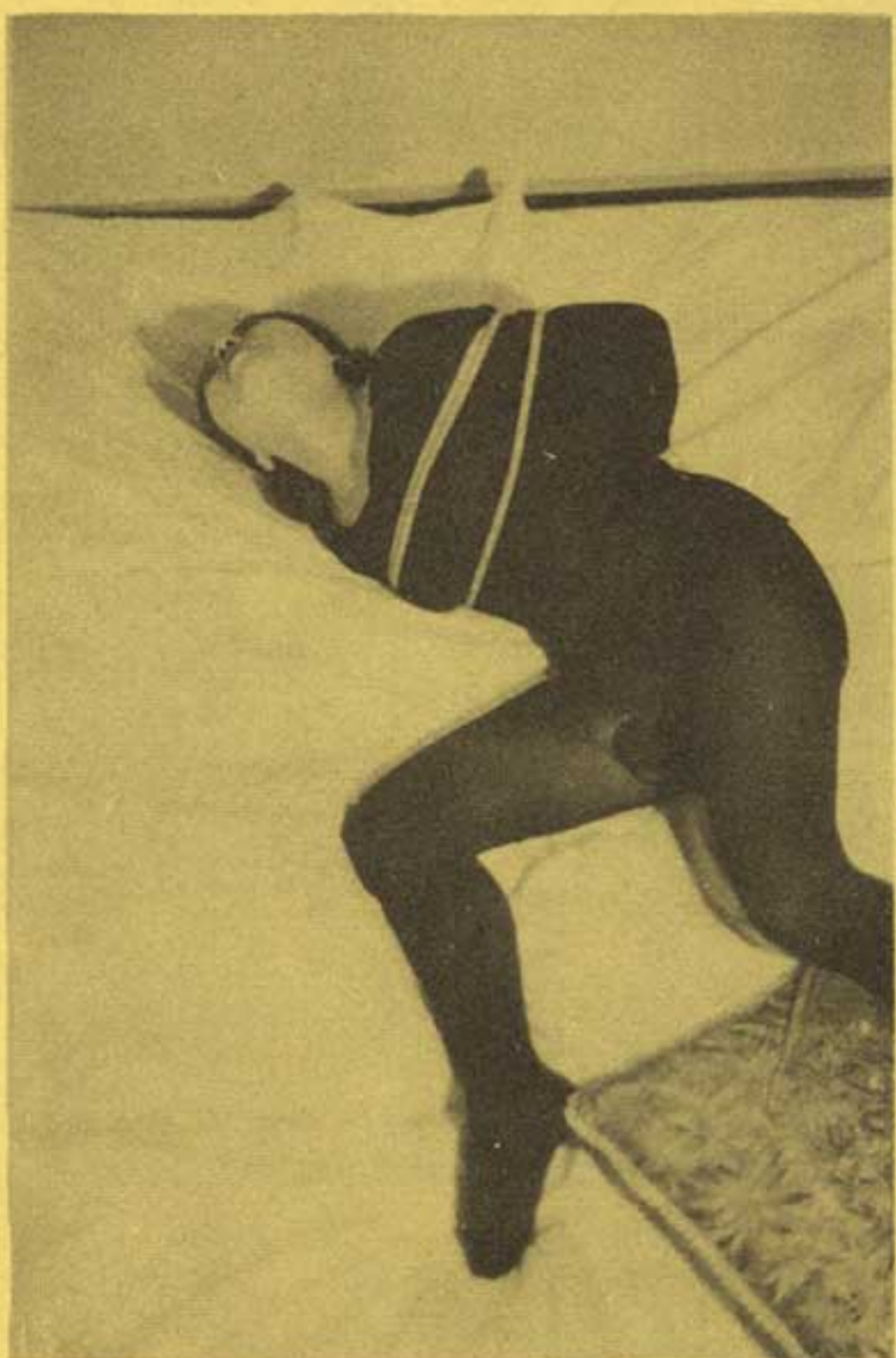
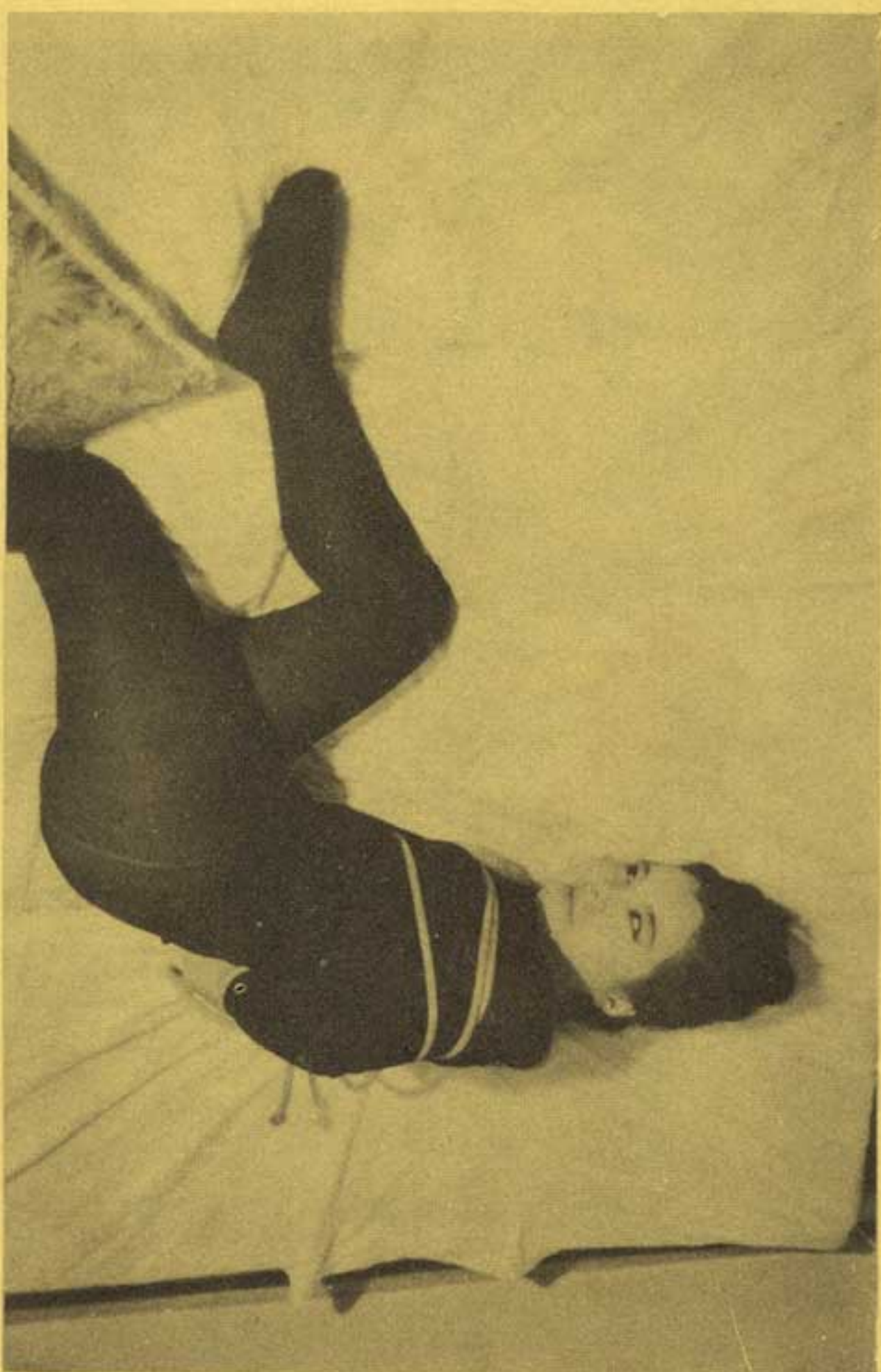
黒い妖精①



モデル・柚木あぐり
カメラ・猪島昌也







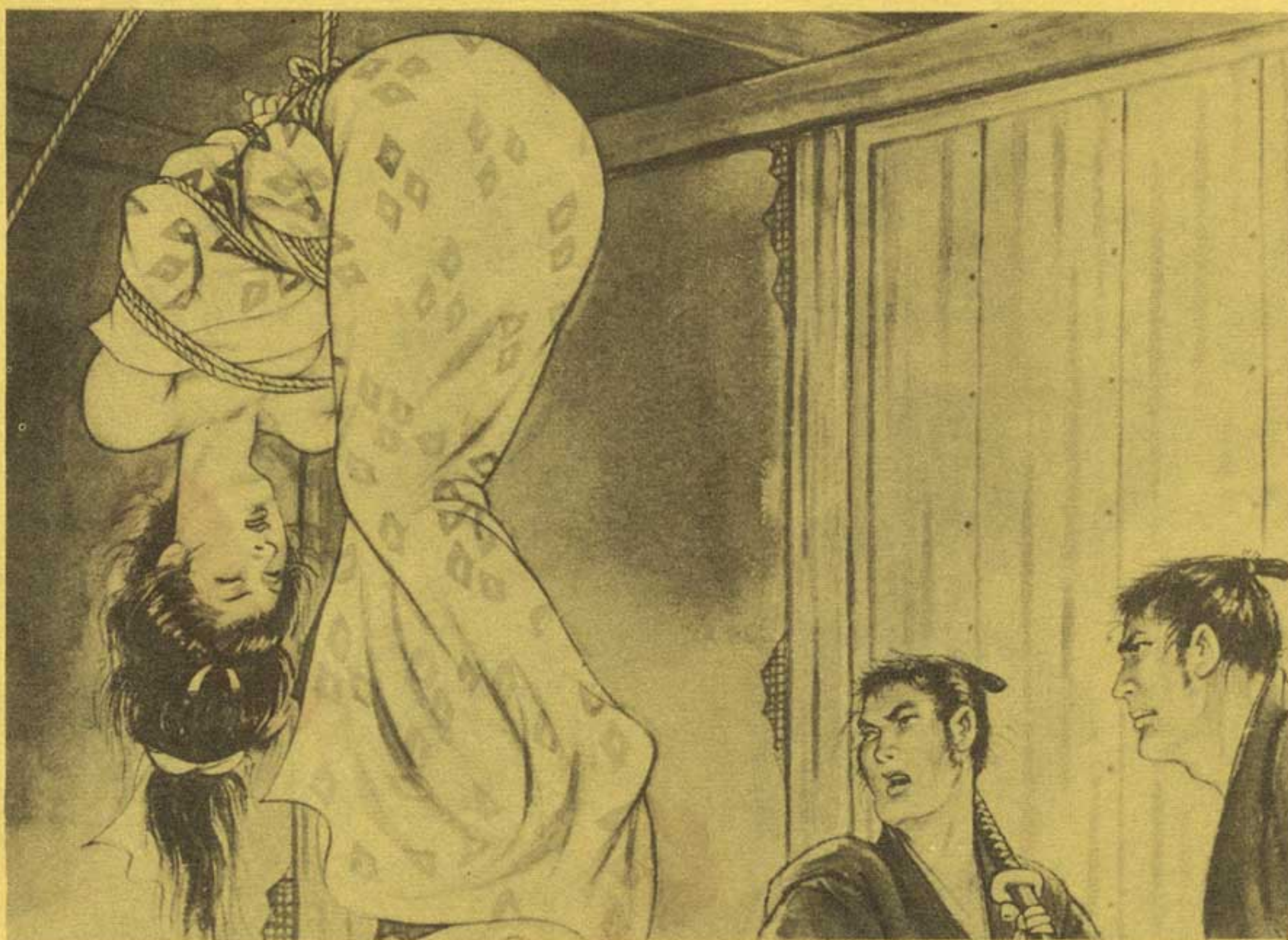








人浪悪



鎧と女



モデル・小笠原純子
カメラ・吉田 久













アメリカの公刊誌・ご紹介

NAZI YOUTH GANGS
OF ARGENTINA

THE LAYMAN'S
GUIDE TO WOMEN

IREAL

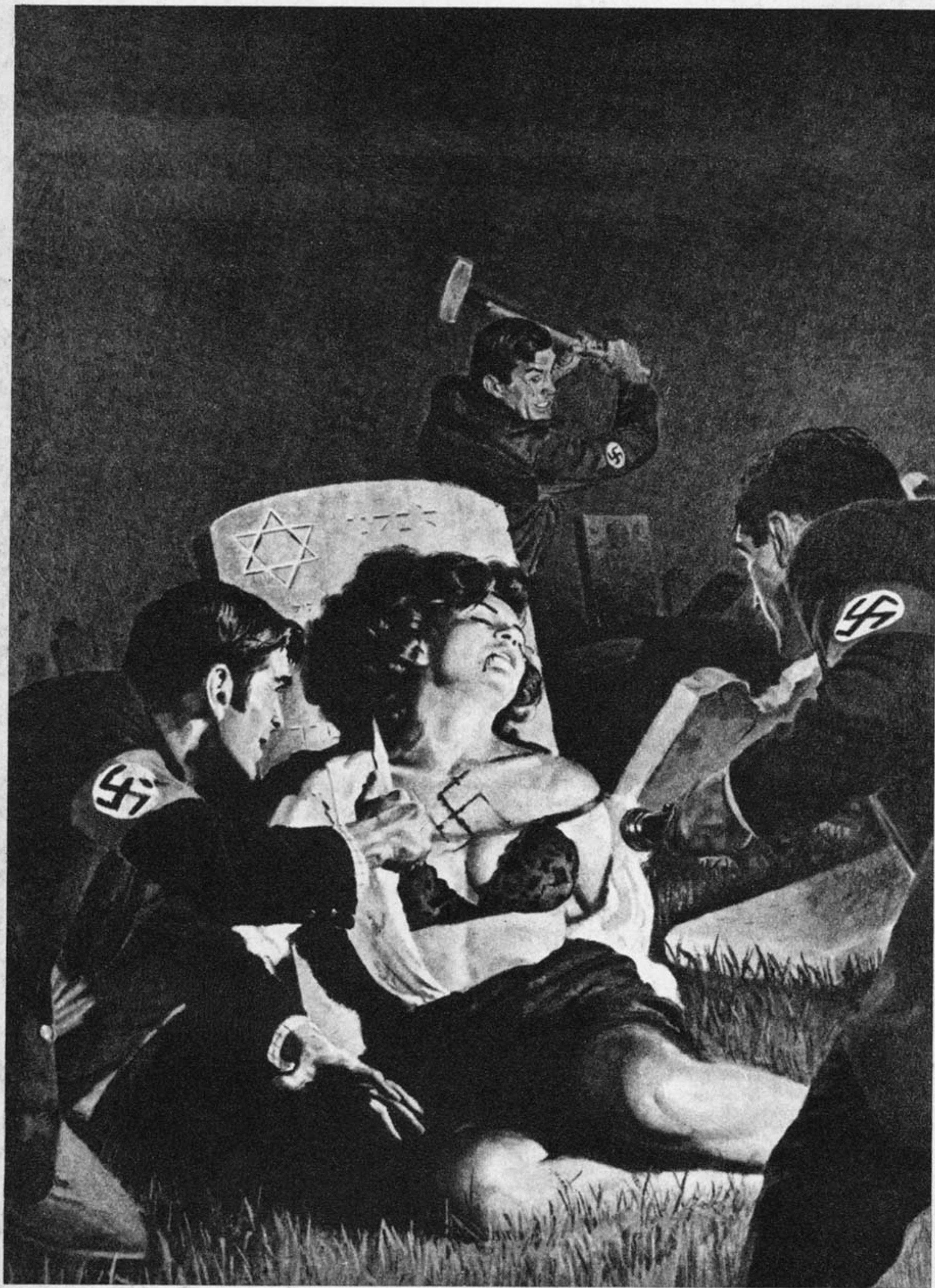
THE MAN WHO TERRORIZED TITO

BEWARE THE HORSEPOWER HUCKSTERS

MOST DARING COMMANDO RAID

APR.
35c





黒い靴下

カメラ・北 好夫
モデル・長谷ミヤ







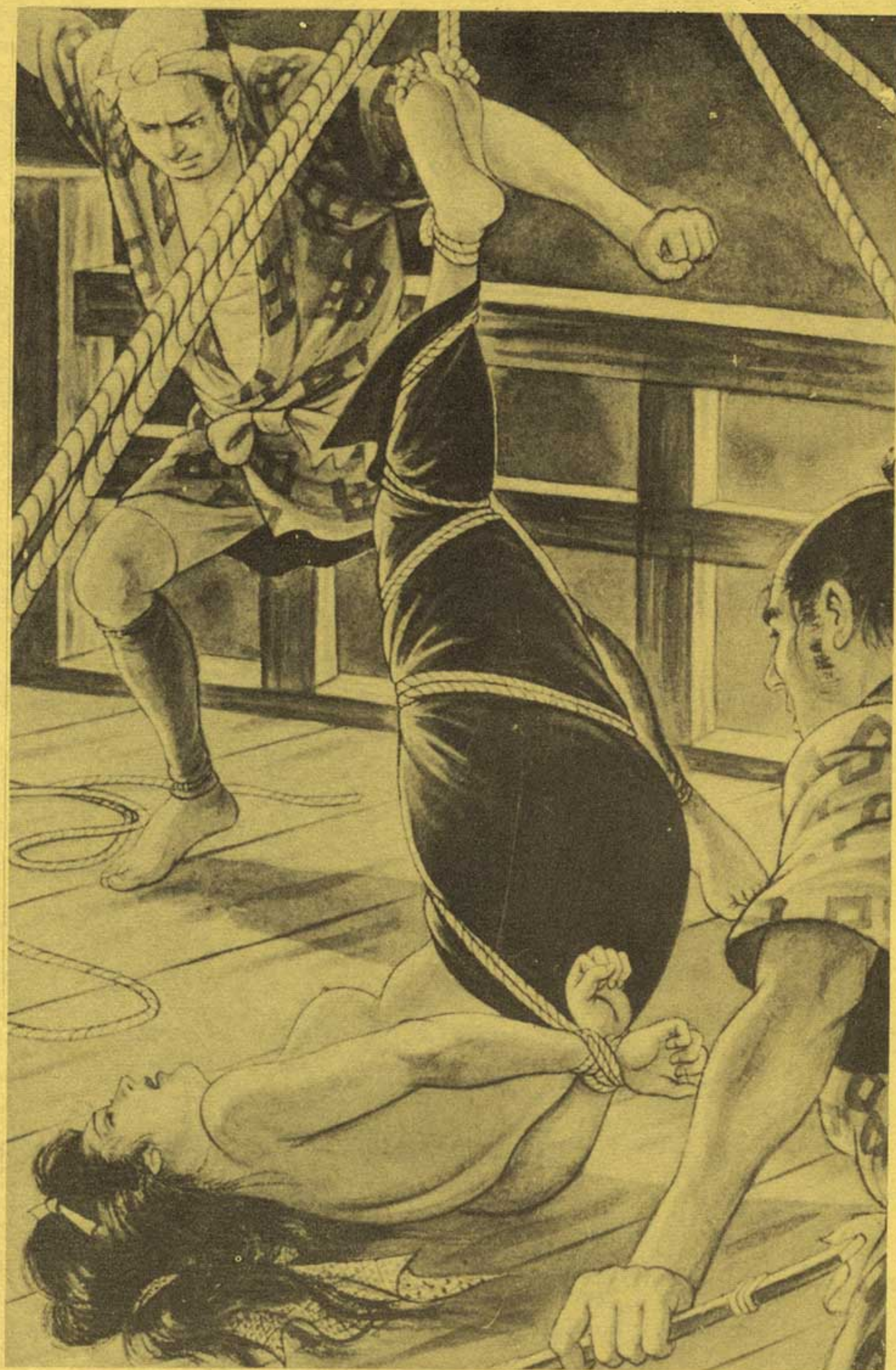








海のあらくれ



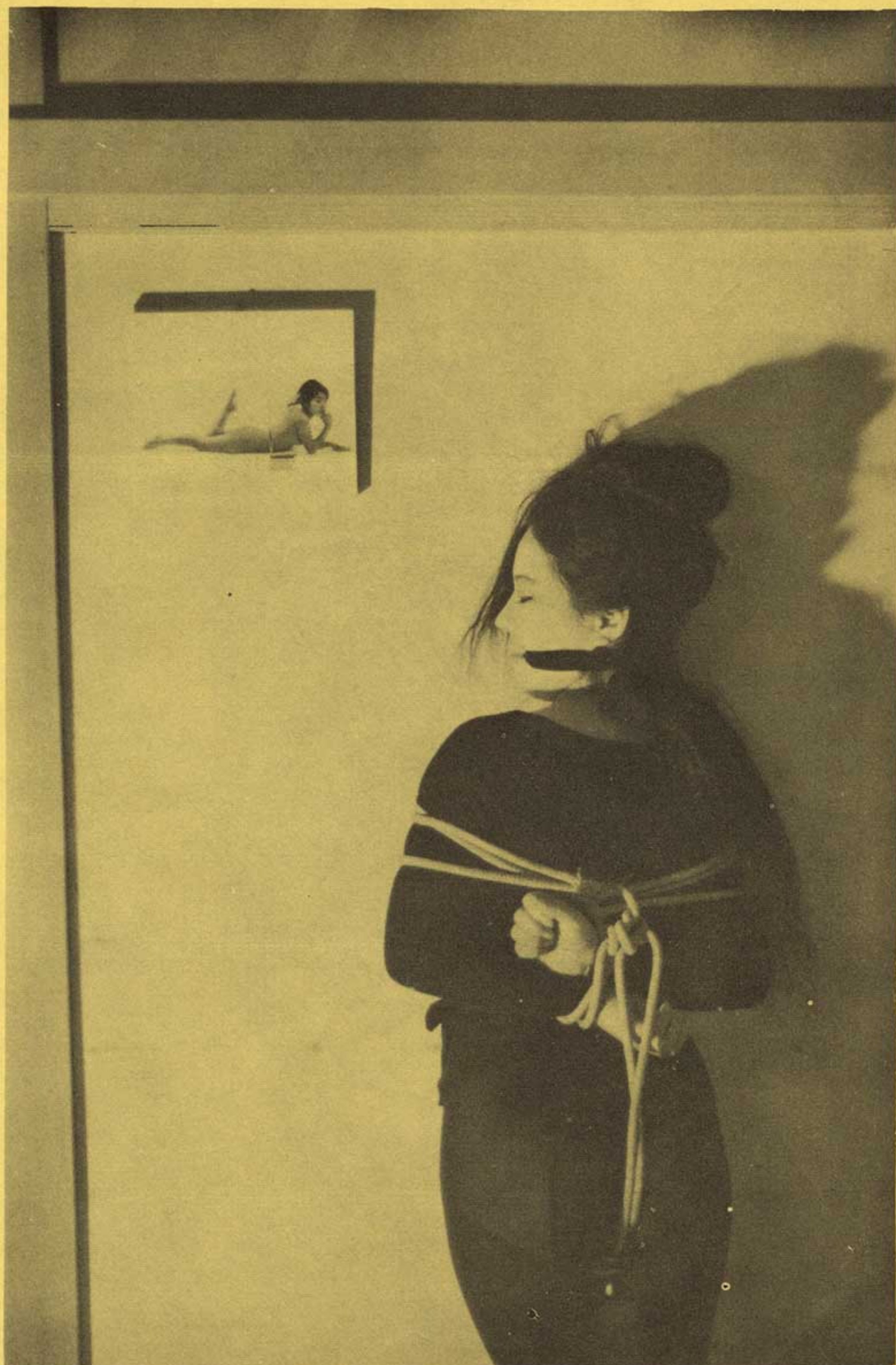
羽仁京志・絵



モデル・柚木あぐり
カメラ・猪島昌也

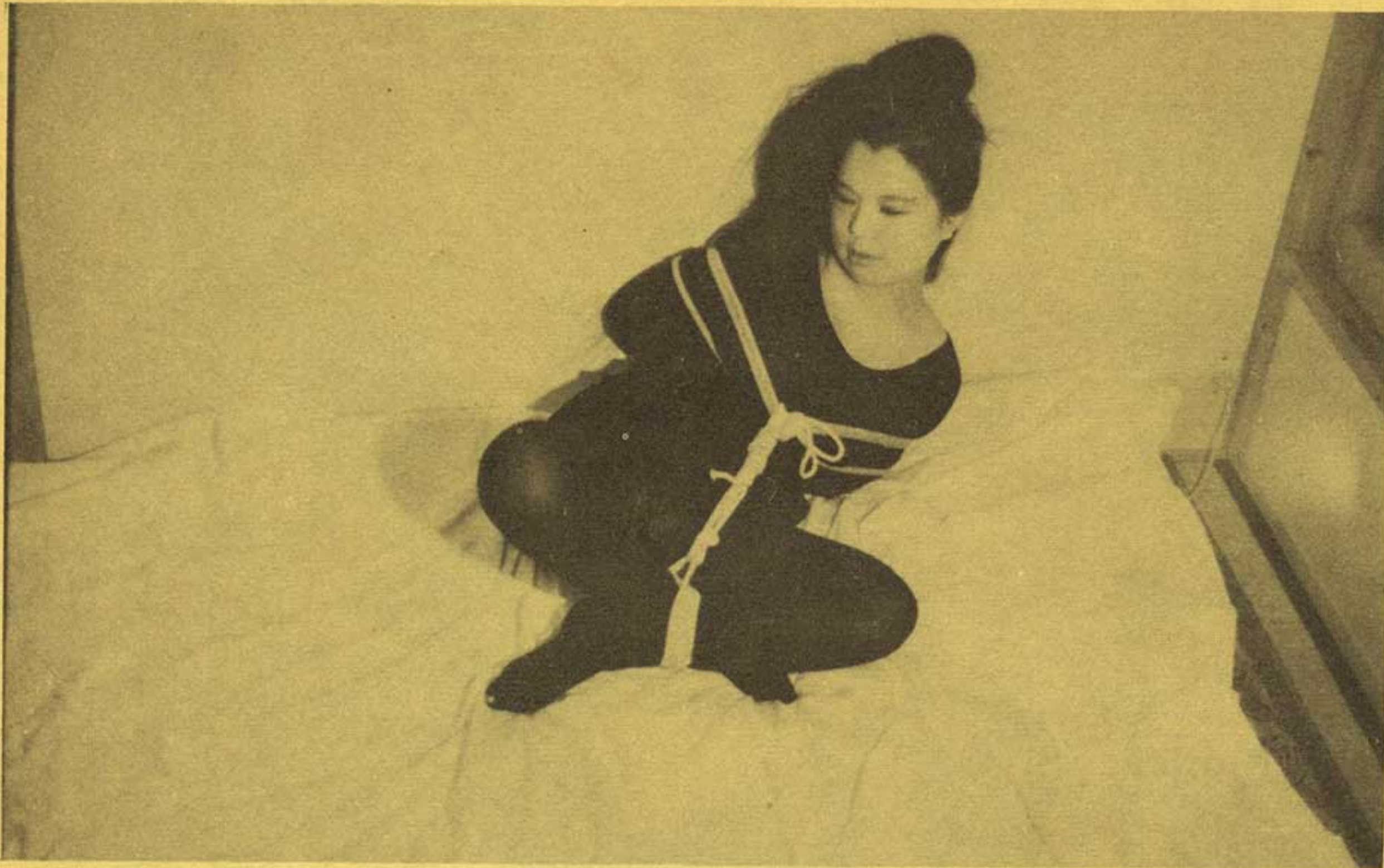


黒い妖精②











「裏窓」を毎月確実に

お手に入れるために

☆☆☆☆☆☆☆☆ 直接購読会員募集

▼三ヵ月会員… 九〇〇円

▼六ヵ月会員… 一、八〇〇円

▼一ヵ年会員… 三、六〇〇円

■いずれも、店頭発売前に直接お送りいたします。送料は、当社で負担します。

■〇月号から三ヵ月分、とか、〇月号から六ヵ月分、というふうにはじめの号を、はつきりお書きください。

■住所氏名を正確に、はつきりとお書きください。

■直接購読会員には、写真の無料サービスをいたします。

三ヵ月…三枚 六ヵ月…六枚
一ヵ年…十二枚（手札型）

東京都中野区松が丘2丁目21番

あまとりあ社

「裏窓営業部」



愛読者のみなさまへ

▼このページにはさみこんであるハガキに、それぞれご記入の上、切手を貼らないで、ポストへお入れください。折り返し、美しいS写真（大名刺型）を一枚（密封の上）お送りいたします。

▼せっかくお送りした写真が、返送されてくる場合がありますから、住所氏名をわかりやすく、きちんとお書きください。

▼このサービスハガキの有効期限は、七月二十日までです。それ以後は無効になりますから御注意ください。

▼なおM写真のほうをご希望の方は、そのむね、ハガキにお書きそえください。

▼「愛読者サービスカード」をお送りしたところ、さっそく、すばらしいS写真のご贈呈にあずかり、感謝しております。こういう写真が、どうして本誌のほうに登場しないのでしょうか。

（大阪・一読者）

▼サービスの写真一枚、たしかに到着しました。なかなか、いいものです。とくに感心したのは、密封した封筒の質のよさだけでなく、差し出し人の名が、個人名になっている点です。こまかい心使いだと、感心しました。さすがに、誠実と良心と伝統の貴編集部だと思います。

（名古屋・一読者）

▼美しい写真、ありがとうございます。した。こういう写真を販売してくれるとうれしいと思います。個人の名でだされたところなど、なかなか読者の心理を読みとっていますね。さすがに、貴社のやることだと感心しました。

（東京・一読者）

▼この企画は、当分のあいだ、つづけてください。毎月一枚ずつたまっていくので、たのしみです。

（九州・一読者）

松尾悦三小品習作集





悦
三



■ ああ、つまらない……

子鹿

村山省一

江刈晃夫・絵

「買いかぶっているのね」

「……蛙と蛇？」

「買いかぶりはごめんだわ」

「蛇だね？」

「それなら話してあげてもいい。あたしがもつとも尊敬していた先生だって、あたしのママに夢中になってから大変だわ。ママの寝室ではいつくばって！ まるで尾をふる犬か酷使される奴隷みたい。それと同じなのね。ママはあたしを寝室へ呼んだわ。いつものように、外国の香水の匂い、ママ自慢のベッドよ。そして奴隷に言ったの。傷つきやすい教え子の前でも、言うとおりにできるかって。顔を赤くした奴隷が、ハイってうなずき目をしょぼつかせながら、ママとあたしを交互に見上げた。月給が安くて家庭教師のアルバイトにきた男性。じゃなくてあたしに勉強を押しつけようとしたのがママ

の願い。あたしが勉強さえすればママは安心、男をおもちゃにしてよろこぶママ。ママの男遊びもへきえきだけど、あたしの先生にあたしの目の前でお馬になるかって言ったのは感心した。

……ママはまるで子供のようにしやぎながら、部屋中奴隷の背にまたがって追い回していた。ネグリジェのママの姿、あたしだって羨ましくなるほどよ。へとへとになったあたしの先生はママの足をおしただいて唇からよだれよ。あたし強がり言うんじゃないけど冷静に眺めていたわ。ベッドに腰かけて。ママはあたしがそばにいることで安心したのよ。大人ってみんなアリバイが必要なのね。あたしの先生も同じだと考える。だってこんな秘密、クラスのお友だちに話せるわけがないもの。ママも先生も、あたしに心から証人を求めていたのよ。もちろん行為の安全なんかではなく、心のうちで。あたしは秘密をもらさない代りに、ママにも先生にも、もっともっと秘密をつくらせてやった。たくさん秘密。

……ママと先生の心を覗きながら、あたしは冷静であろうとつとめた。たとえばママの足、両脚の前にひざまずいている男が、昼間は教壇で非行少女の原因を説いていても、ちっともおかしくもふしぎでもない。ママの足指で目玉をつぶされ、翌日眼帯した先生が教室へ現われたときも同じ、あたしは何喰わぬ顔でエンピツを噛んでいた。ときどきそんなあたしを誤解した眼帯の先生が、片目で訴えるような目付きを見せても、彼が心配するほどあたしはおしやべりではない。

……夜、奴隷がママの寝室でママのみごとな両脚に首をはさまれているのは、真夏の太陽の下、舗道で馬車馬が、あえいでいるのを想像するより気楽。あたしの心は動かされはしない。ママはグラマ―よ。あたしはママとは比較にならない。ママの肉体は男狂いを重

ねるたびにつやをまし全身がしまってくるみたい。たとえばまる味をおびた腕も手首がキュッとしまり、赤ん坊のようなふくよかな手のひら。長い指、指先は細くて形がいい。足もひさがしらまでの肉づきがゆたかで、それからくるぶしまで、キュッと肉がしまり、大地にしっかりふんばって立つ。いや奴隷の首すじをふみつけて立つ。およそ彎曲など縁のない脚線。おしりのまわりがおおきいので、とっても肉感的。こんなママにくらべるとあたしは子鹿みたい。

……こんなママを堪能させる野獣に、あたしは嫉妬する。でもママが求めているのは野獣でも、Sのテクニシャンでもない。ママのおしりの下で顔をつぶされ、窒息死さえ夢見るカマキリみたいな男性。カマキリはめすに喰われてしまうというけれど。ママは男に仕える性ではない。いつも男に奉仕させる台の上に立つ。かかとの高い三寸ぐらいのヒールをはいて、あたしのパパは土木技師で目下インドネシアのパレンバンにいる。後進国への技術援助、ダムの建設工事。ママに奉仕できなかったパパは、原地人と椰子の木かげでダムばかり夢見ているはず。パパが日本に残してくれた豪華な住宅、ブロックのモデルハウスよ。ママの寝室にはママのカギがあり、あたしの檻にはあたしのカギがあつて。カギって便利よ。いちどかけてしまえば心よりも固くしまっているし、覗きたくても覗かれないし、独房以上の孤独と自由を閉じるから。」

「ぼくは高い建物の屋上から市街を見下ろすのが好きである。そのために手っ取りばやく上がれるデパートの屋上へ行く。きみと出会ったのはMデパートの屋上だった。つゆに入って、にわか雨のふる曇り日だった。ウィークデイのせいもあり、屋上の人出は少なかった。きみの姿が日についたのもそのせいだろう。にわか雨がやって

きても、なおしばらく、きみは屋上の四囲に張りめぐらされた金網にひたいをつけていた。そんな後姿にひどく心を動かされた。しかしなぜ濡れているのだね、というおせっかいをやくほど近づくことはなく、きわめて興味本意でようすを見守っていたのだ。……

かなりひどい雨だった。きみのブラウスはたちまち濡れ、肩や背に張りついた。無雑作に束ねた髪も濡れている。ほくのほかに居合わせた人たちは空もようを見上げ、さっさと下りてしまっていた。二人だけになると雨の中で濡れているきみとの距離が急に近くなったような気がした。雨がさらにはげしくなったとき、きみはほくの方へゆっくりと歩いてきた。ほくは屋上の入口で立っていたわけだ。なぜ濡れていたんだね？ と自然な言葉をかけたが、きみは答えない。関心を示している異性をそばに置いて、きみは止みそうにない空を見上げた。これは自信がなくてはできぬ態度であろうとほくは思った。……

びしょ濡れではないか。かせ引くよ。というほくに、おじさんときみは呼びかけてきたのだ。おじさん？ ほくはきき返した。大きな瞳でじっとほくを見つめていたきみに。すると、あたし年上の男の人は皆おじさんと決めているのと言う。どういうわけだね？ ときくと、ふふふ、関係ないわ。きみは横を向いてしまった。頬に伝う雫をぬぐおうともせず、平然と瞳を空へ向けている態度。……

小柄だが肉づきはしまっているし、胸のふくらみも濡れたブラウスを透して盛り上がりが目立つ。まだ世間並におじさんと呼ばれる年齢には遠いほくだが、きみの言い方を聞いていると、ちょっとした快感めいた気持になったのだ。そのとき、きみは男をかき分ける嗅覚を身につけているなと思った。相手に応じて自分に注意を引かせる態度に。……

きみはしばらくほくを無視した態度で目を空へ向けていた。その姿勢をくずしてみようと考え、きみのように雨の中で平気で濡れることはほくにはできない。と言ってみた。ひとりごとのようにね。すると、関係ないことでしよう。ときみは言った。まったくその通りさ、関係ないね、とほくも言った。つまり、関係ないね、という言葉を引きかけにして、どこでもあるような場所で、きみと向かい合っているわけだ。……」

「それを育ちのよき、放住主義の家庭のせいになれるのはごめんだわ」

「つぎに、あの喫茶店でのことについて話してみよう。どこにでも見られるような雑ばくなジャズ喫茶だった。ほくはひとりぼつとすわっていることで、ひどく場ちがいな気持と対峙していたのだ。

人目をはばからぬ嬌声を上げたり、テーブルのそばでリズムに合わせ腰を振り合っている若い男女、己れを誇張した服装や身ぶりを見ているうちに、この若者たちは本気で狂おうとしているのか、附和雷同のたぐいではないか、うたがわずにはいられなかった。……

ほくはきみに指定された時刻より早目に入り、もう何本かのたばこを灰にしていた。入口に近い席でという言葉通り、じっとすわっていたが落ちつかない。もしかすると悪い連中に取りまかれてしまうのではないか。ありうることだという不安。しかしきみを信じていた。信じるというより、そんな悪さやいたずらではあるまいと。予定の時刻からややすぎて、きみたちは現われた。きみたちというのは、背をほくに向けてすわったきみの前に、年下と思われる可愛らしい少年がいる。かれとほくとは離れてはいても顔が向かい合っ



いる。……

かれの着ているアロハツヤツの柄が顔にくらべ身についてない。まだ、こういう場所へ出入りするのになれてない、うぶな感じであると思った。じじつきみにくらべ落ちつかないようすで、四囲に気をとられていた。ぼくは目が合うのをさけた。あらかじめ何が起るかきみから知らされてないが、その場での判断であった。見守っていると、話はきみの方で一方的にしているようだ。何を言っているかは聞きとれない。しかしかれの態度に落ちつきが出てくるのを察して、徐々に溶け合っているのがわかった。かれが笑みを浮かべるのを見て、ぼくは嫉妬を押さえるため、たばこを吸いかけてはつぶしていた。……

そして、どれくらいたってからだだったか、きみと向かい合っている可愛らしい少年が頭をたれ、きみが話しかけるのをただうなずいて

いるだけになった。顔を上げようと思わない。なぜだろうと思った。するときみのようすもおかしくなってきた。きみがかれの手を取るようにふらふらと立ち上がった。ぼくのそばを通り表へ出てゆくのに目もくれようとはしなかった。人通りが少なくなった裏通りをきみたちは酔っぱらいか、夢遊病者のような足どりである。あとをつけていたぼくは目的と思われる場所まできたとき、あたしが何をしようと思わないことに勝手に興味持つのがおじさんの範囲よ。許して上げられる範囲よ——と、言われていたのを思いだしたわけではない。いちどに二本の矢を胸板に射込まれたような衝激。これはレトリックが大げさすぎると言うなら。……」

「みごと足払いを喰い、つかまれていた胸倉を突き放された思い？」

では具体的に言って上げる。おじさんが興味持っているのは、あたしの肉体、それとも小悪党ぶった心？ 着物をぬいで裸になるように心をさらけだしなよ。たとえばデパートの屋上から市街を見下ろすのが好きだというのは口実よ。口実にすぎないのよ。あのとときあたしの注意を引くために。俗世間からはなれたふり、そのポーズを見せようとしたように十分とれる。……

あたしの先生は、いつも教壇から多くの女生徒たちを見下ろしている。そのために女生徒たちと立場をかえて見下ろされてみたい、見下ろされるだけでなく踏みつけにされてみたい——と言ったとしても信じない。それと同じ意味で、おじさんのあのとときのポーズはナセンスよ。あたしのママに奴隷にされてよろこぶ先生は、ポーズではない。ポーズでないために、ちゃんとした証人としてあたしがえらばれたのよ。だから、まずポーズしないことね。

……とこころであの喫茶店でのこと、おじさんの推察は少しはずれている。かれ、少年ではなく彼女よ。ポーズではなく本当に男の子のスタイルすることに快感を持つ少女よ。おじさんの言葉によれば年下の可愛い少年になることであり、あたしから鎮静剤を適量にのまされることでよろこぶの。ベッドハウスはあたしたちふたりの、ほんとのねぐらよ。かいこ棚の上で、それぞれまゆになろうとしているの。ママから受けついだ血をすべて吐きだし化身するの。化身するために一ばんくすぐったい部分にキスしあつて。

……キスするとき、もっとも感激よ。ママにも先生にも、まるで復讐しているみたいな快感。くくつと声をだすときもあるわ。だってかれはベッドハウスに入ると、とたんに変わってしまう。ものすごく力をこめて吸い、舌をむりやり押し入れてくるもの。くすぐったさをがまんしているときの気持、それが徐々に変化してゆくときの気

持、さらに、耐えられなくなって叫びをもらすまで、そこまでは時間の経過もわかるの。でも、叫びをもらすときに、かれがあたしの口を、というより手さぐりで、あごを突き上げて叫びを防ごうとするときがある。そのときは時間を忘れてしまっているのよ。

……あたちたちがもっともくすぐったい部分にキスしあうとき、かれは全身の力を犀のように角に集中し、その鋭い角であたしは肛門を突き刺され、くすぐられたりする子鹿でもある。また角をやさしく愛撫するやわらかい耳を持ち、そのすべも心得ている。犀はあたしと同じ肉体だから。同じ肉体で心は子鹿と犀。こんな関係を不潔だと言うなら、あたしの心が動物の臭気を放つのを認めないのよ。よってたかつて人間的な心の教育だけを強いる世の中だから、心が人間になれず動物になるのを認めないのよ。」

「物好きということになろうか、ほくも夏の一夜をベッドハウスですごしたことがあるよ。すぐそばを国電が通っていてね。シングルベッドぐらいの棚が床から天井まで段々に取りつけられている。棚と棚との間はあるぐらをかいてすわれる高さしかない。背丈以上のベッドの段には、すづまりで太った女中が持つてくるはしごを伝って上がる仕組みだ。このかいこ棚のようなベッドの段は狭い通路によつてへだてられていて、手をのばせば隣りのベッドに届くし、頭上のベッドから、はみだした足がぶらさがったりする。……

廊下に暗い電灯があるだけだから、部屋全体は暗く、むっとする体臭で満ちている。その暗さに目がなれてくると、ねぐらの全容がうかがえる。その日暮らしの人夫、夫婦者や子供連れもいる。みんな家のない中年者が大半だ。そして下着一枚の姿でベッドの枠から手

足をはみだし、あるいは折り重なっていびきをかいている。……

垢と臭気がしみつきじめじめした夜具ではとうてい、ぼくはねむることができない。耳に入ってくる高いびきや寝言をのぞけば、すべて重い沈黙、じっとりした沈黙である。この沈黙は湿った穴ぐらで、生ぬるい生きものが肌をよせ合い、目をつむっている気魄を思わせる。この穴ぐらにぼくがもつとも期待していたのは夜の行為である。それを話さねばならないね。……

望みどおり苦しい女の呻きを耳にしたとき、ぼくは想像以上に興奮し感激に全身をふるわせた。女の呻きが極致に達する叫びを上げたとき、手の中でにぎりしめている筋肉が極度に張り、膨張の極に達した。もしぼくの口がにぎりしめている筋肉に届くなら、一滴もろさず飲みつくしてしまい、自分の液で手をよさずに感激できたのに。炎を噴いた後の女の吐息と沈黙が手にとるようにわかった。その女がどこのだれであろうと、垢と汗にまみれた臭気を放つ女であればあるほど、ぼくの想像する刺激は大きいのだ。それが穴ぐら全体の気脈に通じており、舶来の香水をふりまいたベッドにない世界を求めるべくにとって恵みである。……

およそ原始的とさえ想像される姿態、汗と垢の体臭を持つ生ぬるい肌をよせ合っている穴ぐらで、夜の行為が人間的ではなく動物的に誘発され、くり返されているのは、手を延ばせば届く隣のベッドであり足がぶらさがってくる頭上のベッドである。この夢想は、生活が多忙なあまり普通では筋肉の張りも膨脹も叶わなくなったぼくの心が、大自然を流れる溪谷に探り当てた洞穴であろう。……

そしてこの洞穴に可愛い残酷さで迷い込んだきみは子鹿。鎮静剤をのませると卑になる少女を連れて。きみは心が動物的になるのは人間的な教育を強いられるせいだと言う。ぼくは多忙すぎて普通では

筋肉の張りを覚えない。多忙なのは日常的で、生活が非人間的に強いられているからだ、と言ってもはじまらないし、きみともかわりはない。だからどうすれば動物形態観は……。」「

「屁理窟には関係ないわ！」

「ある。きみのような女の子、娘とも少女とも判じかねる心が好きだから。きみとベッドハウスへ行きたい。きみのくすぐったい部分にキスして上げたい。不潔なのはぼくの方だから。子鹿のような前脚の爪で、両眼をつぶされ盲目にしてもらいたい。盲目にされたぼくは暗いじめじめした穴ぐらで蛇に生まれかわる。……きみの一つの穴から、くすぐったい部分の穴から、小悪党ぶった鬘の奥深くへと赤い舌をびらびらさせながら入ってゆく。きみの搾木のような力で骨身をしごかれ、胴体を二つに搾め切られても、頭で内壁を叩き赤い舌をびらびらさせる。……」

「いやッ！」

「蛇になる。冬眠したい。……」

「いや、いやッ」

「いやだから蛇になる。ぬるぬるした長身を二つに搾め切られ、切られた部分から血をたらしながら、方向感覚を失った尾のない蛇。……。頭だけの黒い蛇。搾め切られた傷口の痛みも、きみの搾めつけてくる力、鬘の圧力をじかに受けることで相殺される。ずきずきと呼吸のようなうずき……。きみのくすぐったい部分の穴をたかぶらせる蛇。……」

「もういやッ。やめて」

「やめない。蛇だよ」

「ああ、だめ。……」

「……」



1

いわゆる普通の性愛の生活において、二つの行き方が採られる。一つは一人の女に、生涯の愛をかけて、とことんまで互いに操を立て通す道である。卑俗に言えば、ほれた女は一人で十分、性愛は日新た、一つ井戸は掘れば掘るほど味のある水が出る、というたぐいである。

これが正道だとされる。なるほど、こういう道でそれぞれ男女ともども、お互い一対同士、無事収まりがつけば、この世に波風の立つことはずっと少なめになってしまうであろう。

ところが道は今一つある。それは男の移り気な心である。恋の放浪者ともいえようか、ドンファンタイプの放浪癖は、定着した一対の男女の城をもおびやかすように、不規則な遊星群として、平穏な日常をかき乱すのである。

同じことの繰り返しのような凡俗な日常の明け暮れ——そこに「或る日」という非日常的な日付が挿入される。「……ところが或る日——」これは凡俗ではない、異常な日のことだ。事件があり波らんがあり、挫折や転落や展開が繰り返される。

小説などはいわゆるこの「或る日」のことの描写、記述に尽きるのではないか。だれもが待望することは「或る日」のことである。いつの日か、「或る日」という日が、この凡俗な日常の中に訪れるであろう、期待と不安で、人々は生きる。

放浪者の心は、「——ところが或る日」を待望する心の激しさの証明でもある。これはマゾヒストの中の、放浪者のタイプにも当て



■ 体当たりマゾヒズム論・25

ああ、
或る日或る女を追いもとめ
きようもさすらうMの心よ

水尾 究

江 渕 晃 夫・絵



はめて言えるのである。一つ井戸を、掘って掘って掘り抜いて、癡癡老人のようにそのひとりの女の足の下に死んでもなおふみしだかれていようという、一途なマゾヒストの道と、「——ところが或る日、或る女が——」ということへの待望に身を焼かれながら、「或る日、或る女」との邂逅に、その予感にふるえながら、女から女にさまよい歩く、いわば移ろいやすいマゾヒストの存在のことである。

藤島宇内が『高村さんの一断面』という小文の中で、次のように書いていた。

『「智恵子抄は、高村さんの智恵子さんに対する気持の反面しかあらわしてないと思うけど、あとの反面はどうしたんですか」ときいてみた。するとそれに対して高村さんは、

「そうなんですよ。いやな面はかくしたんです。だけどあれ書いた頃はそうするのが作品だと思ってたな。ほんとはもっと書かなきゃならないことがたくさんある。だから智恵子抄は不完全なものですよ。だけどあれはあれで、もう仕様がなないな」と言っていた』

こういうことは考えてみるまでもなく常識であろう。いつも絶えず隠された反面はあるものだ。隠された女の反面は、月の裏側のように神秘と、今ひとりの女の神秘とは、決して同じものではない。所詮男である以上、残らずあらゆる女という女のその神秘を、くまなくのぞき見尽くしたくあるであろう、それが当たり前のことではなからうか。

マゾヒズムは、きわめて観念的なものが強いものだけに、従ってMの遍歴はひとりの女から次の女へ、次の女からさらに次の女へ、ときわまりがなくなる、という傾向が生じる。「山のあなたの空遠く」Mの幻影を追ってとめどがないのだ。

ひとりの女王に奉仕をするとする。すると一つの焦燥が彼をおびやかす。もつとほかに知らない所で知らない神秘をかかえた、より女王らしい女が、自己の神秘を知らないままに、彼の知らない日常を過ごしているのではないかという焦燥——それは高まって一種の強迫観念ともなって彼を捕えるのだ。

未開発の原野は果てしなく広がって、未踏査のまま打ち捨てられている。だれもが地下資源のことは知らない。一つ場所で、一つ油田を掘り続けること以外に、マゾヒストの目はまだ手もつけられない他の未踏査の原野に走らせるのだ。

マゾヒズムは、所詮一つの夢にしかすぎないために、夢想は駆けて広大な人跡未踏の地に美しい虹の幻を追おうとする。

日常、無数の女性が、自己の資源を知らずに、自己の可能性に全く気づかぬままに、暮らしている。こんなじれったいことはないのだ。数十万、数百万の女性がそうして生きている。

このうちの、ほんのケシ粒にも似た、ただひとりの女の井戸を、せつせと掘り続けることで、どうしてもがまんができよう。そうしている間にも、他のすべての女性は、何にも知らずに通り過ぎていくではないか。

もう戸別訪問では間に合わないのだ。マイクを広場にすえ、「ご通行中の女性の皆さま方に申しあげます。わたくしはマゾヒストでございます——」と叫んでも、なお間にあわない焦燥感が彼を苦しめる。

マスコミのプロパガンダと同じく、マゾヒストは声を大にして、女性大衆に向かい、同時的に訴えかけねばならない。原野は果てしもなく広いのだ。

マゾヒズムは決して病気ではない。が、これをたとえていえばアレギー体質のようなものだ。寒い風に当たるとシンマシンが起る。

魚を食べるとシンマシンが起る、酒を飲むとシンマシンになる、ネクターを飲むとシンマシンになる、が、ごとく、女性の美しいグラビヤ写真を見るとMが起る、サーカスの美しい騎馬女性を見るとMが起る、町で女性とすれ違ふとMになる、足をながめたとたんMになる。これは不可抗力な体質として彼にある。

Mに襲われたとき、それは低気圧の渦中に彼を巻きこむことだ。有無をいわせず彼を拉し去る。突如として起る風塵中に身をゆだねながら、女性原野の広大な広がりの中を大至急に吹きすぎてゆく。精いっぱい速力でもって、精いっぱい熱度でもって走り回って、それでもなお回りきれない焦燥感、知らないところに、知らないほどの埋蔵量がきつとどこかにしまわれてあることに、その予感に焦燥する。

あきらめきれない心というものはいいとおしい。一つところのナワノレンの中で、じつと背をかがめて前後不覚に酔いつぶれるまで飲む男のまるまった背の、身につまされるテイの飲み方と、ハシゴにハシゴを重ね、ついにあきらめきれない、ふっきれない、あのじれったさと——どんなにハシゴをしても、とてもに回りきれぬものではない広大な未踏査の地域に残す未練は、放浪型マゾヒストの心を如実に映す、常に身にまつわりつくところの根源的な焦燥感——虹をつかむ男、彼がマゾヒストである。

彼が望む女性は、或るひとりの女性をでなく、それは広い広がりの中に虹のようにしてある女性という抽象的な概念であるからだ。

2

それは競輪場のあの空しい破り捨てられた車券の残がいにも似ている。

所詮は狂い咲きし仇花への幻影トルコ風呂からトルコ風呂へ、トルコ風呂のはしごをして回る彼の空しさに通じる。

かつては赤線のはしごができた。もちろん、資金捻出には一苦労いる。一苦労の末の資金をもつて、赤線地帯に足を踏み入れたとき、そこにはあの広漠たる原野が、女性という概念がずっと縮小されて五万分の一の地図ほどに、目の届く範囲で展開されている。

もちろんトリックなのだ。トリック撮影の特撮のように何もかもがハリボテだ。十四、五分ほどで一回りできる女性の原野、それが女性の世界の全部であるはずはない。しかし、その特撮のトリック舞台の範囲のうちに、女性という概念的な世界のすべてを見尽くそうとしたのだ。

ひとり残らず、全部の女性を買い占めて、ひとりひとりの、未数的資源をすべて掘り出してみたいという、赤線をはしごする彼の悲そうな焦燥はここに含められていた。

美しい女もいた。まずい女もいた。ころあいの女と視線を合らし、その未知の部分の資源を期待することで胸を踊らせながら、安ぶしんのはしご段を踏む。イミテーションながら、ともかく女の部屋は女の世界すべてとして、神秘めかしてあった。壁に張りつけられた映画スターのプロフィール。化粧鏡と小さな座机、こざっぱりと片づけられている安香水の漂う安らぎのある部屋の中に、女と対座する。未知の女——たとえば相手が赤線の女であっても、未知な女の、そ

の未知ということが期待させるのだ。

あきるほど毎日入れ代わって登場する男たちの中には、毛色の変った客が多い。女がそんなことを話してきかせてくれた。しかし毛色の変わり方の、最たるものが彼女なのだ。

彼があらかじめ物色した女は、いわゆるお高そうな、ぶったような知性派の女が多かった。彼女は自己が肉を切売りする売春婦であることを、百も承知しながら、男を軽べつし客のえり好みをする。いやな客など、決してとらない。また店頭に立ってもほかの安っぽい女のように、女のほうから男に声はかけない。だまってそっと、大抵黒っぽい衣裳に身を包みながら、ほの暗いあかりの下にたたずんで、エキゾチックなマスクを黙ってみせている。必ず、男から声がかかることを、彼女は心得ている。うぬぼれがあるのだ。彼はいつも、そんな女を選んだ。こびへつらうのは、彼のほうからであった。

3

女には、みんなそれ相応の反能はあった。まるで手ぶらのままほり出されるということは、決してなかった。こちらの思惑と、彼女のこちらを見る視線には、ネズミを見るネコとの間のような、戦慄に価する火花が交わされた。

中には、決して、なめさせない、リン然とした高貴な女もいた。高貴という形容が、この世界の女には不自然ということは当たらない。かつて赤線があった時代、新宿の二丁目、花園町には、そんな女が二十人にひとりまじっていた。今のトルコ風呂より、質が良いい時代であった。

しかし、そんな女のスカートの中に、頭を差し入れることの快感は、それだけになおすばらしいことであった。彼女はなめることを許さないかに見えて、ただ優越感を味わう快味のためだけに、ついには、それを許容した。従って、なめるのはあくまで奉仕であらねばならなかった。



奉仕とはあいまいであってはならない、完璧なるがゆえに奉仕の意味は生かされる。
「本当にじょうずになめれるの？ 中途半端ななめ方だったら、許さないわよ」

赤線がなくなってからこっち、高貴な女にぶつかる機会はなくなつた。トルコ風呂の女には、例外なく高貴さがない。高貴な女は、取引としてセックスを客に売っても、決してマッサージやあんまに類する一般的奉仕を、客にささげようとはしない。血が頭に上った男たちの、性的な狂態を己の持物でさまさしてやる、ただそれだけの事務を、冷静に取り運ぶだけであつた。主導権は女の方にこそあつた。いやしくもそれ以外の、付随したサービスや奉仕を男たちにささげることは根輪際いやなのだ。

マッサージで奉仕する、シャボンで客の足の裏まで洗ってやる、それが単に表面的なまねごとであつても、高貴な女はいやなのだ。赤線の女と、トルコ風呂の女とは、そこで質が一変した。中でも、彼が二十人にひとりの割で選んだ高貴な女は、ついに、トルコ風呂においては見つけ出すことができなかった。

4

いったんシンマシンの発作に襲われると、彼はもう收拾がつかない状態に襲われるのであつた。

ヘンレキはかくして始まつた。見果てぬ女の原野にさまよい出て、渴をいやそうとした。最初のトルコ風呂から次のトルコ風呂へ、次のトルコ風呂からさらにその次のトルコ風呂と、じれったさに追っかけられ、回れば回るほど倍加するじれったさに駆り立てられ、また次ぎを回つた。

昔、赤線では女が選べた。いろんな女が立っていた。そんな女から物色すればよかった。ところがトルコ風呂では、それができない。指名のない場合、本番の女、向こうさまの当てがいブチで、運をか

けるしかない。

部屋に通され、その部屋の女と対面させられる。一べつにして、相手を判別する。いつの場合にも、最初の一べつは彼を失望させる。もう話をするだけ、むだだと思つてしまふ。また、ほとんど、話をする気分もわからない。

マゾヒストは妥協ができてにくい。失望したとき、もうその女と過ごす一時間が苦痛になる。全くの無駄と、忍耐の一時間、そしてチップを要求され、ともかく不快な思いをしたくないために、逆に凡俗な冗談のやりとりで、女のきげんを取り結びながら、ドアボーイのいんぎん不礼な、ありがとうございます、の聲に送られ、外に出たときのやりきれなさ――。

このままの状態で、家に帰ることができない。エンジンはかかつてしまった。ブレーキのないスポーツカーのように、トルコ風呂のへん歴のために疾走する。パチンコの玉と同じなのだ。今度ははいるだろう、今度ははいるだろうの、やみほうけたような気持ちの高振りにさいなまれつつ、また違ったトルコ風呂の、本番の女性の部屋に案内されるのだ。

女はどれもが機械的に、早々に客を風呂に入れ、形式的な軽いマッサージでお茶を濁し、スペシャルサービスにとりかかろうとする。そういう特定ランチのコースが、決まっている。女は、そのコースを自動的に消化させるために務めている、進行係のようなものだ。

女は、進行することばかりに気を配るのだ。「早くお洋服脱いで」「むし風呂いかが」「だったらこちらへ」「背中流しましょう」「自分で洗って」「さあ早くこちらへ、マッサージしましょう」「あんなの、大きいわね、スペシャルするんでしょう」

こんな進行係の、ベルトを遅退なく運行させるためのことばの催



促に主導権を奪われて、テイもなく済まされてしまうことに、どうしてがまんができればか。
マゾヒストは、まず最初に、このベルトをズタズタに切り離してしまいたいのだ。

5

ベルトの流れに対して、抵抗することは気重いことだ。決められた習慣に対して、順応することの確実さと頑固さにおいて、女性はほんの些末の融通をも示すことがない。

大抵は妥協のうちに終わってしまう。ベルトにさからわず、何の抵抗も示さず、そのまま乗っかっていることほど安易なことはない。赤線の高貴な女が持っていた、あの反俗的なつきさすような強い視線を持った女は、トルコ風呂にはいない。

しかし、耐えられないのはスペシャルの強要だ。マゾヒストだって、油剤を塗られ、スペシャルサービスを受ければ、やがてはほっ起して、射精をするであろうことは、その通りに違いない。しかし、射精の快感はほとんどとるにたらない。肉と意識は分離し、肉が勝手に射精するのを、意識は無関心にながめているにすぎない。スペシャルサービスは、無意味で苦痛さえ伴う、単なる浪費にすぎない。浪費に耐えるには、マゾヒストの神経はあまりにも疲れすぎている。

「スペシャルはごめんだね」

吐き捨てるように拒むだけだ。ベルトの流れを最後の終幕でさえぎられた女は、不愉快な表情をつくる。こんな不愉快さはあまりない。



しかし、それでもシンマシンの患者は、さらに次のトルコ風呂の玄関にたたずむ。「或る日、或る女」が、ここに居ないと、絶対に断言はしきれないではないか。

彼は恥をしのんで切り出す。或る時は昂然と、或る時は卑屈に、彼はできるだけボーカーフェイスの無感動な表情で、ボーイやマネージャーや、受付の女の子に告白するのだ。

「残忍な女は居ないか。そして勝気できれいな子だ。自尊心が強く、うぬぼれの強い子がいいね」

ボーイやマネージャーや、受付嬢は、最初客の真意がわかりかねて、考えこむような、そしてニヤニヤ笑いをするような、いとも複雑な表情をつくる。そこで彼は、ダメを押すように追い討ちをかける。

「いやね、ほくはマゾなんでね、女の子にひっぱたかれて、馬になって、床の上をはいずり回ることが好きなんだ」

ボーイやマネージャーや、受付嬢は、そこで初めて客を理解し得たように、相好をくずしたニヤニヤ笑いをする。そのニヤニヤ笑いを、侮辱と思っではいけない。これらは、彼らが客に示す、親愛の表情なんだ。

「ああ、サドですね」

こんな珍妙な答え方にこだわっても、またいけない。サドもマゾも、彼らにあっては同じことなんだ。要するに、変態のお客さん、この一言で用は果たせることになる。

五百円札をにぎらせながら、

「美人をたのむね」

念を押すとボーイはうなずく。受付の名簿をいっしょに見ながら、

この子がいいかな、お客さんの好みに合いそうだ、とか言いながら、この風変わりな客のために指名をしてくれる。

本番の子に運命をかけるより、冒頭受付ではっきり告白をしたほうがいい。そして指名をしたほうがいい。いちおうきれいな子、全く見当はずれな子に行き当たる心配はない。どんな子であろうかと、顔を合わせるまでの予感、本当を言えば、このこと自体が、真の目的ではないか。期待と予感のある快感に女の未知の部分を使うのだ。

といいながら、ついに「或る日、或る女」との邂逅はないのだ。すれ違いと行き違いで、女の方原野は近づく後方に退き、なお近づくともた退く。手に入れることのできない未開発の資源が、遠くで蜃気楼のようなイリュージョンを浮かべ、手招きする。

ここで現前の世界では、妥協が行なわれる。このあたりなら、まずまず目がつぶれるんじゃないか、というはかない妥協で、女をして美しいものに見ようと努める。努める以上ベルトは切らねばならない。

「ぼくは、ふろにははいらないんだ」

服を脱ごうともせず、床の上にすわりこむ。ベルト始動の最初のモーターが動かないことに、女はいらだちと、不審の面持を示す。

「ふろにははいらないで、何をしにいらしたの」

「うん、別にどうってこともないよ」

「そんなこともないわ、——ほんとに何をなさりたいの、マッサージ、スペシャル？」

「マッサージもスペシャルもいらない。ぼくはマゾだからね」

「マゾって何？」

おぼろげながらも、意味がわかって、大抵女は白っぽくれる。

彼は床の上にいきなり寝そべって言う。

「足で踏んでもらいたい」

「まあ、どこ踏むの」

「頭と顔がいいね」

6

一時間という時間は短い。またたく間に経ってしまう。説明を始めればきりなく説明に説明をつがねばならない。

「どうして、なぜ、なんのために、本当にそんなことがおもしろいの」

女の問いに答える千返一律なことばの繰り返しに、彼は疲れることとならまだがまんができる。だが、その説明や受け答えでほとんど一時間を費やしてしまうことは、ばかばかしいことだ。

しかし、彼はやっぱり、行った先々のトルコ風呂で、ともかく妥協のできる範囲のマシな女の子には、この説明の繰り返しをしてやらねばならない。でなければ、ことが先へ運ばない。

説明の間に、相手との反応の度合に応じて時間を延長するかどうかの決心を、どちらかに、決める。説明だけで、さよならの場合が多い。しかし、相手のきわめて嬌慢な微妙な反応の現われに対しては、このまま帰ってしまうわけにはいなくなる。

「一時間、延長してもかまわない？」

「かまわないわよ」

時間を延長したら、そこで何をするか、それは彼女が既に了解済みのことである。一時間をかけて、延々とマゾヒストの希望なるものを、しゃべり立てたあとだからである。

踏んで、足蹴にして、口の中にツバを吐きこんで、馬にして乗り回して、しまいにはシビンにしてやればよいのである。それにたじろいだ女は、時間を延長することを、ほかの理由でことわってしまふ。

彼は、女の知恵をためすことが好きだ。

「さあ、ヒントはもうみんな話した。そこでそのヒントによって、どんなことでもいいから、君の判断でほくを喜ばしてくれないか。その時その時の思い付きは、考えるとむずかしくなる、考えずに、ほくを単なる虫けらと思って扱ってくれることだね、気ままに、遠慮なく、きわめて残酷に——」

女のクイズは始まった。与えられたヒントによって、さまざまに思い付きを実地に実行するとき、その行為がどんなものか、期待することが楽しい。彼は女の命令で、床みがきと、マッージをやらされ、スリッパの裏をなめさせられたりした。

なぐるとき、女は平手でなぐろうとはしない。必ずほうきの柄か、洗面具の縁か、の道具を使った。そこに、何がしかの女のおびえがあるようで、彼はじれったかった。平手でなぐりつけることは一種の余裕のように思えるからだ。なぜ平手で、なぐろうとはしないのか。

そして女の知恵には限度があった。やることに疲れるより、考え出すことに頭を疲れさして、その場にへたりこんでしまふ。「もうこの位でいいでしょう、さあ、チップちょうだいよ」

この時マゾヒストは、やはりこの女が、「或る時の或る女」でないことを、しみじみと知るのであった。むだな精神と金と、両面の浪費に後悔しながら、部屋を出る。

外に出たとき、卒然と、今度こそその期待が彼をせき立てる。

入場料八百円也。チップは最小限三百円也。しかし、せめて千円はチップに必要であった。千円が千五百、二千円のチップになっても、仕方がなかった。ベルトは回らないのだ、既製の定食やランチではないのだ。おあつらえの特別注文の料理ともなれば、高くつくのは当然であった。

ネクタールの直か飲みには、五千円ほどかかりたりする。一番巧くいったときは二千円で済んだが、そんなことはめったにない。なんとも大変な負担である。一万、二万の金位、じきになくなってしまふ。ピースを買わずに、「いいい」でがまんをしようというつましい生活の男が、のめりこむように万金をすり減らしてゆく自壊作用にも似た破滅の快感が、その夜の伴奏音をかなでる。

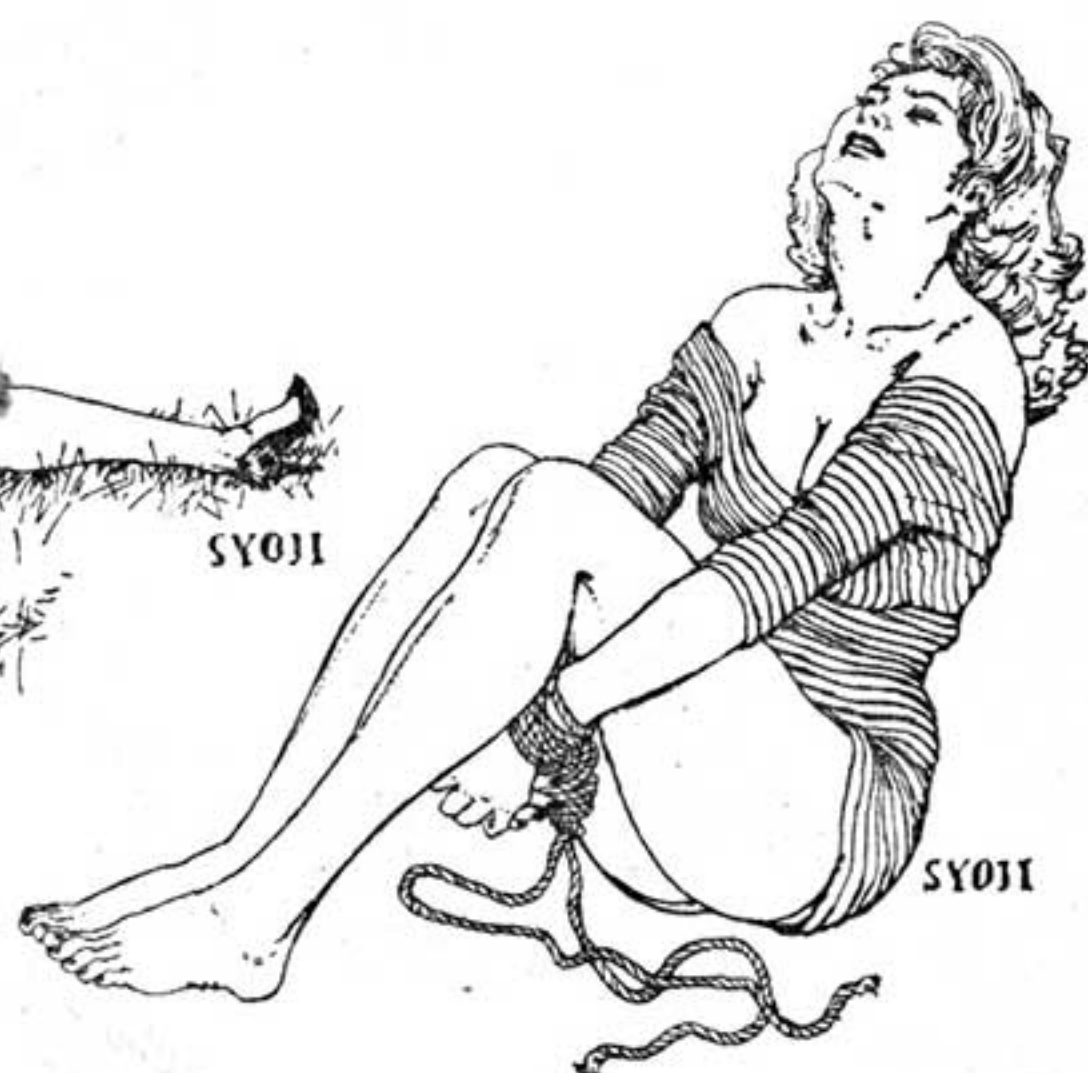
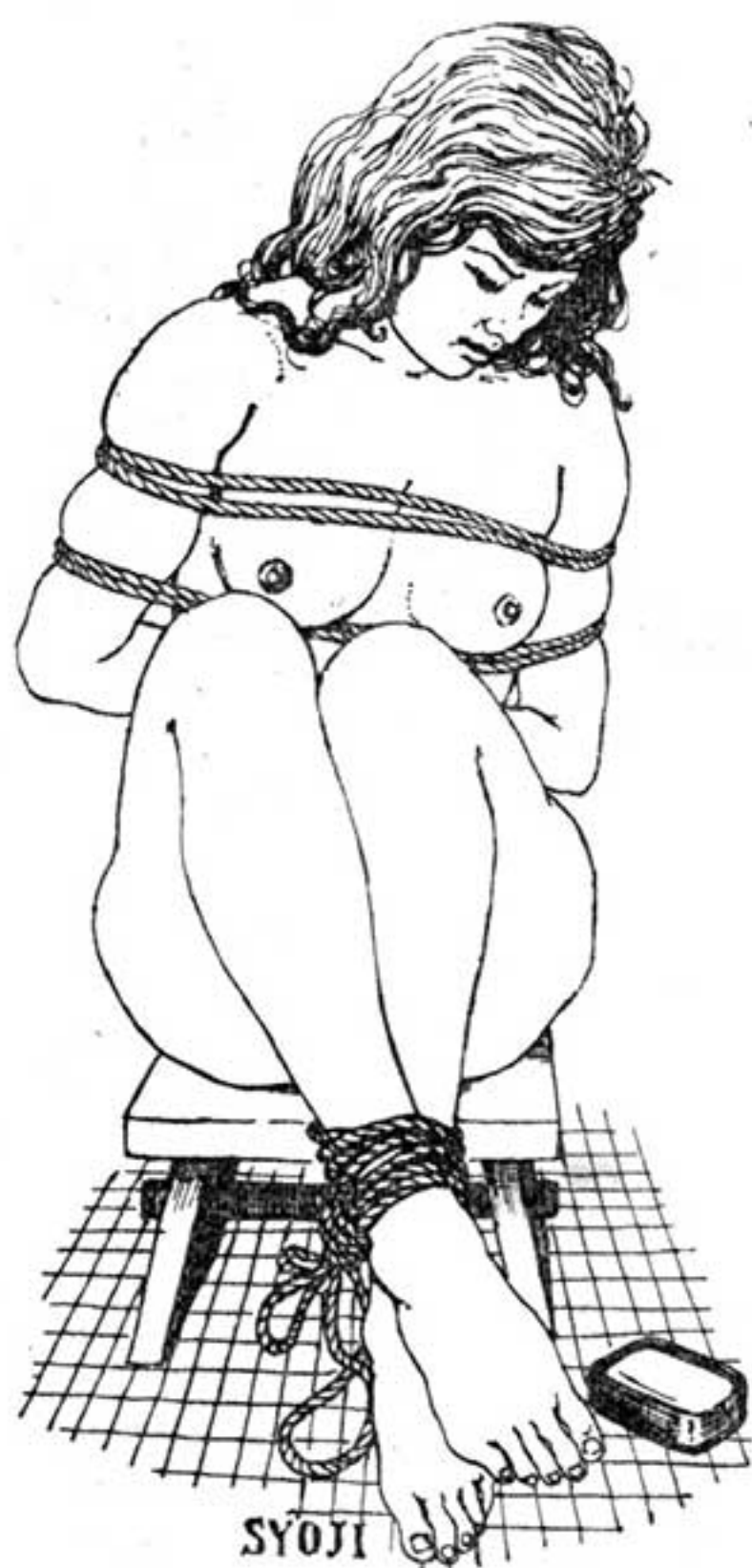
そしてなおかつ、女の原野は広いのだ。いったい女はどこにいるのだ。いつでも、どこでも、女は自己の資質を知らぬ間に、毎日を通りかかっている。一晩で、この全部の女の、知られざる秘密の部分を、スカートをめくるように知らせてやる手段はないものか。しかも同時に、何百万、何千万、ありとあらゆる女のスカートがまくられたら——

女は自分が女であるということからくる秘密と神秘に気づいて、声をあげるだろう。

「何が楽しいって、生きた人間を、動物か器具のように、おもちゃにして切りきざんで、それを笑ってやることほどおもしろいことがあるだろうか」

マゾヒストは、ひとりの女のそれだけでなく、女性全部のその声を聞き出したいのだ。

沖涉二小品傑作集





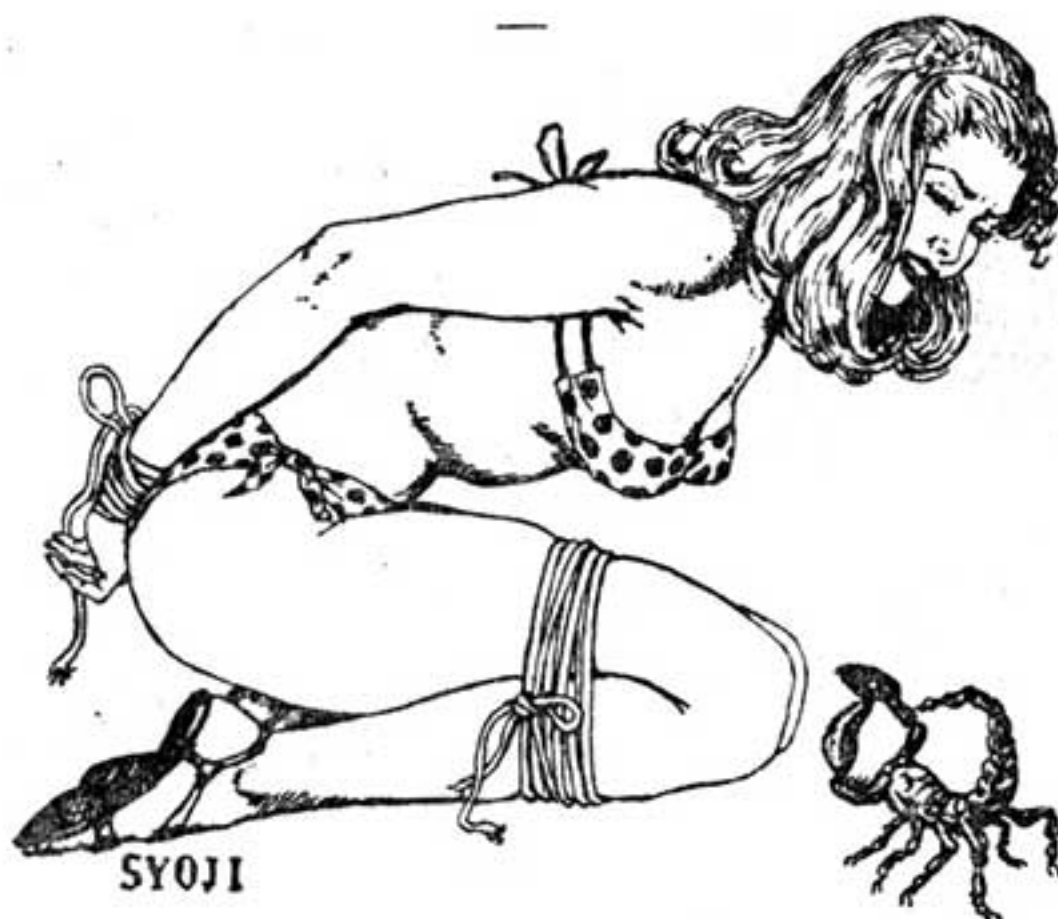
SYOJI



SYOJI



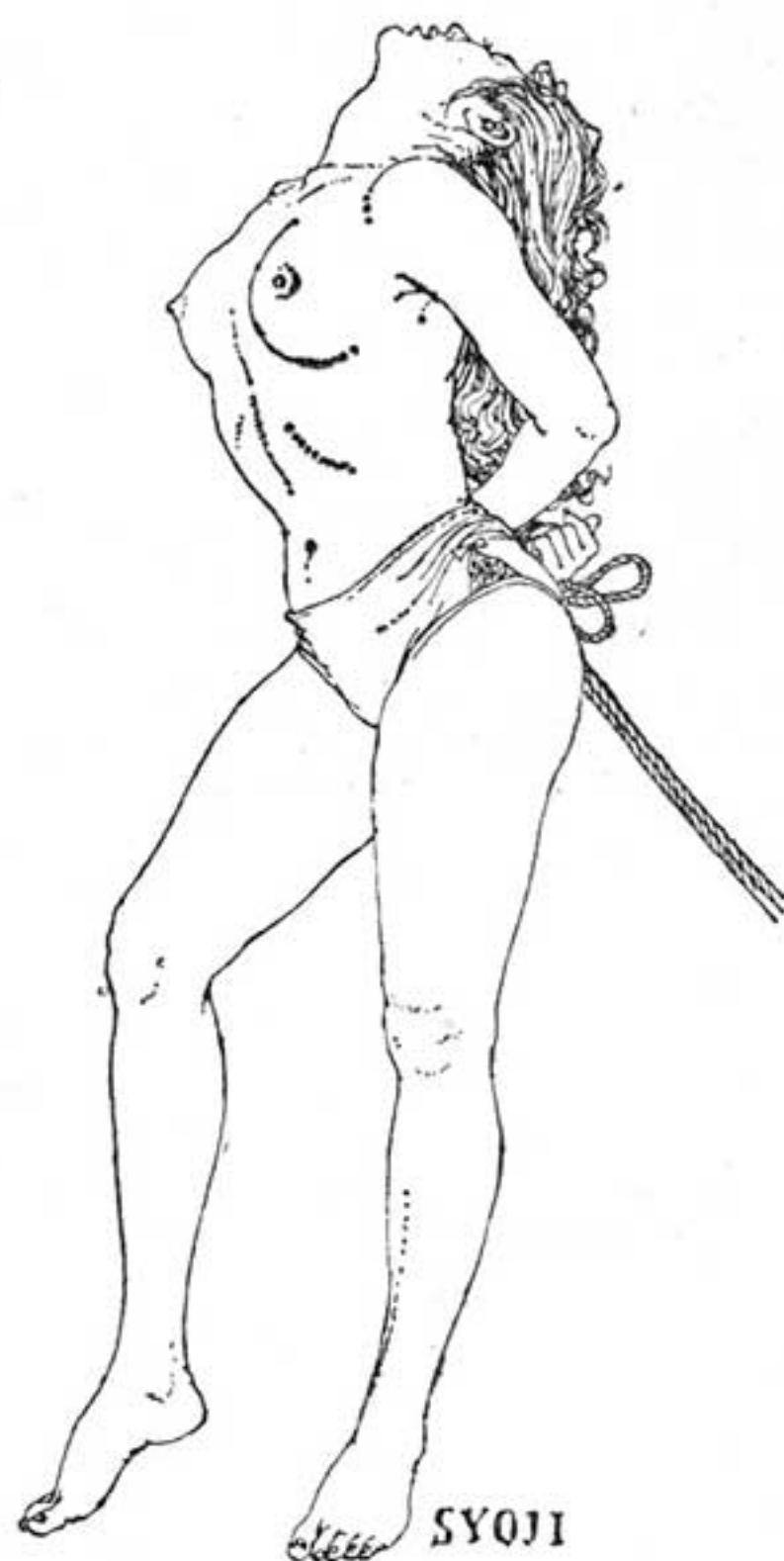
SYOJI



SYOJI







沖涉二★小品傑作集

■ 国に身を捧ぐる者に わが身を捧げん

指名された女

九十九十郎

山田彬弘・絵



ナチス・ドイツにおける国民兵の戦意昂揚に関する法案の一部。

「……ヨッテ、前線ニ一定期間勤務し、特ニ顕著ナル成績ヲオサメタ兵ハ、賜暇ニ際シ、イカナル女性ヲモ、ソレガ法律上正当ナル夫を有スルト否トヲ問ハズ、指名し、被指名者ノ同意ヲ得タ上ニオイテ、コレト同棲スルコトガデキル。……」

村の中央を通るまっすぐな道を風が吹き抜けていった。晩秋の陽光に白く乾いた砂が古新聞を踊らせ、戸を閉め切った両側の家々に

そうて走り抜けていった。

人通りはほとんどなかった。遊んでいる子供の姿さえなかった。ただ所々に人だかりがしているところを見ると、それはきまって食料品店の前に列を作っている人達であった。その人たちの足元にも風が舞っていた。

ハンスは列の人たちの視線を痛いほど感じながら、それでも、ゆっくりと自分の影を踏みしめるようにして歩いていった。彼はことさらに振り返って見なくてもよくわかっていった。彼等がどのような視線を自分に向けているかを。彼等の視線が、ひと眼でそれとわかる前線からの帰休兵の泥にまみれた軍装を無



視して、ただ、その肩にズシリと重くふくらんでいる軍用袋だけに注がれているのを。彼らはその中に何がつまっているかを知りつくしているのだった。

ハンスは顔をまっすぐ前に向けたまま、軍靴をゆっくりと進めていった。背にした袋につまった、帰休兵に特配される食糧品の数々を飢えた眼つきで追う人々の表情に耐えられなかったのである。

どれも一様に疲れ切った顔だ。深く皺を刻んだ顔の奥から、貪慾と羨望とあきらめのいりまじった眼が悲しく光っている。それが帰休兵の心を乱すのだった。そして、陽焼けしたその帰休兵の顔にも疲労の翳がおおいがたくあらわれていた。

家並みがとぎれると畑中の並木道になった。まだ若いポプラの繁りが、白い葉裏をきらめかせて、ハンスの頭上でざわめいていた。

左手の山際に、深い針葉樹の森を背にして白壁に赤い屋根をいただいた別荘風の建物が望見された。

それが眼ざす家らしいと知って、ハンスは重い軍用袋をゆすり上げて、足を早やめた。その家は、寒村の池に降りる鴨や鴨の雛をする人のために建てられたコティジらしかった。

た。木組みをむき出しにした山小屋風の二階屋で、周囲には小さな花壇などもしつらえてあったが、それは人手不足のためか、荒れ果てて、す枯れた雑草の間から、ダリヤが朽ちかけた赤い花卉をのぞかせていた。

あたりには人影もなかった。裏の樅の林を渡る風の音が、静けさを一層深いものにしていった。

ハンスは入口の扉に取りつけてある古風なノッカーを鳴らした。

やや間をおいて、中にかすかな足音が聞こえた。ノブがまわって扉が細めに開いた。

「どなた」

ハンスは軍用袋を傍におろすと、軍靴のかかとをカチッと合わせた。

「シュトラッサー夫人でいらっしやいますか。私はパウル・リヒターの友人で、ハンス・ガーラントと申すものです」

パウルの名を聞くと、女の明るい空色の瞳に不安の色が走った。

「なにかご用でしょうか……」

「パウルから奥さまに、伝言を頼まれたのです。入らせていただだけませんか」

女はしばらくためらう風だったが、やがてハンスのきつい表情に気押されたように、戸を大きく開けて、中へ招じ入れた。

内側がすぐ居間になっていて、本宅から疎開して来たものらしい、コティジには不似合いな贅沢な家具が、せまいばかりに並べてあった。

正面の大きな暖炉の上の黒く錆びた銀色の額縁の中から、ナチス親衛隊大佐の軍服に身を固めた、短い口髪を生やしたきつい顔があたりを睥睨しているのは、この家の主人であろう。

ハンスはそれを横眼でにらみ返しながら、久しく腰かけたことのない、体が沈んでしまふような、柔らかい天鵝絨のソファに腰を降ろした。

「パウルからは何のことづけでしょうか」

向かいあって席についたシュトラッサー夫人は、何の挨拶もなしに、いきなりこう切り出した。ほっそりした白い指をきちんと組んで、突然現れたこの埃まみれの帰休兵が何を言い出そうと一步も引かぬという意気込みを、その固いからだつき全体で示していた。その背後に西日を受けた白いレースのカーテンが風にそよいでいる。

ハンスは夫人の問いに答えずに、半ば夢を見るような眼つきで、シュトラッサー夫人の固い姿勢を見つめていた。

逆光を受けて、ひつつめに結いあげられた

金髪が、聖者の輪光のように夫人のこわばった表情を縁取っていた。あごから首すじにかけての白くなめらかな肌が、しっとりとした輝きを見せている。そして、よく光る碧い眼が、成熟した女の落ち着きに、一種独特の生氣を与えていた。それが男の心をとらえて離さないのだった。

女は眼を閉じて、身じろぎをした。

眼が閉じられると伶俐さが消えて、つつましいやかな表情になる。

「何でございましょう。わたくし、すこし用事をひかえていますので……」

沈黙に耐えかねたふうに、女が再び口を開いた。

「おひとりでお暮しなのですか」

ハンスがぶしつけな質問をした。夫人の瞳がけわしくなった。

「ひとりで暮しております。ですから、早く用事をおしやって、お引き取り下さい」

「きょうは例の手伝いの小母さんと呼ばないんですか」

ハンスの陽焼けした頬に微笑がのぼった。

「手伝いの女とはだれの事ですの。いったいあなたはここへ何しに来たのです。パウル・リヒターがどうしたというのです」

「お忘れになったはずはないのだが。ほら、

パウルがここに来た時、あなたがご自分の貞操の証人としてお呼びになった女のことですよ」

ハンスは白い歯を見せて笑った。夫人がすつくと立ち上った。恰好のよい唇をふるわせて、叫ぶように言った。

「お引き取り下さい。でないと……」

「でないと、どうします。警察でも呼びますか。ナチ親衛隊大佐夫人のお呼びとあれば、サイドカーですつ飛んで来るでしょうな」
「やってきてから、蒼くならないようになさい」

そう言って、夫人は部屋の片隅の電話器の方へ行きかかった。ハンスはテーブル越しに腕を伸ばして、相手の二の腕を掴んだ。夫人は腕を掴まれたまま振り返って、勝ち誇ったように言った。

「さあ、出て行くなら今のうちです」

ハンスは相手の腕を離さずに、テーブルをまわって、夫人の前に立った。向かい合って立つと、夫人の顔は、ハンスの肩のあたりまでしかなかった。

あわてて身を引こうとする夫人を、両腕を掴んで引きもどし、元の椅子に押し倒すようにして掛けさせた。夫人の美しい顔に、はじめて恐怖の色が走った。

「わざわざ警察を呼んで、噂のタネになることもないでしょう。証人には口のかたい、あなたに忠実な小母さん一人で十分じゃありませんか」

ハンスはあくまでも、落ち着きはらっていた。それは苛酷な戦場で鍛え抜かれた神経のせいかも知れなかった。

「な、なにをなさろうというのです」

「もう、たいがいお察しでしょう。あなたを『指名』したのですよ」

ハンスは指名という言葉をとさらに強調した。

「し、指名？」

夫人の怖恐の表情に困惑のさざ波が波紋を拡げていった。

「親衛隊大佐殿の令夫人といえども、指名の対象から外されてはいないのです。ご存知なかったのですか。いや、充分ご承知のはずだ。そうでなかったら、パウルにあんな真似はなさらなかったはずだから」

ハンスは、ゆっくりとひとりごとを楽しんでいるようにしゃべった。

夫人はハンスから眼をそらした。ほっそりした、抜けるように白いうなじの線がこわばって、ひくひく痙攣していた。

ハンスは、そんな夫人の様子を灰色の眼で

見降ろしていた。

しばらく、無言の時間が流れた。西に傾いた日の光がレースのカーテン越しに夫人のうなじから背中中に落ち、金色に輝くおくれ毛が白い肌にたわむれるのを、ハンスは美しいと思って見とれていた。夫人はしきりに膝の上に置いた両手の指を組んだりほぐしたりしていた。

「指名には本人の同意が必要です」

夫人はやっと心を決したように、かすれ声で言った。顔はそむけたままである。

「規則ではそういうことになっているようですね」

「わたくしは同意はいたしません。するものですか」

ハンスは夫人の傍の椅子にゆっくりと腰を降ろした。

「同意を拒めば、その人に圧力が加えられる事は噂でなりとお聞き及びでしょうね。政府は否定しておりますが、指名に同意を与えなかった女に、有形無形の迫害が加えられるという事は公然の秘密です。軍需工場への徴用か、配給量の切り下げか、もっと悪くすれば、何かデッチあげて、その罪名のもとに強制労働です」

指名された女に、逃がれるすべはないのだ

った。国がそれを強制しているのだった。

「もちろん、うまく立ちまわって、指名をさけている女もいます。たとえばあなたのように。あなたはパウルの指名に同意を与え、書類にサインもしておきながら、パウルが気が弱く、その上、いまだに自分を恋しているのを利用して、彼をうまくまるめこんでしまった。そしてその上に、ベルリンにいる夫に対する貞操のあかしを取るために、第三者の女まで呼び寄せるといふ慎重さだった。結局パウルは、サインをもらいながらも、あなたに指ひとつ触れられずに休暇を終わってしまった」

ぼつりぼつりと思い出しながら語るハンスの声には、どこか悲しげな響きさえ交っているのだった。

「わたしには夫があります。貞操を守ろうとするのは当然の義務です」

夫人はハンスを見据えるようにして、唇をふるわせた。この危難をどうしてもはらいのけようとする決意が、引きしまったあこのあたりに、ありありとうかがえた。

「ここへ来る途中、村の人たちが僕のかついていたこの軍用袋に飢えた眼をそそいでいましたかね。一本のチョコレート、ひと缶のパターにありつこうとして、すすんで指名され

たがっている女が近頃多いのに、あなたのその態度は立派だ。もっとも、親衛隊司令部の高級将校を夫に持っているあなたには、食べる苦勞はまったくくないのだが」

ハンスは薄く笑った。

「何とおっしゃろうと、わたしは同意などいたしませんから」夫人はハンスの言葉に取りあわずに拒絶を繰り返した。

「ご主人がにらみつけている前で同意というのは、やはり妻としてしにくいでしょうね」と、ハンスは暖炉の上の肖像画をチラと見やうて言った。

「主人は親衛隊でかなり有力な地位におります。もしも、しいて……」

言いかけた言葉を思わずとぎらせたのは、その時ハンスの顔に浮かんだ笑いが、いかにもものすごかったからであつた。口は笑う形に開いたが、声は出ず、眼には憎悪の色さえ浮かんでいた。

「僕は東部戦線から帰つて来たのです。おわかりですか。全独軍の恐怖の的になっている東部から帰つて来たのです。軍が札つきの囚人部隊さえ投入している地獄から帰つて来たのですよ。あなたのご主人だつて、これ以上に悪い所へ僕を転属させられますまい」ハンスのからだだが怒りのためにひとまわり

ふくれあがつたように見えた。夫人は恐怖で身をふるわせた。

それまでカーテンを白く浮かびあがらせていた夕日が、潮が引くように消えた。それと同時に夫人の金髪の輝きがあせて、部屋の隅から夕暮の気配が対峙する二人の足元にしのび寄つて来た。

二人は塀の上の猫のように眼だけを光らせて向かい合っていた。

しばらくたつてから、ハンスがほそりと言つた。

「食事の仕度は誰がするのですか」

夫人は無言である。

ハンスは上着のボタンを外して、内ポケットから何か書類のようなものを取り出した。夕暮れの微光の中に、その白さが眼にしみるようだった。

「書類はここにそろっています。あとはあなたのサインだけです。承知なさるのでしょね」

書類をつきつけられて、夫人は両手を背後に隠すようにして身を引いた。眼が追いつめられた狐のように光った。

「やはりいやですか。サインがなくなつても僕には大して影響はないんですが、ただあなたの方がお困りになるだろうと思つて。それと

も、ご主人の威光で、署名を拒否しても、あなたに大した影響はないのですかね」

ハンスは書類を手元に引き寄せて、二つにたたんだ。夫人の瞳の奥で光が動いた。

「サインしますわ。でも、お願いです。わたしが人妻であることを思いやつてください。何もしないと約束してください」

夫人は美しい顔に媚の色さえ浮かべて哀願した。先ほどの固い拒否の態度を一挙に引込めて、男の心をくすぐるような哀願に出るその早さに、女の狡猾さがあらわに見てとれた。しかし、その涙さえたたえた哀願の表情は、どんな猛々しい心をもやわらげずにはおかまいほど美しかった。

「奥さん、それは少し虫がよすぎる願いだとは思いませんか」

ハンスは、夫人の瞳が涙の奥でエメラルドのように輝きを増し、唇さえ濡れてくるのを灰色の眼で冷たく見返した。

「だから、こうしてお願いするのです。その代り……」

「その代り何です」

「今度パウルがわたしを指名したら、きっとサインします」

夫人は食い入るような視線をハンスに注いでいる。



「サインしても、この前のような事になりかねませんね」

「いえ、今度こそは、本当に、み、身を任せます」

「信じられませんね。パウルは僕と違って気が弱いから、あなたにこう出られたら、又しても指をくわえて引込むでしょう」

「ほ、ほんとうです。神様に誓って……」

夫人はからだを乗り出し、テーブルに手をかけて、必死のおももちでハンスをふりあおいだ。

ハンスはしばらくの間、死んだような表情で夫人の眼から涙の玉が紅潮した頬を伝って流れ落ちるのを見つめていたが、やがて低く圧し殺した声で言った。

「パウルは死にましたよ」

その言葉は、まるで魔法の呪文のように、夫人の表情を、そこに一瞬凍りつかせた。テーブルの端を掴んだ、美しくマニキュアされた桃色の指先が白く変った。

やがて、じょじょに氷がとけ落ちるようになり、彼女に表情がもどってきた。

「信じられませんわ……」

夫人は肩を落として、嘆息のように小さく

つぶやいた。ハンスは唇の端を引き歪めた。
「われわれは戦争をしているんですよ」

そう言って、ハンスはあたりの静けさにふと気づいたように、室内を見廻した。風が落ちて、家の背後の樅林も夕闇の中に鳴りをひそめている。ここには、腹の底から恐怖を突き上げる十五センチ榴弾砲の炸裂音も、耳を聳する二十ミリ重機の発射音も、神経を引き裂くような金属音を引いて、地上すれすれに襲ってくる襲撃機もなかった。夕闇さえひっそりと訪れて来るのであった。

ハンスは立って行って、壁のスイッチをひねった。活気を帯びた明かりが部屋にみなぎった。一時闇の中に沈んでいたシュトラッサー親衛隊大佐が、再び部屋の中を睥睨しはじめた。その眼の人にシュトラッサー夫人が、うなだれていた。

ハンスはその背後に歩み寄って、柔かい肩を両手でおさえた。彼の目の下には、再び輝きはじめた金髪の渦巻と、うなだれたほそい白いうなじがあった。

ハンスの掌の下で、女のからだは逃がれようと身悶えした。ハンスはその掌を、女の腕にそうて、次第に背の方に這わせていった。
「いやです」

夫人は小さく言ってからだを固くした。



ハンスは両手で、夫人のそれぞれの手首を固く掴むと、そうはさせまいとあらがう腕を背後にねじ上げた。突然おそいかった暴力に、夫人は悲鳴をあげた。

「な、なにをなさるんです」

それに答えずに、ハンスは、椅子のうしろで重ね合わせた夫人の手首を左手でひとつに掴み、右手を軍服の大きなポケットに突っ込んで、中から細い麻縄を取り出した。手早くそれで、夫人の手首を縛り、あまった部分を夫人の頸にまわして、その端を椅子の背に巻きつけた。頸と両手で椅子に固着された夫人は、自由な腰を反らして、縄でくびられたのどの奥で、くぐもったような悲鳴をあげた。

前にまわったハンスは、別の麻縄で、夫人の足首を別々に椅子の脚に縛りつけた。

「やめてっ。し、縛るなんて卑怯です」

夫人はなおも椅子をきしませて、固縛をはね返そうともがいた。

その恐怖と憎悪に満ちた視線を、男の冷たい灰色の眼がはね返した。その眼はあらゆる感情の動きを消し去って、北国の冬の空のように沈うつだった。

夫人の民芸風の刺繍をあしらったブラウスの襟に男の手が伸びて、ボタンをゆっくりとはずし始めた。

「よししてッ、なにをするんですッ」

「戦線に帰ってから、パウルは以前より一層あなたに取り憑かれてしまったようでした。無理もない。いざという時におあづけをくったのですからね。よく、その時の無念さを僕に話して聞かせたものです。時がたつにつれて、彼の夢想はだんだん気狂いじみて来ました。激しい戦争の終わった後など、泥水のたった塹壕の中にべたりと尻を落として、『今度こそはやってやる。サインなんかクソくらえだ。いやといえ、縛りあげても言うことを聞かせてやる』そんな時の彼は、先程の戦斗で燃えさかっている陣地の煙の中にさえ、あなたの姿を追い求めているようでした。僕はただ、パウルの果されなかった仕事を代ってやっているだけなのです」

夫人は白いのどをあえがせながら、ヒイヒイと声にならない悲鳴をあげ続けた。ボタンをはずし終ると、ブラウスを肩脱ぎにして、腕の方にずり落とした。まるい肩があらわになって、明るい電灯の下で、ゆで卵の白味のようにつややかに輝いた。ポケット・ナイフで肩にかかっているスリップの紐を切った。贅沢な絹のスリップは、身悶える夫人のからだの動きに従って自然に下にずり落ちたが、胸のふくらみにせかれて、かろうじて、そこ

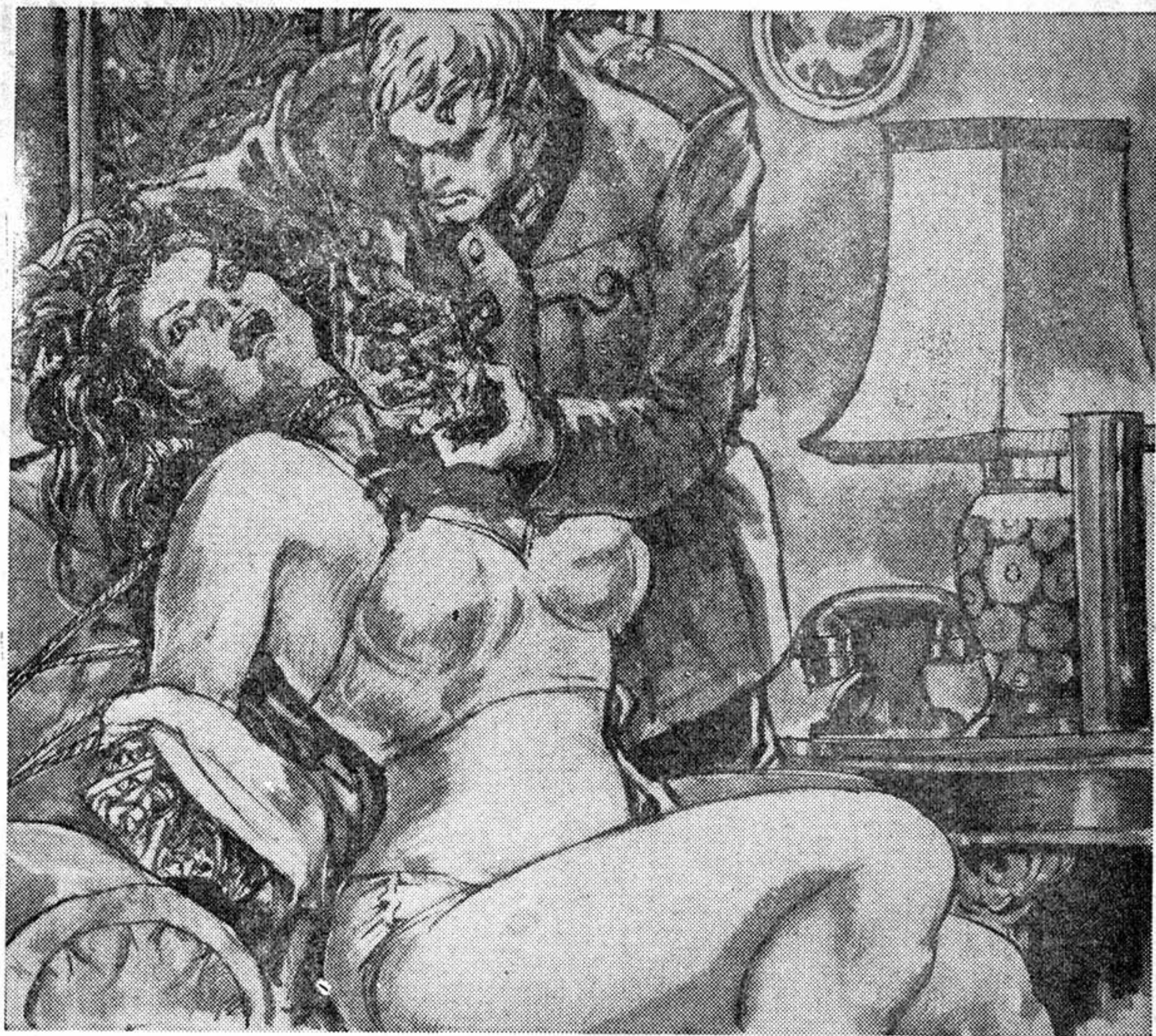
にとまった。

「前線の若者は、誰も彼も女を夢にまで見ます。一日も早く、手柄をたてて休暇を手に入れた、目ざす女を抱くことばかり考えているのです。かねて想いをこがしていた娘、自分を裏切って他人の人妻になった女、それを自由にできるのです。心に深く秘めて人に打ちあけたことはないけれど、時おり胸の底から浸みあがって来る、あの破廉恥な、それだけに思っただけでからだのほてってくるようなあの願い——大抵の人間はついにこれを遂げられずに一生を終えてしまうあの願いが、国家の名によって解放されたのです。あなたは爆発点にまで高まったパウルの願いを、奸智にたけた策略でもって、するりとかわしてしま

った」
「女にも我が身を——貞操を守る権利はあります」

夫人は唇をわなわなとふるわせて叫んだ。その拍子に、今まで乳首のあたりにひっかかって、かろうじて支えられていたスリップがはらりと腰のまわりに落ちた。たわわに実った乳房があらわになった。

ハンスは、完璧な彫刻を思わせるそのトルソのみごときに、思わず息をのんだ。男の愛撫にみがき抜かれたというのだろうか。チー



ズを練り固めたような厚味のある白さの奥から、しっとりとした輝きがにじみ出るようである。

夫人は縄で仰向かされたままで、睫毛を伏せ、さも、羞恥に耐えられないといったように、顔を左右に振って、呻いた。

「これをひと眼だけでもパウルに見せてやりたかった」

つぶやくように言いながら、ハンスは戦場の泥でひび割れた指先を、蒼みをおびた、胸に這わせた。

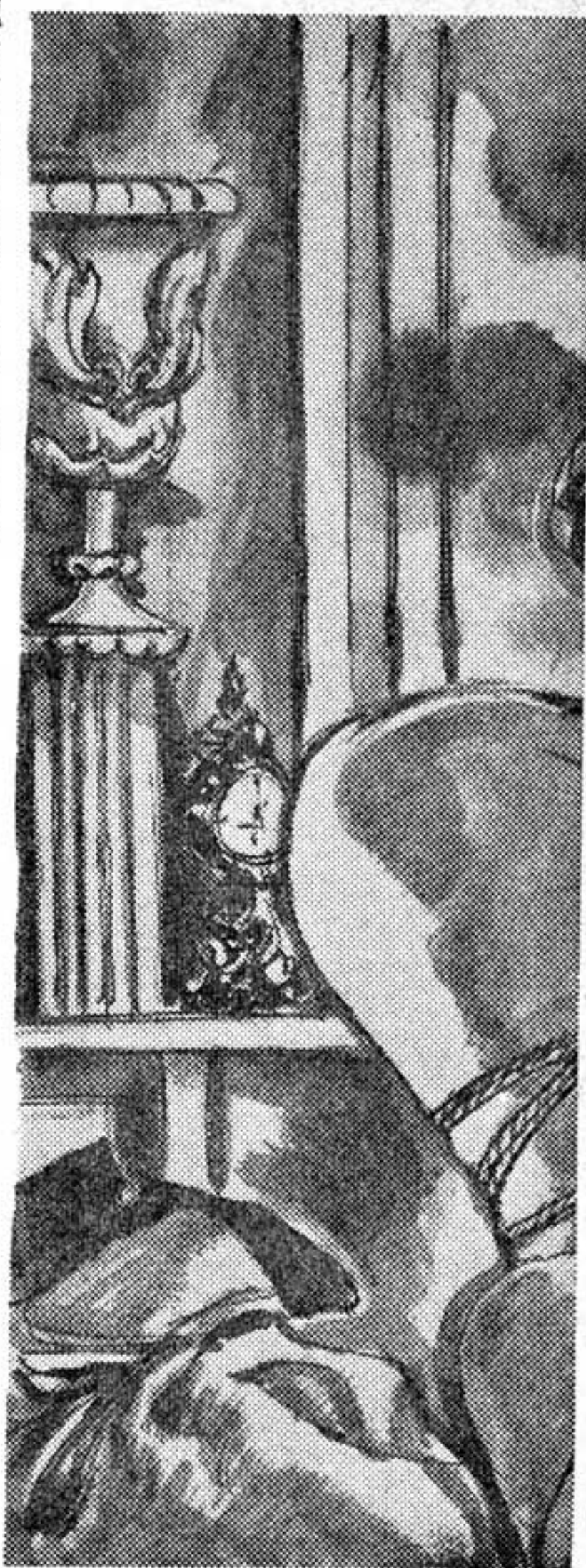
ぬくもりが、遠い故郷の歌のように、流れ込んできた。

掌ですくいあげるようにすると、手ごたえのある重みが、掌の中で弾んだ。

夫人はあえぎとも呻きともつかぬ声をのどでならして、身を悶えさせた。

ハンスは包み込むようにして握んだ指先に力をこめた。

「あなたはかつてはパウルと婚約までした仲だった。あれはまだナチスが政権を取らない前だった。その当時、パウルは当時の青年が皆そうだったように、共産党に同情的な立場を取っていて、よくアジ・ピラを配ったり、小さな演説会では演壇に立ったりした——」
ハンスは話しながら、手にした暖かい肉の



塊を右に左にねじるようにした。

彼の十本の指はその中にめり込み、指の間からは、白い薄い皮膚が奇妙な形ではみ出し、出ていた。

夫人は唇を噛みしめ、鼻孔をふくらませて呻き続けていた。

「——それが、あのナチス党による国会議事堂焼打ち事件をきっかけに、形成は逆転した。共産党が卑劣なテロで次第に後退していくにつれて、ナチの茶褐色のシャツが街をのさばって歩くようになった。あなたはパウルの婚約を一方的に破棄して、親衛隊——その当時はまだ突撃隊といていたが——の大尉と結婚した。共産党の黨員でもなかった善良なパウル、そのパウルに与える筈だったこのからだを、図体が大きいだけが取り柄の田舎者に与えてしまったのだ——」

ハンスは思い切り強く、固くしこってきたものをひねりあげた。

「ゆ、ゆるして……」

夫人の閉じた眼から涙があふれはじめた。ハンスの黒い左手が、のけぞってひくひく動く白いのどを握んだ。

「——そんな貞操を今更後生大事に守り抜こうというのか」

口を開き、舌をのぞかせてあえいでいる夫人の両頬に、鮮烈な音をたててハンスの右手が往復して飛んだ。夫人の恐怖に見開いた眼が、そのたびに光を失っていった。そして、ハンスが手を離すと、夫人は首をガクリと折って、力のないすすり泣きの声をもらしはじめた。焼きごてを当てたように、十本の指のあとが赤く印されていた。

ハンスはしばらくの間、小刻みにふるえる女の白い肩を見降ろしていたが、ゆっくりとしゃがみ込むと、スカートのわきのホックをはずし始めた。

夫人のすすり泣きがピタリと止んで、新しい

い戦慄が全身を吹き抜けてゆくのが感じられた。

「それだけはゆるして……もうおやめになつて……」

ゆるめられたスカートが、荒々しく腰から引き剥がれる羞恥に、夫人は金切声をあげて哀訴した。

絹地のすれ会うかすかな音が、ハンスにはとてつもない贅沢な楽しみのように感じられた。

ストッキングをつけていない夫人の下半身がパンティだけを残して剥き出しになった。薄絹の純白のパンティが夫人の豊かに成熟した腰にピッタリ張りついて、透けて見えた。

そこから両側に伸びる円錐形の太腿は、電灯の明りをしっとりと吸って、なまめかしく息づいていた。

夫人は、次から次へと加えられてくる男の暴虐に精根を使い果たしたかのように、うなだれたのどの奥からすすり泣きの音をもらすだけであった。

男の灰色の瞳は、あい変わらず何の感情もあらわせずに、うっとりという光りをたたえて、眼の下のたぐいまれな裸形を這いまわっていた。

「奥さんにみごとに振られて再び前線に帰って来てからというものは、パウルは氣違ひのようになつて働きました——」話しながら、ハンスは軍用袋の中をかきまわし始めた。

「進んで危険な任務を買つて出て、何か早く手柄を立て、一日でも早く、もう一度休暇を手に入れようとあせつたのです。そして戦斗のない時は、うわごとのように、幻のあなたに向かつて呪いの言葉、悪魔のような復讐の方法をあこれと並べつづけたものでした。そして、このあせりが手柄を立てさせる前に、パウルの命を奪つたのです」

ハンスは袋の一番底から、鈍く金色に光る真鍮製の円筒を取り出した。それは直径が十センチ足らず、長さは三十センチ以上もある重そうなものだった。夫人の恐怖に打ちひしがれた碧い眼が、それに吸いつけられた。ハンスはそれをいじくりまわしながら、話を続けた。

「僕が、休暇に入る一週間ほど前のことでした。敵の大規模な反撃が始まつたのです。最初は一昼夜ほとんど休みなしの榴弾砲の砲撃で、われわれは急造の陣地にひれ伏して、ただ時の過ぎるのを待つより仕方ありませんでした。ちょうど最初の雪が降りはじめたので、空襲が同時に行われなかったのがさい

わいでした。それでも陣地の三分の一は徹底的に掘り返され、雪と泥と血が色どりよろしくミンチにかけられたようにこねあげられました——」

ハンスは同筒をテーブルの上に立て、その表面にくつついている泥のかたまりを丁寧にこそぎ落しながら話していた。彼の手つきはまるでその冷たい金属筒を愛撫しているかようであつた。

「砲撃が止むと、いよいよ戦車のお出ましです。奥さんは戦車のキャタピラーのきしむ音を聞いた事がありますか。いや、ヒトラー総統の誕生記念日に、ウンター・デン・リンデを行進する戦車の音をいつているのじゃないんです。戦場の戦車は泥をこねまわして進むんですから、あんな石畳の上を行くような騒々しい音はたてません。その代り、導輪がキャタピラーに歯車の歯を食い込ませて、何十トンもある重戦車を時速五十キロで走らせるあの腹の底から肉体をむしばんでゆくような、大地そのものが足元で陥没してゆくような音。それがダテではなしに五十ミリの速射砲をふり立て、雪と泥を蹴散らして突進して来るのです。あなたの方に突っ込んで来るのです——」

夫人の顔に新たな戦慄が走り抜けた。素裸

のからだを雪の曠野に曝して、戦車の蹂躪に身をゆだねようとしているかのように全身を鳥肌立てていた。

「戦車は盲です。ただ突進する。そしてそのキャタピラーに触れたものは、すべてこたごに粉碎される。その正面から逃げおくれた者は機銃の掃射で不随になつたからだをどうすることもできずキャタピラーが眼の前に迫つて来るのを待つていないければならない——」

「や、やめてください。そ、そんなことをなせここで話さなければならぬんです。いや、いや……」

夫人は頭を激しく振つて悲鳴をあげた。

「必死に傷ついたからだをいさつて、一寸でも五分でもキャタピラーから遠ざかろうとする。しかし、下はぬかるみ。そして相手は時速五十キロ。鋼鉄の塊はそんな虫ケラなどそこにいるということさえ知らずに泥を掘り返し、雪を蹴散らして突っ込んで来る。その男はのども張りさけんばかりに絶叫する。しかし、五十センチもある戦車の装甲はそんなものなどとはじき返してしまふ。恐怖で狂つたように見開かれた男の瞳に、泥にまみれたキャタピラーのギザギザが大写しになる。こんな時に、人間はどうして死んでしまえないんで

しょうね。心臓が破れ、脳が麻痺してしまうまで、どうして人間は死ねないのですかね。自分の胸がまつぶたに引き千切られ、腕が飛び、肋骨がバリバリ音を立てて砕けるのを、その眼で見、その耳で聞くまで、どうして死ねないのでしょうかね」

夫人は痴呆のような眼をぼんやりとハンスの方に投げて、ガタガタ震えていた。

「ま、まさかパウルがそんなふうに死んだというのでは——」

蒼ざめた唇が、やっとこれだけのことを言った。

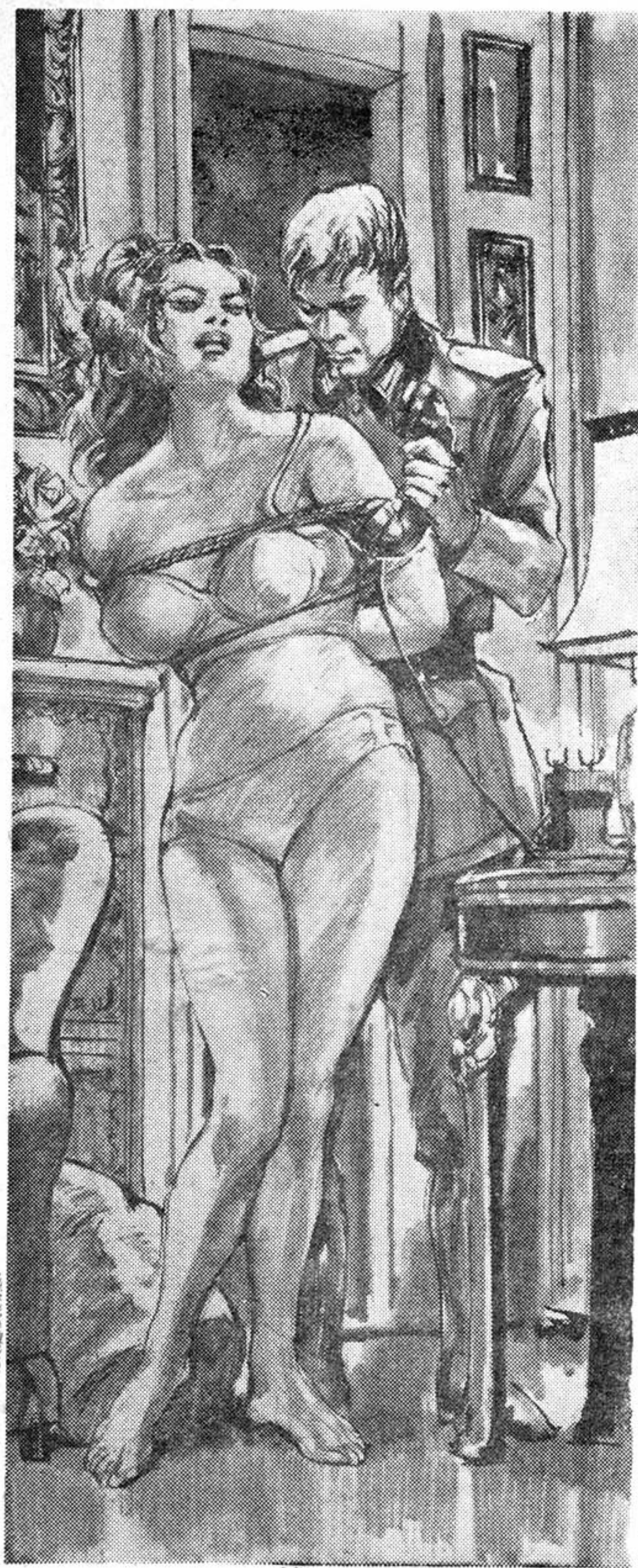
ハンスは、テーブルの金属筒を逆さまにした。コトリとかすかな音をたてて、中から何かがテーブルの上に転がり落ちた。

ヒツと夫人が息をのむ音がした。

テーブルの上にグニャグニャになって横たわったのは、人間の右手だった。泥と血糊がいたる所にこびりついていて、間から、わずかに血の気を失った蒼白いものがのぞいている

のは、たしかに人間の皮膚だった。手首の所から何か巨大な力で千切り取られたようなその肉体の一部は、奇怪な物体に化してテーブルの上に転がっていた。

「パウルの手首です。あれ程奥さんの肌に触れ、若い血の脈打つ肉体を愛撫したがって、手です。彼の生前の肉体を思い起こさせるものは、これだけしか残りませんでした。あとの部分は泥と見分けられない程にこねあがられひきつぶされてしまったのです。僕はこれ



を、対戦車砲弾の空薬莖に入れて、大事に持って帰りました」

ハンスはパウルの血まみれの手首を取り上げると、失神寸前の夫人の乳房に、ひたと押し当てた。

「さあ、パウル、これが十何年の間お前がここがれ続けたミンカの肌だ。婚約までしたミンカ、お前を裏切ったミンカ、今をときめく親衛隊大佐夫人の肌だ——」

ハンスの声はあやしいふるえを帯び、灰色の眼にはじめて激情が燃え上がった。氷よりも冷たい死人の指で乳房を愛撫されるミンカ——シュトラッサー夫人は、羞恥も忘れて、パンティだけの腰をよじり、声にならない悲鳴をあげ続けた。失神しそうになると、ハンスの手が容赦なく頬を打ち、ひねりあげて、正気に返すのである。

鉛色の指先は、ハンスの手に導かれて、乳房から腹、腹から絹にくるまった腰へと這い降りていった。白い腹がせわしくあえぎ、冷汗が力を失った女の全身をしつとりと濡らした。

「ああ——ッ、ゆるしてくださいまし。わ、わたしは悪い女でした。も、もう……よしてッ、そ、そこだけはッ」

泣き悶えるミンカの髪を掴むと、グイと仰

向かせ、その濡れた眼をのぞき込むようにして、ハンスは命じた。

「それなら、パウルの指に接吻しろ。血と泥の中で、無念の思いに空をかきむしって、でいったパウルの指を、その高慢な唇で舐めてみる」

飛び出さんばかりに見開いた眼の前に、泥でもみくちやにされた白い革手袋のようなパウルの手首が突き出された。それが革手袋でない証拠に、その指先にはささくれだって紫色に変色した爪が、五つついている。必死に閉じあわせているミンカの唇を、その指先が生けるもののように、そつとなぜて通り過ぎた。

「口を開けろ」

グラグラゆれる夫人の頭を、ハンスは髪を驚掴みにしてゆすぶった。夫人ののどがゴロゴロ鳴った。

夫人は失神していた。失神しても、その唇は石のように固く閉じたままであった。

部屋の中に静寂が戻ってきた。ハンスは、ふとさむ気をおぼえた。それは秋の夜のせいばかりではなかった。手にしたパウルの手首が、ズシリと重い冷たさを伝えて来るのである。眼の前に輝くような裸身を曝して気を失っている夫人の肌のぬくもりが、こころよい

まどろみの誘惑に似たなつかしきをもって、ハンスの指先によみがえってきた。

ハンスはパウルの死んだ手首をそこに置いて、夫人のいましめを解き始めた。着衣も手足から抜き取った。

ソファにぐったりとしたからだを横たえて、パンティに手をかけた時、女は低く呻いて身をよじった。失神から醒めようとしているのだった。ハンスは夫人を俯伏せにするのと、再び両腕を背後に交又させて、手首を縛った。縄のあまりを、今度は胸の方にまわして、乳房の上下をしめあげた。そうしておいてパンティを足首から抜き取った。それは夫人の素肌のぬくもりを吸収して温かかった。ハンスはパウルの手首をその絹のぬくもりで包んでやった。

その時、部屋の片隅で、電話のベルがけたましく鳴り始めた。それは、この死んだような静けさを乱すのを楽んでいるかのように断続して長々と鳴り続けた。

ハンスはその黒光りするエボナイトの受話器に灰色の視線を注いだ。夫人はソファの上で失神から醒めた。

「ああッ」

夫人の悲鳴は、自分が一糸まとわぬ全裸である事を発見した羞恥と、電話器のベルに対

する驚愕から発したものであった。

あわててソファの上に身を縮めながら、困惑した視線をハンスの上に投げてきた。美しい顔が泣き出しそうにゆがんだ。

「さあ、電話に出るんだ」

夫人のからだをソファから抱き起こしながら、ハンスは、はじらいに染まった夫人の耳朶にささやいた。

「でも、手が……」

夫人はハンスの腕の中で身を縮めたまま、訴えるように言った。

「行くんだ。受話器は僕が持ってやる」

そして、ハンスは膝を折ってそこにしゃがみ込もうとする夫人の、たおやかな背すじを小突き、追いたてるようにして電話の方に歩ませた。

受話器を手にとると、ベルが止んで、再び静寂がもどってきた。

「ミンカ、どうしたのだ……」

小人がせいはいっぱい背伸びして威丈高に怒鳴っているような声が、受話器の中から飛び出してきた。ハンスはそれを夫人の耳に当てがつてやった。

「あ、あなた！」

夫人の裸身は今にも倒れそうに左右にゆれた。

「主人が留守なのをいい事にして、宵の口からベッドに入っているんじゃないか……」

電話の声はハンスの耳にも聞き取れた。ミンカの主人だった。ベルリンから電話をかけたきたのである。ハンスは暖炉の上の肖像をチラと見上げた。電話に出ている自分の妻が素裸を縛り上げられている姿だとは気づくまい。ハンスの頬に冷たい笑いがのぼった。

「い、いいえ、あなたちょっと……」

夫人は何も知らずに快活に笑っている電話の向こうの夫と対照的に、冷汗を流して震えている。

ハンスは夫人の耳から受話器をはなすと、送話器に口をつけてからかうように言った。

「夫人は今、ご指名中なのです。大佐どの」

そして、受話器をフックにもどさずに、そのままに放置した。その奥から小人の怒鳴り声がかすかに続いていた。

ハンスは床に泣き伏してしまった夫人を引き起した。

「さあ、これで決心がついたろう、行くんだ」

夫人を引き立てにかかったハンスは、部屋の隅に茶褐色の木肌を光らせている立派な電気蓄音器に、眼をとめた。

「待て、いいものがある。こんなことには万

事ムードがものを言う」

キャビネットにズラリと並んだ、モーツァルトやベートーヴェンの中に、ハンスは目差すものを見つけ出した。

それは赤いラベルの十インチ盤であった。シャーッとかすかに針音が続いて、突然それが勇壮な行進曲に変わった。

「奥さんも娘の頃はヒトラ―ユーゲントの女子部に入っていたんだらう。この行進曲にあわせて、ヒトラ―總統の前を感激に頬をほてらせながら行進したことがある筈だ。ほれ、はじまった」

ハンスは楽しそうに軍靴を高くあげて床を踏み鳴らしながら、夫人を追いたてた。夫人の号泣が一段と激しくなった。

「それ、もっと背を伸ばして。足をあげて――」

音楽にあわせて女子合唱団の斉唱が高らかに、そして誇らかに鳴り渡った。

「われら乙女は

国に身をささぐる者に
わが身を捧げん

……………」

現代マゾヒズム文化時評

(28)



森 下 高 茂

英米のカタログから

一般に、非共産圏の国々の出版物には、その読者をあてこんだ広告が多く掲載されるのが普通である。アメリカのときは、広告のページ数の方が、本文のページ数よりはるかに多く、より金をかけたページである場合さえある。そこで、毎日、毎週、毎月発行される出版物の広告主は、知恵をしばって新手、奇手の広告を案出する。意想外のアイデアでもないと、読者が関心をひかれないからであろう。イギリスともなると、さすがにアメリカほど広告の氾濫は見られないけれども、それでも、一般出版物は、かなりのページ数と費用とを広告にさいている。

こうして、広告ページは、多大の研究と、

費用をもって構成されていながら、読者の注意を、地味な本文に比べて引かないのが通常である。

ひるがえって、私たちが自分の趣味に関して切抜きを蒐集するとき、広告ページは、本文に直接関係のない意匠を使用していることと印刷物としての美術効果が、概して本文よりも美しいために、重要な対象となる。即ち、その意外性というのは、ケネディ大統領の暗殺事件の詳報の次ページに、極彩式のブラジャーの広告があつて、美しいモデルが、にんまりと笑っているといった類いである。

したがって私たちは、一定の対象を決めて蒐集するとき、内容的にまったく関係のない出版物にも目を通さなくてはならないわけである。私自身の経験から言うならば、ここに上げる写真は、何とインターナショナル・ジ

オグラフィック・マガジン誌(国際地理雑誌)の巻頭広告ページからの採集であつて、同誌の内容とは、なんら直接的な関係もない。この切抜き写真Aの発見された号は、なんとエスキモーの特集号だからである。

同様のことは、写真Bについてもいえる。この切抜きは、英国のある雑誌から採取された。この雑誌は、女とか馬とかいうものとは縁遠い内容のものである。この広告は一見してわかるように、エセックスのモス・ブラザーズという馬具商の広告である。この切抜きと、同質のもので、広告ページが、かなりの商業的意図による改変を図面に加えていても、切抜きとしての価値はうしなわれないという好個の実例が写真Cである。このページは、カウントリイ・ライフ誌から採取された。同誌のこの号の大部分は、高級貸邸宅、売別荘、



■ 写真A

草花、造園などの記事で、わずかに王室（英国）の関係記事がのっているにすぎない。

整然としたポーズ、一九六三年の流行にのっとって整髪されたコアフル、その上に、古典的なライディング・ハットがちよこんとのっている。首元まで、しめあげるようにまきこまれている白いスカーフ。襟足の美しい

テイラードの上衣、それらのすべてが、典雅さを示している。

しかし、この典雅は決してありきたりの、つまり堅苦しい感じと離れることのないあの典雅とは趣きを異にする。それは、職業的モデルが一樣に示す、あの固有の媚びによってである。この種の媚態は、娼婦の媚態——そ

れは東京では、いくらでも見るこるの出来るものである——とは全く異ったものである。

その職業の持っている簡単で非技巧的な本質、それに由来する劣等感、さらに、その裏打ちによって突然と発生する反劣等感、それを裏付け、保証する美しい外装、富貴にみち溢れた雰囲気、上品で、空疎な音楽、気取り、

その中で彼女は微笑むのである。

この媚態は、私達には彼女たちが突如としてはまり込む、性欲のはげしい、陥穴の中の淫猥を思わせる。この淫風は、エレガンスに血と肉とを与えるのである。くるぶしの上からひざの上まで、スポンサーの商号によって断ち切られている、この一枚の広告ページは、見る者によっては、生けるがごとくに描かれたポシペイの壁画の中の或る種のものさえも思わせるのである。

広告ページでないならば、この女性ほどの

女性には実際に私達の前に（写真としてでも）この衣服で現われることはあるまい。広告ページの特長は、実にここにある。

フロインディン誌

一九六四年一月二十一日号

現代ドイツの持っている、最高の美女の、ひとり、ナディア・テイラーが出演する曲馬映画の一コマである。純白に身を飾った女調馬師の写真がここにある。そして、それは私に三月一日、羽田におり立ったジナ・ロロブ



■ 写真B

リジダを思い出させた。

彼女は「白さぎ」のよう、と言われた純白のスーツに白い長靴で、この極東の帝国におり立ったのである。そのときほど群がるファンと新聞記者の姿がこの世で一番邪魔になるものと思われたことはない。それは、ちょうどミロのヴィナスの股間にむらがるハエの群のように、ジナの身边にむらがついていったのである。

私は、ジナが決して倒錯的な傾向を持っていないとは思わない。しかし、時として彼女は、身をもって被加虐の世界を再現した。そして、それらの一瞬の幻影が、私どもにとって珍貴なものであったことは否めない。

シルク・ブリーオーネ（パリ）に取材した『空中ぶらんこ』そして史劇のいくつか。それらは、ミロに埋められるにふさわしい肉体とローマのアパートで、わめきちらす主婦の舌をもったこの大女優を私たちにとって、不滅のものとした。

彼女を、自分のものとすることは、むしろ容易であろう。日本人は、女を口説くのに決して才能に欠けているわけではない。まして女を口説くぐらいのイタリア語は、十日もあればマスターできる。金、それは必要ではない。買うのではないのだから。時間、これは

だれでもが持っているはずだ。空襲の時には、とにかく防空壕に走った私達のことだから、作ってつくれない時間もないであろう。

そして、いっぽう女の立場から言っても、男は必要なのである。わたしたちが、紅毛碧眼の女性にエキゾチズムを感じるように、シナにとって日本の男子は、シンギスカンの後裔に似た容姿から、ヴェロナの強姦をフンガルの掠奪婚と蓄妾を思い出させるにちがいないエキゾチズムを持っているのである。印象的であるということ、

“それは勝利への第一歩である”
と新聞王ハーストは言った。

“騒げ、人よりもより見えようとするな。マフラーはかならず馬力を低下させる。それよりも、悪臭、騒音を、金切声を上げろ。”

それが、君の名前を人に憶えさせる一番手取り早い方法だ。”

だからエキゾチックであるというだけで、わたしたちは欧米の男性より優位を占めているのである。シナを我が物とすることは、さほどむずかしいことではない。だが、一番大切なことは、一人の女性が持っている最高の瞬間を永久に持続させることである。もしあなたが、彼女を妻としたときに、すべての美は失われてしまうであろう。あとに残るのは、大衆が羨望しているだろうという、はかない期待感であるにすぎまい。

私は、ここでイタリア女性の口説き方を説明しているのではない。それは、可能だけれど、むなししいということを言っているにすぎない。

一片のグラビアが、純白の女調馬師のイメージを私達に伝えた。そして、われわれの所有する最も美しい女性の一人シナが日本の国に足を踏みおろした。この二人の女性は同じ衣裳をつけていた。これだけの事実、私たちに、連想と、空想との、別の世界を与えるということ、私は書きたかったのである。

『性の革命』

ベンジャミン・モース著

斎田武夫訳

この書物は、昔からしばしば発行された「性の革命」という同じ題名の他の書物に比較して、一風変った主張をもっている。それは従来の「性の革命」が、十九世紀まで抑圧されつづけてきた「性」の解放「女性」の解



■ 写真C



■ 写真D

放を主とした主題を持ち、「性」を宗教的閉鎖から、「医学」により解放しようという主張を持っているのに対して、この書物は解放されすぎた性を如何に制約すべきか、又は制約すべきでないか、という点に主眼をおいているからである。

彼はまず、クラシックなフロイドに対する彼の反論を提起する。そして、それは「キンゼイ報告はもう古い」という一応の結論に終着する。けだし、これは反語であって、キンゼイは古く、フロイドは古く、著者は新しいという事なのであろうが、たしかに著者の考え方は、今日の精神的暗黒大陸アメリカにおいては、まれにみるほどの進歩性をもっている。

彼は、アメリカが、性の象徴によっておわれつくしているとして、その責任を、性的な安楽感を示唆する広告の氾濫に帰する。マディソン・スクエアは、広告業者の街であるが、著者にとっては、悪とあやまった知識の根源である。

「性愛、性行為は、二つのものを追求する」と著者は言う。

「その一つは子孫を残すためであり、他の一つは楽しむためである。かつて、十九世紀までは、楽しむことは、男性のみが持つ特権と

性の革命

ベンジャミン・モース著
斎田武夫訳

THE SEXUAL REVOLUTION • BENJAMIN MORSE, M.D.

TIME 週刊新潮 週刊朝日
が大々的に報道したアメリカの
驚くべき性生活の実態と全貌！

(そして、日本も必ずこうなる！
ことを本書は予言し、警告している)

＜性の革命＞表紙

た「サラリーマン」の妻のケースは、日本では、牛乳屋か、洗濯屋か、生命保険の勧誘員、さらに証券会社の外交員に代るだけである。

著者は、その端的な現われをティーンエイジャーの暴走に見る。乱交、強姦は、彼らにとっては、「新しい形のラーゲ」にすぎない。すでに、子孫を得るための第一の目的は妊娠中絶の激増という形で否定され、第二の目的「楽しむこと」だけが残っているのである。

「売春も又その形を変えた」と著者は言う。

それは公共の売春制度から、コールガール型式に変わったのではなく、精神的に売春は一部の限られた女性達の職業ではなく、一般の女性の共通の副業となったという意味である。

そして、こうした混乱はワイフ交換となり、性映画の氾濫となり、エロ写真や映画の性行為への併用の一般化となった、と著者は言う。

さらに著者に従えば、快楽の追求は一般的に「快い悪、すばらしい不潔」に、対する冒險心をかき立てるようである。乱交、露出的性交、代替物（映画、写真、本等）による刺激の転嫁、これらはすばらしい、未知のこうふんを約束する。「娯楽はそれを必要とする時にのみ登場する」と著者は言う。かつての秘薬に代って、現代では娯楽とは、こうした映画、本、写真、のことを指しても誤りでは

考えられていた。女性が喜びを感じるのは、男性が喜びの絶頂に到達するのを感じ得るためであって、決して、肉からくる直接的喜びではなかった」として、それを閉鎖的なキリスト的道德律の故であるとしている。

たしかにこの種の「女性に対する不合理な制約」は、現代に至っては、いち早く消えてゆく全貌をあらわにしだした性を楽しもうとしている。その結果は一週に、二、三回の性交では頻度が少ないというような勝手な性解説記事に、不知の中に影響された多くの「イン

テリ」を生み出した。

自分の夫の頻度は「標準」より劣るのではないか。快楽度が少ないのではないか、このような根拠のない妄想性劣等感が、なまじ雑誌を読む階層の女たちを責め苛むのである。彼女らは、性のシンデレラになりたがる。彼女らは、つねに王子の突然の来訪を待ちのぞむのである。これは、アメリカだけではない。日本においてもそうである。多くの既婚女性は、良人以外の男性によって、「試す」ことを欲している。それが、いわゆる性道德の破壊という形で現われてくる。牛乳屋と関係し

あるまい、と言う。

著者は、これらの記録これらの実例をあげる事によつて、要するに現代の混乱した性秩序を物語っている。そしてこの混乱は、社会自体の不安定の産物である、という。

“いつの日か”と著者は最後に、控え目に書いています。

“われわれが性に対する自由な扱い方と、穏当な理解や調和のとれた思慮とバランスをとり、均衡状態に達することを、わたしは心から希望している”

だが、と私達は言わねばなるまい。性はこれまでの永い歴史が物語る通り、その混乱をつづけてゆくであろう。彼の希望する均衡状態は、決して調和のとれた形では現われないであろう。われわれの住む世界、そこには数限りない「個性」がある。ちょうど指紋の標準形というものが存在しないように、個性の標準形は、いつになっても現われることはないであろう。ただ調和を望む心は、いつの世の中でも、疲れ、捲み果てた世代に起る共通の想念である。性はあらゆる形、あらゆる方策を発明し、考えつづけ、そして実行してゆくであろう。ただ一つ、私達がそれを単なる排出、肉の欲望の充足とのみ考えず、そこには——たとえ売春婦を相手にしたとしても——

純粋な神に近づく心が要求される、という事だけが、進歩を約束するであろう。

著者は、ニューヨークやシカゴ等の大都市で、同性愛者を一定の地区に集めている事実を記している。それは、公娼地域を定めている、西欧の諸国の制度に似ている。倒錯は同性愛のみならず、全倒錯は現代においては、劣等感を持っていない。私達は逃れ出そうとしていない。定着し、公開し、そして宣揚する欲求が今や私達をおそいつづけている。この選民意識は、特定の地域に集合することによって、かなり安全なものとなる。そして、正常人を倒錯の征服から守ることもなるう。不可知なものとされている性倒錯の世界は、こうしてその最少限の絶対の安全を保証されることによって、唯一の安定した地位を保つてであろう。著者が不用意に言及したアメリカでの事実、私達に新しい帝国の創設を思わせる。

倒錯の心理は翼である。人はそれによって未完成の階段の頂点に立ち、そこから飛ぶことができる。おちるのではなく、空高く太陽に近く飛翔するのである。有翼の馬はペガススと呼ばれる。人々は、その姿を絵画に残し、彫刻に残すけれども、決して荷馬車を引かせようとはしなかった。ペガススは馬の社会で

は、「異常」であるけれども、それは劣悪ではない。

彼は翼を得た。馬の交尾によってではなく、より優れた種族、「人間」の想念によってである。

その想念は祈りである。祈りは、神を駆使する技術である。そこに創造が行なわれ、不在であったものが顕在するに至る。

何千年たっても、性の社会に平和は訪ずれることはあるまい。それはギリシャ神話がおびただしい戦いと、愛との物語にみちみちているように、優越者と劣等者の戦いであり、その世界で、常に勝者は敗者より数少ないのである。

(ビデオ出版刊・二五〇円)



宣伝のなかのM写真

ちかごろ、とくに女性むきの週刊誌に、SM的な写真が多い。むろん、SMそのもののずばりではないが、SM的なひねりをきかせた写真が多いのは、現代コマーシャルの必然的傾向ともいえるのではないか。下にご紹介したのも、そんな一例。

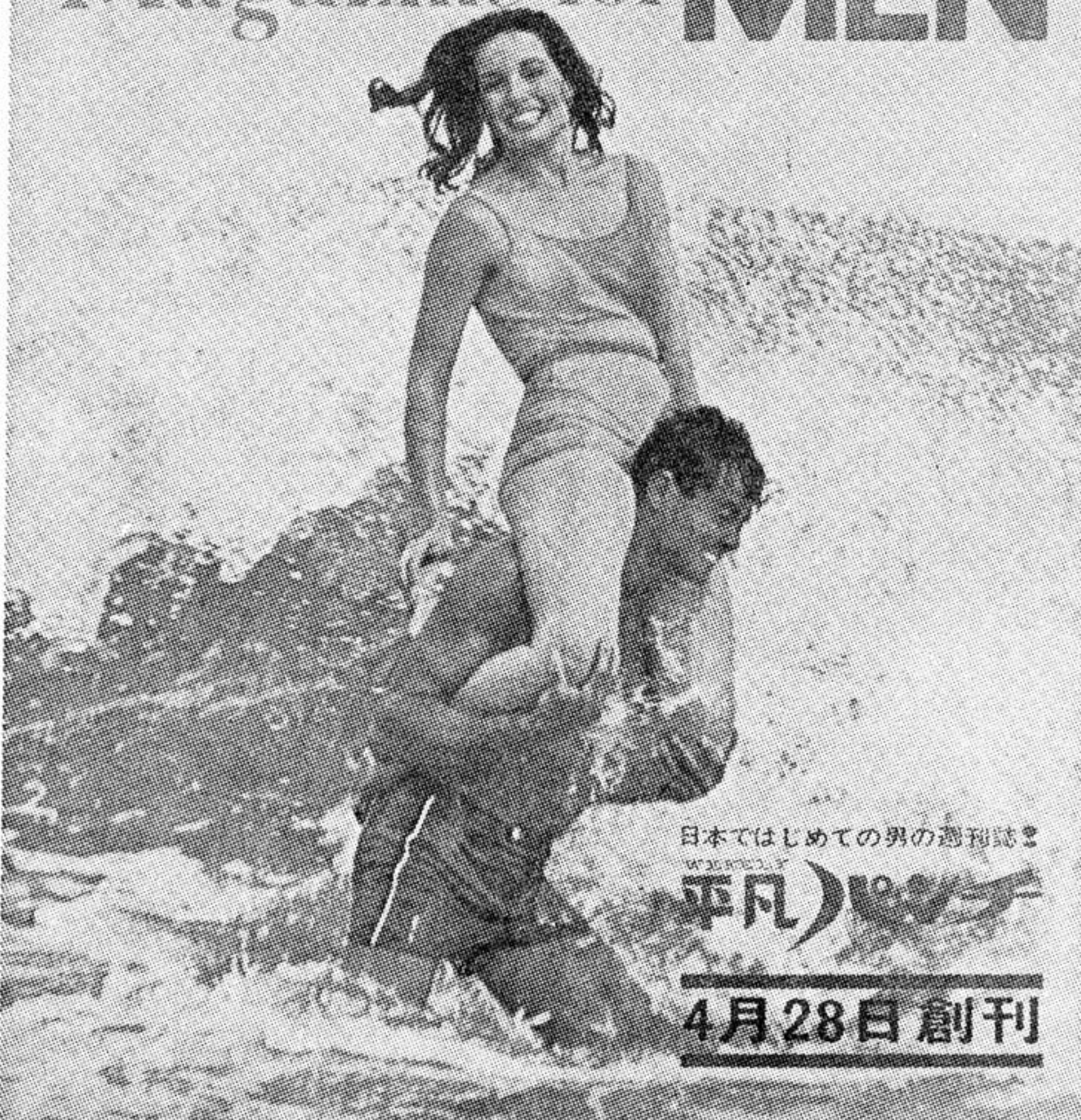
4—APRIL

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

5—MAY

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

Magazine for MEN



日本ではじめての男の週刊誌

平凡)WAVE

4月28日創刊

読者原稿に描写された

クライマックス場面集



金色の薬

溝口雄太
古正英生・絵

そこまで来て、新三は、ぴたりと足をとめた。いやな予感が、鼻さきにおったのだ。
——どうやらここまで来たものの、はて、これから先はどうしたものか？

腕をこまぬいて思案したとき、

「ひいッ！」

闇のおくから、だしぬけに、けたたましい悲鳴がきこえた。

どうやらこの古屋敷の、いちばん奥まった部屋らしい。

「ひいッ！」

と、つづけざまに、また悲鳴がおこった。さけんだ声は、この大きな建物の静寂へたちまち吸われる。それがまた、不気味であった。

「ああッ、あッ……ゆ、ゆるしてッ、ゆるしてえッ！」

女の声が、きれぎれにさけびつづける。およそこわいもの知らずの新三でさえ、思わず、ぞおッとして背すじをふるわせたほどの、この世のものとも思われぬ悲鳴である。しかし、女の声は、それきり、はたとやん

だ。それがやむと、この古屋敷全体が死に絶えたような、深い静寂がまた襲ってきた。

新三の足が、また朽ちた廊下をすすんだ。右へ、右へとまがって、ついに悲鳴の部屋までたどりついたのだ。

——うぬッ、とうとう見つけたぞ、幽霊女めッ！

新三は、いまこそ、しかとその白い幽霊の正体を見きわめようとするように、かあッと目をむきだして凝視したが、ひざがしらのあたりは、こきざみにふるえていた。

白無垢の花嫁衣裳に似た装束をつけ、頭にも白布をかぶっている。奇怪な宗教の儀式にも似た幽霊女の衣裳であった。

その女の手にした燭台のあかりが、ようやくぼんやりとどく畳の上に、ひとりの女がうしろ手に縛られて横たわっていた。

顔ははっきりわからないが、からだつきで新三にはわかる。



——あッ、お柳さんだ、お嬢さんはやっぱりここへさらわれてきたんだ！

すぐに踏みこもうとしたが、かんじんの足がふるえて前へ進まない。

障子の破れ目から、へっぴり腰でのぞく新三だった。

ほ組の纏い持ち、生き不動と異名をとった向こうみずの新三も、相手が女の生き肝をぬくという幽霊では、ちよつと気がくじける。

ほ組の頭のひとり娘、お柳の危難を目の前にしても、むやみにとびこんでいけないのが本音だった。

「ふふふふふ……」

幽霊女は、ぶきみなふくみ笑いをもらしながら、お柳の白い顔をのぞきこんでいる。

平生から色白で、駒形小町と評判のたかいお柳の顔が、恐怖のためにいつそう白くなつて、足腰をくねらせている。

幽霊女の白い細い手が、風に吹かれたように、ふわりとのびた。

お柳は、ひえッと身をすくませる。いくらすくませたところで、両腕は背中中の、帯の上に固く縛りつけられている。よく見れば、両足もそろえて荒縄でくくられているので幽霊のぶきみな手から逃がれることができない。

幽霊女は、片手でお柳の髪をつかみ、もう

片方の手で、お柳の胸もとを、ぐいッと、じやけんにひろげた。

お柳の肌の白さ、やわらかさが、のぞいている新三の鼻さきにおいて、新三は、ごくりとのを鳴らす思いだ。

はだけた素肌の一点へ、幽霊女の目がそそいでいる。凝視しながら、その目が、にやツとした。

やがて、幽霊女は、ゆっくりと右手をのぼし、盆のうえの筆をとりあげると、壺のなかの液体をたつぷりとふくませた。

筆の穂さきに光った液体は、ぶきみな金色であった。どろりとした光沢で、筆の穂さきをふくらませている。

お柳は、またはげしく身をくねらせたが、古畳にからだがかすれただけである。荒縄で縛りあげられた四肢は、まさに、まないたの上の鯉であった。

筆の穂さきが、肌の先端へふれたとたん、「ひ、ひひひッ！」

という、胸をえぐるような悲鳴が、お柳の口からあがった。

しかし、幽霊女は、すこしのためらいもなく金色の穂さきを、お柳の胸に接近させた。「う、うううッ！」

筆の穂さきは、隆起の先端の周囲を、ゆる

やかに塗っているのだ。もつとも美しい、魅
力的な肌の部分が、金色に濡れはじめる。

一体、なんでそんなことをするのか？

なにかの儀式なのだろうか？

おまじないのようなものなのか？

それとも、呪いか。

単なる悪戯か？

幽霊女は、またのろのろと筆の穂さきを壺
のなかへさしこみ、金色の液体をたつぷりと
ふくませる。

そして、もう片方の乳首へそれをむけるの
だ。穂さきがふれたとたん、お柳はまたのど
の奥からうめいた。

さすが、ほ組の頭、鉄五郎の娘である。あ
らわな声はあげない。負けるものか、とばか
りに耐えている風情は、新三の目にも、よく
わかるのだ。それだけに痛々しいのだ。

声をあげまいとして、必死に歯をくいしば
っている。その、くいしばった歯のあいだか
ら、新三の脳を突きさすようなうめき声をあ
げる。

幽霊女は、同じことを二度くり返すと、や
っと、つかんでいたお柳の髪の毛をはなす。

ぐたり、と肩の力をぬいたお柳の胸は、ま
だ残っているおぞましさを訴えるように、は
げしく波うった。



その姿を、幽霊女は氷のようにひややかな
目で凝視している。

新三は、まるで自分がその異妖な責め苦に
あいでもしたように、えり首から背中につけ
て、じつとりとあぶら汗をながしていた。

幽霊女の手が、お柳の白いあごへ、ふわり
とのびた。もう筆はにぎっていない。素手で
お柳のあごをなでている。

まるで、猫ののどを愛撫するような手つき
だった。それはもう、呪いでも儀式でもなく
人間が捕えた獣を賞玩する雰囲気だった。

お柳は、のけぞったまま、もだえていた。
「う、うッ、うッ、うッ！」

と、噛みあわせた歯のあいだから、うめき
声もれるたびに、全身へ、はげしい苦悶と

恐怖が波うつ。

その恐怖が、どんなにつらいものであった
かは、もだえにもだえて、もがき狂ったお柳
の裾が、あられもなくまくれあがっているの
でもわかる。

はだけた裾から、あらわにむきだしたまっ
白なひざが、古畳を蹴るようにして泳いでい
た。胴がくねり、腰があえぐ。

——ちくしょう、まあ、なんてひでえ真似
を！

と、へっぴり腰の新三が歯がみしたときだ
った。

幽霊女の着ている白無垢の衣裳の裸が、な
にかの拍子に、ひよいとまくれ、白足袋をは
いた足が、新三の目にはいった。

——ややッ、足がある！

新三は、思わず胸のなかでさげんだ。足があるんなら、幽霊じゃねえや！

幽霊でなけりゃ、ただの女だ！

なにもおどろくこたアねえ。くそおッ！

そう判断したとき、新三は本来の新三にかえっていた。

破れ障子を蹴倒して、その部屋のなかへ躍りこんでいった。

「お嬢さん、新三が助けにきましたぜ！」

新三をふりかえって、幽霊女はさけび声をあげた。

あわてて逃げようとする幽霊女の弱腰を、

新三は思いきり蹴とばした。

「ちくしょう、逃がすものか。こんどはてめ

えをふんじばって、てめえらの悪事を白状させてやる！」

新三の腰には、さつき塀をのり越えるときに使った縄がある。新三はそれをひっこぬくと、幽霊女の両手をうしろにまわして縛りあげた。さすがに手早い。

「痛いーッ！」

と、女は悲鳴をあげ、猛烈に抵抗した。

しかし、激怒している新三は、女の腕をへし折るような勢いで背中へねじあげ、おさえつけてぎりぎり縛りあげると、女の髪から顔をおおっている白布をひき剥いだ。

「やッ、てめえは、岡平越中守の屋敷の奥女中、菊路じゃねえか！」

新三は、びっくり仰天の声をあげた。

縛りあげられた菊路は、蒼白な顔で、肩と胸とをあえがせている。二十三、四歳の、牙えた美貌をもった女だ。つめたい美しさが、白い衣裳をきているために、いっそうつめたく映える。

新三は縄じりをたぐって菊路のからだをひき起こすと、正面からにらみつけた。

「岡平さまの奥女中が、どういうわけで、こんなあくどい真似をするんだ？」

「……………」

菊路は、顔をそむけて無言だった。

「言わねえのか。言わなければ、言えるようにしてやるぜ」

火消し人足のやることはあらっばい。

菊路の足をあぐらにかかせ、左右の足首をひとつに縛ると、その縄を首のうしろにまわして、海老責めの形にした。

「うううーッ！」

あぐら縛りの上に海老型にからだを折りまげられて、菊路の顔面はたちまち赤くなる。

「こうしておいて、こんどはお前の乳首に、このどろどろした金色を塗ってやるぜ」

「ああッ、どうか、それだけはおゆるしください。それには、あの、殿方が好きになる、恥ずかしいお薬が混ぜ合わせてあるのです」
菊路は、身をもだえて絶叫した。



湖畔の美少女

羽鳥 なつ子
中川 彩子・絵

日が沈んだばかりで、西のほうの空はあざやかな夕焼けでした。赤や黄や青や、それらが微妙に混合し、そのいろどりも刻々変化して、まるでなやかな空のお祭りみたいなくあいでした。

湖のほとりのあの白い山荘に住む美少女に私がはじめて誘いこまれたのは、そんな夕方でした。

美少女は、私をうまくだまして二階の一室へつれこみ、私の両手をうしろ手にくくってしまいました。

これからあなたのそのかわいらしいちぶさやおしりを、もっともっと大きくしてあげるわ、と言って、私の胸や腰をあしのうらでふみしました。

そして、竹のようによくしなう細い手で、私のももをたたいたり、つねったりするのです。私が、やめて、おねがい、と言うと、だ

めよ、あなたはもう私の奴隷よ、これから毎日こうやって、マッサージをしてあげるからね。もしこのことをほかのひとに告げるといけないから、言えないようにしておくわ、と美少女は言う、白い顔にぞっとするような微突をうかべました。

どう、この輪、金属製よ。これをあなたのふとももにがちりはめてあげるわ。左のあしと右のあしにはめると、あるくときに触れて、カチカチと音をたてるでしょう。すると私のことばを思いだして、口がきけなくなる

わ。

やわらかい肉のまわりにはめられたのですから、痛くて痛くて、私はううう、ううう、とうめきました。

これから私のことを、ご主人さまと呼ぶのよ、いいこと。さあ、言ってごらんさい、と美少女は言って、私の長い髪の毛を手でつかんでひっぱるのです。

私は、はい、ご主人さまと言いました。すると美少女は、だめよ、もっとゆかに頭をつけて言うのよ、お前は私の奴隷なのよ、身分をかんがえなさい。きょうから、こんにちは、さようならのあいさつがわりに、私のあしのうらをなめるのよ、さあ、おなめ。

言っておきますけど、私のあしが汚れていようとトイレから出たあとであろうと、私があしをさししたら、お前はすぐに口を大きくひらいてなめるのよ。そのとき唾がすくなくいと承知しないわよ。わかったわね。わかつ



たら、さっそくおなめ。

はい、ご主人さま、ありがとうございます。
私はもう帰ってよろしいでしょうか。

と私が言うと、美少女は訝えかえったように白い顔をこわばらせて、まだだめよ、どうしてお前は、そんなに勝手な行動をとりたがるの、と怒りだし、唾でべたべたにぬれた白い細い足を、私の顔のうえにのせて、ふみつけたり、こすったりするのです。

お前、口がすこしちいさいね、私のあしがぜんぶはいらないじゃないか。だめよ、ぜんぶいれなくちゃ。

と美少女は言うのですが、いくらちいさくて愛らしい彼女のあしでも、ぜんぶ足首まで口にくくむのは無理です。

それを承知で私をいじめるのです。そしておそろしい手術の準備をしはじめました。

うごくといけないから、と言って、私をソファのうえにしばりつけ、手術道具のはいった大きな皮の靴を持ってきました。

その靴のなかからハサミをとりだし、私の口をひらかせると、口の両端をハサミでばちんばちんと切ってしまいました。

私は、ぎゃあッと悲鳴をあげました。

すると美少女は、自分のはいていた靴下をぬいで私の口のなかに押しこみました。



それから、私の口の両端へ消毒薬をたんねんにぬりました。

さあ、きょうはこれでいいわよ、と美少女は言って、私の口のなから、靴下をとりだしてくれました。私は痛みにあたえかねて、ウウ、アアア、とうめき、泣きました。

もう、いくら泣いてもうめいてもいいわ。四、五日もすればよくなるわ。そうだわ、あなた、この山荘へくるとき、だれかほかのひとに見られた？

と、美少女がきくので、私は、うっかり、いいえ、だれにも見られませんでしたわ、とこたえてしまいました。

すると美少女は、片頬にくぼをつくって笑い、それはちょうどよかったわ、あなたはしばらくのあいだ、この山荘にお泊まりなさい。村のひとたちが、おぼけ屋敷とよんでいるこのさびしい湖畔の山荘へ、まさかあなたがひとりで近づくとは、だれも思わないわ。

私は安心して、あなたを奴隷にできるわ。あなたのお口の傷がなおるまで、私が食事をつくってあげるわ。

私が、あしで、パンやチーズやハムをぐちゃぐちゃにふみつぶして、そこへ私のたんや唾をたくさんまぜてたべさせてあげるわ。

たのしいわ。もっともっと私にきたえて、あなたを奴隷らしく教育してあげるわ。あなた、おいくつ？

私よりきつと二つか三つ年上ね。ふつうなら、私のおねえさまなのね。でも、もうだめよ、私の奴隷よ。

まだ、お口痛い？

すこしお口をあけてごらんなさい。おや、お前、私の命令がきけないの？
ちよっとやさしいことばをかけると、すぐにあまったれるのね。さあ、お口をあけなさい。

と、美少女は言って、いま消毒薬をぬられ

たところを、左右の手の指で、ぐいとひっぱりました。私は、ヒィーッと声をあげ、思わず、なみだをこぼしました。

美少女は、あら、ちょっと大きすぎたかしら、でも、なおればちょうどいいかも知れないわ。これで私の足首から足さきまで、ぜんぶはいるわ。

と、勝手なことばかり言うのでした。

それから五日後。

美少女のご主人さまは、その日、朝早くからおめざめでした。

ちよつといらっしゃい、というご主人さまの声に、奴隷の私はとんでいきました。

ご主人さまは、裏庭で細くて長い素足をさけだして体操をしていました。

ご主人さまの胴は、きゅッと細くくびれていて腰がふつくらとはり、それからまたふとももからひざ、足首にかけて、じつになだらかな美しい線で、私はほうせんとみとれていました。まったく、まぶしいくらいでした。

体操がおわると、ご主人さまはいすに腰かけ、お前、ぞうきんで私のあしをおふき、とお命じになりました。

私は、ぞうきんでいいいにふき、それをバケツの水でゆすいで、もういちどふこうとすると、ご主人さまは、きょうはもう、お前

の口もなおっただろう、お前の口でふきなさい、とお命じになりました。

はい、ご主人さま、どうぞ、と私が口を大きくあけると、ご主人さまは右足からいれかけて、あら、まだあしに庭土がついてるわ、あらあら、指のあいだは、まだ土だらけね、でもいいわ、きれいになめるのよ、とおっしゃるのです。

指のあいだからさきに、ていねいになめるのよ、わかったわね。泥がすこしでもついていたら、ひどいお仕置きをするわよ。

あおむけにしぼりつけておいて、おちちのさきに、大きなお灸をすえるからね、いいわね。時間は右足が十分間、左足が十分間、合わせて二十分間よ。

ウツ、ウウツ、くすぐったいわ。もっと、しつかりなめられないの。ぬるぬるなめているから、私がくすぐったくてたまらないわ。

足のあいだの土は、ぜんぶたべてしまうの

よ。吐きだしたりしたら、承知しないよ。

さあ、足のさきから口のなかへいれるよ。

足首までぜんぶいれるんだよ。そのためにわざわざ手術したんだからね。

ウウウツ、ゲツ、ゲゲゲッ！

私は思わず声をあげました。ご主人さまの足が、私の口のなかへねじこまれたのです。

それはまったく強引でした。私は庭土のうえにねころがり、必死に美少女のあしをたべました。

私のあしはちいさいんだから、そんなに苦労しなくてもはいるはずだわ。

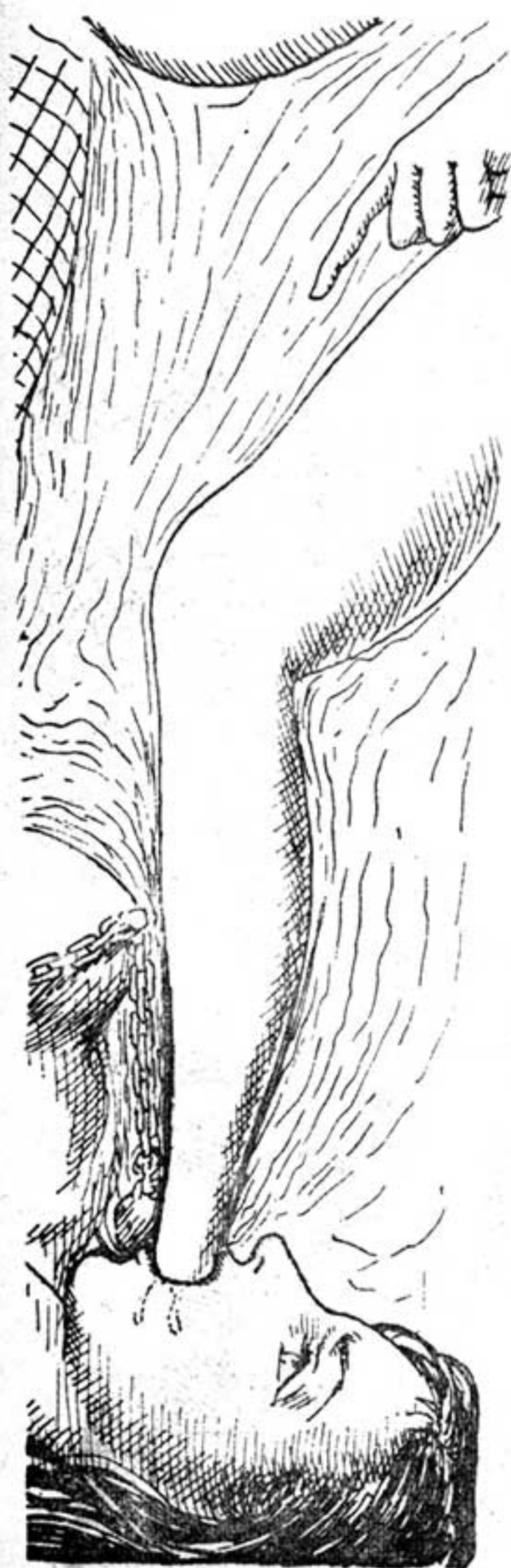
ウウウツ、ゲゲゲッ、ゲゲゲッ！

私は息がつまりそうでした。

やつとはいったらしいわね。あら、お前、

顔がまっ赤だわ。足の指が、のどまではいってしまったので、呼吸がしにくいね。でもこれくらいによ、お前は奴隷なのよ。

ううう、足の指をうごかすと、いい気もち



だわ。やっぱり口を大きくしたかいがあった
ようね。上出来よ。

さあ、こんどは左足よ。しっかりがんばっ
て口をあけるのよ。よいしょっと。

どう、私のあし、おいしい？

はい、ご主人さま、とても美しく、おい
しいです、と私はこたえたのですが、ご主人
さまのおみあしを口いっぱいはおぼっている
ので、なんと言っているのかわかりません。
すると美少女は、ハハハハとかんだかい
声で笑いました。

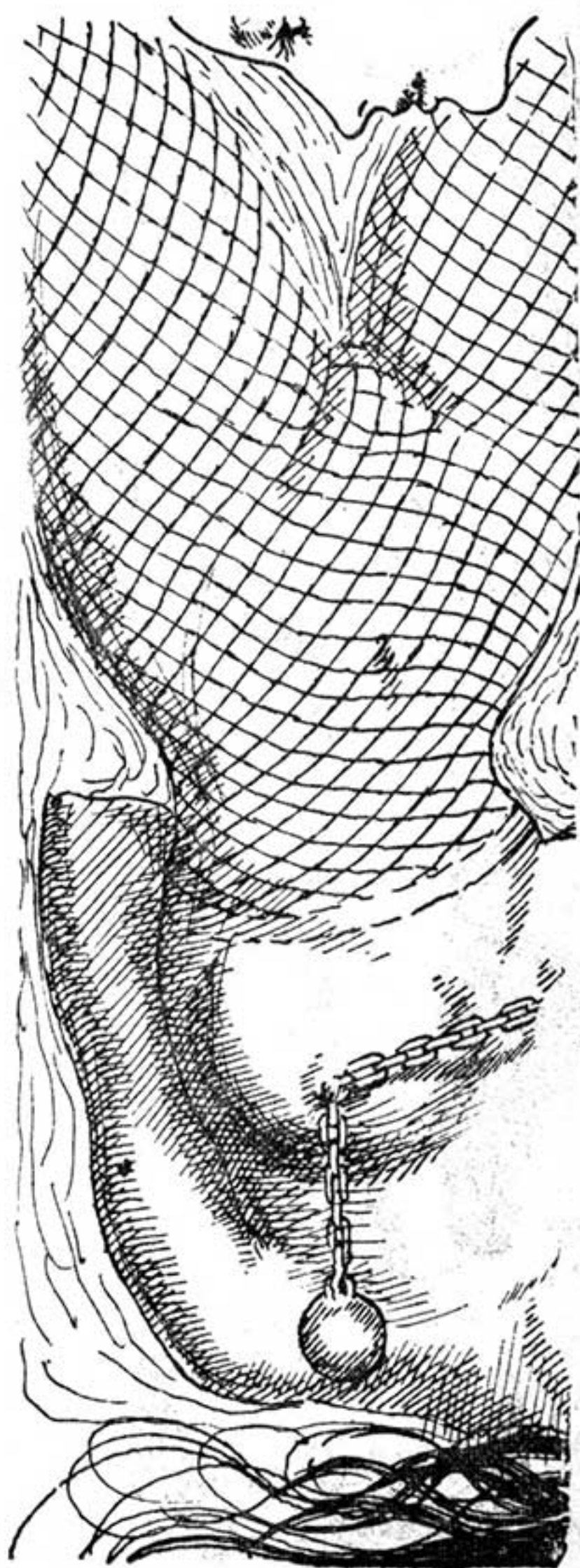
人間てへんなものね、お前たち村の者は、
みんな私のことを、きちがいの娘だといって
バカにしていただろう。だけど、そのきちが
いの女の子が、こんなにからだの大きな娘を
奴隷にしていばっているんだからね。

私を笑ったお前は、あしを口のなかにいれ
てよろこんでいるのよ。お前、恥ずかしいか
い？

いいえ、いいえ、と私はこたえました。

私は、ご主人さまのような美しいひとの奴
隷にされ、そのうえすばらしいおみあしまで
なめさせていただき、ほんとうに幸福でござ
います。

そう、そんなに私は美しいかい？
はい、美しゅうございます。



それじゃ、お前、これをおたべ。ご主人さ
まは、私の目の前へ、たんをおはきになりま
した。私はそれを頂きました。

おみあしの掃除は、もうすっかり終わった
のです。

お前もだいぶ奴隷らしくなったわね。でも
教育は、まだまだこれからよ。そのうち、お
前のその格好のいい鼻の穴も手術してもっと
大きくひろげ、私の足の親指まではあるよう
にしてあげようね。

私はもう、魔法にかけられたように、美少
女のご主人さまのいうままでした。美少女の
もつ妖しい美しさに、魅せられてしまったの
です。

ご主人さまが、馬になれ、と言うと、私は
すぐ馬になり、家じゅうをはいずりまわりま
した。

美少女のたべるものは、もちろん、ぜんぶ
私がつくりまします。美少女がその体内からだす

ものは、ぜんぶ私が頂きます。

私のご主人さまは、私の肉体を改造するこ
とを好みました。私の肉体は、しだいに原型
をうしなっていきました。

左右の乳首に穴をあけて針金をとおし、そ
の針金のさきに、鉛のおもりをつけたりしま
した。

ウエストは、つよいナイロンのひもで編ん
だコルセットのために、息もつけないほどし
めつけられ、極端に細くなりました。そんな
私を、美少女のご主人は、美しいといって目
をほそめるのです。

私のスタイルは、バスト九三センチ、ウエ
スト四七センチ、ヒップ一一三センチになっ
てしまいました。

そして、それから二ヵ月ほどたった嵐の夜
に、美少女のご主人は、私の女としてのもつ
とも重要な機能に対して、とんでもない手術
を敢行したのです。

毒婦妖恋

久慈たかね
小日向一夢・絵

「ひいッ、たすけてッ！」
男装の美女、霧姫の悲鳴は、夜の空気をつんざきました。

自分が、前髪もりりしい若衆姿に変装していることを、思わず忘れて発した、お姫さまの本当の声だったのです。

それもそのはず、霧姫を抱きしめた白狐のお竜の手は、姫のもっともはずかしいところに触れたらしいのです。

「ほほほ、黄色い声をあげるんじゃないよ。なにも、さわろうと思ってさわったんじゃない。お姫さまが、あんまりあばれるから、つい手がそんなところにすべっちゃったのさ。まあ、かんにんしておくれよ」

お竜は、てれたような笑いをうかべます。この毒婦にも、まだ、てれるだけの純情が残っているとみえます。
「いっそ、殺して！」

と、うしろ手に縛られたからだを、よじるようにしてもがく、若衆姿の霧姫。

「ほほほ、とんでもない。お姫さまを助けようとして、こんな大骨折っているんじゃないか。いまさら殺してなるものかね」

これは、おそらく、お竜の本音だったでしょう。

霧姫を、このままうまく柿本軍太夫の手へひき渡してしまえば、約束の金が三百両、お竜のふところへはいるのです。

たかが街道稼ぎの女巾着切りにしては、一世一代といってもいい大仕事でした。

しかし、霧姫は、思いのほか手ごわいお姫さまでした。牝鹿のような、やわらかいうちにも、妙に強靱なところのある四肢を働かし、ともすれば、お竜の脇から逃げようとして、逃げてたところで、うしろ手に縛られている

身ではどうにもならないのですが、この妙にねとねとした指さきをもつ毒婦が、霧姫にとっては気味わるくてしかたがないのです。

本能的な嫌悪感が、この潔癖な霧姫をもがさせるのでした。

「しずかにしておくんなさいよ、お姫さま。あんまり大きな声をだすと、さるぐつわを噛ませますよ。あたしやそんな手数をかけたくないし、お前さんだって不自由だろう。もうしばらくのご辛抱ですよ。三島領へぬけるまでのがまんですからね」

箱根の町は、半分からさきが三島領、警備は葦山の江川太郎左衛門で、ぐっと寛大になることを、白狐のお竜はよく知っています。

霧姫は、だまりこんでしまいました。

激動のあとで、口もきけないのです。荒縄でぐるぐる巻きにしめつけられた胸のうちに心臓が高鳴ってあえぎ、つぎに展開する運命を待つばかりでした。

「ほほほ、素直なお姫さまだこと。そうやって、おとなしくさえていたら、へんなことは、なにもしやしませんよ」

「ゆ、ゆるして。姫を国へかえしてくれたら望みどおりのものを、そなたにあたえます」
あえぎあえぎ、必死のことばを告げる霧姫でした。

「ほほほ、かわいいことをいうお姫さまだねえ。そんなにあらしいことをいうから、あたしや、お前さんの口を、ちょいと吸ってみたくなっちゃうのさ」

お竜はまた、うす気味わるいことをいいだします。うっとりとし紅をふくんだ目で、霧姫の顔をながめるのです。

若衆姿の霧姫は、たしかに、この世のものとは思われぬほどの美しさでした。

しかし、姫はまごうことのない女であり、それを知っているお竜が、恍惚と陶酔の色を目にあらわにして愛撫するという心理には、妖気ただようものを感じさせます。

「悲鳴をあげたり、この小屋からとびだしたりして、もし関所のお役人につかまってごらん。女のお前さんが男姿で関所破り、こいつはとんでもない大罪だ。お前さんの身分がなんであろうと、裸にむかれて拷問さ。しまいには、磔刑柱に縛りつけられて、お乳のしたを槍で突かれるんだ。そんなことになってもいいのかえ」

「……………」

霧姫は、沈黙したままです。いくら世間知らずのお姫さまでも、関所破りがどんなに重罪であるかは、知っています。

姫だけの罪ですめばまだしも、佐竹藩二万



八千石の浮沈にも、当然かわってくるので
す。

「でも、あたしや、見たいような気もするねえ。いえさ、男装のお姫さまが、関所役人の毛むくじらの毛で、じわじわとむかれていくところをさ、うふふふ」

「おねがいです」

霧姫は、のけぞるようにさけびました。

「おねがいです、姫を、たすけてください。

お金でも品物でも、望みのものは、なんでもあげます。三島の宿の河井屋という旅籠に、鈴村善之助という侍が泊っております。姫をそこにつれていってください。おねがいします、お礼はなんでも、姫にできることでしたら、なんでも……」

ろうそくの火が、ほの赤くゆれる水車小屋のなかで、霧姫は高貴の身をかなぐりすて、胸をふるわせ、腰をゆすり、卑しい毒婦に哀願するのです。

と——このとき、お竜の目が、妖しく、するどく光りました。

「あたしや、お金も品物もいらない。あたしの欲しいものは、やっぱり、お姫さまのからださ。あたしや、どうしてもいちど、あたしのからだで、お姫さまを泣かせてみたいんだよ。いいかい、ね、いいだろ……」

毒の花びら

つばくろお新の、いかにも勝ち気を思わせる細い眉が、このとき、ぴりりと吊りあがりました。

「おい、お光。いいかげんにおし。お前のからだには、もとでががかかってるんだ。そう、いつまで無駄めしを食わせておくわけにはいかないよ。これ以上痛い目をみないうちに、稼ぎに出ようという気になったほうが、お前のためだよ」

紅をぬったくちびるで、そんなすさまじいことをいいながら、まだいたいけないお光の肩さきを、手にしたささら竹で、ぴしりッと打ちすえるのです。

「ひいいッ！」

と、ひきつるような悲鳴をあげて胸をのけぞらせるお光は、まだ桃割れ髪のことどもっぽい容姿。ですが、柱を背に、うしろ手に縛りつけられた哀れな、いたいたしい姿でした。

ここは江戸駒形の女すりの総元締、つばくろ一家の座敷の奥にある、かびくさい物置き部屋でした。

女親分、というと、いかめしくきこえますが、つばくろお新は、二十五歳。年増盛りの凄艶な姐御でした。

色がぬけるように白く、えりすじから肩にかけてのなまめいた線、腰から太腿にかけてのぼつりした肉づきは、男どもの目を惹きつけずにはいられません。

しかし、このお新は徹底した男嫌い。男という名の動物は、オス猫をそばに近づけるのも嫌いで、自分のひきいる一家も女ばかり。

それも、美しくて若い女ばかりを置いておくという、変わった性癖の姐御です。

いま折檻されているお光は、上総の在の貧乏百姓の娘で、口べらしのためと、行儀見習いのために、堅儀の商家へ奉公するのが目的

久慈たかね

小日向一夢・絵



で、江戸へ出てきたのでした。

ところが、悪質な口入れ屋のために、とんでもない家へつれこまれてしまったのです。

色はやや浅黒い感じですが、目鼻だちのぱっちりした、かわいい顔のお光でした。

なにも知らないお光は、台所女中として、このつばくろ一家で、十日余りもはたらきました。

しかし、妙な物腰の女ばかりが、七、八人もいて、昼すぎから夕刻になると、裏口からこそそそと出たり入ったり。

いくら田舎者のお光でも、不審を感じ、だんだん不気味になってきて、きょうこそは、おひまをもらおうと決心したやさき、

「ひとさまのものを、だまって頂戴する、その方法を教えてやるから、きょうは一緒に外へ出るんだよ」

という、つばくろお新のことばです。

びつくり仰天したお光は、

「そんな悪いこと、私にはできません」

と、しりごみし、すきを見て逃げだそうとしたのですが、もう一步のところて捕まり、お新や手下の女たちのために縛りあげられ、こうして折檻されているという次第です。

「まったく、しぶとい小娘だねえ。せっかくあたしが、いい腕に仕込んでやろうというの

に……」

お新の白い顔が、だんだん赤みを増してきます。

ささら竹をにぎりなおし、お光を縛った縄目のあいだを、びしりつとたたきます。

「あれえッ！」

その苦痛に身をよじれば、髪もくずれ、えりもともはだけ、裾もみだれます。

それでもなお、歯をくいしばって耐えています。田舎娘だけに、シンは気丈なのでしよう。

お光の顔は血の気をうしなって蒼白になり唇も紫色になっています。

「ふうん、強情だねえ」

と、腕をこまぬいたのはお新。

しかし、お新の表情には、お光に対する憎しみとか、怒りとかいうものはなく、田舎娘のこの強情が、かわいくてかわいくてたまらないような微笑がにじみでています。

たしかに、うしろ手に縛られて、柱にくく

りつけられているお光の風情は、可憐というか、ういういしいというか、男を知らぬ清純さをもつ娘だけに、一点の汚れもない、無垢な美しさがみちあふれているのでした。

「ねえ、お光や。顔をあげて、あれをみてごらん。この物置き部屋にはね、あんなおそろ



しい道具もしまつてあるんだよ」

細くて長い白魚のような指で、お新は部屋の一隅をさします。

その道具とは、あられずりの木を組みたてた馬でした。

あたまでもしつぽもないけれど、背中が三角の形にとがった、不気味な木馬です。

この背中うえに、お光をまたがらせようというのです。

「お前が、あれにのるんだ。お前は百姓の娘だから、本物の馬にはのったこともあるだろうが、ああい固い、つめたい馬にまたがったことはないだろう。あの馬は血もなみだもなく、痛いんだよ。ぐりぐりこすれるんだよ。さあ、それでもあたしのいうことが、き

けないかえ」

凄いやな美しい微笑で、お新はいうのです。あでやかに紅をぬったくちびるも、まるで毒をふくんだ花びらのようです。

お光のおのきを、こうしてたのしんでいくようにもみえます。

しかし、お新の脅迫は、けっして口さきだけではなかったのです。

女親分がめくばせをすると、ひかえていた二、三人の女たちが、いっせいに手をのぼして、お光のからだを柱から放し、木馬のうえへ抱きあげたのです。

「ああ、かんにん、かんにんしてッ！」

哀願の声は、途中で尾をひく悲鳴とかわりました。

お光は、うしろ手に縛られたまま、木馬にまたがせられたのです。

「さあ、もっとしつかりおのり。そんなに腰を浮かしていたら、落っこっちゃうよ、ほらほら」

お新は、割れ竹で、お光の背中やおしりを軽くたたきます。

たちまち、つけねから背をつらぬき、脳天にまでひびく疼痛です。お光は、あごを前につきだし、悲痛な声をあげました。

「ゆ、ゆるしてッ、ごめんなさい、いうことをききます。ききますから、おろしてッ。ここから、おろしてくださいッ！」

髪ふりみだして、お光は訴えました。

「ほほほ、とうとう降参したね。それじゃ、



あたしのいうことなら、なんでもきくというのかい」

「は、はい、なんでも……」

くいしばった歯のあいだから、お光はうめきます。きりきりとつらぬいてくる苦痛に、お光の額から、あぶら汗がにじみだしてきます。

「つばくろ一家の身内になるというんだね」

「は、はいッ。おろして、おろしてえッ！」

「ほほほ、あわてなくとも、いまおろしてあげるよ」

お新のからだは、ようやく畳のうえにおろされました。

ぐったりと横たわったまま、あらい息をついているお光です。うしろ手の縄は、まだ解いてくれないのでした。

「お前たちは、もう、むこうへお行き。ご苦労だったね」

と、お新は身内の女たちを、べつの部屋へ追いやりました。

この物置き部屋に残ったのは、お新とお光の、ふたりきりです。

「お光や」

と、お新は、うって変わったやさしい声音で、ぐったりと目をしてしているお光の白い顔をのぞきこみました。あまりの苦痛のために

浅黒いお光の顔色が、白っぽくなっているのです。

「痛かったかい。かわいそうに。わるかったねえ、ひどい目にあわせて……」

猫なで声をだして、お光ののどくびのあたりに、白い指をねとねと這わせるのです。

「縄、縄をといて……」

お光は、きれぎれの声です。

「縄をといてやるから、今夜はお前、あたしと一緒にねるんだよ。いうことをきかないもんだから、木馬まで持ちだして地獄のくるしみを味わわせたけれど、こんどは、この世の極楽をおしえてあげる、うふふふ」

お新は、妖しいふくみ笑いをもらします。

この姐御が、女すりの一家をかまえて君臨しているのは、もちろん、金を稼ぐためもありますが、そのほかに、こういう秘密のたのしみを得たいためもあるのです。

「あたしにはね、どんなに色好みの男よりも女を泣かすことにかけてや、上だという自信があるのさ。いちどこいつを知ってしまったら、お前だって、もう、あたしから、はなれられやしないさ、うふふふ」

猛毒をふくんだ花びらのようなお新のくちびるが、清純なお光のくちびるに、ぴたりと吸いつきました。



その一 奴隷船

奴隷船は金属的なきしみをたてて、破滅に向かって突進していた。急なカーブを切るたびに、船艙はその速度と、中に呑み込んでいく荷物の重量とで、破裂せんばかりにたわみ、遠心力の方向に圧縮された荷物の間から、声にならない呪詛の呻きが搾り出された。

彼女は、大波のように揺れ動く、周囲の汗臭い肉体の間に、自分のからだを任せきりにして、眼を閉じていた。

一カ月の経験が、逆らうことの虚しさを教えてくれたのだった。奴隷に意志などは、無用どころか有害でさえある。ただ周囲の動きに身を任せておりさえすれば、どうにでも事

フアンタジア・

マゾヒスティカ

は運ばれてゆくものだ。あきらめとも自棄ともつかない感情が、この頃の彼女の身にしみているのだった。

そうは言っても、周囲の圧迫に耐えがたい思いをすることもある。

奴隷たちはみんな、自分の体重を支えるに足るだけの空間さえ与えられていなかったから、周囲からの圧力と、自分の体重との釣合いの上に、かろうじて我が身を支えているに過ぎない。だから、ちょっとしたそのバランスが崩れると、それが連鎖的に伝播して、室内に押し殺した呻きの波動が起るのだった。そして、奴隷船は、奴隷たちのこのはかない釣合いを破壊するのを楽しんでいるかのよう

に、身ぶるいをしながら、暗黒だけしかない彼方に向かって突進を続けているのだった。

どんなに苦しくても、叫んだり、ののしったり、悲鳴をあげたりする奴隷はいなかった。そんな事をしたってどうにもならない、というあきらめと無気力が、この船艙の中によどんでいる。そして、わずかに爪先を床に立て、体のバランスを取ることに気を奪われながら、奴隷たちはおとなしく運ばれて行くのだった。

彼らは、とき折り、まさに水中に沈もうとする者が天をふり仰ぐように、折り重なった肉体のわずかな隙間から、高い天井を仰いだ。天井は白く、明かる過ぎる程の照明が、冷たく無表情な光りを、その下にうごめきひしめく奴隷たちの上に投げかけていた。

彼女は、はじめその照明の明かる過ぎる理由がわからなかったが、近頃になって、よう

八 卷 令
山田 彬弘・絵

やくおぼろげながら理解できるようになった
と思っている。問題は、その明りの傍に円く
口を開けている孔なのだった。奴隷たちは、
たえずその孔からのぞき見られているのだっ
た。孔は暗い所にあつたから、そこからのぞ
く者の姿は奴隷たちの方からは見えなかつた
が、彼女はおびえる者の鋭い感で、そこが監
視室であることを知っていた。この強過ぎる
程の照明は、奴隷たちの動きを、その表情を、
より良く観察するためのものに外ならないの
だった。

そうと知ったところで、彼女にはどうする
こともできないのだった。肌と肌とがじかに
触れ合ういやらしさ。枷をはめられた手足。
鼻をつく汗のすえた臭い。口紅もあせた唇を
魚のようにあえがせ、眼にしみる汗のしたた
りをどうすることもできずに、どんより曇つ
たまなざしで天井を見上げている自分の姿を
みじめだとは思ひながら、どうすることもで
きないのだった。

更に不運なことには、彼女の周囲にひしめ
いているのは、みな男の奴隷ばかりだった。
身の丈はどれも彼女より頭ひとつ位高い。彼
女はこの肉体の谷間に、ひとり取り残され、
ねっとりよどんだ男臭い熱気の底で、あえ
いでいるのだった。背後の男の吐く息が、あ

らわな首すじに火のように感じられ、眼の前
に向かい合っている若い奴隷の視線が、わず
かに乳房を覆っている薄ものの襟あきから、
蒼白い乳房の谷間に、たえず注がれているの
を、彼女は痛い程感じていた。

しかし、どうすることができよう。身をす
さることもできずに、眼を閉じれば、それに
よって一層鋭くなる皮膚の感覚が、肌に伝わ
ってくる相手の体温を、不気味なほどのなま
なましさで感じ取ってしまうのだ。

(どうして、あたしはこんな身になってしま
ったのだろう——)

考えを集中しようとする努力は、すぐに周
囲の男の肉体の微妙なうごめきによって、さ
またげられてしまう。

不意に左手を強く引かれた。重心を失って
からだは左によるめき、右足が宙に浮いた。
そのままだどこに吸い込まれるように、グイグ
イ引張られる。背中への圧迫が急に強くなった。
(いや、いやッ)

酔ったような頭の中で悲鳴をあげる。シャ
ツの肩先がピリリと裂けて、まるい肩があら
わになる。

彼女の周囲で、肉体の林が大揺れに揺れて
いた。その渦の中で、彼女はもみくしゃにさ
れていた。

両手がどこかに持ち去られ、宙に浮いてし
まった足の間に他人が、遠慮もなく割り込ん
できた。汗が乳房の間を流れ落ちた。襟あき
がますます拡がって、乳房のふくらみが、今
ではあらわに見えるのだった。

彼女の髪に、荒い鼻息のかかるのが感じら
れた。

(ゆるして……)

いやいやをするように頭を振った。唇が男
の汗に光る胸毛に触れんばかりだった。それ
でいて、頭をもたげることができないのだっ
た。どうにでもして、という捨てばちな気持
ちと、身を守らねばならない、という処女の
本能が、彼女のかすんだ意識の奥で争ってい
た。

奴隷船が急に止まった。加速度を持った肉
体の群れは、将棋倒しになるのを、互の支え
合いでかろうじてこらえた。

だが、彼女は耐え切れずに悲鳴をあげてい
た。命の次に大切なものが、この混乱の中で
奪われようとしているのだ。

(だれか、だれか、動けてえッ。あたしのハ
ンドバッグが——)

しかし、誰一人ふり返る者もない。まるで
津波のように、奴隷の群れは彼女を押し包み、
引きさらって、今開いたばかりの扉から、固

い石のプラットホームへとなだれ出てゆく。

その二 調教

「そんななまくらな芸で、お客がよろこぶと思うのか」

監督の罵声が飛び、鞭がヒュウと風を切つて床をたたく。鞭が空を切る音が耳の近くですると、まるでそれが自分のからだの上で鳴るかのように、皮膚の神経がヒリヒリする。「もっと足を抜げるんだ。そうだ、尻が床につくまで抜げる。爪先を伸ばしてッ。背すじを曲げちやいかん」

ヒューッ、パシッ。

「あごを引けッ。胸を張って、肩を落とせ」彼女は、いっその鞭が自分の肌を打ってくれたら、と思う。そうしたら、もっと気分が楽になるだろう。全身の神経を鳥肌立てて、いつ降ってくるかもわからない鞭の苦痛にそなえている、その緊張がたまらないのだ。どうせこんな恥ずかしい姿勢をとらされるのなら、鞭でさんざん打ちのめされて、意識もさだかでないときに、やってほしい。意識がはつきりしたままで、こんな恰好を取らされるなんて、たまらない。それも観客の好奇の眼を満足させるために、ただそれだけのためな

のだ。

股のつけ根の筋肉が、裂ける程開かれていゝるその緊張のために、ビリビリ痙攣するのがわかる。けば立った神経の先端から搾り出されるように、汗がにじみでる。

不意に、薄いシャツの背が一直線に剥ぎ取られるのを感じる。

「ああ、よして——」

身をもがこうとしたが、両手はすでに背中できっちりとかくり合わされ、一直線に引き伸ばされた両足は、床にピッタリ密着させられたまま、微動だにさせることができない。

薄皮を剥ぐように、背中から胸へとシャツが剥がれてゆき、不自然な恰好で突き出された胸のふくらみから、キツチリしたブラジャーが弾け飛んだ。汗ばんだ乳房の谷間に、ひいやりと冷気はいまわり、外気にさらされた乳首がちじこまる感覚が、穴があれば入りたい程の羞恥をかきたてた。

「お前のような芸のない奴は、せめて裸でも見せて、お客様の機嫌を取りむすべ」

意地の悪い声が頭上に降りそそいで、鞭が必死の思いで起こしている薄桃色に染まったうなじの上に落ちてきた。

「そのまま上体をうしろへ反らせ。ゆっくり、あわてずにだ。それ、一、二、三……」

あぶら汗を浮かべた細い背すじが徐々にしななつて、乳房が小刻みに震えながら上向きになつてゆく。脇腹が痙攣を起したように引きつる。

「あごを出すなッ」

鞭の柄が、のけぞった白いのどを突く。

(ううッ。た、たおれるッ……)

全身の筋肉という筋肉が平衡を求めて伸縮をせわしく繰り返し、骨の関節がぎくしゃくする。

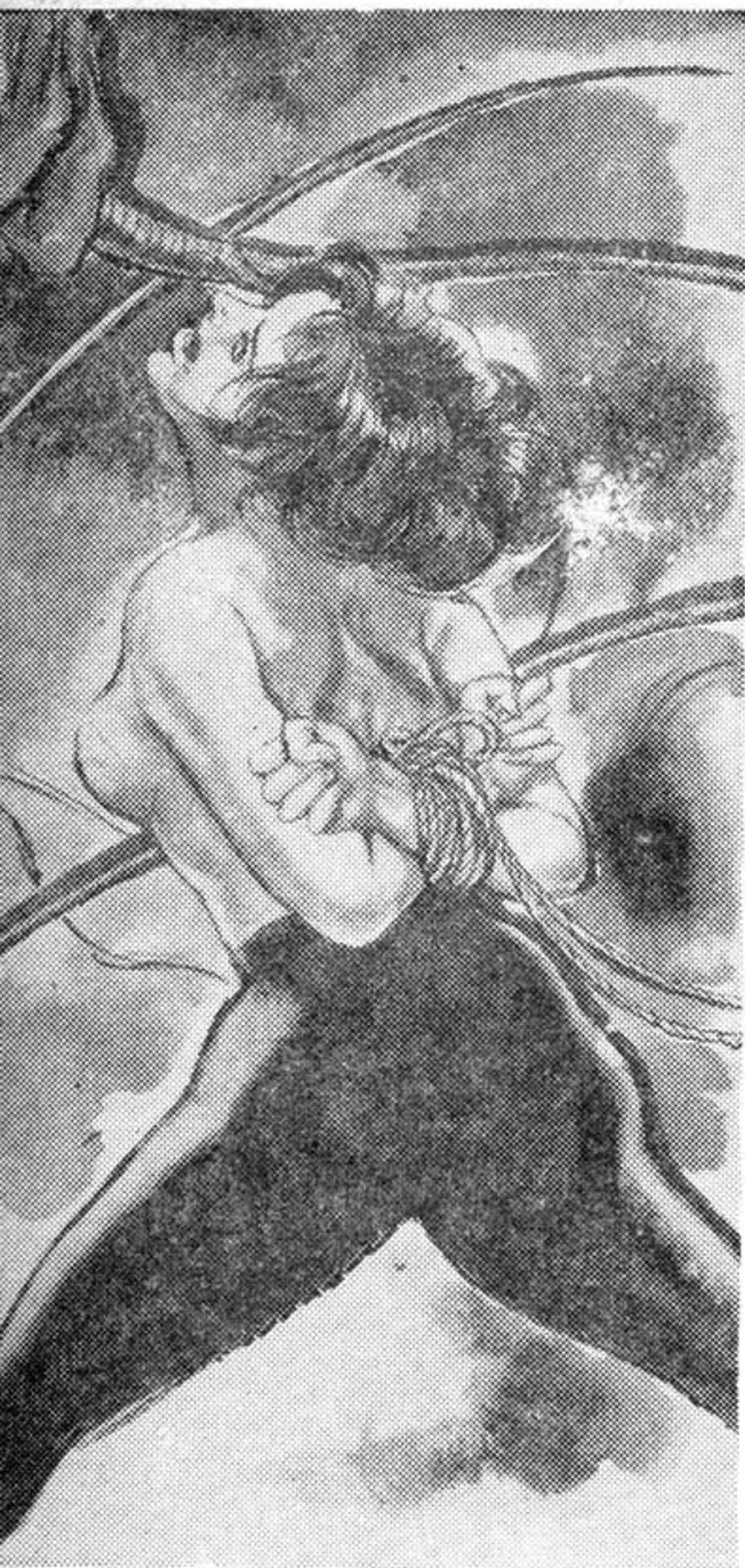
全身から玉の汗を吹き出させて、ようやく得られた平衡の中であえいでいると、はや次の指示が飛んでくる。

「足を合わせながら上体を持ち上げ、手をうしろについて、鞭をそらす」

足はほとんど感覚を失っている。ただ反射神経の作用で動いているようなものだ。弛緩しそうになる筋肉を鞭の威嚇が引きしめる。

弓なりにからだを反らせ、両手足で体を逆に支える。おなか緊張してへこみ、突き出した恰好になった部分に、彼女の羞恥が集中する。

薄いタイツが裂けそうだ。内腿に冷汗の流れる思いで苦しい姿勢をこらえていると、それはあつという間もなく、綺麗に裂け落ちてしまった。



彼女の全身はガクガクふるえた。全身がこむらがえりを起こしそうな緊張。

さかしまになった視野に、監督の毛むくじやらの脛が奇怪な生きもののように映ずる。その渦を巻いた太い毛のひとすじひとすじが、彼女の素肌からみついて来そうなおぞましき。

「どうだ、その恰好は。お前に一番似合うぞ」

ああ、今度は鞭だ———とっていると、果して鞭が、意地悪く彼女の予想していた箇所を、予想していた角度で襲ってきた。

「あ、いたいッ。もうゆるして———」

「腰をふらつかすな。口を閉じろ。よだれをたらしているぞ」

さかしまになった乳房が重く感じられる。

からだ全体が火のように燃え上がって、次第

に意識がもうろうとしてくる。

「足で床を蹴って体を起こし、それと同時に直立不動の姿勢を取る。それッ」

鞭が鳴ると、なえくずれそうな筋肉がピクリと固くなって、素裸のからだが目撃人間のようには彼女の意識の外で運動を開始する。混濁したさかさまの視野が大きく廻転して、ようやく正常にもどる。

彼女は白い太腿の筋肉を緊張させ、汗に光る乳房を弾ませながら、直立不動の姿勢になろうとしたが、しばらくは視点が定まらず、直立しているつもりなのに、からだはいつのまにか傾いてしまう。

「まだまだ柔軟性が足りない。タイツが破れるのを気にしたり、からだのふくらみがあらわになったりするのを気にしていたんでは、

本当の美しさは得られないんだ。オリンピックまで、あと幾日もないんだぞ」

「はいッ」

彼女は美しく上気した頬を更に染めて、監督の逞しいからだを恥ずかしそうな眼つきで見た。

その三 拷問

「ふむ、みごとにふくらんだものだな」

執行人は、覆面のかげから、異様に光る眼をギョロつかせながら、含み声で言った。そう言いながら、節くれだった指先で試めすように、彼女のはち切れそうにふくれあがった腹を、なでまわしている。

小さく呻いて身をよじろうとしたとき、はじめて自分が仰向けに組の上に固定されていることをさとした。

「組上の鯉でなくて、組上のフグだな」

男は彼女の腹をポンポンたたいた。

閉じたまぶたから透明なキラキラ輝く涙があふれ出て、こめかみの方に流れ落ちた。すべて相手のなすがままだった。そのことが、彼女にとって切ないあきらめになっていた。

のどに喰い込んでいるベルトのために不自由な頸をわずかによじって、男の姿を探し求

めた。心は祈るように恋しい男の名を呼び続
けていた。

「不義の快樂の報いがこれか。今こそ思い知
つたろう」

愛欲のあかしは、そのふくれあがった腹の
うえに、まぎれようもなく現れていた。はち
切れそうな白い皮膚の下に、青い静脈がすけ
て見える、その腹のうえに。

彼女は、その腹が自分のからだの一部分だ
とはどうしても思えなかった。自分のからだ
に寄生して、自分の精力を食いつくす異様な
存在のように思えるのだった。愛の結晶。愛
のお荷物。愛の犠牲。愛の枷。愛の……、
「不義の報いだ」

聞きなれた声を耳にして、彼女はぼつてり
とした腹を波打たせた。眼だけをまわして、
その声の主を探ろうとした。覆面をした背の
高い男が、陰惨な快樂をたたえた眼で彼女を
見降ろしていた。

「あ、あなた……」

その眼に夫の面影を認めて、彼女は絶望し
た。やはり夫は知っていたのか——

「存分にさいなんでくれねば、気持ちが悪え
ぬ」

身動きもできない程に縛りつけられたから
だを、狂いたつ嫉妬のいけにえにされるのだ。

男の指は、固さを弄ぶように、更に彼女の
腹をひねりまわした。彼女は絶望と苦痛にの
たうち、呻いた。自分のものでないような腹
のくせに、苦痛だけは確実に自分に伝わって
来るのだった。愛の奴隷……。

せめて、愛に殉じて死んでゆく自分を見守
ってくれる眼があったら、この苦痛も屈辱も
耐えられるだろうに——。

覆面の陰で、陰惨な笑い声が低く起きた。

「そんなにいきむと、中のものがはみ出るぞ」
恐怖に焦点を失った彼女の視線が、そのと
き、金剛石より冷たくきらめく刃物の形をと
らえた。頬がこわばり、固定された四肢の爪
先が、狂気のように空を掻いた。

「い、いやですッ。あなたに……そ、そんな
権利は……」

こわばった舌の奥で、声にならない悲鳴を
あげる。

解剖刀の鋭い切先が、軽く、ほとんど羽根
かなんそのように、はち切れそうな腹の頂点
に触れる。

ほんの軽い、羽根のようなタッチでも、極
限にまで緊張しきった腹の表皮は、弾かれた
ように、切れ目の左右にめくれかえり、傷口
が軟体動物のように蠕動する。

そして、その下から、あざやかな黄色の脂

肪層が、卵黄のように顔をのぞかせる。

奇妙なことに、痛みは少しも感じない。固
く閉じたまぶたの裏に、切り裂かれた自分の
腹のイメージだけがある。切られた自分の首
を自分が眺めているような、奇妙な親しみの
あるイメージ。

男が再び覆面の陰で笑う。その手には解剖
刀が逆手に握りしめられて、

プス——

分厚い脂肪層を突き通る刃物の音。気も遠
くなるような快樂。

（こをたくさんもった鱈をりょうりするとき
のようだわ、ほうちようをプスとつきさして
グイグイしごくようにはらをたちわってゆく
ときのごたえだわ、ほうちようのはさきに
ひっかかるかたいはらわたのごたえだわ。
ザクザクなるあのおと、そのあとからおもみ
のあるどろどろしたぬらぬらした……）

切り裂かれてゆくにつれて、黄色い脂肪が
プリンのようにふるえ、口を開け、二つに口
を開け、収斂する筋肉に引張られて、パック
リと口を開け、その下から真赤な血が、初め
は、たとえば草の葉先にふるえるひとつぶの
露の玉のように恥ずかしげに盛りあがり、そ
れがやがて、二つになり、三つになり、それ
らがつながり、合わさり、ひとつの流れにな

り、あふれ出し、真赤な流れになり、切り口の谷間にあふれ、下へ下へ、流れだし、傷口は更に拡がり、血は濁り始め、ねばつき始め、流れはよどみ、切り口に盛りあがり、白い皮膚の上にそれがふるえ……

(いや……)

もう何も見えない眼をかつと見開く。

瞳孔を焼きつくすような強烈な光芒が、千の眼から降りそそぎ、それが彼女を嘲笑うように、クルリ、クルリ、回転する。

(あのひとの好きだったおなかを傷つけないで、真珠のようになめらかに輝いていたおなかを汚さないで……)

無意識に身をよじるたびに、パツクリ拡がった切り口に盛り上がっていた真赤な、粘り気のある血が、湯気をあげてあふれだす。

そして、潮の引くようにうつろになったそのあとから、緑色の、桃色の、茶色の、精神異常者がカンバスにぬたくったような色彩の臓腑が、せばまった彼女の呼吸に拍子を合わせて、一寸、一寸とせりあがってくる。

腸はよろこびにうねくり、肝臓は興奮にブルブルふるえ、腎臓は坊主頭から湯気をたてて、あたりをキョロキョロ見廻しながら。

「ほら、これだ。これが何よりの証拠だ。見る、不貞のあかしを」



みぞおちをキュウと引きしごかれるような苦痛と共に、血の海の底から、奇妙な肉塊が掴みあげられる。

どすくろい血塊をボタボタたらしながら、それは、こましゃくれた顔に、もういっぱい
の愛嬌をこめて、彼女に笑いかける――

「ご心配いりません、母体の方も順調に回復に向かっています。帝王切開といっても、現代の医学では盲腸の手術と大差ありませんからね。どうぞご安心ください。それよりも、男のお子さんで、おめでとうございました」
医者にそう言われて、夫はあらためて、少しやつれてかえって美しくさえ見える妻の満ち足りたよう寝顔を見た。

その四 奴隷市

バックに甘美な音楽が流れ、豪華なファッション・ショウとして、会場の雰囲気は申し分なかったが、どこかこれまでのショウと違ったところがあった。

そうは思ったが、彼女は職業的な微笑を作るのを忘れずに、観客の間にしつらえられた細長いステージを、訓練し抜かれて第二の天性になってしまった優雅な足どりで、しゃな



りしやなりと歩いて行った。

微笑を作ること、からだ全体で客に媚びることも、なれたことだから別に苦痛ではないのだが、どこかが今までと違った感じで、自分の挙措から自然さが抜け落ちてゆきそうに不安がたえずつきまとい、離れない。

お客の質だろうか。

そう思って媚びの陰からよく見ると、おどろいたことに、観客はみな男ばかりだった。それも妙なマスクなんかつけて、いやらしい眼だけを光らせている。

あまりの意外さに、あやうく微笑を忘れかけ、ハッと我に帰った彼女は、間を持たせるために、右手でしなを作ろうとした。

そして今度こそ本当に声をあげそうになった。

両手は背後でしっかりと手錠のようなもので固定されているのだ。

（何かの間違いだわ——）

彼女は、ともすればはげ落ちそうになる微笑を頬の上に凍りつかせて、ギクシャクする歩をステージの上に進めた。その足に何かがつれた。

（ああ、足まで……）

足首には歩幅をゆるすだけの余裕を残して鎖が巻きつけられているのだ。膝から力が脱け落ちそうになるのを、必死にこらえた。

（夢なんだわ。悪い夢を見ているんだわ）

それを断ち切るように、背後に鞭の音が響いた。

「十三番は、ファッション・モデル・ナンバーワンの梅園公子」

名前を披露されて、彼女は反射的に笑顔を大きくした。ナンバーワンと自他共に許しているその誇りがもどってきた。後ろ手も、足鎖も、何かのアクセサリーなのだろう。

「とにかく、ファッション・モデルと申しますと、姿を良く見せるために、無理な減食などして、骨と皮ばかりのカサカサな女が多いのですが、この十三番は、さすがにナンバーワンとはやされているだけあって、ドレスを着けた時はもちろんのこと、ごらんの通り裸にしても、むっちり肉づきも良く、着せても剥いても決して誰にもひけを取ることはありません」

（ばかな、あたしが裸だなんて——）

とは思ったものの、不安が肩先を吹き抜けていった。そして、ちらと見おろした自分の姿に三度びっくりした。スリッパ一枚のあられもない姿なのである。今日は下着のファッション・ショーではなかった筈なのに。それに、梅園公子ともあろう者が下着のショーに出る筈もない。

（こんなことはみんなウソだ。何かの間違いなんだわ）

微笑はとうに泣き顔に変わっている。ともすればすくみそうになる足を機械的に運んでいる。また、鞭が鳴った。

「たぐいまれな美女の肌を、とくにご覧ください」

彼女のからだから、奇蹟のようにスリッパが抜け落ちた。あとは、ストッキングもないブラジャーとパンティだけ。からだの線をくずさない為に、それらは最少限の肌しか覆わないような薄くて小さいものを特に選んでいた。それがこんな事になろうとは、真白な素肌に薄いピンクがどんな効果を与えるか。

「よしッ。こんな、こんなッ」

夢なら早くさめて、と彼女は悲鳴をあげた。とたんに鞭が空を切って、彼女のむき出しの背中に鳴った。

「ああッ」

よろめいて、しゃがみ込みそうになるのを、腕を掴んで引きずり起される。その胸からブラジャーがむしり取られる。

「いや、いやですッ。裸になるのはいや」

彼女は鋼鉄のような縛束からのがれようと、必死に争った。形よく実った乳房が重たげに弾む。

「モデルを業としていても、自分の縛りファッションを見せるのには慣れていないと見えまして、見苦しいところをお眼にかけますが、これも十三番のウブなところをよく示すものと、その点ご明察をお願い致します」

どつとあがる熱っぽい歓声。めくるめくような羞恥。

「この柔かき、ほのかなぬくもり、なつかしい重み。弄ばれるのを待っているかわいい乳首。これにまさるファッションはありません」

奴隷商人の逞しい腕の中に抱きすくめられて、小鳩のように身悶え、屈辱の汗を流しながら、彼女は必死に祈った。

「さて、次はいよいよお待ちかね……」

一声高くふれながら、男はパッと彼女のからだを離れた。と同時に、彼女の腰まわりに、冷たい風がじかに当たった。

自分でもわけのわからない悲鳴をあげて、その場に突っ伏そうとするのを、またしても非情な腕が、彼女の後ろ手を捻じ切らんばかりにしほり上げて、無理やり立ち上がらせる。身の置き場もない恥ずかしさで、彼女は全身火の柱のように燃えあがる。総身をピンクに染めて身悶え、すすり泣いている女体に、観客の讃辞が降りそそぐ。

「みごとだ」

「ヴィナスの生まれがわりだ」

「ウェストのくびれ、ヒップの張り、そこから爪先までのなめらかなカーブが何ともいえん」

「五十万」

「六十万」

「裏がえしにして尻を拝ませろ」

「八十万」

「ええい、百万でどうだ」

手、手、手が、四方八方から伸びてくる。

ステージを越えて伸びてくる。

毎日々々、朝も晩も掌中の玉のようにいくしきみ、みがきあげてきたこの白い肉体。このなめらかな肌が、今、男たちの眼にさらされて、値をつけられているのだ。

彼女は無理やり仰向けさせられている美しい顔を、涙でぐしょぐしょに濡らして、泣きむせんだ。

（ああ、早く、早く、早く、醒めて。夢ならさめて……）

手が、手が、手が、彼女の足首を掴む。それが上へ上へと、伸びてくる。右の足を掴む手。左の足を掴む手。お互に争い、引張りあい。からみあう指と指。一センチを争って上に伸びる指、指、指。

（ああ、早く、早く、早く）

前号まで

▼わたし（阿麻哲郎）は航海士上島氏を通じ、美しい女予言者サレアを、その日本公演中に知る。上島氏はゴルドンの古文書をわたしにあずけ出航したが、航海途上に煙のように消え、またゴルドンの古文書の本当の持ち主相馬博士に会う寸前、博士は行方不明となり餓死体が発見される。

▼以前上島氏に案内された新宿のバー・エテルナに博士の怪死事件とのつながりをかぎつけ、流しの男に探りを頼んだが、男はかえってホステスのとりことなり九州の山中で変死体となり発見される。こうしてゴルドンの古文書をあずかったために、わたしは事件にまき込まれ、しかも古文書を何者かに持ち去られる。

▼その犯人とおぼしき女性と偶然に出会い尾行したところ

ろ女はアフリカ学術調査隊、西司郎の留守宅に入る。そこで有尾人とナゾの女を目撃し、前二つの殺人は女性による犯行ではないかと考える坂崎警部を伴い、翌朝ふみ込んだが無人家となっている。そのころエテルナの常連小林春吾がまたまたホステスたちに拉致される。

▼事件のカギと見られるクロレラ、相馬博士の冒袋から発見されたKB物質について研究者中村教授は、恐しい反世界へ入るカギではないかと推察を下す。また上島氏夫人、美美子の存在もナゾめいた雰囲気漂う。ベットの用としてサレアからおくられた豆ゴリラ男との異常な関係——そうしたさなか九州の山奥で小林春吾が炭焼男に助け出される。何と、下半身がゴリラ男に変ぼうしていた。そうして中村教授の異様な実験が着手される。

ゴルドンの記憶

⑬

阿麻哲郎
江淵晃夫・絵



落ちる液体

荒らいコンクリートの壁の肌目が、淡い電燈の光りに砂粒の層のような陰影を広げていた。

部屋の中ほどに寝台があった。中村教授の痩せ衰えたからだ、白衣を着た五人の女子学生たちに取り囲まれるようにして横たわっていた。

半分ミイラのように、ちょうど、ひからびた死体を解剖にかかる女子医学生たちのように、教授と五人の女子学生との対照は奇妙な雰囲気をつくりあげていた。

やせて、魚の骨のように突き出たのだ仏がピクリと動いた。

「十分気をつけたつもりじゃけど、もしかするとわしは、実験にしくじってゴリラ男になるかもしれん。それは実験に悪い尿が使われた場合じゃ。悪い尿はやはり飲料としては不適當なんで、それさえ選ばわしは健全じゃ。KB物質を産み出すと同時に、しかもわしは健康を維持することができん」

「それじゃ、良い尿とはどんなのですか？」
箕輪祥子がそう聞いた。ふっくらとふくらみのある白いほおが、心配気にのぞきこんでいた。

「良い尿とはな」

教授は一息ついた。ともするとことばがとぎれがちだった。

「女が女であるがための、女の尿、ということじゃ」

「それ、どういう意味ですか」

「ちよつと説明がむずかしいな」
また息が切れた。

「女の尿は男の尿とはやっぱり違うんじゃ。それは女性ホルモンやその他の含有について言うんじやない。きわめて微妙な靈感としての相違なんじゃ。一口に言うと、羞恥というエッセンスだ。これは一種のエーテルで、な。靈妙な奇蹟を、受け入れる男の体内において果たすんじや——」

羞恥のない尿は悪い尿じゃ。悪い尿でクロレラを培養されるとゴリラ男になる。わしは良い尿が得たい。そして君達を選んだ。君達の尿は、本当に良い尿だと信じる」

白衣の学生たちは、声もなく頭を下げた。いきなり恥部を探り当てられたような、突然の羞恥に、揺すぶられた思いがしたからであった。

女子学生たちは、その器具を運び出してきた。一種の腰掛のようなものであった。という

より、洋式トイレ風の椅子であった。真中が凹んでジョウゴのように下に伸びていた。

そのジョウゴの部分は、厚いガラスでできていた。すほまりは一本のガラス管となってそれをくわえておくに手ごろだった。

椅子の足は開いていた。エッフェル塔か東京タワーのように、ゆるいこう配で、うんと広く、両翼に広がっていた。

「いつの間にこんなもの、こしらえてらしたんでしよう」

口に出さずとも学生たちは、特別の注文品であろうそんな奇妙な椅子を、ちゃんと計算どおりに準備していた教授の手落ちのなさが彼女らの羞恥心をいっそう揺すぶるのであった。

椅子の広がった足を、寝台の教授の、ちょうど顔の上をまたがらす格好にすえた。五人がかりの作業であった。準備はできたのであった。

ほっと一息ついて、お互い顔を見合わせた。気のゆるみから、五人が五人とも、ふっと尿意に気づいたのである。気がつくやうに尿意はお激しく、下腹に重く響いた。これは一種の脅迫であった。

「どなたかお先に」

沈黙に耐えかねて、小沢麗子がとうとう口

に出した。

みんないっせいに小沢麗子の顔を見た。

「言い出した方からどうぞお先に」

と、みんなの視線が告げていた。小沢麗子の、白い、細目にすぼまったおとがいのあたり、訳のわからぬ感動にふるえるように思えた。あがらうことはできなかった。彼女は立ち上がった。みんなの視線が舞台のスターの演技に集中されるように、集中された。

フットライトを浴びて舞台上に上る、そんな様子で、小沢麗子は寝台の上の椅子にすわった。

スカートのすそを持ち上げる必要はなかった。そのまま、椅子の中央の凹みが、彼女の腰をそっと吸い寄せるのである。

外部からはわからない。ただ、水泡の音が起こって、ジョウゴ状のガラスの中をすべり落ちる液体が、その先端を口にふくんだ教授の口中へ吸いこまれてゆくのを、無感動にながめるだけであった。

排出の快感

小沢麗子の次が紫山みさ子だった。

紫山みさ子は、学生のかたわら、某新劇劇団の研究生でもあった。目の大きな、特徴のある容ぼうをしていた。

寝台の椅子から降りてくる小沢麗子を迎えようと、視線をあげたが、小沢麗子はその視線をそらした。排出し終わったあとの、ほっとするような快さが、からだにあった。それが彼女にとっての羞恥の種となっていた。

紫山みさ子は割に大胆に椅子にデンと腰をすえた。何か舞台の上で、演技をするふうの、そんな気持ちになっていた。椅子に腰をすえ、スカートを広げると、凹みに尻がさそいこまれるように、収まりぐあいがほどよかった。

下をのぞくと、両足の下に教授の顔があった。薄く目を開き、それが笑っていた。笑いながら、いったんはずしたガラス管の先を、再び口にくわえた。さあ、出してくれ、と催促するように目ばたきした。

紫山みさ子は、何か妙にからだの体温が上がるような、変てこな気分に見られた。緊張すると尿がこぼれる、そんなふうなこぼれ方だった。友だちがそれを見ていた。ギラギラした、息詰まるような視線の激しさがあった。もう観客も俳優も、その区別がなかった。

腰のゆるみから、ジョウゴを伝う水滴の音がこぼれた。こぼれると、そのとたんに教授ののど仏が動いた。激しい動き方をしないと後から後からの、流れ落ちる水量に追いつかない。それで、そのたびに、教授は肩で大き

く呼吸をし、追いつかない場合はせきこむようにむせんで、水滴をこぼした。

紫山みさ子は、そういうときには排出を途中で止めた。止めることは苦しかった。出すならいっそ、無制限に、一気に出し尽くすべきであった。一どきの放出は快感を伴う。ところがそれができなかった。

次第に学生たちは、自分で演じ、友だちのをながめる間、気持ちの別の意味で高まってきた。訳のわからぬ興奮が襲ってきた。恥部のあたりが、カーッと熱くほてり、むずがゆいような搔痒感で、いらだった。そのいらだちは一種の快感であった。

その快感は、同じようにして、スチュワデスの佐々木正子にもあった。彼女は、半分ゴリラ男にされて助けられた小林春吾を、九州から東京まで運んだバイカウント機のスチュワデスだった。

小林春吾の輸送は、特に極秘を要したので苦肉の策として、彼を乗務員用のトイレ中にかくまって運んだことは、先号で述べたとおりである。

ほかにかくまい用がなかった。佐々木正子も、その事情をよく説明されていたので、十分承知はしていたのだったが、さて実際、自

分でトイレに立ったとき、ひどく困った。

尿のおいにおい小林春吾はむっくり起き上がり、一しずくでもないからと、懇願するようにひざをにじり寄らせてきたのは弱った。

ついそのショックで、彼女は身の者に小林春吾輸送の件の内容について口をすべらした。いちやく報道陣のかぎつけるところとなり、警視庁は押すな押すなの大混雑、そんな不測の困乱を招いたのも、元はといえば佐々木正子の無慮な一言からだった。

坂崎警部は、岸本刑事を通じて彼女を呼んだ。いまだに意識を回復しない小林春吾に関して、思いつくところがあつたからである。

「佐々木正子さんがいらしてますが」

当直警官の報告で知らされ、警部は別室に彼女を招じ入れた。そしてひざ詰談判で彼女を口説き落とした。

佐々木正子は個室に通された。そこには半分まだ意識もうろうとしたままの、小林春吾の変わり果てた姿があつた。

彼女は、ためらった末、決心した。つい軽はずみに口をすべらしたために、事件を大っぴらにして、小林春吾を世間に対して見世物か何かのよう、大げさに暴露してしまったことに責任を感じていた。何か彼のために、役に立ちたいと思っていた。

それが警部の申し入れを、一まずころよく受け入れる素直な態度になって表われた。

しかし、人払いの必要があつた。部屋には半分獣のようになってしまった男と、ただふたりだつた。ふたりだけになって、それから思案せねばならなかつた。

佐々木正子は、いろんな心理の経過をたどつたのちに、快感に達した。排出の快感に、何物か、悪魔的な力が加味されたようであつた。坂崎警部の思い付きは図に当たり、小林春吾はそれ以来日を追って回復した。しかしからだはそのままだつた。下半身に密毛が生え、しっぽが伸びていた。

失踪への復讐

上島芙美子は、ペット用の豆ゴリラ男を使つての夜の悪癖がすっかり身についてしまつた。ちょうど、たばこをのみ習い、すうことが習性となつて脱け出られず、日に十本、二十本と、本数がただ増加していくように、次第に悪癖の深みにはいつてゆく自分自身を、どうにも制御できなかつた。

それは第一、夫の上島航海士が、わけもなく行方不明になつたりしたからである。そのことに原因がすべてであるとして、彼女は夫をうらんだ。

「あなたが、どこかへ消えてしまったことがいけないのだわ。わたしだって、ごく平凡な女なんですもの。どうしてもこのごろでは、あれなしに夜を過ごすことができなくなつたんです。仕方がないんです」

そんなふうに、夫の写真に向かって、語りかけたりした。

豆ゴリラ男は実に従順に、彼女の意のままに従つた。従わざるを得なかつた。従わないと、それは本当に死ぬような目にあわされた。蹴られなくられはもちろん、窒息の刑というむごい仕打ちも受けた。

ああ、窒息の刑、そんな刑罰を与える芙美子自身、女とは恐いものだと思つた。自身、恐い女だと思つた。何もかもが、外から陰蔽された、部屋の中で行なわれ、そこで行なわれることは、決して外部に洩れることはない、そういう安全保証があつた。

安全保証は女を大胆にする。芙美子の場合がそうであつた。彼女はしばしば窒息の刑、という刑罰を豆ゴリラ男に課した。

刑罰を行なうとき、彼女は、豆ゴリラ男を縛つたりなぞしなかつた。自由な状態にしておいて刑を行なつた。そのほうが、ずっと手ごたえがあつて、刺激をもたらした。

「お仕置してあげるから、こちらへいらっし



やい」

にらむようにして声をかけると、ゴリラ男はもうすぐみ上がってしまう。すぐみ上がったゴリラ男を、有無を言わせずつかまえて、床の上に押し倒し、顔の上にペッタリと尻をつけてしまうのがこの刑であった。

ゴリラ男は、呼吸ができない苦しさに、子どものような小さな手足をふるわして、尻の下でもがき回る。つかまえた手のひらのうちで、あがき回る獲物の生命を感じるとき、本能的なある種の快感がわくものだ。その快感は、尻の下の生命のあがきをじかに皮慮に感じるとき、なお倍加されるのである。

窒息寸前のあわやというとき、芙美子はわずかに尻をずらすか、持ち上げるかして、息のできるようにしてやる。するとそのわずかなすき間にしがみつくように、ゴリラ男は、必死に鼻腔を広げて、せわしなく荒らい息をする。

わずかなすき間でかく空気のおいがどんなに甘く、貴重なものであるか、思い知らしてやるときの気分は、酒に酔ったときの様子にも似た、酩酊状態が訪れるのだ。

無残にもすき間はまたもろにかかった尻の重味でふさがれてしまう。ゴリラ男のものがき



が尻の筋肉や皮膚に、快い刺激を伝える。

なぜこんなことが愉快なのか、こんな遊びの愉快さを覚えてしまったのか、芙美子は何もわからなかった。

それよりも、もっとどうにもならなくなったことは、夜の営みであった。長い間、独り寝の寂しさに耐えてきたところに、夫の失踪のニュースである。これは芙美子にとって、実に残酷な仕置きに等しかった。

悪いことはそのこと自体にあって芙美子の責任ではない、彼女は思った。

ゴリラ男を使って、じょうずなクニリングニストに仕立てあげるための、調教が始まったのである。テクニクは身についた本能的なものともいえ、日を経ずして熟練したものとなった。

荒らい、動物のザラザラした舌ざわりが、独特の効果をもたらした。この喜びは新しい発見だった。その発見に芙美子は最大の罪悪感を感した。

上島芙美子の性格がゴリラ男の入手以来、一変したのでは決してない。彼女は、あくまで昔のままの彼女であった。つつしみ深く清楚で、美しい。

芙美子は昔、夢遊病の気がある、と、医者から注意を受けたことがあった。夢遊病とい

うと大げさだが、人一倍寝ぼけぐせが強いことは事実だった。自分でもわからぬうちに起き出して、夜中に外を歩いていた、などということもあった。

しかし、子ども時代には、そういうことに類したことはままあるもので、夢遊病というのは医者（イサヲ）の冗談半分のおどしだった。

だが最近、彼女はそれに関して、不思議な経験を持つようになった。記憶の喪失というのがそれであった。二時間のときもあったし三時間のときもあった。またまる一日記憶喪失の状態に置かれていたときもあった。

それは夫の失踪前後から、傾向が顕著になったような気配があった。

フツと意識が遠のく。そしてやがてフツと意識がもどってくる。その間、二時間、三時間、いや、まる一日経っていたりするのである。といって、本当を言えば、意識がその間なくなっていた、という実感は彼女にはない。芙美子は不思議でならない。

彼女の実感によれば、当たり前前に意識は何の支障なく継続しているのだ。少しの切れ目も感じられはしない。だから、彼女にしてみると、まちがっているのは時間のほうで、彼女の側にはない、ということになる。

たとえば、時計を見ると一時だ。そして一

時だな、と思いながら仕事を続ける。ころあいを待てた時計を見る。すると驚いたことに、時計の針はもう三時をしている。意識の上では、おそらく五分とは経っていない間隔である。それが実際には、二時間も経っていたのだ。

或る時はこんなこともあった。やはり時計の針は一時をさしていた。彼女は編物をしていた。またふと時計を見ると、一時十分である。ああ、長いようでまだ十分しか経っていない、そう思ってテーブルの上を見ると、新聞が二つのつかっている。一つは確かに今日の新聞だ。今一つは、と見ると、何と日付が明日の日付になっている。

こんなばかなことがと、いろいろ確かめてみると、おかしいのは自分の側にこそあった。つまり、一時と一時十分の間の十分間というその時間は、実は一日と十分間、ということ、十分間以外の丸一日という時間が、芙美子の意識の中では、完全に失せてしまっているのである。

これは恐しいことであった。ずっと以前、医者が冗談まじりに、夢遊病の気がある、といつて芙美子をおどかしたことが、何やら単なるおどしではなく、本当のことではなかったのか、というふうに思い返されるのであった。

完全に喪失して、どこかに失踪してしまう時間の行方が気になった。その時間、芙美子は何をどうして生きているのだろう。

西司郎の行方

わたしは必ず教授は自宅のどこかに居るはずだ、との見当から、中村教授宅のあちこちを捜し回ったが、ついに何もわからず引き上げた。あちこちを捜し回るといっても、どこも出入口には錠がおりているし、泥棒のように屋内にもぐりこんだわけではない。せいぜい、門から内の家屋の周囲の庭先を、ずっと見回してみたにすぎない。それ以外、手の施しようはない。

収獲がないまま下宿に戻った。えらくうつとうしい雨が続く。桜の時分だというのに、この雨ではいたしかたもない、とあきらめ顔で、早目に配られた夕刊を見ているうち、下段左隅の小さな記事の活字に目を引かれた。「アフリカ学術探検隊の西司郎隊長・行方不明」というのであった。恐しい予感が胸を打った。同時に芙美子の映像が脳裏に浮かんだ。小林春吾が羽田で見かけた人は、やっぱり芙美子だったんだ、ひらめくような確信だった。



た。内容を次に目で追った。それによると、西司郎京大教授は、既に内地に居るときから行方不明だとのことであった。羽田を発った

ことになっていて、しかも現地で先に行って待っていた隊員たちのところには、ついに現われずじまいだった。

いろんないきさつから、そのことはしばらく伏せられたまま、ひそかに調査がなされた。が行方はわからずじまいだった。果たして、

羽田から無事だったのかどうか、羽田をたつた、というのは教授であつたのか別人であつたのか、という疑問だけは、調査の結果判明した。

教授が羽田をたつた形跡は、どこにもなかった。教授を当日、羽田で見た者はいないし、名簿にもない。名簿にはいったん当日便の予約がされてあつたが、取り消されていた。そればかりでなく、航空会社のだれもが、当日の乗務員を含めて、教授の姿を確認したものはなかった。

当日、小林春吾が教授を羽田に送りに行っている。カメラマンの会田琴三といっしょだった。そこで小林は、教授を本当に見かけたのかどうか。見かけたのは教授ではなく上島芙美子ではなかったか。それは何の暗合か、偶然か、それを思うとわたしの胸は苦しくなった。

何か、ともかくよからぬ影が、上島芙美子の身辺に漂っているという印象が、だんだんはつきりした形をとってきたからであつた。というより、これは既に、はつきりとした証拠と同じ重味でもって、わたしにはのしかかっていた。

回 復

小林春吾は、今日さめかけていた。さめかけてなかなかさめきれずにいる夢の中のもどかしさのように、そして水中におぼれて、ようやくと水面に浮かび上がろうとする何か力のはいらない、むなしい努力のように、さめてさめきれずいた。

恐しい悪夢を見たと思った。悪夢からのがれるために、夢中で目を精いっぱい見開き、早く目さめたいと思った。

ただ一枚の、薄い半透明の幕が間を距てているだけであつた。その半透明の幕の向こうに何かが見えた。ぼんやりしか見えないそのものが、次第にはつきりした輪郭を示し始めた。それが何であるか、最初判断がつかなかった。とにかく目の前におおいかぶさるように近づいていた。そのものが、何であるか、ようやくわかったとき、小林春吾は己の神経を疑った。とんでもない妄想を起こしたことに恐れをなしたくらいである。

しかし、よく落ち着いて、目をこらしてみると、やはりそのものにまちがいはなかった。こんな驚きはなかった。気がついてみると、小林春吾の顔面は液滴でびっちょり濡れていた。口の中が塩からい一種のにおいでこめられていた。

目の上のものから、不意にしずくがほとば

しり出た。反射的に小林春吾は口を開いた。口を開いたのは、自分の意志からではなかった。条件反射のようなものであった。彼が気づかない間に、彼にそうした条件反射をおこさすべく、何かの作用が働きかけていたのだ。その作用の主は、白い指だった。

白い佐々木正子の指先だった。指先が小林春吾の唇に触れて、唇をあけさせた。ちょうどうまく、液滴がはいるように、手でもってすけていたのだった。

ようやく小林春吾にも状況が飲みこめてきた。常規を逸する状況におかれていたのであつた。落ちてくる液の正体がわかったとき、とつさに顔をそむけた。そして低いうなり声をあげた。自分では、何かの意味を叫んだつもりであつたが、それはことばにはならなかった。ことばにならず、動物じみたうなり声となって表現された。

佐々木正子は、はっとしてとびのいた。今さらとびのいても、自分が彼に何をしていたか、もう隠しようはなかった。小林春吾は、はつきりと意識をとりもどしたのだ。

ちゅうちょする余裕はなかった。佐々木正子は、すぐに廊下に出て、坂崎警部に小林春吾の意識が回復したことを、告げに走った。

告げに走ったままで、いちおう彼女の役目は終わった。佐々木正子は、二度と小林春吾の部屋にはもどらなかった。恥辱を受けたのは小林春吾より、佐々木正子のほうであった。その恥辱には、さすがに耐えきれぬものがあった。

坂崎警部は、がっしりとした体軀を起こし緊張した面持ちで廊下に出た。熊本県警の古谷主任と、岸本刑事、長沢、八木両刑事がいっしょであった。

部屋に入ると、小林春吾は真正面に大きな目を見開いて、上半身を起こしていた。

「やっど普通の状態になられたようすな」坂崎警部はにこやかに笑い、彼のかたわらの床の上に、いとも無難作にすわりこんだ。

古谷主任も、他の刑事連もそれにならった。一時は時ならぬ報道陣の群れで、ごったがえすような騒ぎを呈していた廊下が、今は中休みの状態で、幸いにもひとりの記者の姿も見られなかった。

最初しばらくの間、坂崎警部はだまったまま、小林春吾の様子を見守っていた。ことばをかけるにも、小林春吾のはっきり意識づいたときのショックがあまりも大きいため、前後なすべきわざを全く知らぬげな様子であったからである。

佐々木正子の存在が第一のショック、それから下半身、意外にも深々とした毛がはえ、おまけにしっぽまでついていて、これに対してのショック——全く茫然自失のテイのようであった。

小林春吾が、熊本県杖立川の溪谷の、炭焼小屋に救いを求めたときには確かに意識はあった。また飛行機で東京に護送される途中、それから警視庁に保護された当初、彼は衰弱がひどかったが、とにかく意識はあった。

しかし、それは仮の意識にしかすぎなかった。今度こそが、本当の目さめであった。

もう今では、彼には何の記憶もなかった。炭焼小屋に救われたことも、飛行機で運ばれたことも、いっさいが記憶になかった。まして、それ以前の最も深く、かつ恐ろしい体験についての記憶は、さらになかった。

彼の記憶は、バー・エテルナでとぎれていた。エテルナでよっぱらったまではおぼえている。そしてふと気づいた今、小林春吾は警視庁の一室に保護されていた。それはまだしも、何と、まるでサルのように長いしっぽが生えていることはどうしたことか。彼はがく然とした。

いったい何がこの失われた時間に行なわれたというのか。すべて理解に絶すること

であった。

「小林さん、とにかくよかったですな。助かって」

八木刑事が声をかけた。彼は長沢刑事といっしょに、バー・エテルナでの現場を見ていた刑事であった。小林春吾を誘かいした、エテルナのマダムのを追って、奥多摩までつ走った。

そういういきさつから、刑事にとっては、小林春吾の救出は、全く人ごとではなかった。

案じて呼びかけるその声には、特別の親愛の情がこもっていた。

とはいいいながら、小林春吾には、エテルナから先の肝心の記憶がなかったのだ、調べはそこから一步も進まなかった。

坂崎警部を初め一同が、壁につき当たったような感じで困っているところへ、いきなり聞きおぼえのある声がかかった。

中村教授であった。

「わしがその失われた記憶を、呼びもどしてあげよう、ゴルドンの記憶についてじゃ」

(つづく)



読

者

コ

ー

ナ

ー



★裏窓誌充実の段、慶賀に存じ上げます。五月号では特に、

①クライマックス場面集の沖渉二氏の挿絵

②沖氏の小品傑作展

はいずれも肉感豊かで氏の持ち味を最高に生かした佳品であり

③既刊号よみもの紹介の挿絵

④公開予定映画、海外公刊誌の画集

もおもしろく、ただ④の映画物は印刷が悪いため迫力が半減しているのは遺憾で、日本人モデルの写真（同巧重復のきらい多し）に代えて、良い紙で見せて欲しかったと思います。また、

⑤フェニクス社提供写真は異色と見ましたが、期待の

⑥鬼頭曉氏の作品

こここのところ和装物ばかりで、何ら持ち味が出ず、美しくはあるが画面が無用な線にわずらわされて、全く迫力を欠き、単なる形式美に堕しているのは甚だ残念です。右顧左弁せず、肉体の線、革紐の線を充分に生かしたポリウムのある画面、生々とした線描の復活を、是非にと望んで止みません（その意味で「尼寺」の分だけは生きた作品と見ました）

⑦中島喜美氏の作品

も、佳品が多いと見ましたが、「井戸の底」は欠点まるだしで顔の描写稚拙、線描も堅く、もう一工夫お願いしたく思われます。なお和装美についての文章は同感されるところがあります

★このらの投稿はハガキで結構ですからご自由にお書きください。

★今月掲載しました方には、8月号および、S写真をお送りします。誌上匿名は自由ですが、住所、氏名はお書きください。（読者コーナー係）

が（また、その挿絵も悪くなくむしろ活字で隠され過ぎている点、遺憾です）それは洋装美についてとも言えることで、沖氏の薄物の下着の挿絵は従来常に優秀で、今後ともその制作が切望されます（但し、着衣主義の美は必ずしも普遍的でなく、鬼頭氏の以前の作品、沖氏の②の作品等は無着衣で充分に生きている作品です）

右の論の延長として、是非お願いしたいのは、日本人モデルの写真の際、その欠点をカバーするよう極薄の下着を活用し、向暑の折からそれを濡らして使う方法です。以上に比し、コルセツト物や絵のない競作小説はど

直に気づいたままを。編集各位のご健勝を祈り上げます。

（東京・渋谷生）

★五月号「和装美礼讃」の文に同感。せつかくの岩田氏の絵の色が薄く、かつ文字で見にくいのは残念でした。写真についてはしばらくぶりの日本調「にはんがみ」がよかった。特に斜めと後ろ姿がいい。出来ることなら「和装美礼讃」の絵のような写真がのぞましいところです。記事には行きづまった感じがすが、なんとかならないでしょうか。写真とか絵は、今以上に日本調をとり入れて下さい。

（愛知県 M・Y生）

★五月号では①「和装美礼讃」矢部定三、岩田吉夫、二人のコンビが特に良い。②映画評論の「突然炎のごとく」黒田史朗、毎月お願いします。③「黄金草の宿」豊中夢夫、本当に夢があつて好かった。写真については「にはんがみ」「沈思のひと」共にモデルの着物、下着が薄く、日本古来の絹の妖しいぞろりとした、ぬめつとした美しさを……。それから着物一すく裸ではムードが出ていない。もっと寝みだれた姿があってもよい

読者コーナー

と思う。和装下着、長襦袢姿で細紐で締められた上から水をかけて、体の線が出た写真をお願いいたします。(東京 K・M生)

★五月号でよいと思ったのはクワイマックス集くらいなもの。最近平均しておもしろ味なし、本誌の読物で挿絵のない物(例えば競作同一題名小説等)は不可。グラビアページのモデル縛りはあまりいただけない。今後の希望としては、①映画のスクリーンをもっと多く。②挿絵を多くして④絵物語を毎月掲載。⑤密林を舞台になにか連載を。⑥今月はカット、小品集など多く良好、しかし絵ははつきりした色で刷ってほしい。薄茶、みどりは不可。(東京 T・K)

★五月号でおもしろかった記事は「竜四郎嫉妬」「黄金草の宿」「和装美礼讃」の順。さて、貴社負担で直購会員にサービス、感謝します。あつかましいお願いのついでに、直購会員に貴社所蔵のSフォトを、なるべく安価(実費プラス、マーチン)でおわけ下されば幸甚です。そのため十枚一組といった形でけっこうと思います。モデル別、姿態別etc……。臨時増刊で既刊号からのフォト、未発表のフ

ォトを刊行して下さい(五百円程度で)。いいたいこと言ってますみません。

(長崎・オーワン生)

★五月号でよかったのは「裏窓文芸評論」「なめくじ」「背骨の曲った娘たち」の順です。文芸評論や矯正具の裏面史はこれからもずっと続けてほしい。連載の「ゴルドンの記憶」は比較的読みごたえがある。しかし、「男色大鑑」は義理人情というアブノーマルをモットーとする貴誌につかわしくない。「クワイマックス場面集」は全くつまらない。SMは単に縛りや責めの場面の情景のみを好むものに非ず、その意味で「パノラマ島秘譚」も前回の「アラビアの城」も、心なくしてぬけ殻だけのものなり。一年に一度でもよいから文学的、芸術的な価値の高い作品を載せてほしい。値段が上がったことに対しては別に文句はない。ただ肉体的SMのみに偏重せぬよう、低俗な要求に迎合し、貴誌の高い品位を落さぬことを願ってやみません。

(東京 S・S)

★六月号の「パノラマ島秘譚」は「アラビアの城」以上のおもしろさです。ページ数が短かく

感じてなりません。今から七月号が待ち遠しいです。ついでながら「アラビアの城」を単行本にして発行していただけないでしょうか、お願いします。中川先生のさし絵、今月号のは魅せられました。私は今月号のように描かれた先生の絵は好きなのですが、いつも描かれていないような絵は好きではありません。「読者コーナー」でどなたか言っておられました。目次カットに描かれていた先生の絵は、目次、邪魔にならぬ程、惹かれてなりません。ぜひグラビアで再発表して下さいませんか。心からお願いします。いろいろな制約があつて思うような発表が出来ないという編集部の苦労はよくわかりますが、もう少し元気を出して下さい。本屋さんで聞いても青少年が悪書で毒されるなんてナンセンスで、悲しいけれども毒される程本を読んで下さらないとこぼしてしまいました。大部分はテレビに取られてしまつて営業も不振のことです。だから「裏窓」を守るのは読者しかないということになります。どうか読者に愛情を持って、編集者と読者とのつながりを密にして(サービスカードがその仕

事と思いますが)より良いものを作成して下さい。「裏窓」には私のような厚かましい読者といふよりも、悪びれに買い求めて秘密にしている読者といふところがあると思います。この、秘密にしているような読者を掘り起こしてこそ「裏窓」の一大発展が出来ることと思ひます。今月号の鬼頭先生の絵は魅力がないです。先生には申し訳ないことですが、普通の絵より弓子さんのさし絵のようなものが良く感じられます。貴め絵であろうとなんであろうと芸術性に変りがないと思うので。だから、展覧会などに発表するわけでもなく、かつ入選持選など公の栄誉は得られなくても、真からその素晴らしさを認めて読者がいるということを考えて、ぜひ描いて下さい。喜多先生などもあまり発表しなくなりしましたが、他の仕事之急がしいのかわかりませんが、一部の読者といふはいえ「裏窓」の読者は幾万人、広い意味では上野の美術館以上の眼にふれていると思ひます。限られた一部の人のための「裏窓」の読者のために、独特の芸術性を公表して下さい。よう、お願いします。

(福島県 6T生)

原稿募集



つぎの要領で、あたらしく原稿の募集をいたします。ふるってご投稿ください。

▼創作（四百字詰め原稿用紙） 25枚まで

S・Mその他を主題とした小説をお寄せください。
新鮮味ある異色小説をお待ちしております。

▼告白体験記……………20枚前後

真実の告白、得がたい体験記をもとめます。
だれにも言えない告白を、原稿紙にぶつけてください。

◎掲載させていただいた作品には、相応の稿料を掲載後二ヵ月以内にお送りいたします。

◎原稿は第五種郵便になりますから五十グラムごとに十円の郵券を貼り、開封にして投函をおねがいたします。

▼原稿の送り先は――

東京都中野区松が丘2の21
あまとりあ社
裏窓編集部

●編集後記●



▼先月号（六月号）にはさみこんだ「サービスカード」はたちまち、五月号をうわまわる数が、編集部に集積いたしました。

▼当誌における作家、画家の人気の程度がひとめでわかりこれからの編集方針に大きな参考となりました。あつく御礼申しあげます。

▼ハガギに「貴誌の良心的な編集、また営業方針の誠実なことをかねがね感じている」という文意をお書き添えくださった読者の方が多数あり、たいへん、うれしく思いました。

▼雑誌の性格が非常に前衛的であり、わからない人には、どうもむずかしく誤解されやすいので、私たちも必要以上の神経をつかい、誠実性をバックボーンとしてまいりました。この誠実性は、そのまま雑誌の永続性につながるものと信じます。読者のみなさまの、いままで以上の、精神的（？）なご協力をおねがいたします。

▼編集部からお送りしたサービスの写真が、五、六通返送されてきております。ご住所とお名前を、はっきりお書きくださるよう、おねがい申しあげます。写真が不必要な場合は「写真はいららない」と、はっきりお書きください。
▼なお、本号のハガギのしめきり日は、七月二十日です。で、どうか、お忘れなきようお願いします。
(飯田)

アメリカの公刊誌・ご紹介

The true story of **SEX AND PAIN**
a shocking report from
a psychologist's
private files

REAL MEN

AUG. PDC 35¢

When a savage lusts for blood,
not even slaughter is enough
**THE NIGHT MY
CALL-GIRLS DIED**
Even the doctors shudder when
they hear the name "Glaucoma"
**YOU MAY BE BLIND
TOMORROW**

The unbelievable battle of the USS Barb
**THE SUB THAT SANK
A RAILROAD**





傲慢と屈従





北米・フェニクス商会・特約







藤沢修
作品集



モデル・榛名リエ

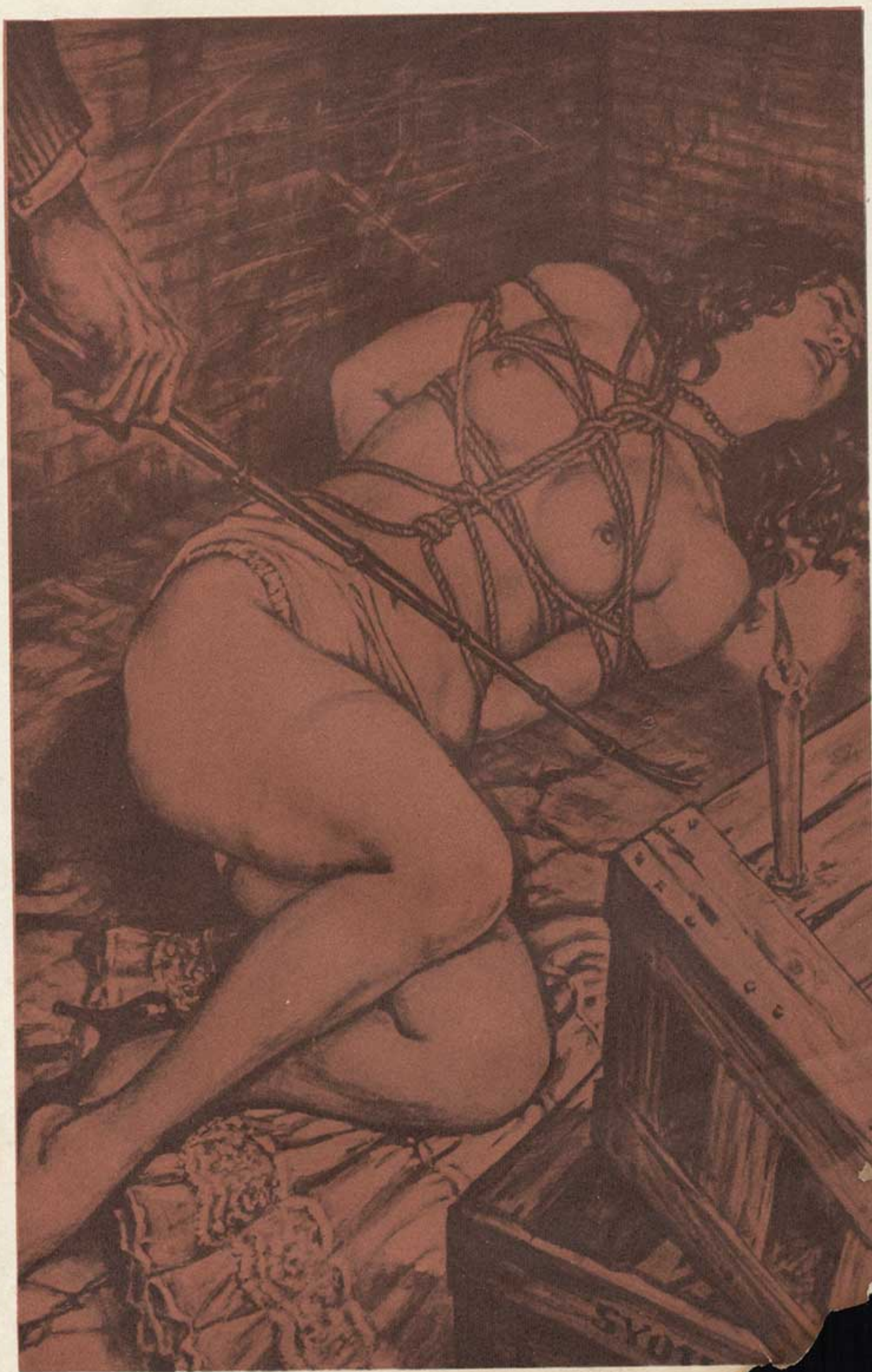


あるレスビアニズム



落合竜二・絵

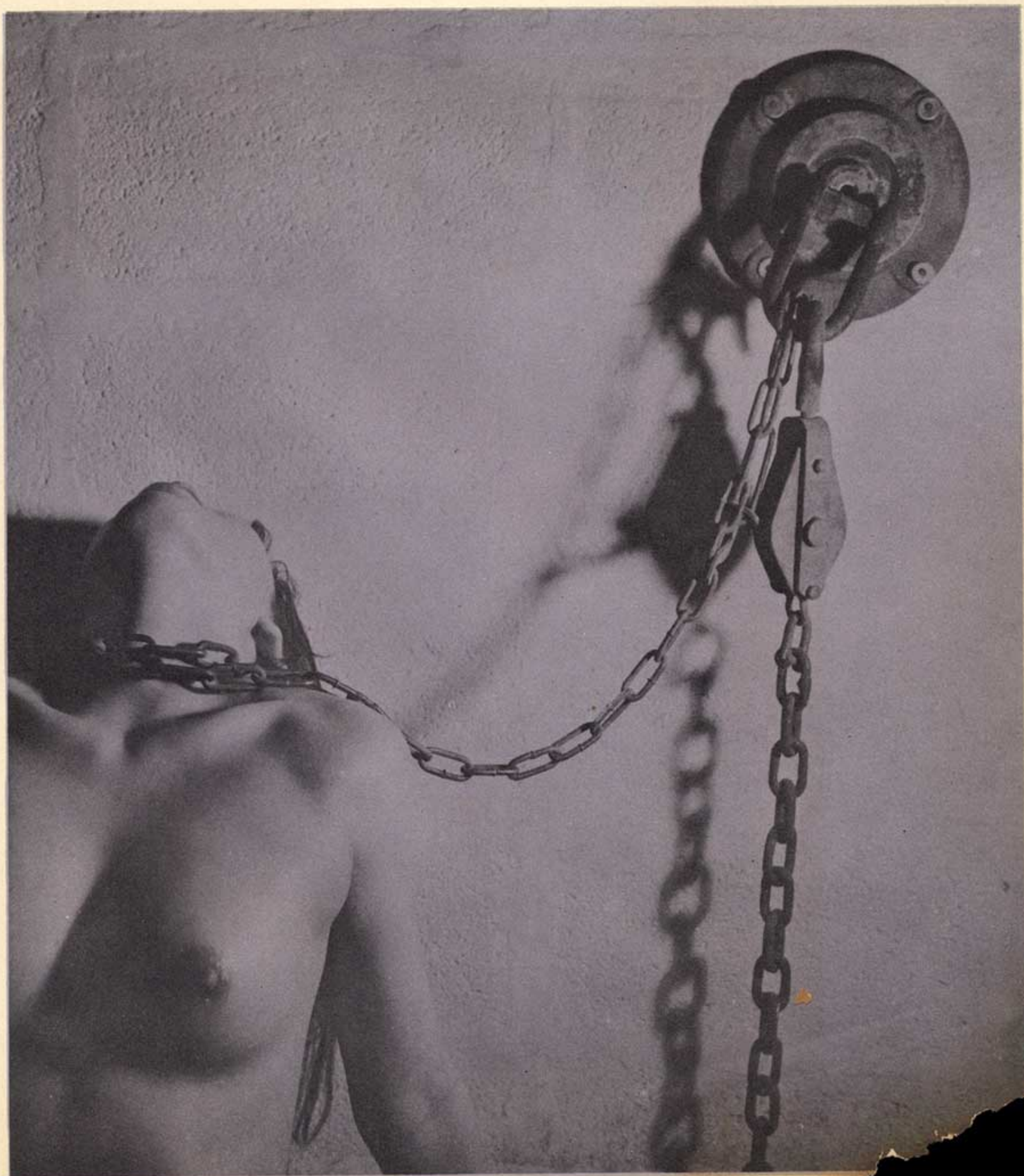
地下室二景



沖
涉



カメラ・吉田 久



美の

裏窓・既刊号総目次

★既刊号をお買い洩らしになった愛読者の方々の
為にこの機会にバックナンバーをお揃えになる
ことをおすすめします。

★三冊以上御注文の際は送料は不要です。

★二冊以下の御注文は一冊につき送料12円です。

★御送金は振替か現金書留が最も確実です。

東京都中野区松が丘2丁目21番振替東京55408あまとりあ社宛

39年(六月号)三〇〇円

○オフセットページ

絵物語・コンドルの楽園(文・祖父江新
絵・落合 竜二)

密室の砂丘(フォト) 吉田 久

ある夜のバーで 絵・沖 涉二

ドイツ民族博物館資料より フュニクス

フォト作品集 藤沢 修

洋画の中のアップ・シーン集 スチルより

★グラビア・犬の絵(フォト) 吉田 久

スクリーン・クライマックス集 編集部編

マゾヒスティック・スチル集 編集部・編

傑作フォト集 猪島 昌也

アメリカ新着フォト集 北米・フェニクス

パノラマ島秘譚・2 北園透一朗

戦後の妖美な眺め(山田彬弘・絵) 間野 嶺

○小品傑作展 絵・沖 涉二

曲切り念者(東桂史・絵) かびや・かずひこ

腹切り残酷史譚(鬼頭晩・絵) 夏川浩一郎

濡れ花(落合竜二・絵) 松山 省一

ゴルドンの記憶・15 阿麻 哲郎

○読者投稿・クライマックス場面集

赤い月の夜(秋吉密・絵) 赤木 恵介

女すりお蝶(古正英生・絵) 五所 章

暗黒街の掟(豊田みのる・絵) 東島かおる

腐れ土蔵(小日向一夢・絵) 義川 源

39年(五月号)三〇〇円

○オフセット

和装美礼讃(文・矢部 定三
絵・岩田 吉夫)

○沈思のひと(フォト) 吉田 久

○時代妖艶面選 鬼頭 晩

○姫君受難・三景 古正 英生

○アメリカの公刊誌・ご紹介

○ジャングルの襲撃○悪魔教の女

○馬上の麗姿○密林の女奴隷

★グラビア・山参道 吉田 久

★乳房を飾る男(絵物語) 文・パール・島

★時代妖美面選 中島 喜美

パノラマ島秘譚・1 北園透一朗

裏窓文芸評論 安東 泉

○読者投稿・特集

狼火の部屋(沖涉二・絵) 多賀 満

お雪地獄(古正英生・絵) 丸亀 恵史

本郷大五郎の不満(山田彬弘・絵) 三津井弓雄

海賊船の女たち(豊田みのる・絵) 北村仙也

白い鬼(秋吉密・絵) 三枝喜久治

竜四郎妖妬(東桂史・絵) 潮 一樹

蛙(なめくじ) 村山 省一

黄金草の宿(落合竜二・絵) 豊中 夢夫

ゴルドンの記憶(江淵晃夫・絵) 阿麻 哲郎

○小品傑作展 沖涉二・落合竜二

39年(四月号)二五〇円

○時代絵物語

さみだれの死(文・庄内 裕司
絵・小日向一夢)

○妖美面個展 山田 彬弘

○時代妖艶面選 鬼頭 晩

○和装の女性美・四態 都築 峰子

○フォト(玩具・訓練・協演) 金井 行雄

★グラビア・天守閣 吉田 久

★スクリーン・クライマックスシーン集①②

★フォト集(モデル・榛名リエ) 藤沢 修

続・スクリーンに躍る 藤見 郁

アラビアの城・10(鬼頭晩・絵) 北園透一朗

翻られた稚児(東桂史・絵) かびや・かずひこ

四作家競作同一題名小説

美女と毒薬 志村清太郎

井村 錠

松山 省一

葬送行進曲(都築峰子・絵) 八巻 令

背骨の曲った娘たち・2 岐阜須三夫

地下室の檻(山田彬弘・絵) 杉野平太郎

白蛙教のいけにえ(古正英生・絵) 野呂 久

三人のモデル(秋吉密・絵) 赤木 恵介

お島とお紋(豊田みのる・絵) 九谷竜太郎

ある異色映画と異色スライド 藤見 郁

39年(三月号)二五〇円

幻想絵物語・奇怪な動物園

文・志村 基治
絵・秋吉 密

絵物語 文・祖父江 新

ある晴れた日の公園で 絵・落合 竜二

○妖艶女態四景(面集) 鬼頭 晩

○光と影の哀歌(フォト) 吉田 久

○和装絢爛(フォト) 北 好夫

★グラビア★榛名リエ・バレード 藤沢 修

★奢れる女神のポーズ六態 編集部・編

★アメリカの公刊誌ご紹介 編集部・編

★吊り鉤(フォト) 吉田 久

スクリーンに躍るロマンと幻想 藤見 郁

海の復讐鬼(東桂史・絵) 潮 一樹

背骨のまがった娘たち(中川彩子・絵)

多ア坊のこと(山田彬弘・絵) 岐阜須三夫

体当たりM論(江淵晃夫・絵) 北野 竜一

アラビアの城⑨(鬼頭晩・絵) 北園透一郎

マゾヒズム画廊 フュニクス商会

手だれの死者(東桂史・絵) かびや・かずひこ

きつねづら(小日向一夢・絵) 井村 錠

奢れる女神への祈り② 森本 愛造

サド裁判・茶番劇の俳優たち 安東 泉

ゴルドンの記憶⑫(江淵晃夫・絵) 阿麻 哲郎

39年(二月号) 二五〇円

○オフセットページ	文・藤見 郁
フォト・ストーリー	文・藤見 郁
竹の家	写真・フェニクス
画集・女の館	落合 竜二
ふたりのお遊戯	西ドイツ・フェニクス
きもの繚乱	カメラ・北 好夫
★グラビアページ★	
五百羅漢	カメラ・吉田 久
戦慄のまなざし	北米・フェニクス
脚立と貴婦人	北米・フェニクス
奇怪な散歩者	西ドイツ・フェニクス
縄と鎖のコメディ	北米・フェニクス
四作家競作同・題小説	松山 省一
花と悪銭	風松英之介
	井村 錠
	京 剣児
ご隠居のたのしみ(落合竜二・絵)	八巻 令
犬の楽園(秋吉富・絵)	下須 畜男
瀬沼めぐみの受難(山田彬弘・絵)	春川 光彦
アラビアの城・8	北園透一郎
奢れる神への祈り・1	森本 愛造
わが愛のうめきとさげし	新村満美子
私本・男色大鑑・2	かびや・かずひこ
ゴルドンの記憶(江淵晃夫・絵)	阿麻 哲郎

39年(一月号) 二五〇円

フォト・ストーリー	文・藤見 郁
魔女狩りパターソン	フェニクス商会
絵物語・女戦士のレポート	文・祖父江 新
	絵・落合 竜二
	文・井村 錠
	絵・中川 彩子
ミノーの貞操帯	文・井村 錠
○装身具とふたりの美女(フォト)	西ドイツ・フェニクス
○アメリカSM絵物語	北米・フェニクス
★グラビア・かわいい妖精①②	吉田 久
★グラビア・海外SMフォトご紹介	北米・フェニクス
鬼神丸秘帖(小日向一夢・絵)	潮 一樹
アラビアの城(鬼頭暁・絵)	北園透一郎
男色大鑑・若道のほこりたかく(東桂史・絵)	かびや・かずひこ
おつかれさま(山田彬弘・絵)	春川 光彦
■女宇宙士訓練室	絵・鬼頭 暁
空想と狂想のあいだ	森下 高茂
地図にない村(都築峰子・絵)	九十九十郎
体当たりマゾヒズム論・19	水尾 究
「馬狂いの女たち」における	
マゾヒズム描写	森本 愛造
ゴルドンの記憶(江淵晃夫・絵)	阿麻 哲郎

38年(十二月号) 二五〇円

フォト・ストーリー	文・吉永百合夫
深夜のひとりごと	カメラ・吉田 久
絵物語・破魔姫受難	文・島本 春雄
	絵・山田 彬弘
○フォト・白い炎	吉田 久
○アメリカSM絵物語	フェニクス商会
グラビア・まるい笹口具	フェニクス商会
	カーテンのある風景・吉田 久
海外SMフォト	フェニクス商会
★特集・マゾヒズム画廊	フェニクス商会
崖の上の墓標(豊田みおる・絵)	佐藤達四郎
ピンアップだけはやめて	ADグラナムール
FとMの行き戻り(落合竜二・絵)	光谷東穂
奇妙な実験(都築峰子・絵)	八巻 令
アラビアの城・6(鬼頭暁・絵)	北園透一郎
私のSM論	重森 東
体当たりマゾヒズム論・15	水尾 究
恋人たちのオリ(山田彬弘・絵)	九十九十郎
ほも紳士録(12)	かびや・かずひこ
体当たりマゾヒズム論	エダ・キリコ
灰色の夜(カット・エダキリコ)	水尾 究
現代マゾヒズム文化時評	森下 高茂
ゴルドンの記憶(江淵晃夫・絵)	阿麻 哲郎

38年(十一月号) 二五〇円

○大吠岬の太陽	文・エダ・キリコ
	カメラ・吉田 久
○暗い画廊	吉田 久
○フォト作品集	金井 行雄
○アメリカSM絵物語	フェニクス商会
ヴィナスの誕生	森下 高茂
ねむれぬ夜の追憶(鬼頭暁・絵)	北海 道雄
悪党半九郎(小日向一夢・絵)	潮 一樹
★グラビア・時代妖美術集	中島 喜美
★グラビア・海外の公刊誌より	フェニクス商会
★グラビア・大吠岬	吉田 久
ビルマの首枷族	春川 光彦
ある女装者の夜々	かびや・かずひこ
■画集・黒い皮の響宴	鬼頭 暁
大都会の夜の底で(江淵晃夫・絵)	九十九十郎
青雲崩れるとき(古正英生・絵)	井村 錠
現代マゾヒズム文化時評・(19)	森下 高茂
体当たりマゾヒズム論・(14)	水尾 究
ゴルドンの記憶(江淵晃夫・絵)	阿麻 哲郎
○絵物語・鉦山町の女たち	文・宗方 八郎
	絵・都築 峰子
○絵物語・武士道無残	文・島本 春雄
	絵・東 桂史

38年(十月号) 二五〇円

○絵物語 龍宮城の反乱	文・祖父江 新
	絵・落合 竜二
○時代 妖説朽木女忍伝	文・島本 春雄
○絵物語	絵・鬼頭 暁
○サド 異端の城	文・三鬼 俊
○絵物語 異端の城	絵・中川 彩子
○戦国 本能寺炎上	文・井村 錠
○絵物語 本能寺炎上	絵・小日向一夢 久
★グラビア・ミッドナイト	吉田 久
★グラビア・海外の公刊誌より	フェニクス商会
○雁形城落城図	小日向一夢
○時代妖美術集	中島 喜美
伊賀の闇の葉(古正英生・絵)	佐藤達四郎
裏切り(秋吉富・絵)	九十九十郎
ミッドナイト撮影記	エダ・キリコ
蛇縛女切支丹(東桂史・絵)	義川 源
アラビアの城・5 毒ぐもに巻かれる弓子	北園透一郎
(鬼頭暁・絵)	郷 保夫
お転婆学園奇襲作戦	阿麻 哲郎
ゴルドンの記憶⑥(江淵晃夫・絵)	森下 高茂
現代マゾヒズム文化時評(18)	水尾 究
体当たりマゾヒズム論・(13)	水尾 究
寄稿作品ご紹介と短評	編集部・編
裏窓叢書名場面集	編集部・編

38年(九月号)二五〇円

●裏窓草紙「絵本いろはうた」

うた・宮古志満夫

絵・小日向一夢

文・島本 春雄

絵・春日 章

文・井村 錠

古正 英生

●アメリカ絵物語 男爵夫人の拷問博物館

★グラビア・洋画のSMシーン・スチル集

★グラビア・海辺のうた

夜のなげき

吉田 久

★グラビア・海外SM絵物語・ご紹介

小笹姫受難(小日向一夢・絵)……潮 一樹

特製マゾキン(山田彬弘・絵)……鳴岡 晨

魔女アクリカ(中川彩子・絵)……春川光彦

●鬼頭晩画集「美しきけもの檻」

●絵物語 必殺のデリンジャー……落合竜二

体当たりマゾヒズム論・14……水尾 究

現代マゾヒズム文化時評・18……森下高茂

穴(あな)……(都築峰子・絵)……石山省一

お化粧される弓子(鬼頭晩・絵)……北園透一郎

★裏窓蔵書名場面集(中島喜美ほか絵画集

38年(八月号)二五〇円

●絵物語 東京——神戸十六時間

文・祖父江 新

絵・山田 彬弘

文・矢桐 重八

絵・春日 章

文・黒部 恭治

絵・中川 彩子

文・祖父江 新

絵・落合 竜二

●西部 紅のライフル……

★グラビア・砂の上の船

漁師宿にて

吉田 久

★グラビア・海外サド写真特選集

残念なり猿飛佐助(小日向一夢・絵)……井村 錠

妖異水底に沈む(秋吉樹・絵)……信夫 澄夫

お仕置きにぬれる弓子(鬼頭晩・絵)

……北園透一郎

お転婆学園秘密作戦(江淵晃夫・絵)……郷 保夫

女の争い(都築峰子・絵)……五所 章

フィギュア・トレーニング……春川 光彦

切支丹散華(東桂史・絵)……北村 仙也

現代マゾヒズム文化時評(17)……森下 高茂

38年(七月号)二五〇円

●絵物語 無明怨念記……

文・矢桐 重八

絵・春日 章

文・春川 光彦

絵・中川 彩子

文・北園透一郎

絵・鬼頭 暁

吉田 久

●絵画集・サデイスチンの微笑……江淵 晃夫

・切支丹女牢……喜多 玲子

・南北戦争以前……鬼頭 暁

・海外SM絵物語……フェニクス商会

切腹殉教記(小日向一夢・絵)……黒部 恭治

しのび逢い刺青情話(都築峰子・絵)

北野 竜一

くたばれッ淑女学院……郷 保夫

西鶴におけるマゾヒズム……安東 泉

血染め白百合(古正英生・絵)……佐藤達四郎

体当たりマゾヒズム論(12)……水尾 究

墓場からの命令(山田彬弘・絵)……祖父江 新

わが愛の渴望(落合竜二・絵)……白木ゆりこ

虐げられた女たち(東桂史・絵)……野方 伸

ゴルドンの記憶④(江淵晃夫・絵)……阿麻 哲郎

38年(六月号)二〇〇円

●鬼頭晩時代妖美画集……鬼頭 暁

●中島喜美時代妖美画集……中島 喜美

●グラビア・幽囚の部屋……吉田 久

●絵画集・続・美しき海賊船……フェニクス商会

七つの大罪(中川彩子・絵)……九十九十郎

続・異端の終末……芦田 奈貴

おどろ記珍化論……左 次郎

「ロリータ」における

ニンフェッティズム……安東 泉

「夜と霧」……黒田 史朗

放浪と自己恋着の画家……かびや・かずひこ

月光の道で……河村 童八

鬼婦長……丸亀 恵子

夜の妖蝶……立原 道夫

ボスには乳房がある……五所 章

体当たりマゾヒズム論(11)……水尾 究

さんざね不動(小日向一夢・絵)……庄内 裕治

復讐黒髪秘聞(中島喜美・絵)……黒部 恭治

忍法「乳影」(鬼頭晩・絵)……島本 春雄

妄執侍(古正英生・絵)……潮 一樹

霧姫変化(鬼頭晩・絵)……佐藤達四郎

ゴルドンの記憶③(江淵晃夫・絵)……阿麻 哲郎

38年(五月号)二〇〇円

絵物語・白蠟闇若衆……

文・島本 春雄

絵・東 桂史

文・豊田 一狼

絵・山田 彬弘

江淵 晃夫

藤沢 修

・美しき海賊船……

・くさりと美少女……

海外SM画傑作選……

茅女物語……井村 錠

会津の女兵……潮 一樹

その夜……飯田 豊吉

ゴルドンの記憶(2)……阿麻 哲郎

椎名夫人の足……村山 省

ほも紳士録……かびや・かずひこ

現代マゾヒズム文化時評(14)……森下 高茂

体当たりM論(10)……水尾 究

私の愛した女優……北野 竜一

アラビアの城……北園透一郎

孤島の復讐鬼……祖父江 新

異端の終末……津田 奈貴

背後の脅迫者……豊中 夢夫

ばんざいッお転婆学園……郷 保夫

38年(四月号) 1100円

絵物語・冥府海賊伝奇.....	文・島本春雄
・マドリヌと黄金の靴.....	文・松平荘司
・白狐のお新いろうさんげ.....	絵・中川彩子
小日向一夢妖美画個展.....	絵・東桂史
グラビア・黒猫といす.....	毛卓三
・黒いタイツ.....	猪島昌也
・鏡と女.....	藤沢修
・パウリーネ夫人のピクニック.....	フェニックス商会
海外SM画傑作選.....	提供
ゴルドンの記録 ①.....	阿麻哲郎
処刑の図.....	三鬼俊
無分別な夜.....	海老沢七郎
大阪非情地帯.....	豊中夢夫
内外ミュージックホール・スナップ集 藤沢修	
「虹川画伯のアトリエ」演出ウラ話 北野竜一	
文芸評論「醜いコメディ」について 安東 泉	
はも紳士録 ④.....	かびや・かずひこ
A子の話.....	南 ゆり
体当たりマゾヒズム論 ⑨.....	水尾 究
舞踏会の賛.....	春川 光彦
のぞきの大スケ捕物帖.....	飯田 豊吉

38年(三月号) 1100円

絵物語・スリーベツト号.....	文・豊田一狼
不時着す.....	絵・鬼頭 暁
・銭姫党伝奇.....	文・島本春雄
・白峰の女忍者.....	文・矢桐重八
・黒猫を捕えた①②.....	毛卓三
海外SMフォト・画傑作選.....	泰西出版資料
醜いコメディ.....	淡路周五
大根根無頼.....	祖父江新
和装恋慕.....	宮古志満夫
はも紳士録 ③.....	かびや・かずひと
体当たりマゾヒズム論 ⑧.....	水尾 究
猥.....	村山 省
犬とギブスと搾衣.....	春川 光彦
不死身の女.....	海老沢七郎
「蠍たち」にみる.....	安東 泉
あるサディスチンのタイプ.....	鬼頭 暁
鬼頭暁時代妖美画展.....	左 次郎
うら八捕物帳.....	飯田 豊吉
「裏窓」湯河原へ行く.....	編集部

38年(二月号) 1100円

絵物語・姫法師呪文.....	文・島本春雄
・変化黒髪小僧.....	文・京 剣児
秋吉樹妖美画個展.....	秋吉 樹
グラビア・黒い皮のスタジオ.....	泰西出版
・美の凝結.....	金井 行雄
・美の模像.....	金井 行雄
海外SM画傑作展.....	泰西出版
島原の子守唄.....	春川 光彦
金色の胸毛.....	立原 道夫
郡氏の応接室.....	豊中 夢夫
代用品じゃつまらない.....	九十九十郎
フォルリ城の花嫁.....	三鬼 俊
おれの名はクニエル.....	祖父江 新
愛の戦慄と充実.....	白木ゆりこ
体当たりマゾヒズム論 ⑦.....	水尾 究
はも紳士録 ②.....	かびや・かずひこ
新・森茉莉論.....	間野 嶺
新・安岡章太郎論.....	安東 泉
女因お蓮の死.....	小田桐 爽
浪人夢想日記.....	市原 砂夫
カブー家の第三夫人.....	加木れい子

38年(一月号) 1100円

絵物語・ハレウィンの歌う首.....	文・松平荘司
・赤鯨奇伝.....	絵・中川彩子
・隠密野番猫.....	中島 喜美
山田彬弘妖美画個展.....	山田 彬弘
グラビア・美の回帰.....	毛卓三
・美の彷徨.....	北 好夫
・美の孤立.....	金井 行雄
クリスマススイヴに悪魔がくる.....	九十九十郎
赤い血のうずまき.....	関町 妙男
仮面のたわむれ.....	溝口 雄太
黒い幻想.....	白木ゆりこ
小さな赤い腰巻の記憶.....	外村 良
体当たりマゾヒズム論 ⑥.....	水尾 究
夜の感触.....	万里小路 崑
忍道通走記.....	祖父江 新
決闘立花屋.....	花巻京太郎
女性的情念の三十年.....	かびや・かずひこ
「叩き声」を解剖する.....	安東 泉
小説「連」のレスピアニズム.....	間野 嶺
婦人機密将校ボーリン.....	泰西出版資料
売られていく玩具たち.....	北園透一郎

37年(十二月号) 1100円

絵物語・洞穴の姫と.....	文・松平荘司
片耳の悪魔.....	絵・中川彩子
・耳の戦慄.....	絵・曾我部 泰
・妖説黒縄盗賊.....	絵・小日向一夢
グラビア・犬と女.....	毛卓三
・美の発端.....	北 好夫
・美の展開.....	毛卓三
・美の落差.....	金井 行雄
かわいい調教師.....	北園透一郎
殉国.....	中康 弘通
投げ節お駒.....	花巻京太郎
締めつける愛情.....	春川 光彦
東京午前零時.....	豊中 夢夫
日本刑罰史(終回).....	名和 弓雄
はも・とその周辺(終回).....	かびや・かずひこ
体当たりマゾヒズム論 ⑤.....	水尾 究
ゆ紀夫論.....	安東 泉
われ草紙.....	小田桐 爽
青春.....	浦戸 宏
のうの上相談から.....	三津井弓雄
イライラする夜に.....	神原 栄知
風雲地獄街道(終回).....	鈴宮 英樹